

一般国道49号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

山 口 遺 跡

2010

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号
阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

山 口 遺 跡

2 0 1 0

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道49号は日本海側の新潟市と太平洋側の福島県いわき市を結ぶ主要幹線道路です。また、新潟市と阿賀野市、阿賀町を結ぶ地域幹線道路として重要な役割を果たし、近年その交通量は増加の一途をたどっています。

しかし、現道は阿賀野市の市街地（旧安田町、旧水原町）を通過しており、幅員が狭小なため、その交通量に対応できず交通混雑、交通騒音、交通事故等の都市機能や生活環境に与える影響が問題となっています。

阿賀野バイパスはこれらの問題の解消、安全かつ円滑な交通処理を目的とし、阿賀野市の将来の街づくりとの調和を取りながら計画されたものです。また、「阿賀野テクノタウン（新潟県東部産業団地）」や「阿賀野市総合運動公園」などを支援し、当該地域の発展に寄与するものです。

本書は、この阿賀野バイパスの建設に伴い実施した、阿賀野市山口に所在する山口遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査によって、同遺跡は弥生時代、古代、中世の遺跡であることが分かりました。特に弥生時代では掘立柱建物、土坑、埋設土器などの遺構や土器から、県内でも調査例の少ない弥生時代前期から中期前半の小規模な集落が発見されました。また、古代では8世紀後半から9世紀中ごろの、中世では13世紀から14世紀の集落の一端が明らかとなりました。

今回の発掘調査で得られた資料や本報告書が、地域の歴史資料として広く活用されるとともに、県民の埋蔵文化財に対する理解や認識を深める契機となることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し多大な御理解と御協力をいただいた阿賀野市教育委員会、並びに地元住民の方々、また、発掘調査から本報告書の刊行に至るまで格別な御配慮をいただいた、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対して厚くお礼を申し上げます。

平成22年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

例　　言

- 1 本書は、新潟県阿賀野市山口字城ヶ窪 3079 番地に所在する山口遺跡の発掘調査記録である。
- 2 この調査は一般国道 49 号阿賀野バイパスの建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。埋文事業団は、発掘調査作業及び関連諸工事を株式会社ノガミに委託し、埋文事業団の管理・監督のもと平成 20 年 4 月から 12 月にかけて発掘調査を実施した。発掘調査面積は 8,850m² である。
- 3 整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成 20 年度に埋文事業団の管理・監督のもと株式会社ノガミがこれにあたった。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は山口遺跡の略記号を「ヤマグ」とし、遺構名、出土地点や層位等を続けて記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて座標北である。
- 7 遺物番号は古代・中世の遺物と弥生時代の遺物でそれぞれ通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はそれぞれ一致している。
- 8 本文中の註は脚註とし、頁ごとに番号を付した。また、引用・参考文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、卷末に一括して掲載した。ただし、第VI章に係るものに限り、章の最後に掲載してある。
- 9 自然科学分析（珪藻分析・花粉分析・寄生虫卵分析・植物珪体分析・微細物質分析・放射性炭素年代・土壤理化分析）はパリノ・サーヴェイ株式会社に、黒曜石产地分析は有限会社遺物材料研究所に委託して行った。
- 10 遺物のトレースは株式会社セピアスに委託して行った。
- 11 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集に際しては、株式会社セピアスに委託してデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 12 調査成果の一部は『埋文にいがた』65 号、『第 16 回 遺跡発掘調査報告会』、『平成 20 年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』で公表しているが、本書をもって正式報告とする。
- 13 石器・玉類の石材鑑定は掲載遺物については埋文事業団高橋保雄が行い、未掲載遺物に関しては荒谷が行った。
- 14 第Ⅲ章 2・3 の地質に係る部分については千葉博後氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）に現地にてご助言をいただいた。
- 15 本書の執筆は高橋保雄（埋文事業団調査課長代理）の指導のもと、荒谷伸郎（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部 調査員）、吉田浩明（同 調査員）、高橋勝広（同 調査員）、石垣義則（同 調査員）がこれにあたり、編集は荒谷が担当した。執筆分担は以下のとおりである。
第Ⅰ章 1…高橋保雄、2・3…荒谷伸郎
第Ⅱ章…石垣義則
第Ⅲ章…荒谷伸郎
第Ⅳ章 1…荒谷伸郎、2・3…吉田浩明、4…荒谷伸郎
第Ⅴ章 1…荒谷伸郎、2…吉田浩明、高橋勝広・荒谷伸郎、3A・B…石垣義則、3C・D・E…荒谷伸郎
第VI章 1・2・3…千葉博後・齊藤崇人・伊藤良永・馬場健司・松本美由紀・高橋敦・齐藤纪之・中根秀二（パリノ・サーヴェイ株式会社）、4…薬科哲男（有限会社遺物材料研究所）
第VII章 1A…石垣義則、1B・C…荒谷伸郎、2・3…吉田浩明・荒谷伸郎
- 16 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）
相沢 央　朝岡政康　阿部泰之　アラタンホヤガ　石川日出志　篠澤正史　北野博司
間 雅之　田中耕作　鶴巻康志　中山俊道　古澤要史　増子正三　渡邊ますみ
阿賀野市教育委員会　阿賀野川土地改良区

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
A 試掘調査	1
B 本発掘調査	3
C 整理作業	4
3 調査体制	4
A 試掘調査	4
B 本発掘調査・整理	5

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境	6
2 歴史的環境	7
A 弥生時代の遺跡	7
B 古代の遺跡	8
C 中世の遺跡	9

第Ⅲ章 調査の概要

1 調査の概要	13
A 遺跡の立地と微地形	13
B グリッドの設定	13
2 基本層序と地形の変化	15
3 調査の基本方針	18

第Ⅳ章 遺 構

1 概 要	19
A 古代・中世の遺構	19
B 弥生時代の遺構	19
2 第1面の遺構	19
A 掘立柱建物	20
B 井 戸	20
C 土 坑	23
D 竪穴状遺構	25
E 溝	25
F 炭 窯	27
G 焼土 遺構	27
H 畝間状遺構	27
I 凹 地 遺構	28
J 性格不明遺構	28
K ピット	29
3 第2面の遺構	29
A 土 坑	30
B ピット	30
4 第3面の遺構	30
A 掘立柱建物	31

B 土 坑	32
C ビ ッ ト	34
D 埋 設 土 器	36

第V章 遺 物

1 概 要	37
2 古代・中世の遺物	37
A 中世の土器・陶磁器	37
1) 井 戸	38
2) 土 坑	39
3) 溝	39
4) 性格不明遺構	40
5) 遺構外出土土器・陶磁器	40
B 古代の土器	40
1) 土 坑	40
2) 溝	41
3) 焼 土 遺 構	41
4) 性格不明遺構	41
5) 遺構外出土土器	41
C 石 器	42
D 石 製 品	42
E 鉄 製 品	42
F 銅 製 品	43
G 鉄生産関連遺物	43
H 木 製 品	43
3 弥生時代の遺物	43
A 弥生時代の土器	43
1) 分 類	43
2) 実測図の表現方法について	47
3) 捶立柱建物	47
4) 土 坑	47
5) ビ ッ ト	50
6) 遺構外出土土器	50
B 土製品・焼粘土塊	54
C 石 器	55
1) 石 鐵	56
2) 石 錐失敗品	56
3) 石 雜	57
4) 不定形石器	57
5) 両極潤離痕のある石器	57
6) 磨 製 石 斧	58
7) 敲 磨 石 類	58
8) 石 盆・砾石・台石類	59
9) 石 核	59
10) 剥 片 類	59
11) 異 形 石 器	60
D 玉 類	60
E 搬 入 譜	61

第VI章 自然科学分析

1 は ジ め に	62
2 古環境推定及び植物利用	62
A 試 料	62
B 分 析 方 法	62
1) 菊 華 分 析	62
2) 花粉分析・寄生虫卵分析	63
3) 植物珪酸体分析	63
4) 微細物分析	64
C 結 果	64
1) 菊 華 分 析	64
2) 花粉分析・寄生虫卵分析	67
3) 植物珪酸体分析	68
4) 微細物分析	69
D 考 察	70
1) 古 環 境	70
3 遺物の年代観及び遺構の性格の検討	72
A 試 料	72

1) 土坑試料	72	2) SE1260	73
3) 弥生土器	73		
B 分析方法	73		
1) 放射性炭素年代測定	73	2) 寄生虫卵分析	73
3) 土壤理化分析	74		
C 結 果	74		
1) 放射性炭素年代測定	74	2) 寄生虫卵分析	74
3) 土壤理化分析	75		
D 考 察	76		
1) SE1260	76	2) 土 坑	77
4 黒曜石产地分析	78		
第VII章 ま と め			
1 弥生時代	82		
A 弥生土器	82	2) 編年の位置付け	84
1) 器種組成	82		
B 石器・玉について			87
C 総括と周辺遺跡との関連について			88
2 古 代	89		
3 中 世	90		
《要 約》			92
《引用・参考文献》			93
《観 察 表》			96
遺構（中世・古代）観察表			96
掘立柱建物（SB）観察表	96	井戸（SE）観察表	96
土坑（SK）観察表	96	竪穴状遺構（SX）観察表	97
溝（SD）観察表	97	炭窯（SX）観察表	99
焼土遺構（SX）観察表	99	礎間状遺構（SX）観察表	99
凹地遺構（SX）観察表	99	性格不明遺構（SX）観察表	99
遺物観察表			100
土器・陶磁器（古代・中世）観察表	100	石器観察表	104
石製品観察表	104	鉄製品観察表	104
銅製品観察表	104	羽口観察表	104
鉄滓観察表	104	木製品観察表	104
弥生土器観察表	105	土製品・焼粘土塊観察表	112
石器観察表	113	石器欠陥品観察表	113
石器観察表	113	不定形石器観察表	113
両極剥離痕のある石器観察表	114	磨製石斧観察表	114
敲磨石類観察表	114	石皿・砥石・台石類観察表	115
石核観察表	115	異形石器観察表	115
玉類観察表	115		

插 図 目 次

第 1 図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置	2	第 7 図 遺構の平面・断面形態及び遺構覆土の堆積形状の分類	18
第 2 図 トレンチ位置図	3	第 8 図 弥生土器出土分布図	44
第 3 図 山口遺跡周辺の主な遺跡	11	第 9 図 石器出土分布図	55
第 4 図 周辺の地形とグリッド設定図	14	第 10 図 刺片類出土分布図	60
第 5 図 基本層序と遺構検出層位模式図	17	第 11 図 珊瑚化石	64
第 6 図 混入物の含有率	18		

第 12 図	主要珪藻化石群集の層位分布	66
第 13 図	花粉分析・寄生虫卵分析プレパラート内の 状況写真・種実遺体	67
第 14 図	植物珪酸体含量	69
第 15 図	植物珪酸体	69
第 16 図	リン酸・腐植含量分布図	76
第 17 図	リン酸・カルシウム含量分布図	76
第 18 図	山口遺跡における弥生土器の組み合わせと その編年観	86

表 目 次

第 1 表	調査・整理の経過	4
第 2 表	山口遺跡周辺の主な遺跡	10
第 3 表	器種別石器出土表	55
第 4 表	珪藻分析結果（1）	65
第 5 表	珪藻分析結果（2）	66
第 6 表	花粉分析・寄生虫卵分析結果	68
第 7 表	植物珪酸体含量	68
第 8 表	微細物分析結果	70
第 9 表	放射性炭素年代測定結果	75
第 10 表	層年較正結果	75
第 11 表	土壤理化学分析結果	75
第 12 表	湯ノ倉・板山の原産地における原石群の 元素比の平均値と標準偏差	79
第 13 表	山口遺跡出土黒曜石製造物の元素比分析 結果	79
第 14 表	山口遺跡出土黒曜石製造物の検定結果	79
第 15 表	山口遺跡・獣山遺跡出土土器の器種組成表	83

図 版 目 次

【図面図版】

図版 1	遺構配図図 1（第 1 面）／遺構分割図配図模 式図（第 1 面）／確認層位模式図（第 1 面）	
図版 2	遺構分割図 1	
図版 3	遺構別図 1（SK48・49・53・67・SD77・ 110・SX54・55・85、P28～31・51・73・ 74・86・133）	
図版 4	遺構分割図 2	
図版 5	遺構別図 2（SD22・24・SX17・P33）／ 遺構分割図 3（SK7・15・20・828、P6）	
図版 6	遺構分割図 3	
図版 7	遺構別図 3（SK829・830、SD22～25・ 27、P8～11・16・18・19）	
図版 8	遺構分割図 4	
図版 9	遺構別図 4（SB1500、SK152・520・ 521・545、SD50・546・583・796・797、 SX144、P203・206・522）	
図版 10	遺構分割図 5	
図版 11	遺構別図 5（SE995、SK94・991・997、 SD43・50・962、SX56・141・142、P44・ 57・58）	
図版 12	遺構分割図 6	
図版 13	遺構別図 6（SK149・763・764・920・ 969・988、SD148・624・793～795・ 798、SX153・154・573、P321・454）	
図版 14	遺構分割図 7	
図版 15	遺構別図 7（SE4、SK52・960、SD50・ 574）	
図版 16	遺構分割図 8	
図版 17	遺構個別図 8（SX576・577・610・780、 P105・128・129・575・605・812・814・ 815）／（SE722、SK150・507・721・ 922、SD580、P1014・1038）	
図版 18	遺構分割図 9	
図版 19	遺構個別図 9（SE513、SK578）	
図版 20	遺構個別図 10（SK1255、SD580・645・ 800・801、SX647・648、P598・599・ 604）	
図版 21	遺構分割図 10	
図版 22	遺構分割図 11	
図版 23	遺構個別図 11（SE799・857）／（SK1639、 SD580・645）	
図版 24	遺構分割図 12	
図版 25	遺構個別図 12（SE1538、SD1539・1540、 SX1537・1624）	
図版 26	遺構分割図 13	
図版 27	遺構個別図 13（SK1053～1056・1177、 SD645・1031・1032・1041～1044・ 1521・1541、P1522）	
図版 28	遺構分割図 14	
図版 29	遺構個別図 14（SB1282、SE1175・1211・ 1260、SK1225、SD1031・1032・1201・ 1207・1259）	
図版 30	遺構分割図 15	
図版 31	遺構個別図 15（SE1173・1220・1230、 SK1174・1212・1621、SD1201・1207・ 1224、SX1231・1623）	
図版 32	遺構分割図 16	

- 図版 33 造構別図 16 (SE1052, SK1057・1058・1179・1180・1210・1213, SX1208・1209・1178)
図版 34 造構分割図 17
図版 35 造構分割図 18
図版 36 造構別図 17 (SE1554, SD1593～1596・1598・1599, SX1555・1610, P1162・1163) / (SB1324, SD1031・1201)
図版 37 造構配置図 2 (第 2 面) / 造構分割図配置模式図 (第 2 面) / 確認層位模式図 (第 2 面)
図版 38 造構分割図 19
図版 39 造構分割図 20
図版 40 造構分割図 21 / 造構別図 18 (SK1414)
図版 41 造構配置図 3 (第 3 面) / 造構分割図配置模式図 (第 3 面) / 第 3 面調査範囲
図版 42 造構分割図 22
図版 43 造構別図 19 (SK1350・1536, P1352・1413・1428・1493・1494・1517・1612)
図版 44 造構別図 20 (SK1161・1394・1502・1611・1640, P1024・1393)
図版 45 造構分割図 23
図版 46 造構別図 21 (SK1165・1170・1227・1449・1450, SX1397)
図版 47 造構別図 22 (SK1040・1289, P1036, SH1167)
図版 48 造構分割図 24
図版 49 造構別図 23 (SB1607 ① < P1241・1390～1392・1506・1507, SX1637 >)
図版 50 造構別図 24 (SB1607 ② < P1169・1286・1290・1508・1509・1515 >, SK1176・1214, P1051)
図版 51 造構別図 25 (SK1505・1523) / 造構分割図 25・26 (弥生時代)
図版 52 中世の土器 1
図版 53 中世の土器 2
図版 54 中世の土器 3, 古代の土器 1
図版 55 古代の土器 2
図版 56 古代の土器 3
図版 57 古代・中世の石器・石製品・鉄製品・銅製品・鉄生産関連遺物・木製品
図版 58 弥生時代の土器 1
図版 59 弥生時代の土器 2
図版 60 弥生時代の土器 3
図版 61 弥生時代の土器 4
図版 62 弥生時代の土器 5
図版 63 弥生時代の土器 6
図版 64 弥生時代の土器 7・土製品・弥生時代の石器 1
図版 65 弥生時代の石器 2
図版 66 弥生時代の石器 3
図版 67 弥生時代の石器 4
図版 68 弥生時代の石器 5
図版 69 弥生時代の石器 6
図版 70 弥生時代の石器 7
図版 71 弥生時代の石器 8
図版 72 弥生時代の石器 9・異形石器・玉類
【写真図版】
図版 73 調査範囲全景、遺跡遠景 (古代・中世)
図版 74 遺跡近景、調査前風景、基本土層、作業風景、部分全景 (古代・中世)
図版 75 部分全景 (古代・中世)
図版 76 調査範囲全景、掘立柱建物 1 (弥生時代)
図版 77 掘立柱建物 2、土坑 1、包含層遺物出土状況 1、弥生時代の玉 (弥生時代)
図版 78 掘立柱建物、井戸 1 (古代・中世)
図版 79 井戸 2 (古代・中世)
図版 80 井戸 3 (古代・中世)
図版 81 井戸 4 (古代・中世)
図版 82 井戸 5 (古代・中世)
図版 83 土坑 1 (古代・中世)
図版 84 土坑 2 (古代・中世)
図版 85 土坑 3 (古代・中世)
図版 86 土坑 4 (古代・中世)
図版 87 土坑 5 (古代・中世)
図版 88 土坑 6 (古代・中世)
図版 89 土坑 7 (古代・中世)
図版 90 土坑 8 (古代・中世)
図版 91 土坑 9 (古代・中世)
図版 92 土坑 10、竪穴状造構 (古代・中世)
図版 93 溝 1 (古代・中世)
図版 94 溝 2 (古代・中世)
図版 95 溝 3 (古代・中世)
図版 96 溝 4 (古代・中世)
図版 97 溝 5 (古代・中世)
図版 98 溝 6 (古代・中世)
図版 99 溝 7 (古代・中世)
図版 100 溝 8 (古代・中世)
図版 101 炭窯、焼土造構、歓間状造構 (古代・中世)
図版 102 四邊造構、性格不明造構 1 (古代・中世)
図版 103 性格不明造構 2 (古代・中世)
図版 104 性格不明造構 3 (古代・中世)
図版 105 ピット (古代・中世)
図版 106 掘立柱建物 3 (弥生時代)
図版 107 掘立柱建物 4、土坑 2 (弥生時代)
図版 108 土坑 3 (弥生時代)
図版 109 土坑 4 (弥生時代)

- 図版 110 土坑 5（弥生時代）
図版 111 ピット（弥生時代）
図版 112 埋設土器、包含層遺物出土状況 2、木質遺物出土状況（弥生時代）
図版 113 中世の土器 1
図版 114 中世の土器 2
図版 115 中世の土器 3・古代の土器 1
図版 116 古代の土器 2
図版 117 古代・中世の石器・石製品・鉄製品・銅製品・鉄生産関連遺物・木製品
図版 118 弥生時代の土器 1
- 図版 119 弥生時代の土器 2
図版 120 弥生時代の土器 3
図版 121 弥生時代の土器 4
図版 122 弥生時代の土器 5・土製品
図版 123 弥生時代の石器 1
図版 124 弥生時代の石器 2
図版 125 弥生時代の石器 3
図版 126 弥生時代の石器 4
図版 127 弥生時代の石器 5
図版 128 弥生時代の石器 6
図版 129 弥生時代の石器 7・玉類

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

一般国道 49 号（福島県いわき市～新潟市）は、太平洋側と日本海側を結ぶ主要幹線道路である。新潟県内では、沿線の阿賀野市・東蒲原郡阿賀町と新潟市を結ぶ地域幹線道路として重要な役割を果たしている。現道は阿賀野市の市街地（旧安田町・旧水原町・旧京ヶ瀬村）を通過し、交通量も 1 日当たり 20,000 台を超えている¹⁾。しかし、この区間の道路幅員が狭小なため、近年の交通量の増加に十分対応できず、交通混雑や交通騒音・交通事故など、都市機能や生活環境に与える影響が問題になっている。これらの問題を解消し、安全で円滑な交通を処理することを目的に、「一般国道 49 号安田バイパス」（阿賀野市六野瀬～同市寺社間 5.6km）と「一般国道 49 号水原バイパス」（阿賀野市寺社～同市下黒瀬間 8.1km）が計画された。これら二つのバイパスは、平成 16 年の市町村合併に伴う阿賀野市の誕生を機に、「阿賀野バイパス」と呼称することになった。

阿賀野バイパスのうち、安田バイパス部分は昭和 60（1985）年の一部暫定供用を経て、平成 18（2006）年 10 月に供用されている。

一方、水原バイパス部分は、平成 11 年 3 月に都市計画道路として決定され、翌 12 年 4 月事業化された。平成 15 年度から用地着手が行われた。これを受けて国土交通省と新潟県教育委員会（以下、県教委という）との間で、建設用地内における埋蔵文化財の取り扱い、試掘確認調査に関する協議が本格化した。

平成 17 年 4 月、国土交通省から試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という）調査を委託した。これ以後、阿賀野バイパスの試掘確認調査が本格化し、平成 17 年度に庚塚遺跡が、平成 18 年度に孤塚遺跡がそれぞれ新遺跡として登録された。本発掘調査は平成 19 年度から本格化し、庚塚遺跡・孤塚遺跡の発掘調査を実施した。

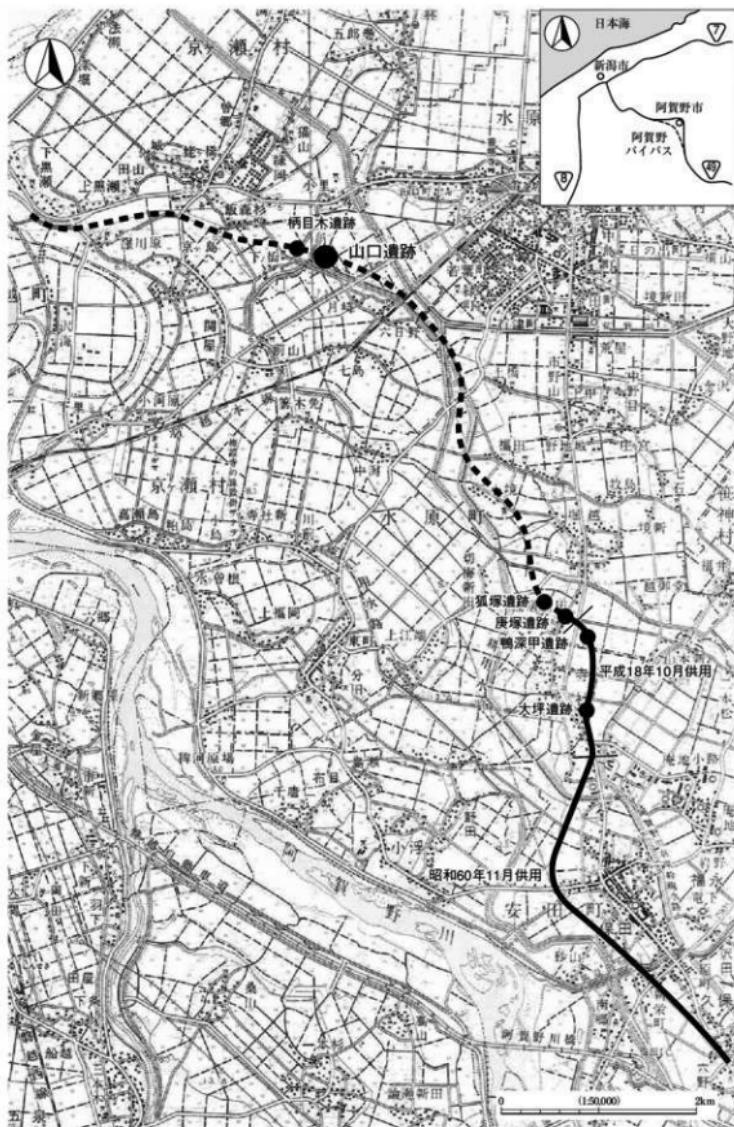
山口遺跡は平成 19 年度の試掘調査で新発見された遺跡であり、本発掘調査必要面積が 42,300m² と報告された。これを受けて国土交通省、県教委の 2 者で山口遺跡の取り扱いを協議した。平成 19 年 10 月、平成 20 年 2 月の協議を経て、当初調査予定面積は小里川寄りの 5,000m² と決定した。

2 調査の経過

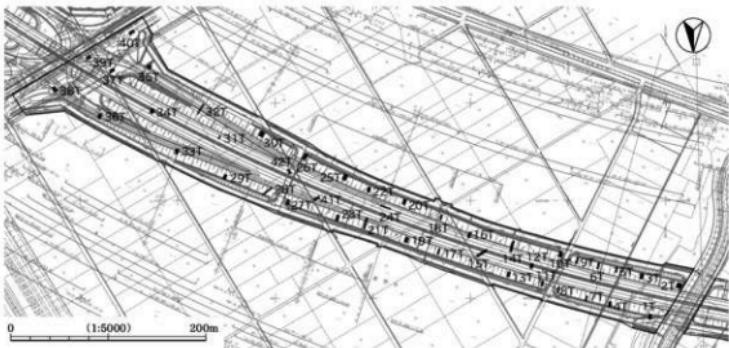
A 試掘調査

試掘調査は、平成 19 年 10 月 10 日から 30 日までの 15 日間を行った〔加藤 2008〕。調査範囲は阿賀野川右岸の自然堤防上、阿賀野バイパス路線内の旧小里川から国道 460 号間の 50,000m² を対象に、重機及び人力によるトレンチ（試掘坑）掘削と精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。設定したトレンチは 42 か所で、実質調査面積は 796m²、試掘率は 1.6% である。

1) 阿賀野市保田～同市中央町 1 丁目間では、20,600 台／日もの交通量があり、大型車が 12.5% を占めている状況である〔国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所 2006〕



第1図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置
(国土地理院発行「新潟」「新津」1:50,000原図 平成9年発行)



第2図 トレンチ位置図

調査によって、弥生時代の遺物包含層と古代・中世の遺物包含層が複数のトレンチから確認された。これに合わせて、遺構も6トレンチで弥生時代の竪穴状の掘り込みが、古代の遺構も5トレンチから32トレンチの範囲内で溝、土坑、ピットが確認された。

この結果を踏まえ、新遺跡の存在が明らかとなり、字名から「山口遺跡」として周知化された。これに伴い古代・中世遺跡 36,900m² の範囲に、重複する弥生時代の遺跡 3,500m² と古代の遺構が 2 層確認された範囲 1,900m² を加えた、延べ 42,300m² について本発掘調査が必要であると判断した。

B 本発掘調査

本発掘調査は平成20年4月15日から12月1日の期間で行った。以下、調査日誌から経過を抜粋して記載する。

4月15日 プレハブ設営をはじめとした準備工に着手した。

4月22日 阿智野市教育委員会を訪問し、調査計画を説明する。

5月8日 調査区の西側 $2/3$ の範囲を対象にバックホーによる表土掘削に着手する。

5月9日 作業員を入れての作業を開始する。遺物も出土し始め、調査区西半では中世の遺物が、東側では古代の遺物が主体であった。また、後に弥生時代の調査範囲とした8F、9E グリッドを中心とした範囲では、表土直下がV層であったため、弥生時代の遺物も多く出土して遺構の存在をうかがわせた。

5月12日 遺構検出を本格的に開始した。5・6B、5・7・8C、4・7D、3・4・6・7E グリッドでは III b 層上面で、これよりも東ではV~VI層上面での検出となった。

5月29日 遺構掘削に着手した。調査区西側では中世の遺構が、東側では古代の遺構が主体となって出土した。

7月19日 調査区の東側 1/3 の表土掘削に着手した。ここでは、古代の遺物と鉄達の出土が目立つ。

8月1日 ラジコンヘリコプターによる1度目の航空写真撮影を調査区西側の「第1面」を対象に行う。

8月18日 蕊生時代の包含層であるV層の掘削に着手する。

8月23日 弥生時代の調査と並行して「第2面」の調査のため、対象範囲の間層掘削をバックホーにて28日まで行う。ここで検出した遺構・遺物は共に少なかった。遺構掘削終了後、引き続き下位の「第

3 調査体制

3面」の調査へ移行した。

10月9日 農閑期に入り、これまで使用されていた農道部分の掘削が可能になる。バックホーにて掘削を行い、古代・中世の包含層と遺構が残存していることを確認する。

10月10日 排土置場としていた調査区北東隅の表土掘削を行う。この頃、弥生時代の遺構掘削が本格化し、複数基のピットの存在から掘立柱建物の存在がうかがわれる。

10月23日 調査成果を報道機関に公開する。

10月25日 現地にて調査成果を一般に公開する。見学者120名。

11月13日 ラジコンヘリコプターによる2度目の航空写真撮影を調査区東半の「第1面」を対象に行う。

11月27日 ラジコンヘリコプターによる3度目の航空写真撮影を「第3面」の調査範囲を対象に行う。

11月28日 深度2mを超える井戸の断ち割りをバックホーにて行い、底面を検出する。

12月1日 すべての測量を終えて、現地調査終了となる。

C 整理作業

図面・写真的整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。現地発掘作業が終了した12月2日から、本格的な整理作業に着手した。本発掘調査と一部並行して行った整理作業の流れは以下のようになる。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
本 調 査	■	■						■				
調査			■	■	■	■	■	■				
現場収集												
図面整理												
遺物水洗い・注記				■	■		■	■				
遺物別別					■	■			■	■		
遺物実測						■	■		■	■		
図版作成							■	■	■	■	■	
原稿執筆								■	■	■	■	
編集・校正									■	■	■	

第1表 調査・整理の経過

3 調査体制

A 試掘調査

調査期間 平成19年10月10日～30日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 木村 正昭（事務局長）

斎藤 栄（総務課長）

藤巻 正信（調査課長）

庶 務 長谷川 靖（総務課班長）

調査指導 田海 義正（調査課試掘・確認調査担当課長代理）

調査担当 加藤 学（同 班長）

調査員 斎藤 準（同 嘱託員）

B 本発掘調査・整理

調査期間 平成 20 年 4 月 15 日～12 月 1 日

整理期間 平成 20 年 12 月 2 日～3 月 31 日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理 木村 正昭（事務局長）

斎藤 栄（総務課長）

藤巻 正信（調査課長）

庶務 長谷川 靖（総務課班長）

監督 高橋 保雄（調査課本発掘調査担当課長代理）

調査組織 株式会社 ノガミ

現場代理人 小熊 晋介（埋蔵文化財調査部）

調査指導 戸根 与八郎（ 同 調査室長）

調査担当 荒谷 伸郎（ 同 調査員）

調査員 吉田 浩明（ 同 調査員）

小林 晴生（ 同 調査員 8月9日まで）

高橋 勝広（ 同 調査員 8月18日から）

石垣 義則（ 同 調査員）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

山口遺跡は、新潟県の北東部に位置する阿賀野市に所在する。阿賀野市は平成 16 年 4 月に安田町、水原町、筆神村、京ヶ瀬村が合併して誕生した市で、本遺跡は旧水原町に位置する。

本遺跡の西方には一級河川の阿賀野川が流れる。阿賀野川は山間部を蛇行し、阿賀野市（旧安田町）草水、五泉市馬下付近から平野に流れ出し扇状地を形成する。この扇状地にはほぼ重なる阿賀野市草水から稗河原場付近に至る 12km 程の間では、川の流れは比較的急で、砂礫の広い河原を枝分かれしながら流れている。これより下流では流れを大きく蛇行させながらも、緩やかになり流路も安定する。阿賀野川は広大な沖積地である新潟平野を形成する。

新潟平野は、海岸線に沿って砂丘列が発達し、河川の海への流出口を狭くしている。このような地形のため、洪水になると河川の水が海に流出しづらく氾濫をおこしやすい。阿賀野川は氾濫を繰り返すことによって流路を変え、自然堤防、三日月湖（河跡湖）を作り、河道の痕跡を残してきた。

本遺跡の東方には五頭連峰が連なる。五頭連峰は菱ヶ岳断層に沿って南北に延び、北から南へ向い、金鉢山（888.4m）、松平山（953.9m）、五頭山（912.5m）、菱ヶ岳（973.5m）、宝珠山（559m）などの山々からなる。五頭連峰の周辺には熊野神社が多く分布することから、中世には熊野信仰（熊野系修驗）の対象となる場所であったという意見もある〔中野 1988〕。現在は登山道が整備され、地域の人々が利用し、また山麓の西側には出湯、今板、村杉などの古くからの温泉もあり、観光地として賑わいをみせる。五頭連峰の西側には、標高約 100 m 前後の山々からなる筆神丘陵が約 18km にわたって延びている。丘陵地の西側、北端の旧豊浦町の真木山丘陵から南端の旧安田町の赤坂山丘陵には、古代から中世の窯業遺跡や製鉄関連遺跡が多数分布する。丘陵は第三紀層の上に堆積した第四紀洪積層によって形成されたと考えられる〔荒木 1970〕。

本遺跡の現況は水田で、その周囲には田園風景が広がる。水田以前は桑畠として利用されていたことが明治 44 年の測量地形図から見てとれる。遺跡の西側には人工河川として改修された旧小里川が流れる。小里川は旧水原町上江端付近に源を発する。現在は旧京ヶ瀬村小里付近で人工河川として改修された安野川へ合流するが、かつては駒林川へと合流していた。この駒林川はさらに北上して人工河川の新井郷川へ合流するが、かつては福島潟へと注ぎ込んでいた。また、正保 4（1645）年に成立した「正保越後国絵図」をみると、かつての安野川も福島潟に流れ込んでいたことが認められる。改修以前の小里川は、勾配が緩やかで流路は大きく屈曲していた。そのため豪雨のたびに氾濫し、駒林川と共に沿岸耕地に浸水、冠水の多大な被害をもたらしていた〔京ヶ瀬村 1969〕。これを防ぐために行われた小里川・安野川の改修では多くの蛇行部分をカットし、現在の直線的な流れへと変える工事が行われた。

2 歴史的環境

A 弥生時代の遺跡

山口遺跡周辺の弥生時代前期から中期後半までの様相について、阿賀野川以北を中心に概観する。この地域には阿賀野川以南と比較しても多くの弥生時代の遺跡が分布している。

弥生時代に先行する縄文時代後期後半から終末期の遺跡として青田遺跡（旧加治川村）、村尻遺跡（新発田市）、鳥屋遺跡（旧豊栄市）、六野瀬遺跡（5）などある。これらに関する発掘調査や研究成果から、浮線網状文土器群の鳥屋 2b 式と亀ヶ岡文化の最終型式群の大洞 A' 式が併行関係にあることが理解されている〔荒川 1999、小林 2008〕。「大洞 A' 式」の範疇をどのように理解するかは研究者間で一致しない部分もあるが、今回の報告では大洞 A' 式の直後、新潟県域の「緒立式」、福島県域の「御代田式」、山形県庄内地方の「生石 2 式」から弥生土器とする見解〔石川 2003〕に基づいている。

広域的な視点で葬制から弥生時代前半の特徴をあげるとするならば、東日本における再葬墓とこれに関わる遺跡の存在があげられる。弥生時代の再葬墓は前期から中期前半の東日本、とくに中部地方から関東地方、東北南部の一带に分布しており〔石川 1999〕、新潟県もその分布圏内となる。県内ではこれまでにも多くの再葬墓が確認されており、その当時の葬制、集落形態や集落構造を読み解く上で重要な地域と位置付けられると考える。

県内の再葬墓の調査は昭和 13（1938）年、杉原在介氏による六野瀬遺跡の調査に始まる。この時、再葬墓に隣接して伸展葬とされた 1 体も検出されている〔杉原 1968〕。その後、平成 2 年（1990）にも調査が行われ、再葬墓に関係すると見られる「剥片剥離作業ブロック」が検出されている〔石川 1992〕。

猫山遺跡（6）は昭和 33（1958）年に調査が行われ、県内 2 例目の再葬墓が検出された〔上原 1959〕。ここで出土した土器は、当時の北陸地方を代表するものとして、全国集成の中でも紹介されている〔上原・磯崎 1968〕。その後、平成 13（2001）年に京ヶ瀬村教育委員会が発掘調査を行い、弥生時代前期から中期前半にかけての大型掘立柱建物群や土坑墓の可能性が示唆される土坑 6 基などが検出された。この成果は集落の調査事例が少ないので、貴重なものといえる〔古澤ほか 2003〕。平成 14（2002）年からは、遺跡の範囲と内容を確認するための試掘調査が実施されている。遺跡範囲の推定とともに、肩位的な遺物の出土状況の把握などの成果があげられている〔古澤 2008〕。本遺跡の東方約 1.3km に位置する三辺稻荷遺跡（43）は平成 20（2008）年に調査が行われ、前期の土器とともに直径 4m の住居が検出された〔古澤 2008〕。

大曲遺跡（4）は昭和 49（1974）年に土取りにより偶然に発見された遺跡である。当時、再葬墓 1 基確認されたが、その詳細は報告されていない。その後、平成元（1989）年に県内では 4 例目としての調査が行われ、17m² の小範囲から 4 基の再葬墓が検出された〔石川 1989〕。出土した土器は、県内では分布が希薄な中期前葉のものであり、周辺地域との関連を示す事例を含むものであった。石器では第 3～5 号墓坑から多数の剥片類が出土した点が特筆される。また、近年までその詳細が不明であった 1974 年の調査で出土した土器については、阿賀野市教育委員会により再整理が行われた。これらについては資料紹介という形で公表されている〔アラタンホヤガ 2008〕。

大曲遺跡に隣接する山ノ下遺跡（3）は平成 9（1997）年に調査が行われた。この報告の中で再葬墓造成期の遺跡の類型化が試みられ、「再葬墓遺跡」以外を「剥片剥離作業遺跡」と「生活遺跡」として捉え、

山ノ下遺跡は生活遺跡に位置付けられた〔石川 2005a〕。これにより、再葬墓研究の進展に伴っては、それ自体にのみ焦点をあてるのでなく、その周辺の遺跡との関連性とともに論じる必要性が明確に指摘された。

その後、広域的には中期中頃の南御山 2 式直前には弥生再葬墓は減少し、それ以後は見られなくなり、それに変わるように土坑墓と壺棺が普及する。六野瀬遺跡では東北系弥生土器の南御山 2 式とともに、北陸系櫛描文土器が出土している〔石川 2000〕。孤塚遺跡（2）では、中期後半の土坑墓が 11 基検出されている〔佐藤ほか 2009〕。なお、本遺跡からも中期後半の宇津ノ台系の土器が少量ではあるが出土している。

B 古代の遺跡

山口遺跡が位置する阿賀野市は、古代の行政区画である越後国沼垂郡に属していた。越後国沼垂郡の成立については〔山田 1986、鶴田 2004〕が詳しい。それによると、7世紀末頃、それまで越国とされていた地域が細分され、越前国・越中国・越後国・佐渡国が成立する。その後、大宝二（702）年に越中国の蒲原、古志、魚沼、頸城の 4 郡が越後国に移管され、和銅元（708）年には越後国に出羽郡が成立する。和銅五（712）年に出羽郡が分離し、陸奥国の最上・置賜両郡と合わせて出羽国が設置される。8世紀中葉には越後国の領域がほぼ確定し、現在の新潟県の原型が出来上がる。また、「和名類聚抄」によると、沼垂郡には足羽・沼垂・質地の 3 郷が記されており、本遺跡周辺は質地郷あるいは沼垂郷に属していたと見られる。

以下では生産遺跡と集落遺跡の動向に着目し、古代の様相を概観する。なお、須恵器及び土師器の年代については述べるときは、〔春日 1999〕編年を用いることとする。

生産遺跡

窯業や製鉄などの林野の開発は、製塩などの海辺の生産とともに、古代の主要な手工業生産に位置付けられる。五頭山麓窯跡群（笠神窯）は沼垂郡内の須恵器生産を担い、一郡一窯的生産の役割を果たしていた。五頭山麓窯跡群は 8 世紀前半に須恵器生産が開始され、8 世紀後半から 9 世紀前半に窯数が最も多くなり、9 世紀中葉以降生産は減少し、そして衰退へと向かう。最も活動が活発になる時期は、官衙の再編時期と重なり、手工業生産が最も拡充される時期である。調査事例は清見寺 A 窯跡（24）〔中川ほか 1962〕や猿沢 2 号窯跡（50）〔中川ほか 1973〕があり、出土した須恵器からそれぞれ 8 世紀後半（IV 2 期）、9 世紀前半（V 2 期）の所産である〔小林 2004〕。9 世紀前半以降、他郡では須恵器生産が衰退していくが、笠神窯では小規模ながら生産が継続される〔望月 2006〕。なお、沼垂郡内にはホーロク沢窯跡群（新発田市）〔鶴巻 2001〕や安田窯跡群（旧安田町）〔春日 2004〕が確認されているが、ともに IV 2～3 期（8 世紀後半）と操業時期は短期間である〔春日 2006〕。五頭山麓窯跡群で生産される須恵器の胎土はやや粗く、石英や長石、金雲母などの混入物が多く混入するざらついた胎土が特徴である。

集落遺跡

生産遺跡に統いて、古代の集落遺跡を見てみると、集落（村落）がいくつかのまとまりをもって分布する。発久遺跡（23）の周辺には、小曾根遺跡（14）、腰廻西遺跡（51）、壱本杉遺跡（52）、未明遺跡（54）、台田遺跡（53）などが分布する。この周辺は、古墳前期から在地豪族の拠点として開発が進められていた地

域でもあった。また、近くには五頭山麓窯跡群や製鉄遺跡が位置し、それらの手工業生産との関わりを持ちやすい地域だったともいえる。発久遺跡はIV～VI期（8世紀中葉～9世紀後半）まで続く長期的な集落で、当時の役所の業務に関わる木簡や多数の墨書き土器が出土したことから官衙関連遺跡と評価されている〔川上 1991〕。代表的な木簡をみていくと、曆木簡は各月朔日の干支が書かれている木簡で、そこに記されている暦は記載方法や朔日干支の検討から延暦十四（795）年の暦とみられる。辺抄木簡は、品物を受け取ったことを証明する木簡である。その木簡には、受け取り責任者とみられる「磯部廣人」という署名も記されている。さらに、健児が宿直勤務をしたことを上司に報告した宿直報告の木簡も出土した。健児制とは延暦十一（792）年に設置された兵制で、健児には地方有力者である郡司の子弟が充てられた。この木簡の出土から、発久遺跡には健児によって守衛される施設があったと推測されている〔相沢 2004〕。また、その木簡は定木として再利用された痕跡が認められる。IV期（8世紀中葉～9世紀初頭）は律令社会の変革期であり、これまでに整備されていた官衙の再編が行われる時期と見られ、沼垂郡及び岩船郡では、この時期に官衙関連遺跡が増加する〔春日 2006〕。ただし、壹木杉遺跡（52）のように9世紀中頃に新たな集落が形成される動きも見られる〔川上 1999〕。

その一方で、9世紀に入ると、これまでに古代の集落が形成されなかつた阿賀川右岸の自然堤防及び微高地に、新たな土地開墾の動きがみられる。その動きは、大坪遺跡（39）、横峰B遺跡（46）、鶴深甲遺跡（42）、庚塚遺跡（1）の周辺で認められる。大坪遺跡では土師器焼成遺構が5基検出されており、その土師器の年代はVI期の所産である〔荒川ほか 2006〕。

C 中世の遺跡

中世に入ると、これまでの政治や経済活動に大きな変化が見られる。そのひとつは土地支配の在り方で、古代の律令制とは異なり、荘園と国衙領からなる「荘園公領制」と呼ばれる。中世において、山口遺跡周辺は摂関家領の白河荘内に属していた。白河荘の範囲は阿賀野市及び新潟市北区（旧豊栄市）の一部が含まれると考えられており、白河荘の成立やその歴史的背景については〔荻野 1986〕や〔樋口 2004〕、〔田村 2004〕の論考が詳しい。

白河荘について

上記の論考を参考に白河荘について概観する。中世では、古代で見られた初期荘園や免田型荘園とは異なり、領域型荘園（中世荘園）が成立する。それは11世紀中葉以降のこと、12世紀初頭の白川院政期に本格化し、鳥羽院政期にピークを迎える。越後国の荘園の多くは、鳥羽院政期に成立したものである。また、11～12世紀には国衙領も郡・郷・保などの新たな支配体制に分割・再編成された。阿賀野川以北（阿賀北）では、白河荘のほかに、奥山荘・加地荘・豊田荘などの荘園が成立することから、「荘園の世界」といわれる。白河荘の立莊は、長承三（1134）年八月二十八日「越後國司序宣」で認められる。そこには、荘園の四至（東西南北の境界）に榜示を打ち、国司の入部を禁じる旨が記されている。榜示とは領主名が記された所領の境を定める標識であり、官物や臨時雜役の免除、不入などの特権の標識でもある。また、治承四（1180）年五月十一日「皇嘉門院懇處分状」から白河荘が皇嘉門院領であったことがわかる。皇嘉門院は摂關家の藤原忠通の娘・聖子であり、同荘が成立した長承三年段階では崇徳天皇の皇后であった。ただし、実質的な管領者は藤原忠通であり、彼が皇嘉門院領として白河荘を立莊させたと見られる。立莊する際には、立莊に反対する在府官人を牽制し、現地で立莊を承認させる力が必要であった。その実力を持つ

ていたものが城氏一族と見られている。

城氏とは、10世紀後半～11世紀前半に東国で活躍した平維茂（維良）の後裔である。維茂の嫡子繁貞は越後国に郎党・従類を養い、越後国司の追捕の対象となるような活動を行うなど、国衙勢力と敵対しながらも、越後国内に所領を獲得しつつある存在であった。城という性は、維茂の子繁成が出羽城介に任命されたことに由来する。繁成と越後の関わりは不明であるが、城氏一族が「越後国住人」と初めて史料上にその姿を明確に現したのは、永久五（1117）年のことで、そこで記される「越後国住人平永基」は城貞成の子である。城氏一族のなかで、白河荘に関わった人物に資永（助水）・助職（長茂）兄弟がいる。とくに弟の助職は城四郎と称し、国人からは白河御館とも呼ばれていた。治承三（1179）年に始まる源平の争乱は、その後越後国にも波及し、平家の滅亡に伴い城氏の勢力を衰えはじめる。

文治元（1184）年、越後国は源頼朝の知行国となり、それ以後も一時的な断絶があるものの、鎌倉時代を通じて將軍知行国として存続し、鎌倉幕府の管轄領域である東国に位置付けられた。鎌倉期の白河荘は、伊豆出身の大見家秀が地頭となって管理、支配を行った。その後、荘内をいくつかに分割し、大見一族から派生した安田氏、水原氏、山浦氏らの国人領主によって支配された。大見一族の在地支配が進むにつれて九条家の白河荘支配は後退していく。

元弘三（1333）年に鎌倉幕府が滅亡し、建武新政権が発足する。倒幕に大きな功績を挙げた新田義貞が越後守に任命され、守護職を兼務し一国全体を統括した。程なく、足利尊氏と後醍醐天皇・新田義貞との関係は悪化し、尊氏は後醍醐に反旗を翻す。後醍醐天皇の南朝側は、新田義貞を總大将として出陣するが、尊氏軍に敗れ去る。これ以降、越後国も南北朝の動乱状況となる。白河荘の位置する阿賀北地域には、尊氏方の北朝勢力が数多く控えていた。白河荘山浦地頭大見能登守の代官を名乗る加治岡政光は、足利方の國大将佐々木加地影綱の軍に属し、新田方の軍勢と合戦している。これは、白河荘の在地勢力が動乱に参加している唯一の事例である。

延元三（1338）年、尊氏は征夷大將となり室町幕府が成立する。暦応四（1341）年、上杉憲頃が越後国守護となる。それ以後、上杉氏は越後の領国支配を進め、上杉一族や守護代長尾一族が越後各地に配置されるようになる。越後府中を拠点とする守護上杉氏の支配は、阿賀野川以北には及びにくかったと見られ、越後守護の弟・憲重が白河荘の山浦を拠点としたことは、守護支配の弱点を補うものと見られる。この後、16世紀前半まで守護上杉氏、守護代長尾氏による越後国支配の体制が存続する。

永正四（1507）年、守護代長尾為景が上杉一族の上条定実を擁立して、守護上杉房能を追放したとき、越後の戦国時代が幕を開ける。

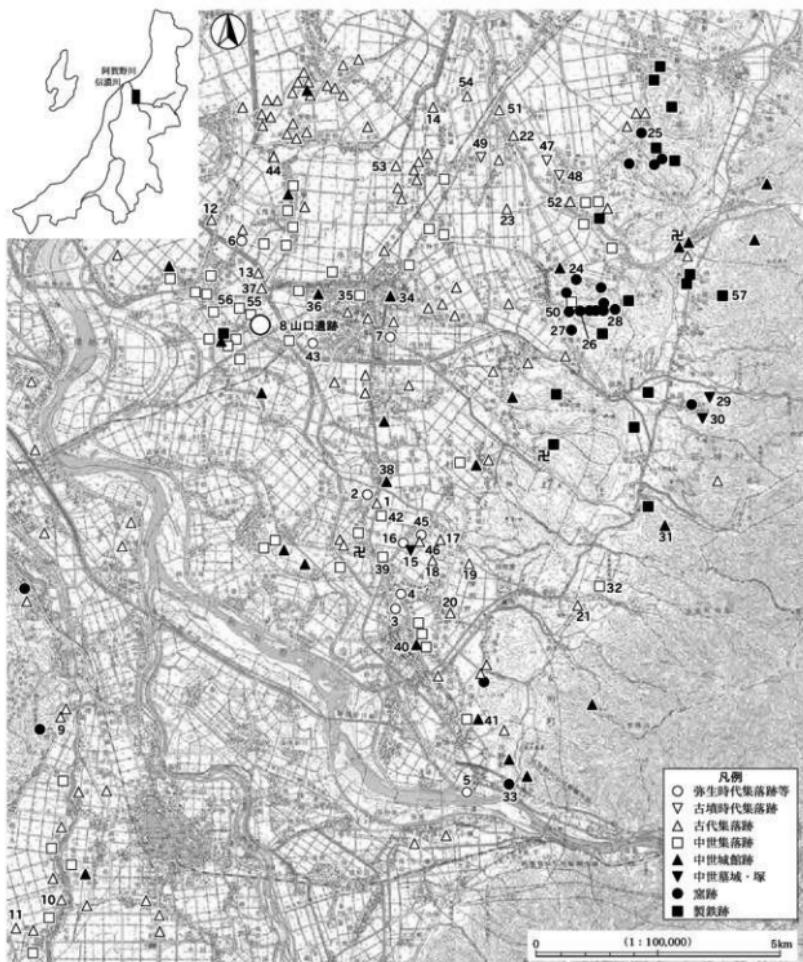
No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	庚塚	11	佐吉田	21	ツベタ B	31	村杉城跡	41	六野瀬御跡
2	狐塚	12	村下	22	腰廻	32	渕山	42	鷹深甲
3	山ノ下	13	大曲川端	23	兎久	33	赤坂山中世窯跡	43	三辺福尚
4	大曲	14	小曾根	24	清見寺窯跡 A	34	水原御跡	44	山鳥屋敷
5	八野瀬	15	横峰御跡	25	北沢	35	七面堂	45	横峰 A
6	猫山	16	小山崎	26	猪沢中世窯跡	36	下条御跡	46	横峰 B
7	下金田	17	上野林 J	27	梅島御跡	37	羽宜堀	47	上高間
8	山口	18	上野林 L	28	背中奥窯跡	38	坂越御跡	48	前田
9	小室山	19	上野林 C	29	經済中世墓地	39	大坪	49	高畑
10	新保	20	岩野 A	30	日洗沢中世墓地	40	安田城跡	50	鍋沢二号窯跡

第2表 山口遺跡周辺の主な遺跡

生産遺跡

中世における経済活動は、古代以上に流通範囲や流通量が拡大する。集落遺跡から出土する陶磁器や土器の器種組成は、広域流通品の珠洲窯や越前窯の製品、狭域流通品の在地産陶器、輸入陶磁器、在地産の土師器などからなる。

12世紀後半以降、中世須恵器生産の中心的役割を担う珠洲窯が活発になる状況の中で、笠神丘陵では



第3図 山口遺跡周辺の主な遺跡
(国土地理院発行 平成11年「津川」平成9年「新津」「新瀬」平成2年「新発田」1:50,000原図)

古代に一度廃絶した窯業が再開される。笠神丘陵における窯業生産の推移は、13世紀の北沢遺跡（須恵器系・吉岡II古期、13世紀第3四半期）に始まり、背中糸窯（須恵器系・吉岡II新期、13世紀第4四半期）[吉岡1994]、権兵衛沢窯（瓷器系・13世紀後半～14世紀初頭）、赤坂山中世窯（瓷器系・13世紀中頃～後半）と生産が短期操業で運営され、狼沢窯（瓷器系・13世紀末～14世紀前半）をもって終焉を迎える[小田1999]。また、赤坂山中世窯跡の西方約1kmに位置する六野瀬遺跡（5）では、近接する赤坂山中世窯の製品が多く出土することから、その製品の積み出し場と推定されている[鶴巻1992]。

集落遺跡

集落では土地利用に変化が見られ、堀が巡る館が出現し、集落や生産域には条理区画が用いられる。また、丘陵部には防御施設を伴う山城も出現する。白河莊内には中世館跡が数多く確認されているが調査事例は極めて少ない。堀越館跡は14世紀後半～15世紀前半の館で、出土遺物は日用品が少なく、茶の湯、花生け、香に関する非日用的なものが目立つ。特に、重要な資料として廃棄土坑からの一括遺物が挙げられる。これは火事場整理事と見られ、和田中条氏文書中条房賀記録の応永三十（1423）年の部分に、堀越要害落城の記事が残っていることから、この廃棄一括資料は考古学と文献史学の双方の視点から検討できる貴重な事例といえる[小田2001]。それ以外の城館としては水原館跡（34）、安田城（40）、笠岡城などがある。

大坪遺跡（39）の周辺では9世紀に始まり、中世まで断続的に營まれた複合遺跡が分布する。大坪遺跡では中世初期の掘立柱建物50棟が検出され、その内訳は梁間1間型建物が10棟、総柱建物が40棟である。大きなものでは床面積が100m²を超えるものもあり、4棟検出されている。遺構はこのほかに井戸や大型の溝、木棺墓が検出されている。遺物は土師器を中心に、珠洲焼や国產陶器、白磁や高麗青磁の輸入陶磁器類が多数出土し、主体となる時期は11～12世紀であった。これらの成果により大坪遺跡は大型建物を中心とした集落であり、当時の有力者の居館と考えられている[荒川ほか2006、荒川2007]。鶴深甲遺跡（42）は、14世紀～15世紀前半の集落であり、掘立柱建物や井戸、土坑などが検出されたほかに、溝状の凹地遺構が数多く検出された。凹地遺構は水田跡の可能性が示唆されており、鶴深甲遺跡は居住域と耕地または水田と見られる生産域からなる集落である[高橋ほか2006]。なお、鶴深甲遺跡の西側に隣接する狐塚遺跡（2）でも12～14世紀の集落が確認されている[佐藤ほか2009]。

第III章 調査の概要

1 調査の概要

A 遺跡の立地と微地形

本遺跡の所在する阿賀野市域は、北流する阿賀野川によって形成された沖積平野と五頭山を中心とした山地、標高約100mの笹原丘陵で構成される。遺跡は阿賀野川の右岸、流れから東へ約3.4km離れた沖積地に位置している。北東は小里・山口集落、南西は下ノ橋集落、南東は月崎・六日野のそれぞれの集落が乗る自然堤防に囲まれた氾濫平野に位置している。遺跡の周間に目を移すと、集落の位置する自然堤防や旧河道によって若干の起伏が認められるものの、近代の耕地整理によってほぼ平坦地へと変更されている（第4図）。そのため旧地形の把握は困難であったが、本来は微高地と後背地が複雑に入り組んだ複雑な様相を呈していたと考えられる。地形図及び周辺住民からの聞き取りによると、本遺跡周辺は耕地整理以前には桑畠として利用されていた。なお、現況の水田の標高は約6mである。

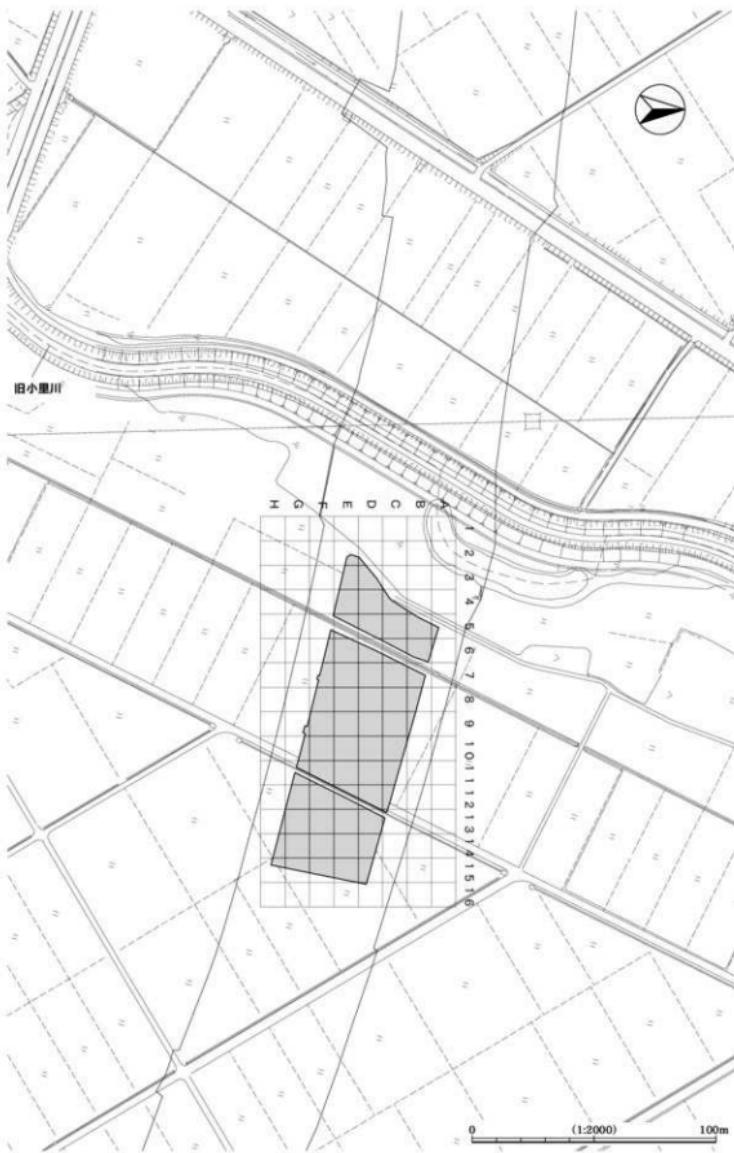
調査区の西側60mに旧小里川が北流する。現在は排水路として開削改修されているが、本遺跡から約800m北流した地点で駒林川に合流して福島潟方面へと至る。今回の調査では、弥生時代から古代までの地形が旧小里川に向かって下る様子が明らかになった。このことから、流路部分については調査区外であったが、この斜面が旧小里川の河川作用によって形成された可能性を指摘できる。これについては基本層序の項で詳述する。この旧小里川の対岸、本遺跡から約70m西方には柄日本遺跡が位置する。

B グリッドの設定

グリッドの設定については今後の調査継続に伴う復元性を考慮し、道路法線に沿った任意のものではなく東西座標軸による数値で設定した。

グリッドは、国家座標系に沿って10mの方眼を組み、これを大グリッドとした（第4図）。大グリッドの呼称は、西から東へアラビア数字で1～5、北から南へアルファベットの大文字でA～Eとした記号を組み合わせ、1A・2A…、1B・2B…、1C・2C…のように呼称した。さらに大グリッド内を25分割し、北西隅を1、北東隅を5、南西隅を21、南東隅を25となるように番号を付して2m四方の小グリッドとし、大グリッド番号との組み合わせで、「9E17」などと表した。調査範囲のほぼ中央に位置する9Eグリッド北西隅の杭の座標はX=203780.000、Y=61480.000である。

なお、調査区中には農作業用水路が2本縱断していた。この2本は発掘調査中も供用中であったため安全確保を理由に、水路からは十分な距離をとって表土・包含層掘削を行った。さらに、調査区の周囲も農道に囲まれていたため、表土掘削は調査境界から距離をとり、農耕車の通行と作業員の安全に留意して作業を行った。



第4図 周辺の地形とグリッド設定図

2 基本層序と地形の変化

本遺跡は阿賀野川及びその支流によって形成された沖積地の氾濫平野に立地している。今回の調査では、弥生時代から古代、中世に至る地形の変化と土地利用の変遷が捉えられた。

人為的な痕跡を残すVI層以前の堆積層は、重機による掘削が可能な深度までは、基本層序で把握したものとの同質のシルトを基本とした層であった。これは比較的均質なシルトが厚く堆積し、阿賀野川本流の作用による沖積世の堆積物と考えられる。その後、現在の流路と近接した位置に旧小里川が流下を始める。この河川の浸食作用により調査区西半のVI層が削られ、西へ下る斜面が形成されたと考えられる。旧小里川との関連は、弥生時代調査範囲のVI層上面の等高線が開削改修以前の旧河道痕跡に平行することからも推察できる。その後、弥生時代に至り、人々が最初の生活痕跡を残す時期を迎えて遺物包含層のV層が形成される。弥生時代の遺構は、この斜面を上った自然堤防状の微高地とその後背地に構築され、斜面は主に遺物の捨場として利用された。

弥生時代以降、遺跡は一度空白期となり、再び人々の痕跡が認められるのは古代となる。この時点で斜面はまだ存在しているが、人々の活動痕跡の中心は調査範囲の東側に重心を移し、斜面はわずかな遺物の散布が認められる程度となる。この古代を主とする遺物包含層であるIV層は、上下層と異なる暗褐色を呈している。これは植生の変化を含めた周辺環境の変化と安定を示している可能性がある。その後、斜面は間層であるIII b層により埋没する。この堆積には遺物は伴わず、比較的均質な砂質シルトで構成されることから、比較的短期間の内の洪水堆積であったとも推察できる。これにより斜面は埋積し、調査区東半から続く平坦な地形へと変わる。

ここまで、斜面部を中心に堆積過程と地形の変遷を述べたが、調査区東側の高位面では近代の耕地整理に伴う削平により原地形の完全な把握には至らなかった。わずかに耕地整理時に農道部分として削平を免れた部分（第5図・柱状圖④）から推測すると、古代の遺物を多く含む暗褐色層が確認され、IV層が高位面まで及ぶことと、斜面部でIV層を覆い隠したIII b層がここまで及んでいないことが推測された。こうして調査範囲がほぼ平坦になった後の中世段階で、遺物包含層のIII a層が形成された。合わせて調査範囲全域に遺構が構築されるようになる。その後、近世段階では遺物の出土も少なく、利用頻度は高くなかったと考えられる。近代に至ると桑畠として利用された後、前述の耕地整理を経て、現在は周囲一面が水田へと転換されている。

上記のように原地形及び遺物包含層と遺構確認面の関係については、削平により断続的にしか把握できなかつた部分がある。そのため、調査は層位順ではなく、遺構の広がりを面として捉えることで行った。現代の耕作土であるI層、旧表土と考えられるII層及び調査区西半で確認された中世の遺物包含層であるIII a層を掘削した後に検出した遺構群を「第1面」とした。ここで遺構検出面としたIII b層の下に被覆されたIV層を掘削した後に検出した遺構群を「第2面」とした。上面の一部が古代・中世の遺構検出面となつた弥生時代の遺物包含層であるV層については、その範囲が限定されることから、遺構・遺物が検出された部分のみを調査範囲とし、ここで検出した遺構群を「第3面」とした。調査は以上の計3面で行い、報告順も調査順に従い「第1面」（古代・中世）→「第2面」（古代）→「第3面（弥生時代）」の順とした。

以下、基本層序I～VI層の説明をする（第5図）。本調査区は西へ下る斜面部分と削平により作出された東側の平坦面で構成される。この状況を表現するため、基本層序の土層の取得は調査範囲の長軸である

「柱状図①—柱状図⑦」ラインをメインベルトとして行った。

なお、既報〔加藤 2008〕の試掘調査との基本層序の相違点は、大きく以下の 2 点である。①試掘での III 層は、これを III a、III b 層に新たに細分し、III a 層を中心とする遺物包含層、III b 層は無遺物層と理解し、この上面を遺構検出面とした。②本調査区内では「試掘調査の VI 層」は存在しなかつたが、調査段階では試掘調査の層順をそのまま用いて作業を行った。しかし、今回の報告にあたっては層順の連続性に欠けが生じないように「試掘の VII 層」を「VI 層」に振り替えて行う。この 2 点以外に大きな認識の違いはない。

I 層…にぶい黄褐色粘質シルト（10YR5/3） 粘性：強い しまり：強い

現代の水田耕作土である。調査区を南北に縱断していた農道部分を除く全域に広がる。

II 層…褐色シルト（10YR4/4） 粘性：普通 しまり：普通

中世以降に堆積した層で、耕地整理以前の旧表土と考えられる。

III a 層…にぶい黄褐色シルト（10YR4/3） 粘性：普通 しまり：普通

中世を中心とする遺物包含層である。III b 層と色調・土質が近似するが、遺物の面的な広がりが捉えられたことから遺物包含層として分離した。植物珪酸体分析（第 VI 章 2）では、栽培植物であるイネ属を検出した。

III b 層…褐色砂質シルト（10YR4/4） 粘性：やや弱い しまり：やや弱い

調査区西半の斜面を埋没させた無遺物の間層で、上面は中世の遺構検出面となる。今回の基本層序中ではもっとも砂質が強い。土質は均質であり、混入するシルトブロックの粒径が局所的にではあるが、水平に堆積する様子が観察できる部分もある。このことから堆積に水の作用の介在をうかがい知ることができ、比較的短期間内の洪水堆積であった可能性も指摘できる。

IV 層…暗褐色シルト（10YR3/3） 粘性：普通 しまり：普通

古代から中世の遺物包含層である。時代幅は広いが、今回の調査範囲では主に古代の遺物を包含している。間層である III b 層に覆われた部分からの出土遺物は古代のものに限定されることから、III b 層の堆積時期は「古代以降、中世の遺構が構築される以前」に置くことができる。

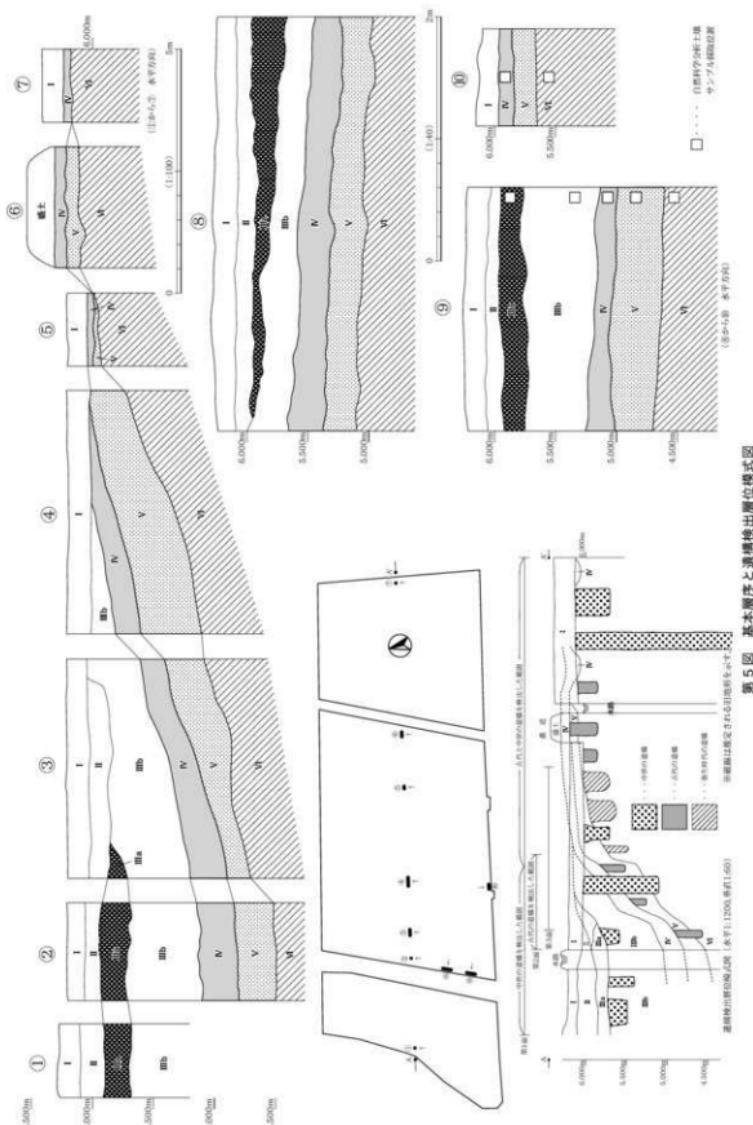
色調は上下層とは異質な暗褐色を呈する。これに有機物の堆積作用と考えれば、植生を含めた周辺環境の大きな変化、もしくは長期の安定が推測された。植物珪酸体分析（第 VI 章 2）からは、「タケア科やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギア科等」が生育していた環境が推定されている。

V 層…にぶい黄褐色シルト（10YR5/3） 粘性：強い しまり：強い

弥生時代の遺物包含層で、上面は古代・中世の遺構検出面でもある。VI 層に色調・土質とともに極めて近似するが、遺物の混入と極めてわずかに混入する炭化物（φ ~ 3mm）によって分層し得た。表現が適切ではないかもしれないが、調査時は「VI 層よりわずかに濁った層」という認識であった。弥生時代の遺構が構築される範囲に存在し、前述の農道部分（第 5 図・柱状図⑥）から東では検出できなかった。

VI 層…褐色粘質シルト（10YR4/6） 粘性：強い しまり：強い

無遺物層で、本層上面を今回調査範囲の全時期を通しての最終遺構検出面とした。色調・土質は V 層に近似するが、こちらは炭化物粒を一切含まない均質なシルト層である。以下、重機による掘削が可能な深度までは砂質の若干強い層を数回挟むものの、基本的に同質のシルトが厚く堆積するのを確認した。



3 調査の基本方針

土層注記にあたっては客観性を確保するため、現場での調査段階において調査員間で共通認識を持って記載を行った。

色 調 農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』(2002年版)を使用したが、色調は乾燥の度合い、空気に触れた後の酸化の進行によって著しく変化する。可能な限り水分を含んだ新鮮な状態で色調を判断するように心がけた。また、グライ化が認められた部分についてはできる限り迅速に、酸化が進行する前に色調の記録を行った。

土 質 本遺跡の土質は基本的には「シルト」であるが、より粘性が強く粒子が細かいシルトを「粘質シルト」、より粘性が弱く粒子が粗いシルトを「砂質シルト」と区別した。

粘 性 同じ土質に分類された土層の中で、さらに「強い」、「普通」、「やや弱い」、「弱い」の4段階に細分した。基本層序を基準にし、自然堆積に近い状態のものを「普通」とした。感覚的要素が強く働く項目であるが、調査員が相互に共通認識の構築に努め、記載内容にズレがないように記載した。個別の土層説明の掲載にあたっては「普通」の場合は記述を省略し、これ以外のものについてのみ特記する属性として記述した。

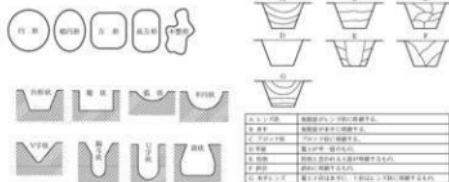
し ま り 十分に水分を含んだ状態で、「強い」、「普通」、「やや弱い」、「弱い」の4段階で区別した。基本層序を基準にし、自然堆積に近い状態のものを「普通」とした。しまりは、粘性と同様に極めて感覚的要素が多い記載であるので、この記載についても調査員が相互に共通認識を持つて行った。個別の土層説明の掲載にあたっては「普通」の場合は記述を省略し、これ以外のものについてのみ特記する属性として記述した。

混 入 物 混入物には、炭化物、焼土などが認められた。混入物の含有率は、色調と同様に『新版 標準土色帖』(2002年版)に基づいて判断した(第6図)。個別の土層説明の掲載にあたっては、個別の指示が無い限り「均等に」混入した状態を示しており、これ以外のものについては特記事項として状態を記述した。また、混入物の粒径については数値を記述した。下限と上限の定まっているものは「3~5mmの」とし、微細物が多く上限のみ把握できたものに関しては「~3mmの」と記述した。

また、本遺跡では基本層序及び遺構覆土中で、普遍的に径5mm前後の白色シルトブロックの混入が3~7%前後認められた。これは、後世の植物の根痕である可能性が高いとのご教示を得ることができた。このため径10mm以下、かつ含有率10%以下の白色シルトブロックについては記載を省略した。また、壁の崩落等による明らかな地山由来のシルトブロックなどについては、その旨を記述してある。



第6図 混入物の含有率
('新版標準土色帖'から作成)



第7図 遺構の平面・断面形態及び遺構覆土の堆積形状の分類
([荒川他 2006]を一部改変)

第IV章 遺構

1 概要

A 古代・中世の遺構

古代・中世の遺構は計2面の合計で、掘立柱建物(SB)3棟、井戸(SE)15基、土坑(SK)49基、竪穴状遺構(SX)1基、溝(SD)45条、炭窯(SX)1基、焼土遺構(SX)2基、畝間状遺構(SX)1群16条、凹地遺構(SX)1群14基、性格不明遺構(SX)22基、ピット(P)1,320基を確認した。

「第1面」では、Ⅲb層が良好に残る調査区西側で中世の遺構を主体に検出し、中央から東側にかけては後世の削平の影響でV層～VI層が遺構検出面となることもあり、古代と中世の遺構が混在する状況であった(図版1)。大多数の遺構はここでの検出となった。時期は古代と明確にできる遺構が土坑8基、溝4条、焼土遺構2基、性格不明遺構3基と一部のピットに限られることから、これを除く大半のものは中世に属するものと考えられる。

「第2面」は、調査区中央部で中世の遺構が構築されるⅢb層を取り去った後に検出した遺物包含層Ⅳ層の下、V層上面を遺構検出面として調査を行った(図版37)。ここでⅣ層出土遺物は古代のものに限定されることから、確認した遺構も古代に属するものと考えられる。

以下、遺構の記述にあたっては本来、時代別に行うべきであるが、今回の調査では層位的な遺構の把握と調査ができなかったことと、遺物を出土しないことで時期を明確にできなかった遺構が多数に上ることから、ここでは各調査面での記述を優先した。遺構種別ごとの記述では、時期が明確な遺構については、その明示に努めた。

B 弥生時代の遺構

「第3面」で検出した。掘立柱建物(SB)1棟、土坑(SK)19基、建物を構成するもの以外の単独で検出したピット(P)15基、埋設土器(SH)1基を確認した。遺構の分布範囲は包含層の範囲とほぼ一致し、V層掘削後のVI層上面を遺構検出面とした。立地は斜面を東へ上った自然堤防状の微高地とその後背地に限られる。出土遺物から、時期はいずれも弥生時代前期～中期前半に位置付けられるものである。

遺構配置は、掘立柱建物を中心に構築される様相を捉えることができた。掘立柱建物の南では約7～10mの距離を置いて東西方向に土坑が並んで構築されている。一方、北東約6mの地点では袋状土坑が単独で構築される。このように掘立柱建物の周囲では遺構が比較的密に確認されたが、南西側のSEグリッドには周囲を遺構と斜面の落ち際に囲まれた空白域も存在する。また、北西の斜面には遺構は構築されずに遺物の捨場として利用されていたと考えられる。

2 第1面の遺構

表土及び表土直下の遺物包含層を掘削後に調査区全域で検出した遺構群である(図版1)。ここで検出した遺構は掘立柱建物3棟、井戸15基、土坑48基、竪穴状遺構1基、溝45条、炭窯1基、焼土遺構2基、

歛間状遺構1群16条、凹地遺構1群14基、性格不明遺構22基、ピット1,167基である。

A 掘立柱建物

3棟確認した。掘立柱建物を構成する柱穴の認定にあたっては、柱穴の配置・規模及び底面標高についても考慮した。ピットについては、このほかに1,167基検出されており、3棟の掘立柱建物を構成するピット20基の比率は約1.7%と低いものである。したがって、今回認識した以外にも掘立柱建物や柵列などが相当数存在するものと考えられる。

SB1282 (図版28・29・78)

12E・Fグリッドに位置する。P1276・P1277・P1278・P1283・P1629・P1630の6基により構成される。桁行2間(東側4.16m、西側4.37m)、梁行1間(北側2.49m、南側2.59m)で、長軸方位はN-7°-W、面積は10.83m²である。桁行方向の柱間寸法は、P1283-P1630が2.26m、P1283-P1629が1.90m、P1276-P1277が2.14m、P1277-P1278が2.23mを測る。

P1283の平面形は梢円形に近いが、各柱穴の掘形としては円形を意図したものと考えられる。直径は20~34cm、断面形はいずれもU字状で、深さは21~55cmを測る。柱痕は検出できなかった。遺物は出土していない。

SB1324 (図版35・36・78)

14・15Gグリッドに位置する。P1316~P1323の8基により構成される。梁行2間、桁行2間で、南北軸を基軸とすると方位はN-1°-Wとほぼ真北を指す。規模は南北方向2.63~3.01m、東西方向2.88~2.97mを測る。柱間寸法を見ると東側柱列が北から1.37mと1.64m、西側柱列が北から1.32mと1.31m、北側柱列が東から1.36mと1.52m、南側柱列が東から1.49mと1.48mを測る。面積は8.25m²である。

柱穴の平面形は円形を基調であるが、P1317は梢円形を呈する。断面形は浅く、P1321が弧状となる以外はU字状の形状である。柱穴の直径は21~29cm、深さ7~45cmを測る。柱痕は検出できなかった。

遺物はP1320から古代の土師器の壺の小片が出土したが、本遺構周辺は古代の遺構が点在していることから、これは埋没時に混入した可能性が高いと判断した。

SB1500 (図版8・9・78)

6E・Fグリッドに位置する。P239・P241・P1218・P1455・P1456・P1460の6基により構成される。本グリッド周辺はピットが密集して確認されており、P1218がP1461をP1455がP1470を切っている。桁行2間(北側2.70m、南側2.79m)、梁行1間(東側1.48m、西側1.27m)で長軸方位はN-60°-W、面積は3.75m²である。柱間寸法はP239-P1455が1.43m、P1455-P1456が1.27m、P241-P1460が1.31m、P1460-P1461が1.48mを測る。

柱穴の掘形はP1456とP1460が方形、そのほかが円形となる。断面形はいずれもU字状を呈する。柱穴の直径は19~28cm、深さ15~31cmを測る。柱痕は検出できなかった。

遺物は出土していないが、III b層上面で検出したことから判断して、中世に属すると考えられる。

B 井 戸

15基検出した。いずれも平面形を円形とする素掘り井戸であり、内部に井戸側などを持つものは無い。グリッド7列から東側の全域に分布している。

平面規模は、最小径で92cm(SE722)、最大径で292cm(SE799)となる。深度が2m前後と相対的

に深い井戸（SE513・857・1052・1173・1554）の断面形は、U字状で占められる。深度が浅く、平面規模も小形となる井戸の断面形状は、箱状のものが3基（SE722・1175・1230）、台形状のものが3基（SE1538・1220・1260）となり、深度は82～117cmの中に収まる。一方、径2～3m前後と平面規模の大きい井戸（SE4・799・995・1211）では、深さが104～160cmとなる。断面形は、SE4・995・12114が台形状、SE799が弱い袋状となる。なお、SK578は緩く開く立ち上がりから土坑としたが、壁の崩落した井戸の可能性もある。このように平面規模の拡大と深度の増加には直接的な相関関係は認められず、形態の違いは機能差もしくは時期差に起因するものと考えられる。

分布は、深度が相対的に深い井戸と平面規模の大きい井戸は、調査区中央から東側にかけて点在する状況を示しており、特段の配列や集中は認められない。7・8DグリッドのSE4とSE995の近接は、時期差を持つものであろう。一方、浅く小型とした6基の井戸は、調査区中央から東側にかけての南寄りに偏在しており、その中でも11・12F、13Gグリッドに5基が集中する。

溝との重複関係についてはSE857（9Fグリッド）、SE1211（13E・Fグリッド）、SE1175（14F・Gグリッド）、SE1173（14Gグリッド）、SE1230（12・13Gグリッド）でそれぞれ溝と重複しているが、SE1175とSD1259が新旧不明である以外は、いずれも溝よりも新しい。このことから、重複する溝に井戸の付属施設としての機能は認め難い。

遺物は、無遺物の4基（SE857・1052・1260・1538）以外、いずれも中世の遺物が出土することから、造構の時期も中世に置くことができると考えられる。出土した土器はいずれも破片資料であった。SE799では埋没途中の3層に多量の礫を主体とする遺物が廃棄された状態が認められた。SE1554では機能時に近いと考えられる6層から木製品（146・147）と礫が出土した。無遺物の4基についても覆土と掘形形状の類似性及び分布状況から判断し、中世に属する可能性が高い。

SE4（図版14・15・78）

7D10・15、8D6・11グリッドに位置する。平面は円形で、規模は長径193cm、短径172cm、深さ104cmを測る。断面は台形状である。覆土は16層に分層し、レンズ状に堆積するが、下位には炭化物の斜位層が見られる。1～9層にはぶい黄橙色が基調となり、地山ブロックが混入する自然埋没土と推測される。10層以下では炭化物の混入が顕著となり、11・14・16層は炭化物が主体の斜位層となる。遺物は珠洲焼（1）、青磁（2）、中世土師器（3）、和釘（131）、砥石のほか、覆土16層から種実が3点と炭化米の可能性のある炭化種実21.26gが出土している。

SE513（図版18・19・78）

10D7・8・12・13グリッドに位置する。平面は円形で、規模は長径173cm、短径159cm、深さ211cmを測る。断面はU字状であるが、一部は狭い底面からV字に近い状態で立ち上がる。覆土は17層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は中世土師器のほか、覆土16層から種実が2点出土している。

SE722（図版16・17・78・79）

8F18・19グリッドに位置する。平面は円形で、規模は長径92cm、短径78cm、深さ95cmを測る。断面は箱状である。覆土は3層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は中世土師器（4）が出土した。

SE799（図版21・23・79）

9F24・25、9G4・5グリッドに位置する。P956と重複し、本造構が古い。平面は円形で、規模は長径292cm、短径246cm、深さ132cmを測る。断面は緩い袋状である。覆土は5層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土3層から10～20cmの大きさの礫が約80点出土し、この中には煤の付着した礫

も少量混在していた。礫は覆土3層に沿うように南東方向からの傾斜をもっており、一度に廃棄されたものと考えられる。遺物は珠洲焼(5・6)、瀬戸・美濃焼(9)、青磁(7)、中世土師器(8)、和釘のほか、種実が1点出土している。

SE857 (図版21・23・79)

9F3グリッドに位置する。SD140と重複し、本遺構が新しい。平面は円形で、長径153cm、短径141cm、深さ183cmを測る。断面はU字状である。覆土は10層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土8層の上面には炭化物が薄い帯状に堆積していた。遺物は覆土上層から古代の土師器が出土したが、これは重複する古代の溝(SD140)に帰属する可能性が高い。

SE995 (図版10・11・79・80)

7D14・15グリッドに位置する。P1005と重複するが、新旧関係は不明である。平面は円形で、長径254cm、短径234cm、深さ160cmを測る。断面は台形状である。覆土は11層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土6層は炭化物を多く含む。遺物は珠洲焼(12)、中世土師器(10・11)が出土している。

SE1052 (図版32・33・80)

14D23グリッドに位置する。平面は円形で、長径122cm、短径111cm、深さ193cmを測る。断面はU字状である。覆土は7層に分層でき、水平レンズ状に堆積する。覆土2層は炭化物が主体の層で、椀状で薄く堆積する。本遺構南西には溝状の掘り込みが重複している。井戸に伴う施設の痕跡の可能性もあるが、削平されたVI層が検出面という点を考慮し、関連は不明である。遺物は覆土から鉄滓が出土している。

SE1173 (図版30・31・80)

14G2・7グリッドに位置する。SD1201と重複し、本遺構が新しい。平面は円形で、長径122cm、短径105cm、深さ188cmを測る。断面はU字状である。覆土は9層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土7層は炭化物を多く含み、覆土中位に約1mの厚さで堆積する。遺物は珠洲焼のほか、覆土7層から炭化米の可能性のある炭化種実0.18gが出土している。

SE1175 (図版28・29・80)

14F21、14G1グリッドに位置する。SD1031・1259と重複し、SD1031より新しく、SD1259との新旧関係は不明である。平面は円形で、長径101cm、短径96cm、深さ85cmを測る。断面は箱状である。覆土は4層に分層でき、レンズ状に堆積する。SD1259との新旧関係は不明としたが、本遺構との関連も推測される。遺物は珠洲焼、刀子(125)、鉄滓が出土している。

SE1211 (図版28・29・81)

13E23・24、13F3・4グリッドに位置し、SD1031・SD1032より本遺構が新しい。平面は円形で、直径262～292cm、深さ118cmを測る。断面は台形状である。覆土は6層に分層でき、レンズ状に堆積する。覆土3層下部ではシルトと黒色土によるラミナ状の互層が形成されている。遺物は覆土から珠洲焼(13～15)、瀬戸・美濃焼(16・17)、砥石(120)、銅製提子(139)、羽口のほか、3・4層から炭化米の可能性のある炭化種実0.21gが出土している。

SE1220 (図版30・31・81)

13G12・13・17・18グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径97cm、短径75cm、深さ117cmを測る。断面は台形状である。覆土は6層に分層でき、レンズ状に堆積する。3層は炭化物を多く含む。遺物は珠洲焼、鉄滓が出土している。

SE1230 (図版 30・31・81)

12G25、13G2 グリッドに位置する。SD1207、SX1231 と重複し、本遺構が新しい。平面は円形で、長径 183cm、短径 162cm、深さ 96cm を測る。断面は箱状である。覆土は 5 層に分層でき、水平レンズ状に堆積する。4 層は炭化物を多く含む。遺物は珠洲焼(18・19)、青磁(20)、中世土師器(21)、砥石(119)、焼成粘土塊、鉄製品が出土している。

SE1260 (図版 28・29・82)

12F11・12・16・17 グリッドに位置する。平面は円形であるが、隅丸方形状に弱く角が張る。規模は長径 97cm、短径 87cm、深さ 93cm を測る。断面は漏斗状である。覆土は 3 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SE1538 (図版 24・25・82)

11F9 グリッドに位置する。P1586 と重複し、本遺構が新しい。平面は円形で、長径 128cm、短径 116cm、深さ 82cm を測る。断面は台形状である。覆土は 7 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は古代の須恵器と土師器の小片が出土したが、近接する古代の遺物集中範囲から混入した可能性が高い。

SE1554 (図版 34・36・82)

15D12・17 グリッドに位置する。SX1542 と重複し、本遺構が古い。平面は円形で、長径 108cm、短径 103cm、深さ 216cm を測る。断面は U 字状である。覆土は 7 層に分層でき、レンズ状に堆積する。底部直上の 7 層は炭化物が主体の層である。6 層上位から木製の下駄(146)と鍼(147)、人為的な痕跡の不明確な杭状の木片が出土した。その直下には 10 ~ 20cm 大の躰が 3 点認められ、木製品との同時性をうかがわせる出土状況であった。遺物はこのほか珠洲焼(22・23)、砥石が出土している。

C 土 坑

48 基検出した。なお、SK578 については壁が開いて立ち上がるため土坑としたが、壁の崩落した井戸の可能性も考慮した。

「第1面」で検出した土坑のうち、中世の遺物を出土するものは 5 基、古代の遺物を出土するものは 8 基である。残る 35 基は土器類の出土はなかったが、これらの大部分は調査区西側の III b 層上面で確認されていることから、多くは中世に属するものと考えられる。

出土遺物などから古代としたものは、SK721・1053・1054・1056・1058・1177・1180・1639 の 8 基である。このうち 8F グリッドにて SK721 を単独で検出したほかは、13E グリッド周辺での検出である。古代全体で見ると 11F グリッドでも遺構の集中が見られることから、これらとともに古代の遺構は調査区東側に分布の中心があるものと考えられる。

古代の土坑とした 8 基の平面は、長方形 1 基 (SK721)、円形 2 基 (SK1054・1058)、梢円形 3 基 (SK1053・1056・1177・1180)、となる。規模は梢円形の SK1180 が長径 261cm で最大となり、以下は 57 ~ 180cm の中に収まる。深さは 5 ~ 34cm となる。

無遺物の土坑も含め、中世及びその可能性が高いと判断したものは 40 基である。このうち 6C グリッドにある SK67 と SK94 は未調査部分を挟んでいるが、本来同一の大型土坑となる可能性がある。SK578 については前述のように井戸の可能性がある。さらに SK960 は長径 580cm、短径 480cm の規模で SD800・801 と連結することから、相互に関連した機能も想定できる。また、SK20 では炭化米の可能性のある炭化種実 0.01g 以下が出土している。

以下、時期が明確なものを中心に抽出したものについて記述する。

中世の土坑

SK152 (図版8・9・85)

6E18 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 91cm、短径 80cm、深さ 25cm を測る。断面は半円状である。覆土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は珠洲焼(152)が出土した。

SK578 (図版18・19・86)

9C23・24、9D3・4 グリッドに位置する。平面は円形を呈する。規模は長径 315cm、短径 287cm、深さ 115cm を測る。断面は台形状である。覆土は17層に分層でき、レンズ状に堆積するが、底面直上の17層は均質な砂質シルトで、厚く堆積する。遺物は珠洲焼(26)、中世土師器(25)、刀子(122)、和釘(135)、砥石のほか、覆土17層から炭化米の可能性のある炭化種実0.08gが出土している。

SK764 (図版12・13・86)

7E24・25、7F4 グリッドに位置する。SK149・763と重複し、SK149より新しく、SK763より古い。平面は長方形と推定され、長径は残存長で 222cm、短径 153cm、深さ 30cm を測る。断面は台形状である。覆土は3層に分層できる。レンズ状の堆積で1層は、炭化物を多く含む。遺物は珠洲焼、中世土師器が出土している。

SK960 (図版14・15・88)

9B18・19・21～24、9C1～4・7・8 グリッドに位置する。SD800・801と重複するが新旧関係が明確でないことから、同時存在した可能性が高い。平面は不整形で、長径 580cm、短径 480cm、深さ 75cm を測る。断面は弧状である。覆土は11層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は珠洲焼(27)、青磁(28)、砥石(117)、刀子(126・127)、和釘(130)が出土している。

古代の土坑

SK721 (図版16・17・86)

8F4・5・9・10 グリッドに位置する。P1014と重複し、本遺構が新しい。平面は長方形で、長径 180cm、短径 151cm、深さ 29cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。遺物は須恵器、土師器が出土している。

SK1053 (図版26・27)

12E5 グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径は推定 102cm、短径 71cm、深さ 12cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。遺物は須恵器が出土している。

SK1054 (図版26・27・89)

13E12・17 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 79cm、短径 67cm、深さ 20cm を測る。断面は台形状である。覆土は3層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器が出土している。

SK1056 (図版26・27・89)

12E10、13E6 グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径 132cm、短径 104cm、深さ 13cm を測る。断面は台形状である。覆土は3層に分層でき、レンズ状に堆積する。3層は焼土が主体の層である。遺物は2層の上位で須恵器や土師器(64)の破片が一括廃棄された状況で出土した。このうち須恵器無台杯62と63は、重なった状態で出土した。

SK1058 (図版 32・33・91)

13D15・14D11 グリッドに位置する。SX1178 と重複するが、新旧関係は不明である。平面は円形で、長径 112cm、短径 97cm、深さ 34cm を測る。断面は台形状である。覆土は 3 層に分層でき、水平に堆積する。遺物は須恵器 (65) が出土している。

SK1177 (図版 26・27・90)

12E9・10 グリッドに位置する。平面はやや不整な梢円形で、長径 145cm、短径 105cm、深さ 23cm を測る。断面は半円状である。覆土は 2 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は土師器 (66・67) が出土している。

SK1180 (図版 32・33・91)

13E8・9・13・14 グリッドに位置する。SK1210 と重複し、本造構が新しい。平面は梢円形で、長径 261cm、短径 96cm、深さ 11cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。遺物は須恵器 (68・69) が出土している。

SK1639 (図版 22・23)

12C16 グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径 57cm、短径 47cm、深さ 5cm を測る。断面は弧状である。覆土は 2 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は土師器が出土している。

D 竪穴状遺構**SX1555** (図版 34・36・92)

長方形の整然とした平面形が推測され、平坦な底面が作出されるものを竪穴状遺構とした。しかし、全体の調査を行えなかったこともあり、隣接する凹地状遺構群の一部となる可能性を残す。調査区東端の 15D25・16D21 グリッドに位置する。SX1610 と重複し、本造構が古い。東側が調査区外のため全体形は不明であるが、平面は東西方向を指す長方形と考えられ、断面はほぼ平坦な底面をもつ台形状となる。覆土は 3 層に分層でき、レンズ状に堆積する。長径方向での残存長は 166cm、短径方向で 187cm となり、深さは 16cm を測る。遺物は出土していない。

E 溝

調査区全域で 45 条の溝を検出し、古代と中世の各時期のものが存在する。なお、このほかに調査区東端で並列した小溝を 16 条検出した。これらについては一群を「畝間状遺構」として扱い、別項を設けて後述することとした。

調査時において未調査部分を挟んだ両側で検出したものは、基本的に別番号を付した。報告にあたり、改めて同一遺構とできるものについては方向、断面形、覆土の状態、底面標高、出土遺物をもとに検討した。結果、中世の溝では「SD22 - SD50」、「SD23 - SD797」、「SD25 - SD546」、「SD26 - SD27 - SD962」、「SD580 - SD1042」、「SD645 - SD1044」が同一の溝である可能性が高いと考えた。古代の溝については削平により分断されている部分も含め、「SD140 - SD632 - SD1539」、「SD1032 - SD1041」が同一の溝である可能性が高いと考えた。SD140 (8E ~ 9F グリッド) と SD1539 (11F グリッド) は西北西軸の同一の線上に位置し、いずれも古代の遺物を出土している。さらに西側の延長線上にある SD632 についても西北西軸に延びる溝がほかに存在しない点からみて、SD140・1539 と同一の溝を形成する可能性が高いと考えた。調査区東側の SD1032 と SD1041 はいずれも古代の遺物を出土してお

り、T字状に交差している。

以上のように整理すると、45条検出したうちの9条は統合され、計36条の溝として把握できる。このうち確実に古代に属するのは、前述の「SD140 - SD632 - SD1539」と「SD1032 - SD1041」の2条に限定され、このほかの多くは中世に属するものと考えられる。

底面傾斜と軸方向 中世の溝については底面の傾斜に着目した。9・10C グリッドの SD800・801 は平行して屈曲しながら SK960 に連結している。屈曲部から東側の底面標高を見るとほぼ平坦であるが、屈曲部から SK960 手前までの底面標高差は SD800 が 10cm (勾配 1/30)、SD801 が 28cm (勾配 1/10) と、SK960 に向かって下っている。SK960 との新旧関係は不明であるが、同時に開口していたと考えた場合には相互の関連性が推測できる。調査区西側の SD24 は底面標高差 21cm (勾配 1/100) をもって西方向に緩やかな傾斜している。SD24 の北側に平行する SD22・23 はそれぞれ勾配 1/300、1/350 と緩やかではあるが、西向きの勾配をもって下っている。また、SD645 は勾配 1/210 をもって西に延びている。一方で、そのほかの中世の溝はほぼ平坦な底面が構築されている。

このように中世の溝を底面の傾斜から概観すると、東西方向の溝は西方向の勾配を持ち、これに直交する南北方向の溝では、前者ほどの勾配は認められない。両者の違いは機能を含めた造構の性格の違いに起因する可能性が指摘できる。加えて、東西方向の勾配が流水を促し、旧小里川方面の低地への排水を意図したものと仮定すると、現在は削平により失われた中世段階の地形が北西方向に緩やかに下るものであったとも考えられる。

長方形に巡る溝 調査区西側の 7C グリッドにある SD43 は長方形に巡る溝である。長径 900cm、短径 711cm の規模をもち、長方形の長軸の方位は N - 30° - W を指す。幅は 51 ~ 150cm と不揃いで、左回り (反時計回り) に底面標高が徐々に下っていく状況であり、深さは 23 ~ 128cm と約 1m の高低差を持つ。その先は未調査部分に至り、全体の形態は不明である。なお、本造構の西側には未調査区を挟む形で SK67 (深さ 97cm) と SK94 (深さ 110cm) が存在する。これは大形土坑として同一造構となる可能性があり、合わせて SD43 との関連もうかがわれるものである。

一方、調査区東側の 12・13F、12 ~ 14G、13・14H グリッドでは二重に巡る溝が存在する。外側の溝 (SD1201・1224) は隅丸長方形に、内側の溝 (SD1207) は長方形に巡る。外側の溝は長径 19.9m、短径 残存長 12.2m、内側の溝は長径 11.6m、短径 9.0m の範囲を巡り、長方形の長軸の方位は概ね N - 65° - W を指す。外側の溝の幅は 60 ~ 160cm、深さは 13 ~ 68cm と、溝幅と深さが不定であり、底面は起伏とともに段差も持っている。内側の溝幅は 35 ~ 100cm、深さは 8 ~ 55cm で、複数の段差をもつて時計回りに徐々に底面標高を下げている。さらに未調査部分を経て、調査区南壁にかかる SX1231 (深さ 82cm) に連結する可能性も指摘しておく。このように、底面に傾斜をもち外周側に抜けていくような溝の形態や大型の土坑に近接する状況は前述の SD43 との共通点といえる。さらに両者とも溝が全周することなく、1 か所あるいは 2 か所の通路状の切れ目を有する点は、本造構の性格を考えるうえで重要と考えられる。ただし、起伏をもつ溝の上部が削平を受けた結果、途切れたような状態で確認されたに過ぎず、本来は全周していた可能性も考慮されなければならない。なお、溝の内側からは軸方向などで溝との直接的な関連をうかがわせる造構は検出されていない。これは、削平による造構の消失も考慮されなければならぬが、SD43 の内側では小規模なビットが 1 基のみの検出であるように、もともと造構が希薄な地点であったとも考えられる。

F 炭窯

SX55 (図版 2・3・101)

調査区西側の 5C・6C グリッドに位置し、形態及び炭化物層の状況から炭窯と判断した。東側が未調査部分となるが、平面形は細長い長方形と考えられる。断面は長径方向・短径方向ともに台形状であるが、長径方向は西側が緩い段部をもって立ち上がる。規模は長径方向の残存長 423cm、短径 105cm、深さ 43cm を測る。覆土は 7 層に分層でき、レンズ状に堆積する。4・5 層は炭化物を多く含むことから、直下の 6 層上面を焼成面と考えた。加えて、掘形面でも焼成が行われたとすると、少なくとも 2 回以上の使用が推測できる。シルト質の土壤に起因するのであろうか、底面及び壁面にかけて焼土などの明確な被熱痕は形成されない。遺物は出土していないが、4 層から炭化米の可能性のある炭化種実 0.16g が出土している。

G 焼土遺構

調査区中央東寄りで検出した SX1537 と SX1626 の 2 地点を焼土遺構とした。いずれも焼土の分布範囲として捉えられたもので、地山への明確な被熱痕跡は認められない。2 地点間は約 3m と近接している。また、SX1537 の南西隣接部及び SX1626 の 2m 北東でそれぞれ遺物集中範囲を確認した。これについては相互の関連性も考慮し、ここで合わせて記述する。

SX1537 (図版 24・25・101)

11F18 グリッドの V 層上面で検出した。焼土の分布は不整円形を呈し、南北方向 78cm、東西方向 73cm の範囲に広がる。また、焼土範囲の南西に近接して遺物集中範囲を確認した。東西方向 79cm、南北方向 80cm の範囲に土師器甕の細片を中心に、須恵器無台杯 (72) などが出土した。この遺物集中範囲は SD1539 内に落ち込むように分布しており、本遺構の形成は SD1539 と同時期とできる。

SX1626 (図版 24)

11F8 グリッドの V 層上面で検出した。焼土の分布は不整椭円形を呈し、長径方向 129cm、短径方向 105cm の範囲に広がる。長軸方位は N - 38° - E を指す。焼土範囲の北東 2m、11F4・5 グリッドでは遺物集中範囲 (図版 25) を確認した。遺物は東西 180cm、南北 50cm の範囲に土師器甕の細片を中心とした遺物が集中して出土し、この中には墨書きされた須恵器無台杯 (84) が含まれていた。

H 畫面状遺構 (図版 34 ~ 36・101)

調査区東端で並列した小溝を 16 条検出した。これを一定区画内で同一の方向性が認められたため、耕作痕跡を想定した 1 単位の遺構群として捉えた。

14E・F、15E・F・G グリッドに位置し、SD1593 ~ 1601・1613 ~ 1619 の 16 条の小溝により構成される。北側で凹地遺構を構成する SX1550 ~ 1552・1600 と重複し、本遺構が古い。確認できた範囲は北東方向は 15.8m、北西方向は 15.1m まで、溝の長軸方位は N - 60° - E 前後を指す。断面形は半円状あるいは弧状を呈し、上端幅 25 ~ 85cm (平均 50cm)、底部幅 10 ~ 67cm (平均 20cm)、深さ 10 ~ 20cm (平均 15cm) を測る。覆土はいずれも單層であるが、褐色砂質シルト、黒褐色砂質シルト、赤褐色砂質シルトが混在している。炭化物などの混入物は極少量しか認められない。遺物は出土していない。

I 凹地遺構 (図版 34・36・102)

調査区東端の 15D・E・F グリッドにおいて、凹地遺構群を確認した。SX1542～1553・1558・1610 の 14 基により構成される。平面はいずれも不整形を呈し、底面は凸凹が顕著である。これらはほぼ南北方向を軸方向として配置されることから、一群の遺構となる可能性が高いと考えた。SE1554 及び歛間状遺構と重複し、本遺構群が新しい。

検出された範囲は南北方向で約 16m、東西方向で約 9.8m である。個別の規模をみると、南北方向 114～496cm、東西方向 100～355cm となり、深さは 10～20cm と浅い。覆土はいずれも単層で、地山ブロックを含む灰褐色砂質シルト、にぶい黄褐色砂質シルト、オリーブ黒色砂質シルトが混在する。遺物は SX1543 から焼成粘土塊が出土したのみである。

J 性格不明遺構

性格不明遺構としたものは計 22 基である。時期は SX573・1178・1623・1624 が古代と考えられ、これ以外の多くは中世に属するものと考えられる。以下、大分類ごとに記述する。

SX85・141・142・577・610・1623 (図版 2・3・10・11・14・17・30・31・102～104)

上部が削平されたことによるのか深度が浅いもので、底部付近のみが残存し、本来の形態が失われたと考えられるものである。SX85 は地山が変質したと考えられる範囲のみの確認である。SX610 はやや不整な平面形を呈し、底面には緩やかな凹凸が見られる。遺物は SX610 から中世土器、SX1623 から土師器が出土した。

SX17・780 (図版 4・5・14・17・102)

上記同様に検出深度の浅いものであるが、底面直上に多量の炭化物が堆積するものである。このうち SX17 の 3 層については掘形を伴わない地山であるⅢ b 層が焼成時の熱で変質した部分と考えられ、覆土 2 層が炭化物を多く含む底部直上層となる。SX780 では炭化物に加えて焼土も含まれる。

SX1208・1209 (図版 32・33・104)

深度が浅く、底面直上に多量の焼土が堆積するものである。SX1208 は長径 48cm、短径 27cm、深さ 7cm、SX1209 は長径 39cm、短径 28cm、深さ 2cm とともに規模は小さい。底面直上の焼土層の状況から、何らかの焼成遺構の可能性がある。

SX144・153・154 (図版 8・9・12・13・102・103)

浅い掘形内に多量の炭化物とともに骨片が認められるものである。SX144 は長径 56cm、短径 47cm、深さ 6cm の浅い円形の掘形を呈する。覆土は暗褐色シルト内に炭化物を 40%、焼土を 5% 含み、細骨片も微量ながら確認された。SX153 は長径 42cm、短径 23cm、深さ 5cm の梢円形の掘形を呈する。2 層では炭化物を 30% を含み、1 層では細骨片の集中する部分が見られる。SX154 は長径 82cm、短径 72cm、深さ 5cm の円形の掘形を呈する。覆土は炭化物を 30%、焼土を 20% 含むほか、多量の焼骨片も検出できた。また南西側には溝状の張り出し部分を伴う。

以上の 3 基については焼骨の出土からいわゆる火葬土坑の可能性も指摘できるが、地山への明確な焼土の形成が認められないため、ここに含めた。

SX573 (図版 12・13・103)

浅い掘形内に土器片や礫が配置されるものである。長径 82cm、短径 64cm、深さ 8cm の梢円形の掘

形内から最大20cmの礫14点とタタキ目のある珠洲焼体部片4点が出土した。礫には被熱したものも含むが、覆土中に炭化物や焼土は含まれない。

SX54 (図版2・3・102)

炭化物の混入がみられないものの、炭窯としたSX55とほぼ同じ主軸方向で隣接するうえ、形態も類似することから、同種の遺構あるいは関連性がうかがわれるものである。遺物は覆土から青磁(52)、中世土師器が出土した。

SX56・576 (図版10・11・14・17・102)

浅く溝状の掘形を有するものである。SX56はその配置と方向性からSD43との関連性がうかがわれる。SX576は覆土2層及び5層で炭化物を多く含む。遺物はSX56から珠洲焼(53)のほか中世土師器が出土し、これはSD43出土のものと接合した(35)。SX576からは中世土師器が出土した。

SX647・648・1178・1231 (図版18・20・30・31・32・33・103・104)

平面形は長方形、断面形が箱状あるいは台形状を呈し、比較的整然とした掘形を持つ。このうちSX1178は覆土中に焼土・炭化物が多く混入することから、焼成遺構の可能性がある。なお、SX1231は調査区外にかかっており全体形は不明である。遺物はSX1178からは須恵器(73~75)、土師器が出土している。SX1231からは珠洲焼(54・55)、中世土師器(56・57)が出土したほか、覆土から炭化米の可能性のある炭化種実1.79gが出土している。

SX1624 (図版24・25・104)

浅い不整な掘形内に多量の遺物を出土するものである。底面に硬化は見られないが、平坦に整形されており、南壁沿いの2本の小ピットが本遺構に伴うものとすれば、不整ではあるが竪穴状遺構とも考えられる。遺物は須恵器の杯(76~81)を主体に、蓋(82)・甕(83)、土師器の甕が出土している。

K ピット

1,187基確認した。掘立柱建物を構成するものが20基あるため、単独の状態で検出されたピットは計1,167基となる。調査区西側のIII b層上で検出したものは、時期も中世のものが大半であると考えられる。調査区中央から東側では古代と中世のピットが混在し、古代のピットに関しては「第2面」と同時期のものを含むと考えられる。

規模はいずれも小さい。平面が直径20~30cmの円形で断面がU字状のものが主体を占めているが、直径10~20cmの円形で断面がV字状の杭穴状の形態をもつものも約260基存在する(図版105)。これらは調査区中央南西側の7Eグリッド周辺、調査区北東の14Dグリッド周辺、調査区西端の5Cグリッド周辺でやや集中する。

3 第2面の遺構

調査区中央部のIII b層の下から、遺物包含層のIV層と、これに対応する遺構群をV層上面にて検出した(図版37)。遺構は斜面に構築され「第1面」とは地形を変えている。ここで検出した遺構は土坑1基、ピット153基である。時期は、包含層出土遺物が古代に限定されることから、いずれも古代に属する。

A 土 坑

SK1414 (図版 40・92)

6D・E グリッドに位置する。平面は円形で、長径 183cm、短径 155cm、深さ 27cm を測る。断面は弧状である。覆土は 6 層に分層でき、レンズ状に堆積する。6 層は炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

B ピット

153 基検出した。直径 20 ~ 30cm の円形で断面形が U 字状になるものが主体となるが、直径 10 ~ 20cm ほどの円形で、断面形が V 字状を呈する杭穴状のものが 12 基存在する。これらについては建物、杭列などを構成する配置を捉えることはできなかった。

4 第3面の遺構

調査区中央部にて、弥生時代の遺物包含層の V 層とこれに対応する遺構群を VI 層上面にて検出し、これを第3面と捉えた（図版 41）。ここで検出した遺構は、掘立柱建物（SB）1 棟、土坑（SK）19 基、建物を構成するもの以外のピット（P）15 基、埋設土器（SH）1 基である。遺構の重複は SB1607 を構成する P1509 と P1515 の 1 か所のみと少ないとから、各遺構間に大きな時間差はないものと考えられる。

これらの遺構群が構築される高位面に隣接した斜面の落ち際、6・7E、8D グリッドを中心にして、遺物分布が等高線に平行した帶状を示す小規模な遺物の捨場を検出した（図版 41）。出土量は、特に掘立柱建物に近接した範囲で多くなる。これより北側、遺構密度の低い地点では隣接する斜面からの遺物の出土も希薄となり、捨場を形成しなくなる。

遺構覆土の観察において、角ばった炭化物の混入が認められるものがある。これは包含層中に混入するものとは形状が異なるもので、特定の遺構でのみ認められる。粒形が角ばった状態は、その供給源が近い可能性を示し、遺構までの移動距離も短かったと考えられる。このような混入の状態は包含層のものとは異なり、その生成過程と共に区別されるものである。

このほか、7E4 グリッドを中心とした範囲で木質遺物を確認した（図版 51・遺構分割図 25 中段）。これは斜面に横たわるような状態で、大きく 2 本を検出した。木質部分は脱色により白色化しており、残存状態は極めて不良であった。明確な加工痕は見出せないこと、樹皮が多くの部分で遺存することを考え合わせ、自然木の可能性が高いと判断した。

調査にあたっては、土坑としたもの及びピットとしたもの一部については、微細遺物の回収のために覆土を回収しての土壤洗浄を行った。結果は、わずかに小型の剥片石器を回収したが、期待した骨片の回収はならなかつた。これは骨片の残存状態が不良であったためと考えられる。なお、これにより得られた微細な剥片類は、以下の出土個数記述の際に調査時に取り上げられたものと区別して、[○点 (○g)] と記載した。これは、土壤洗浄の有無により個体数が大きく変化するが、この変移が必ずしも遺構の性格を表すものではないと考えたためである。本遺跡では剥片石器製作が行われていたことは確定であり、微細な剥片類は包含層中に普遍的に存在するものであったと認識している。

A 掘立柱建物

SB1607 (図版 48 ~ 50・76・77・106・107)

柱穴と考えたピット 8 基と集石及び赤化範囲 (SX1637) により構成される。なお、本遺構周囲で検出した P1169・1286・1290・1515 についても本遺構との関連を考慮し、ここで報告する。

位置・形態・規模 弥生時代調査範囲のほぼ中央、9D1 グリッドを中心に位置する。立地する地形は、斜面と後背地に挟まれた自然堤防状の微高地である。建物の長軸方向も地形に従い、等高線に平行して構築されている。V 層掘削中、標高 5.8 ~ 5.9m 前後の地点にて集石の露出により確認した。形態などは縄文時代からの系譜をうかがわせる。以下、部位名称は青田遺跡〔荒川ほか 2004〕に基づいて記述する。

柱穴配置はいわゆる亀甲形となり、この桁行方向に P1509・P1508 の 2 本の張り出し柱を加えるものである。P1390 - P1507 間とした主軸長は 5.4m となる。梁行長は P1241 - P1391 間で 3.0m、P1506 - P1392 間で 2.6m、P1509 - P1508 間で 2.5m となり、西側ほど狭くなる。

柱穴 平面形態は不整なものが多いが、これは断面形態が開口部に向かい聞くものが多いためである。断面観察では柱痕様の堆積を示すものがあり、この柱痕の径は約 20 ~ 30cm の幅に収まる。しかし、本来の柱の太さと必ずしも一致しない可能性もある。深さは、亀甲形を形成する 6 本では 66 ~ 96cm であるが、張り出し柱と考えた P1509・P1508 は小径で、深さも 60、30cm と浅い。

構造復元時に「独立した棟持柱」〔古澤ほか 2003〕が埋設されたと考えられる P1507 では、掘形が 96cm と最も深い。これと対になる P1390 は、深さは及ばないものの、根固めのためと考えられる土器片の埋設を検出した。土器片は柱痕の西半を取り回すように覆土中位から下位にかけて重ね合わせた状態で出土した。これに用いられた土器(1)は、ほかの多数の土器片と異なり、水平方向の輪積み部分ではなく、垂直方向を指向して削っていた。これを人為的なものと解釈すると、縱方向での分割は破片を重ねるのに適しており、同時に土器の湾曲と柱の曲線が合えば、隙間を埋めるのにも都合がよいためと考えられる。また P1391 の覆土中及び P1392 の覆土 7・9 層では極微量であるが骨片の混入が認められた。

遺物の出土は少ない。土器は、前述の根固めに用いられたものを除くと細片が多く、掘形埋め土への混入と理解できる出土状況であった。石器は、P1390 から多くの剥片とともに石核が出土した。また、P1392 では掘形埋め土である 9 层からヒスイの原石 (図版 72 - 283) が出土した。

また、建物の周囲で P1169、P1286、P1290、P1515 の 4 基のピットを確認した。いずれの柱穴も建物を構成するものより規模が小さい。P1290 では柱痕の分層が可能であった。

内部施設 集石と赤化範囲を検出した。その性格上、建物との関連については検討の余地を残すが、ここでは建物との同時性を想定して報告する。

集石は、建物の中央からやや南東よりに位置する。掘形は伴わず、検出面上に直接礫が配置されている。礫は径 10cm 前後の凝灰岩を主体に用い、いずれも被熱を受けている。赤化範囲は、この集石と P1391、P1392、P1507、P1508 を取り回すように建物の南東側に形成される。明確な被熱痕跡は見出せなかつたが、この範囲内からは極めて微量であるが焼土粒も検出できた。これにより、集石には屋内炉としての機能が推察され、とすれば赤化範囲は地山に形成された焼土が拡散した範囲とも理解できる。また、この範囲内でも極めてわずかだが、骨片の混入が認められた。

B 土 坑

19基検出した。このうち、平面規模が1～2m前後で弧状に近い断面形状を持つものが8F・9E・Fグリッドを中心とし、帶状に10基（西からSK1502・1394・1166・1450・1165・1170・1227・1449・1289・1040）集中した状態で検出された。この中には、覆土中に骨片を検出できたものがある。骨片は極めて微量なうえ、径も最大のものでも3mm前後と小さい。検出位置は、覆土上位よりも底面に近いところが多く認められた。これを受け、猫山遺跡との遺構の類似性も考え合わせ、一部の土坑については墓の可能性を考慮した調査を行った。同時に覆土を回収しての土壤洗浄の対象にもした。さらにSK1165・1170・1289・1394については遺体埋置の可能性を探るために土壤の理化学分析を行った。結果はリン酸とカルシウムの含量からは、遺体等の痕跡は認め難いとのことであった（第VI章3）。

土器は残存率の低い細片が多く、接合率も高くなかった。この傾向は覆土中でも特に上位で顕著で、これは包含層出土土器の様相に近いともいえる。石器では、前述の帶状に集中する土坑群の内、SK1040・1165・1166・1170からの石鏃の出土が特筆される。この4土坑から出土した石鏃は11点すべてが完形であり、本遺跡から出土した石鏃全体の完形率48%（失敗品を除く）と比較すると突出して高い割合といえる。石鏃自体は、土坑のうちではSK1176・1523からも出土しているが、こちらからは欠損品か失敗品しか出土していない点とも対照的である。

SK1040（図版45・47・77・107）

9E15・20グリッドに位置する。平面は円形で、長径168cm、短径160cm、深さ74cmを測る。断面は漏斗状である。覆土は6層に分層され、2・3層では極微量の骨片が認められた。土器は4層を除く各層から出土した。特に2・6層からの出土が多く、6層からは沈線に赤彩が施された底部片（6）が出土した。石器は石鏃2点、不定形石器1点、敲磨石類2点、石核3点、剥片類33点（127.86g）〔23点（7.34g）〕が出土した。

SK1165（図版45・46・107）

8F8・9グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径184cm、短径132cm、深さ48cmを測る。断面は半円状である。覆土は2層に分層され、2層では極微量の骨片が認められた。土器は1・2層から出土する。出土量は1層からのものが多いが、同一個体片は少ない。石器は石鏃3点、不定形石器5点、両極剥離痕のある石器1点、敲磨石類1点・破片1点・剥片類57点（108.39g）〔60点（10.64g）〕が出土した。

SK1166（図版42・44・108）

8F6・11グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径204cm、短径172cm、深さ40cmを測る。断面は弧状である。覆土は3層に分層した。土器は1層から比較的の残存率が高い破片（14）が出土した。石器は石鏃1点、剥片類22点（77.81g）〔23点（7.19g）〕が出土した。

SK1170（図版45・46・107）

8F9・10・14・15グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径228cm、短径196cm、深さ32cmを測る。断面は弧状である。覆土は2層に分層され、1・2層では極微量の骨片が認められた。わずかな違いであるが、下位の2層で確認した骨片のほうが多い、径も5mm前後と大きい。土器は1・2層から出土する。出土量は1層からのものが多いが、同一個体片は少ない。石器は石鏃5点、不定形石器4点、両極剥離痕のある石器1点、剥片類64点（229.98g）〔77点（29.46g）〕が出土した。

SK1176 (図版 48・50・108)

8D23・24 グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径 164cm、短径 134cm、深さ 34cm を測る。断面は弧状である。覆土は 4 層に分層した。土器は、出土量は多いが、細片が主体である。底面直上、4 層から出土した土器(25)について放射性炭素年代測定を行い、BP2,330 ± 30 との結果を得た(第VI章3)。石器は、石礫の欠損品が 2 点、剥片類 29 点 (135.50g) [2 点 (8.38g)] が出土した。

SK1214 (図版 48・50・108)

8D25、9D21 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 134cm、短径 126cm、深さ 28cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。土器は、出土量は多いが、細片が主体である。石器は敲磨石類 1 点・破片 1 点、石核 1 点、剥片類 6 点 (38.33g) が出土した。

SK1227 (SX1397 遺物集中地点) (図版 45・46・108・112)

8E20・25、9E16・21 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 180cm、残存短径 140cm、深さ 38cm を測る。断面は弧状である。覆土は 3 層に分層した。土器は各層から出土するが、底面近くの出土が多い。石器は石錐 1 点、不定形石器 1 点、両極剥離痕のある石器 1 点、敲磨石類 2 点・破片 2 点、石核 3 点が出土した。この土坑に隣接して遺物集中地点 (SX1397) が認められ、壺(35)と敲磨石類 3 点、剥片類 7 点 (31.79g) [20 点 (6.93g)] が出土した。

SK1289 (図版 45・47・77・108)

9E22・23、9F2・3 グリッドに位置する。平面は不整形で、長径 122cm、残存短径 108cm、深さ 58cm を測る。断面は台形である。覆土は 3 層に分層され、2・3 層では極微量の骨片が認められた。遺物では 2 層からの垂玉の出土が特筆される。土器は 2 層から SB1607 - P1509 と接合する 36、SK1170 と接合する 39 が出土した。石器は石核 2 点、剥片類 10 点 (43.72g) [10 点 (2.37g)] が出土した。また、覆土中に炭化物が多く混入することから、微細物分析を試みた(第VI章2)。結果、オニグルミの核、コナラ属の子葉、ブナ科の果実のほかマツ属とヌルデ?の炭化材が認められた。

SK1350 (図版 42・43・109)

7E9・14 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 80cm、短径 66cm、深さ 18cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。土器は細片の出土である。石器は剥片類 9 点 (14.66g) [4 点 (1.36g)] が出土している。

SK1394 (図版 42・44・109)

7F5・10、8F1・6 グリッドに位置する。平面は不整形で、長径 92cm、短径 68cm、深さ 32cm を測る。断面は台形状である。覆土は 2 層に分層され、2 層では極微量の骨片が認められた。土器は各層、細片の出土である。石器は不定形石器 1 点、敲磨石類 1 点、剥片類 15 点 (89.32g) [6 点 (1.36g)] が出土した。

SK1434 (図版 48・51)

11C11・16 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 48cm、短径 44cm、深さ 8cm を測る。断面は弧状である。覆土は単層である。土器は 1 層から底部片が出土している。石器は、石核 1 点が出土した。

SK1449 (図版 45・46・109)

8F1・6、9F5・10 グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径 168cm、短径 152cm、深さ 38cm を測る。断面は V 字状である。覆土は 2 層に分層され、2 層では極微量の骨片が認められた。土器は、出土量は多くないが 43 を復元し得た。石器は剥片類 1 点 (2.02g) [44 点 (11.03g)] が出土した。

SK1450 (図版 45・46・107)

8F2・3・4・8 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 142cm、短径 120cm、深さ 36cm を測る。断面は弧状である。覆土は 2 層に分層され、2 層では極微量の骨片が認められた。土器は各層、細片の出土である。石器は両極剥離痕のある石器 1 点、剥片類 4 点 (3.75g) [10 点 (1.83g)] が出土した。

SK1502 (図版 42・44・109)

7F4 グリッドに位置する。平面は不整形で、長径 96cm、短径 96cm、深さ 18cm を測る。断面は台形状である。覆土は 3 層に分層した。土器は各層、細片の出土である。石器は敲磨石類 1 点、破片 1 点、石核 2 点、剥片類 16 点 (41.57g) が出土した。

SK1505 (図版 48・51)

9D5、10D1 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 78cm、短径 64cm、深さ 18cm を測る。断面は台形状である。覆土は 3 層に分層した。土器は各層、細片の出土である。石器は剥片類 [1 点 (2.96g)] が出土した。

SK1523 (図版 48・51・77・110)

9D4・5・9・10 グリッドに位置する。平面は長方形で、長径 180cm、短径 136cm、深さ 80cm を測る。断面は袋状である。覆土は 4 层に分層した。

遺物は 1 層と 4 層からの出土が多い。土器では底面上から 7 点、比較的大形の破片が出土 (内 3 点を図化、45 ~ 47) した。この土器は、ほぼ底部直上としてよい出土状況であったが、土器と底面の間には、4 层よりも炭化物を多く含む 1cm にも満たない薄い堆積層が認められた。これは使用時に近い堆積物と考えられ、本遺構機能時の炭化物供給量が堆積時よりも多かったことが推測される。石器は石礫の欠損品 1 点、石礫欠品 1 点、石錐 3 点、不定形石器 1 点、敲磨石類 4 点、石皿・砥石・台石類 1 点、石核 4 点、剥片類 20 点 (190.54g) [44 点 (39.56g)] が出土した。石器は、土器片のように底面直上からの出土はない。

SK1536 (図版 42・43・110)

6F5 グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径 94cm、短径 78cm、深さ 46cm を測る。断面は台形状である。覆土は 4 层に分層した。土器は各層、細片の出土である。石器は、両極剥離痕のある石器 1 点、敲磨石類 1 点、剥片類 4 点 (5.53g) が出土した。

SK1611 (図版 42・44・110)

7E15・20、8E11・16 グリッドに位置する。平面は不整形で、長径 188cm、残存短径 184cm、深さ 40cm を測る。断面は弧状である。覆土は 4 层に分層した。遺物は 1・4 层からの出土で、土器は各層、細片の出土である。石器は石礫 1 点、敲磨石類 1 点、剥片類 2 点 (1.17g) [44 点 (14.25g)] が出土した。

SK1640 (図版 42・44・110)

8F11 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 92cm、短径 68cm、深さ 32cm を測る。断面は台形状である。覆土は 3 層に分層した。土器は 2 層から比較的の残存率が高い破片 (56) が出土した。石器は敲磨石類 1 点、剥片類 1 点 (1.02g) [1 点 (0.36g)] が出土した。

C ピット

掘立柱建物の項で扱ったもの以外の単独で検出したピット 11 基についてここで報告する。柱痕が残るものとこれに規模が類するものをピットとしたが、機能面で土坑と明確に区分できないものを含む。したがって、名称の違いは機能、性格の違い明確にするものではない。当初は建物の存在を想定しての検出に

努めたが、SB1607 のような建物の確認には至らなかった。しかし、斜面の落ち際に小規模な土坑としたものも交えて列状に並ぶ様相（「SK1536 - P1493」、「P1517 - 1494 - P1428 - P1413 - SK1350」、「P1493 - P1494 - P1352 - P1024 - SK1640」）が捉えられたことから、建物以外の構造物（機能・用途）を想定することも可能であろう。

遺物の出土は、土坑としたものより総じて少ない。土器は細片の出土が主体で、図化したものも 4 ビットの 8 点に留まる。石器の出土も同様に少ない。

P1024 (図版 42・44・111)

7F9・10 グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径 108cm、短径 92cm、深さ 68cm を測る。断面は漏斗状である。覆土は 6 層に分層され、1・2 層は柱痕の可能性がある。土器は細片の出土である。石器は石核 1 点、剥片類 4 点 (30.33g) が出土した。

P1036 (図版 45・47)

10E17 グリッドに位置する。平面は梢円形で、長径 52cm、短径 46cm、深さ 28cm を測る。断面は半円状である。覆土は 2 層に分層した。土器は細片の出土である。石器は出土していない。

P1051 (図版 48・50)

8D24・25 グリッドに位置する。近接する SB1607 との関連もうかがわれる。平面は不整形で、長径 164cm、短径 124cm、深さ 58cm を測る。断面は半円状である。覆土は 5 層に分層した。遺物は単独で確認したビットの中では最も多い。土器は、出土量は比較的多いが、細片が主体となる。石器は石礫の欠損品 1 点、石礫失敗品 1 点、両極剥離痕のある石器 1 点、敲磨石類 3 点・破片 1 点、石核 3 点、剥片類 21 点 (154.96g) が出土した。

P1352 (図版 42・43・111)

7F3 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 104cm、短径 92cm、深さ 72cm を測る。断面は U 字状である。覆土は 6 層に分層した。土器は細片の出土である。石器は敲磨石類 2 点が出土した。

P1393 (図版 42・44)

8F6 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 20cm、短径 18cm、深さ 20cm を測る。断面は U 字状である。覆土は 3 層に分層した。土器は細片の出土である。石器は石錐の破片 1 点、剥片類 3 点 (11.10g) が出土した。

P1413 (図版 42・43・111)

7E13・14 グリッドに位置する。平面は不整形で、長径 48cm、短径 46cm、深さ 28cm を測る。断面は台形状である。覆土は 5 層に分層した。土器は細片の出土である。石器は剥片類 4 点 (1.28g) [1 点 (0.25g)] が出土した。また、2 層からは蛇紋岩の原石（図版 72 - 285）が出土している。

P1428 (図版 42・43・111)

7E17・18 グリッドに位置する。平面は不整形で、推定長径 74cm、短径 52cm、深さ 72cm を測る。断面は U 字状である。覆土は 9 層に分層され、1 ~ 7 層は柱痕の可能性がある。土器は細片の出土である。石器は、石錐 1 点、剥片類 2 点 (6.41g) が出土した。

P1493 (図版 42・43・111)

6F5、7F1 グリッドに位置する。平面は円形で、推定長径 64cm、短径 62cm、深さ 58cm を測る。断面は U 字状である。覆土は 7 層に分層され、1 ~ 4 層は柱痕の可能性がある。土器は出土していない。石器は剥片類 3 点 (2.84g) が出土した。

P1494 (図版 42・43)

7E22 グリッドに位置する。平面は円形で、長径 36cm、推定短径 36cm、深さ 40cm を測る。断面は U 字状である。覆土は 2 層に分層した。土器は細片の出土である。石器は出土していない。

P1517 (図版 42・43・111)

7E16・17 グリッドに位置する。平面は円形で、推定長径 64cm、残存短径 56cm、深さ 60cm を測る。断面は U 字状である。覆土は 3 層に分層した。土器は細片の出土である。石器は、石核 1 点、剥片類 2 点 (4.87g) が出土した。

P1612 (図版 42・43)

7F13・14・18・19 グリッドに位置する。平面は梢円形で、残存長径 90cm、推定短径 76cm、深さ 68cm を測る。断面は U 字状である。覆土は 4 層に分層され、1～3 層は柱の抜き取り痕跡とも理解できる。土器は細片の出土である。石器は剥片類 2 点 (9.47g) が出土した。

D 埋設土器

SH1167 (図版 42・43・112)

1 基検出した。弥生時代調査範囲の南東端、9F17・18 グリッドに位置し、表土直下で確認した。土器の上半を欠くが、包含層の削平状況と土器下半の残存率の高さを考え合わせ、埋設土器として報告する。掘形は平面が円形で、径 56cm、深さ 28cm となる。ここに土器がやや西側に傾いた斜位の状態で埋設されていたと考えられるが、上半は削平により消失した可能性が高い。覆土は 2 層に分層したが、埋設土器の内外での覆土の違いは認識できなかった。断面観察では、底部片の外に土器片が押しつぶされ、複数重なるような状態であった。しかし、この状態は不自然で、後世の削平時などに露出した土器片が土圧の影響でめり込んだものと考えられる。土器は胴部下半のみの出土で、残存部は条痕のみが施された深鉢 (65) である。

第V章 遺物

1 概要

遺物は $54 \times 34 \times 10\text{cm}$ の整理箱で総数 82 箱出土した。時代は遺構が構築されるのと同じ弥生時代、古代、中世のものであり、わずかに近世遺物も見られる。出土量は弥生土器が 49 箱と最も多く、次いで弥生時代の石器が 13 箱となる。その後、時期を経ることに出土量は少なくなり、古代の土器は 6 箱、中世の土器・陶磁器は 3 箱である。

掲載にあたっては、土器・陶磁器は出土遺構ごとの掲載を優先し、これ以外のものについては遺構の内外を問わず種別ごとに掲載した。

2 古代・中世の遺物

土器・陶磁器を主体に石器、石製品、鉄製品、銅製品、鉄生産関連遺物、木製品が出土した。このほか主に井戸から種実及び炭化米の可能性のある種実が出土しているが、これについては遺構の各説でそれぞれの個数と重さを記述している。遺物の分類・編年及び年代観については、古代の土師器・須恵器は〔春日 1999〕(須恵器の胎土分類は〔新潟古代土器研究会 2004〕)、珠洲焼は〔吉岡 1994〕、青磁・白磁は〔山本 2000〕、瀬戸・美濃焼は〔藤澤 2008〕、中世土師器は〔品田 1997〕の各論考を参考にした。

第 1 面の調査に伴う遺物は、遺構内及び遺物包含層である III a・IV 層からの出土である。中世の土器・陶磁器の出土傾向は、珠洲焼については調査区東部の 3D・E ~ 9・10B・C グリッドにかけて帶状に分布し、溝では SD22・23・26・50・800・801、土坑では SK960 などに沿うような状況とも捉えられる。また、鉄製品もほぼ同様の出土傾向を示す。一方、青磁や中世土師器などの出土は散在的で、特定の傾向は認められない。古代の土器の出土傾向は、須恵器については分布に濃淡があるものの調査区のほぼ全域から出土している。特にはピット分布の濃い 6 ~ 8D, 8F, 13・14D・E, 14・15F ~ G グリッドからの出土が多い。土師器も同様に分布に濃淡があるものの調査区のほぼ全域から出土している。

第 2 面に伴う遺物は、間層である III b 層に被覆された遺物包含層である IV 層からの出土である。ここでの遺物は古代のものに限られる。古代の土器の出土傾向は 7 ~ 9C・D グリッドの斜面の落ち際付近から多く出土し、これより東の高位面(第 1 面)との包含層の連続性をうかがわせる状況であった。

A 中世の土器・陶磁器

貿易陶磁器である青磁・白磁、国内産陶磁器である珠洲焼、瀬戸・美濃焼、これに在地産の中世土師器を加えて構成されている。

珠洲焼が出土量の大半を占め、時期幅も〔吉岡 1994〕のⅠ期からⅤ期と広い。しかし、Ⅰ期・Ⅱ期(12世紀第3四半期~13世紀第2四半期)とできるものはそれぞれ 1 点に留まり、一部Ⅴ期の可能性のあるものも含むが主体はⅢ・Ⅳ期(13世紀第3四半期~14世紀第3四半期)となる。貿易陶磁器である青磁は龍泉窯系の碗に限られ、21 点出土している。時期は〔山本 2000〕の E 期(13世紀前後~前半)となり、珠

洲焼の年代幅に収まる。のことから、中世遺物の主体時期は13世紀から14世紀に置くことができる。なお、出土量は少ないものの中世土師器も広くは「13世紀中ごろ～15世紀前半ごろ」〔鶴巻2004〕の様相を呈しており、これと矛盾しない。この年代観は造構内外でも大きな違いは見られないことから、造構の構築年代と理解しても差し支えない。

1) 井 戸

SE4 (1～3)

1は珠洲焼擂鉢で、SD583出土の破片と接合したものである。内面は使用により大きく摩滅しており、卸し目はわずかに確認できるのみである。2は青磁碗で、蓮弁文が施されていると考えられる。3は中世土師器の皿である。成形はロクロで、轍輪台からの切り離しがヘラ切りのC類〔品田1997〕（以下同じ）。なお、本報告にあたっては出土量が少ないため皿・小皿の細分は行わず、器種は便宜的に「皿」を用いた）にあたる。

SE722 (4)

中世土師器の皿で、C類である。

SE799 (5～9)

5・6は珠洲焼である。5は甕である。6は擂鉢の体部で、内面には一単位幅2.2cm（8本）の卸し目が施される。7は青磁碗で、蓮弁文が施されていると考えられる。8・9は中世土師器の皿でC類である。

SE995 (10～12)

10・11は中世土師器の皿でC類である。12は珠洲焼擂鉢である。色調はにぶい黄橙色を呈し、単位不明の卸し目が残る。〔吉岡1994〕（以下同じ）のⅢ期と考えられる。

SE1211 (13～17)

13～15は珠洲焼である。13は甕の口縁部である。14は擂鉢で、器形はわずかに影らみを有する。内面には一単位幅3cm（11本）の卸し目が体部中位から施される。Ⅳ期と考えられる。15は擂鉢で一単位幅2.8cm（9本）の卸し目が残る。16・17は瀬戸・美濃焼である。16は仏花瓶である。釉薬は灰釉で、丸みの強い体部に櫛掻きによる4本の平行沈線が巡る。17は卸皿である。釉薬は灰釉で、口縁部直下から卸し目が一本引きされている。

SE1230 (18～21)

18・19は珠洲焼である。18は擂鉢の口縁部である。なお、今報告では珠洲焼の鉢類の細分に廻し、便宜的に卸し目の残存しないものも「擂鉢」とし、片口部の残存するものの「片口鉢」として分離した。19は甕の体部下半である。内面の一部に研磨痕が認められ、「土器片利用の研削具」〔藤巻1989〕、「土器片研磨具・研削具」〔高橋1996〕としての機能も推察される。20は青磁碗である。碗II-a類でE期（13世紀前後～前半）〔山本2000〕（以下同じ）と考えられる。21は中世土師器の皿で、轍輪台からの切り離しが糸切りのB類である。

SE1554 (22・23)

22・23は珠洲焼擂鉢である。22は胎土には海綿骨針を含むが、長石・石英も多く含んでいる。23の内面には幅広の一単位幅3.5cm（16本）の卸し目が密に施される。Ⅳ～V期と考えられる。

2) 土 坑

SK152 (24)

珠洲焼擂鉢で、内面には一単位幅 2.2cm (11 本) の卸し目が施される。

SK578 (25・26)

25 は中世土師器で、底部は糸切りと考えられる。26 は珠洲焼擂鉢で、色調は黄橙色を呈している。内面には一単位幅 2.2cm (11 本) の卸し目が体部中位から施されている。III期と考えられる。

SK960 (27・28)

27 は珠洲焼片口鉢の片口部分である。28 は青磁椀で、薄い器壁に鶴蓮弁文が施されている。

3) 溝

SD22 (29～32)

29～31 は珠洲焼擂鉢である。29 の内面には卸し目が体部中位から施される。30・31 は共に、内面は一単位幅 2.0cm (10 本) の卸し目が密に施され、IV期と考えられる。32 は青磁椀と考えた。

SD23 (33)

珠洲焼擂鉢で、口縁部が外側に引き出されている。

SD43 (34～36)

34 は青磁椀で、SD795 から出土した破片と接合したものである。薄い器壁に鶴蓮弁文が明瞭に施され、軸も薄く均一にかけられている。椀 II-b 類で E 期のものである。35 は中世土師器の皿で C 類である。SX56 から出土した破片と接合した。36 は珠洲焼擂鉢で、ほかと比較すると器壁が薄手である。II 期と考えられ、遺構出土のものでは古手となる。

SD50 (37～45)

37～43 は珠洲焼である。37～39・42・43 は擂鉢である。37 は一単位幅 2.2cm (9 本)、38 は一単位幅 2cm (9 本)、39 は一単位幅 2.8cm (9 本) の卸し目が施される。42 の内面は使用により大きく摩り減っている。40 は甕の口縁部である。41 は甕 T 種の口頭部である。44 は青磁椀である。椀 II-b 類で E 期である。45 は中世土師器の皿である。ロクロ成形であるが、底部の切り離しは風化により読み取れない。

SD77 (46)

珠洲焼擂鉢で、6D5 グリッドの III a 層から出土した破片と接合したものである。口縁端部は、ほぼ平坦に作出される。内面は一単位幅 1.8cm (9 本) の卸し目が施される。IV期と考えられる。

SD794 (47)

珠洲焼片口鉢である。内面は一単位幅 2.2cm (7 本) の卸し目が施される。IV期と考えられる。

SD795 (48)

珠洲焼で、甕の頸部と考えた。なお、本遺構から出土した青磁椀が SD43 出土破片 (34) と接合した。

SD800 (49)

中世土師器の皿で C 類である。

SD1201 (50)

珠洲焼擂鉢である。卸し目は口縁端部との間隔をやや開けて施される。

SD1224 (51)

青磁碗である。鎬蓮弁文が施され、特に鎬が明瞭である。

4) 性格不明遺構

SX54 (52)

青磁碗で、蓮弁文が施されている。

SX56 (53)

珠洲焼壺の体部である。外面は平行タタキ目、内面は無文當て具痕が残るが、底部近くの下半ではこれが及ばずロクロ目が残る。なお、本遺構から出土した中世土師器がSD43出土破片(35)と接合した。

SX1231 (54 ~ 57)

54・55は珠洲焼である。54は擂鉢である。55は珠洲焼の鉢又は壺の底部と考えた。56・57は中世土師器の皿である。57はロクロ成形であるが、底部の切り離しは風化により読み取れない。

5) 遺構外出土土器・陶磁器

第1面の調査時に包含層より出土したものである。遺物はⅢa層、Ⅳ層からそれぞれ出土するが、中世遺物に関してはⅢa層からの出土が多い。

珠洲焼 (58 ~ 60)

遺構外から出土するものも遺構出土のものと同様にⅢ期からⅣ期が主体となるが、わずかにこれより古手のものも含む。58は擂鉢で、卸し目は口縁端部のかなり下から施される。Ⅰ期と考えられ、本遺跡出土の珠洲焼では最も古手に位置付けられる。59は片口鉢で、内面は一単位幅2.4cm(11本)の卸し目が施される。60の擂鉢は体部が直線的に開く。59・60はⅢ~Ⅳ期と考えられる。

白磁 (61)

口縁端部の釉が拭われて口禿げとなっている。器種は明確にできない。

中世土師器

細片のみの出土である。遺構出土のものと同様に成形はロクロで、轆轤台からの切り離しがヘラ切りのC類が主体で、切り離しが糸切りのB類は少量の出土である。

B 古代の土器

須恵器と土師器がある。須恵器は【春日1999】のⅣ~Ⅴ期(8世紀後葉~9世紀中葉)に位置付けられる。この時期は、指摘のように『越後の須恵器窯生産の「定着」期(Ⅳ期)』から『小泊産の大量流入と越後の須恵器窯生産の「衰退」期(Ⅴ期)』【春日1999】にあたる。本遺跡から出土した須恵器からも、阿賀北産と小泊産が混在し、これ以外の産地の可能性を残すものがわずかに混じる様相が読み取れた。器種は杯の出土が多く、これ以外の甕・瓶などは少ない。土師器は、甕のほか食膳具である椀も認められ、これもⅤ期の様相を呈しているといえる。

1) 土 坑

SK1056 (62 ~ 64)

62・63は須恵器無台杯である。ともに胎土は【新潟古代土器研究会編2004】(以下同)のB群で、小

泊産と考えられる。64は土師器無台碗で器壁が薄い。外面はロクロナデが確認できるものの、内面はより風化が著しくわずかに確認できるのみである。器高が高いことから小甕の可能性も残す。

SK1058 (65)

須恵器の底部である。底径は5.6cmと小さく、体部も急に立ち上がることから瓶と考えた。

SK1177 (66・67)

66・67は土師器の底部である。66は無台碗、67は無台杯と考えた。

SK1180 (68・69)

68・69は須恵器の底部である。68是有台杯、69は瓶と考えた。

2) 溝

SD1032 (70)

須恵器有台杯である。胎土はB群で、色調は一部橙色を呈する。

SD1539 (71)

須恵器無台杯である。胎土はC群とした。C群は、阿賀北産としたA群、小泊産としたB群に当てはまらないものである。本遺跡での出土量はA群・B群と比べ少なく、客体的な存在である。絶対的な出土量が少ないため断定できないが、本群が隣接する柄日木遺跡でも出土するいわゆる新津丘陵産を含む可能性を指摘しておく。

3) 焼土遺構

SX1537 (72)

土師器長胴甕である。風化が著しいが、外面はロクロナデが確認できる。

4) 性格不明遺構

SX1178 (73～75)

73～75は須恵器無台杯である。73は胎土がB群、74はC群となる。75は底部が回転糸切りで、胎土はA群で阿賀北産と考えられる。

SX1624 (76～83)

76～83は須恵器である。76～79は無台杯である。76・77は底部を回転ヘラ切りで切り離し後ナデが行われ、底面は丸みを帯びる。81是有台杯、82は蓋、83は甕の体部片である。これらの胎土は83を除きA群である。残る83もC群に分類され、本遺構から明確にB類と分類できるものは出土していない。

5) 遺構外出土土器

a 第 1 面

古代・中世第1面の調査時に包含層から出土したものである。ここで出土した中世の遺構への混入土器についてもここで扱い、該当遺物は観察表に明記した。

須恵器 (84～99)

84～89は無台杯である。84は底部外面に「廣者」と墨書きされている。90～92は有台杯である。蓋は93が胎土A群、94・95が胎土B群である。96・97は長頸瓶の口縁部と底部で、胎土はA群である。

98は壺の肩部と考えられ、一条の沈線が巡る。胎土はB群である。99は甕の口縁部で胎土はB群である。
土師器（100～107）

100～102は椀である。100は風化が著しい。102は赤彩が施されている。調整はロクロナデ後、体部下位はロクロケズリが行われ、口縁部下には二条の沈線が巡っている。赤彩と口縁部が内湾する器形の特徴から、金属器を模倣したとされる「赤彩土師器」[北野1994]に類するものと考えられる。103は黒色土器である。内面で黒色処理が行われる。器種は明確にできない。104は遺存状態が不良で口径も推定できないが、小甕である。105は104の存在を受けて小甕の底部と考えた。内面にタール状の付着物が認められる。用途を含め中世土師器の可能性を残す。106・107は長胴甕の口縁部である。

b 第 2 面

須恵器（108～114）

108～110は無台杯である。111・112は蓋である。112は外縁が意図的に打ち欠かれた可能性がある。111が胎土A群、112がB群である。113・114は横瓶の口頭部と体部である。

C 石 器（115～120）

石器は砥石がある。11点出土しており、いずれも「第1面」に伴うものである。116～118は正裏面・両側面の4面に砥面が認められる。115・120は正裏面に砥面が認められる。119も砥面の残存は片面のみだが、形態も含め正裏面に砥面を残すものに類すると考えられる。石材は図示したものはいずれも凝灰岩である。

D 石 製 品（121）

古代の石製品として腰帶の石鈎(遙方)1点が出土した。出土は中世の遺構であるSD50の覆土中からで、時期が異なる遺構への混入であった。そのため、古代の遺構との関連は明らかでない。一部欠損しているが残存部では高さ3.6cm、幅3.6cm、厚さ0.5cm、重量13.33gで、石材は黒色粘板岩である。表面と側面はよく研磨されているが、裏面は条線の鋸目が残る。装着痕は残存する裏面の三隅に潜り穴が認められ、本来は四隅にあったと考えられる。

E 鉄 製 品（122～138）

刀子

可能性のある細片も含め15点出土し、6点図示した。122は刃部で、幅が広く厚みもある。123～125は刃部から基部で、いずれも両端を欠損している。123は刃部と基部の境で、その両方に段を持つ。124は刃側に、125は背側に段を持つ。126・127は基部である。

和釘

可能性のある細片も含め34点出土し、10点図示した。いずれも断面方形である。135～137はこれが折れ曲がったものと考えた。

不明鉄製品

138は半球形の椀状を呈する鉄製品である。口径3.2cm、器高1.7cm、重さ10.07gである。器壁は厚さ2～3mmほどと薄い。

F 銅 製 品 (139)

提子が1点出土した。SD1211から出土したもので、容器部の口縁部と注口、弦の取り付け部が残存する。注口は厚さ約2mmの銅板を半円の桶状に曲げたもので、容器部との接合部から先端に向かいやや狭まり、上向きに取り付けられる。弦の取り付け部は、注口を跨ぐように容器部の口縁部に取り付けられている。形状は半円形の銅板に切り込みを入れた山形で、中心に径約5mmの円孔が穿たれている。

G 鉄生産関連遺物 (140～145)

羽口・鉄滓がある。大半は調査区西側からの出土で特に鉄滓は13・14Eグリッドに集中が認められる。このほか焼成粘土塊としたものが若干出土しているが、その多くは羽口もしくは鉄生産に関わる炉壁など的小破片と考えられる。

羽口

いずれも小破片であった。140は炉内先端部で溶損によりガラス化している。推定内径2.5cmである。

鉄滓

楕円形鍛治滓と流動滓がある。141～143は楕円形鍛治滓である。143は楕円形鍛治滓の破片で、底面に取り込まれた炉壁の一部が付着する。144・145は流動滓である。

H 木 製 品 (146・147)

杭や板材の可能性のある木片を除くと、明確に製品とわかるものは2点であった。いずれもSE1554から出土したものである。146の下駄は板目に切り出された板材を用いたいわゆる連齒下駄で、緒穴が2か所に残る。台裏では長軸に対して直交するわずかな盛り上がりを前後2か所で確認でき、ここが歯であったと考えられる。また、台表で認められたわずかに凹む範囲は指圧痕と考えられる。147の鉢は板目に切り出された板材を用い、柄の装着穴は中央に開けられている。差し込み口は片側に聞く形状で、柄は斜めに装着されたと考えられる。

3 弥生時代の遺物

A 弥生時代の土器 (1～144)

弥生時代前期から中期前半のものが主体で、これ以外ではわずかに中期後半のものが出土する。出土は遺構群を中心とした分布状況を示す(第8図)。8E・9Fグリッドのように遺構が集中する場所に近接して集中城が認められる。また遺構群の北西側の斜面部でも等高線に沿うように集中城が認められ、小規模な捨場を形成する。遺構が希薄な調査区北側や南東側では、土器の出土量も減る。遺構出土土器は包含層出土のものと比べて細片が多く、接合率も低い。SK1166やSK1449のように同一個体の破片が比較的多く出土した遺構についても、略完形まで復元できたものは皆無であった。接合・抽出については遺構出土土器を優先し、遺構外出土土器については復元率が高い個体を中心に作業を行った。

1) 分 類

これまでに調査された同時期の周辺遺跡〔古澤ほか2003・土橋ほか2009〕との相互比較を容易にするた



第8図 弥生土器出土分布図

めに新潟市緒立遺跡の分類[渡邊 1998a](以下、〈緒立・甕○類に該当〉のように表記した)を基に行った。なお、本遺跡の特性に合わせて、一部異なる部分や表現を改変した部分がある。

①變形土器(以下、「甕」)

A 類…肩が張り、口頭部が直行ないし外反するもの。肩部から胴部上半に変形工字文などの文様帶が施される。さらに、口縁部の施文や口縁部の形状により細分した。〈緒立・甕 C 類に該当〉

A1…口縁部外面に1~数条の平行沈線文が施されるもの(66)。〈緒立・甕 C1 類に該当〉

A2…口縁部外面が無文のもの(67)。〈緒立・甕 C2 類に該当〉

A3…くの字に外反した短い口縁が付くもの(19a・19b・36・37・68・69)。〈緒立・甕 C3 類に該当〉

B 類…A 類から外反する口縁が付かないもの。さらに、口縁部の施文により細分した。〈緒立・甕 D 類に該当〉

B1…口縁部に繩文が施されないもの。B2 と明瞭な区別をする為、口縁部の文様帶に繩文が施されないものということも出来る(5・25・26・70)。〈緒立・甕 D1 類に該当〉

B2…口縁部に1~数条の平行沈線文が施され、その部分に繩文が施されるもの。また、口縁部の文様帶に繩文が施されるもの。B2 の中でも、その文様が変形工字文または変形工字文が削れたもの(12・54・72~78)と、磨消繩文のもの(14・82)がある。〈緒立・甕 D2 類に該当〉

C 類…最大径が口縁部にある筒形になるもの(48a・48b・82)。〈緒立・甕 E 類に該当〉

D 類…口径 40cm 程度の大型のもので、口縁部から体部上半のいずれかに単位文様が施されるもの。胴部上半に変形工字文や工字文が施されるもの(45)。〈緒立・甕 F1 類に該当〉

E 類…口径 40cm 前後の大型のもの。

E1 類…単位文様が描かれないもの (84a・b)。〈縦立・甕 G 類該当〉

E2 類…単位文様が施文されるもの (7・30a・30b・85)。〈縦立遺跡に該当する分類なし〉

F 類…屈曲する頸部を持ち、単位文様は描かれないもの。さらに、地文が縄文施文のもの (32)、地文が条痕文施文のもの (86)、ハケメ調整が施されるもの (87)。〈縦立・甕 H 類に該当〉

②深鉢形土器 (以下、「深鉢」)

A 類…地文に条痕文を施されるもの。さらに、口縁部等の施文により細分した。〈縦立・深鉢 A 類に該当〉

A1 類…口縁部に条痕文のみ施されるもの。口縁部が内湾するもの (88・89)、内湾しないもの (1・15・16・27)、指頭圧痕による波状口縁のもの (90) がある。〈縦立・深鉢 A2 類に該当〉

A2 類…口縁部に条痕を施された後に、波状沈線文を施文されるもの (21・91)。〈縦立・深鉢 A1 類に該当〉

A3 類…口縁部から体部上半に縄文が施されるもの (49a・49b・92a・92b)。〈縦立・深鉢 A3 類に該当〉

A4 類…口縁部に平行沈線文等が施文されるもの (28)。〈縦立・深鉢 A4 類に該当〉

A5 類…口縁部に結節縄文が施文されるもの (93)。〈縦立遺跡に該当する分類なし〉

B 類…地文に縄文を施すものの。さらに、口縁部等の施文により細分した。〈縦立・深鉢 B 類に該当〉

B1 類…口縁部に縄文のみ施されるもの (4・43)。〈縦立・深鉢 B3 類に該当〉

B2 類…口縁部に波状沈線文等の沈線文が施されるもの。波状沈線文が施されるもの (9・41・52・63・94～96)、平行沈線文が施されるもの (46・97) がある。〈縦立・深鉢 B2 類に該当〉

B3 類…口縁部に結節縄文が施されるもの (18・22a・22b・38・64・98)。〈縦立・深鉢 B1 類に該当〉

C 類…口縁部に縄文帯と横位羽状沈線文が施されるもの (99)。〈縦立・深鉢 C 類に該当〉

D 類…口縁部が内湾し、口縁部が肥厚部分に縄文が施される (100)。〈縦立遺跡に該当する分類なし〉

③鉢形土器 (以下、「鉢」)

A 類…胸部から口縁部にかけて緩やかに外傾するか、もしくは直線的に立ち上がるものの。〈縦立・鉢 A 類に該当〉

A1 類…胸部上半に変形工字文が描かれるもの (101)。〈縦立・鉢 A2 類に該当〉

A2 類…無文のもの (102)。〈縦立遺跡に該当する分類なし〉

B 類…口径に対し器高が高い小型の鉢で、口縁部から胸部上半に変形工字文などが施文されるもの (103・104a～d)。〈縦立・鉢 B2 類に該当〉

C 類…胸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形で、単位文様が施されないもの (50・105・106)。〈縦立・鉢 C 類に該当〉

D 類…口径が 30cm 前後の大型の鉢で、口縁部から胸部上半に文様帯が施される。さらに、器形により細分した。〈縦立・鉢 D 類に該当〉

D1 類…胸部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がるものの。胸部に縄文、口縁部に変形工字文などが施文されるもの (110)。〈縦立・鉢 D1 類に該当〉

D2 類…D1 類に比べ小型で、土器の厚みは薄手のもの (113・114)。〈縦立・鉢 D2 類に該当〉

D3 類…口縁部が強く内湾するもの (111・112・115)。〈縦立・鉢 D3 類に該当〉

E 類…口部が外反し、底部が丸底ないし平底のもの。

E1 類…肩部で屈曲するものの。胸部から底部にかけて単位文様が施されるもの (39・47・107)。〈縦立・鉢 E2 に該当〉

E2 類…胴部から底部にかけて単位文様が施さないもの (108)。〈縦立遺跡に該当する分類なし〉

④高杯・台付鉢形土器

出土量自体少なく、細片のみで器形の全体像がつかめない為、分類は行っていない。

⑤壺形土器 (以下、「壺」)

A 類…口縁部外面が肥厚し、その部分に沈線文が施文されるもの (122)。〈縦立・壺B2 類に該当〉

B 類…口縁部外面が肥厚し、その部分に縄文が施される。頸部は無文帶で、肩部には磨消縄文で文様が施文される (125)。〈縦立・壺C3 類に該当〉

C 類…頸部が短く、屈曲が弱いもので、ミガキが加えられる (59)。〈縦立・壺F 類に該当〉

D 類…口縁部が肥厚し、頸部に隆帯が巡るもの (34)。〈縦立に該当する分類なし〉

E 類…頸部の屈曲は弱く、口縁部に向かってほぼまっすぐに立ち上がる。胴部下半から底部には条痕文が、口縁部から胴部上半には縄文が施される (35)。土器の厚みはやや薄手の作りである。〈縦立に該当する分類なし〉

F 類…大型の壺で、肩部から胴部上位に文様帶を施すもの (123)。〈縦立に該当する分類なし〉

そのほかに、細片では反燃が施文されるもの、磨消縄文や磨消浮帶文が描かれるものもある。

⑥蓋形土器 (以下、「蓋」) 〈縦立に該当する分類なし〉

縦立遺跡では出土量が少なく、分類されていない。以下、本遺跡出土遺物を基に分類した。蓋部につまみ部が付随するものと、つまみ部を持たない逆台形状のものがある。今報告では、全体の形態が把握できるものが限られたため、蓋部とつまみ部に分けた上で細分した。

蓋部

A 類…地文に縄文が施されるもの。さらに、文様の特徴により細分した。

A1 類…縄文のみ施文されるもの (55・131)。

A2 類…平行沈線文が施されるもの (11a・11b)。

A3 類…変形工字文が施されるもの (24)。

A4 類…磨消浮帶文が施されるもの (135)。

B 類…地文が施されないもの。さらに、文様の特徴により細分した。

B1 類…ナデのみのもの (61)。

B2 類…変形工字文が施されるもの (132)。

B3 類…沈線文で変形工字文以外の文様が施文されるもの (133)。

B4 類…沈線文が一条引かれ、口縁部外面に強いナデを加えるもの (60)。

B5 類…結節縄文のみ施文される (134)。

つまみ部

C 類…縄文が施されるもので、形状により細分した。

C1 類…つまみの立ち上がりの外反が弱く、形状は逆台形状で、小ぶりのもの (136)。

C2 類…C1 類よりひとまわり大きいもの (3・17・137・138)。

D 類…つまみの立ち上がりの外反が強く、形状は逆台形状で、ミガキ調整が加えるもの (139)。

E 類…立ち上がりが直行し、ナデのみのもの (140)。

また、つまみ部を持たない逆台形状の蓋は 62・143 である。

2) 実測図の表現方法について

遺構出土遺物、遺構外出土遺物の順に記載する。遺構出土遺物は掘立柱建物・土坑・ピット・埋設土器、遺構外出土遺物は包含層・試掘トレンチがある。

実測の際は〔石川 2005b〕に基づき、以下の事項に留意して作業を行った。

- ①土器の実測図を作成する際には文様の単位に着目し、単位文の中心軸を正面とした。
- ②欠損部のある上器を復元実測する際は、現存する部分（範囲）を明記し、復元した部分と区別した。
- ③一周の 6/36 (1/6) 以上残存していれば、径の推定を行った。
- ④文様が入る遺物の実測図には必ず拓本を添え、必要に応じて展開拓本を添えたものもある。断面図に「外面の拓本」を添える場合は断面に向かって左側に、「内面の拓本」は右側に配置した。

ここで記述の際に用いた用語についても若干補足しておく。変形工字文の記載で用いた「交点 1」・「交点 2」や「中点 1」・「中点 2」は〔須藤 1976〕で用いられているものである。「磨消繩文」は基本的に「広義の磨消繩文」であるが、明らかに充填とわかるものについては「充填繩文」と表記した〔石川 2005c〕。「磨消浮帯文」は磨消部をわずかに窪ませ、それに挟まれて浮き上がる部分との陰陽で構図を描いたものを示す〔石川 2002〕。

以下、各説とする。出土地点や層位、胎土、調整、色調などは観察表に譲り、記述は特記事項のみとした。

3) 掘立柱建物

SB1607

掘立柱建物を構成するピットのうち P1390・1391・1509 から出土した土器である。

P1390 (1 ~ 3)

1 は深鉢 A1 類である。外面は地文前のナデが丁寧でないためか、わずかに輪積み痕が残る。内面も同様にナデが弱く輪積み痕が残る。胎土には白色の粗砂や小礫の混入が非常に目立つ。柱穴の根固めの使用を意識してか、破片は縱方向に削られている。2a・b は鉢であり、胎土や磨消繩文の特徴、焼成具合などから二片を同一個体と考えた。無文部と繩文部のコントラストが明瞭である。3 は蓋のつまみ部 C2 類である。繩文 (LR) が施文され、つまみ部と体部の境部分はナデで消されている。

P1391 (4)

深鉢 B1 類である。内外面には、工具による横方向のナデが残り、砂粒の動きから工具は右から左へ動いたと考えられる。口縁部外面には 1.5cm 幅の繩文が帶状に施文される。

P1509 (5)

甕 B1 類であり、波状文が描かれる文様帶は弱いナデで整えられる。

4) 土 坑

SK1040 (6 ~ 10)

6 の外面には、幅 3mm のやや深めの沈線による二条の平行沈線文が横走する。沈線溝には赤彩がわずかに残る。その上に多重モチーフによる文様が描かれるが、全体の構図は不明である。底面には二本描きによる「4」に似た構図が描かれる。胎土には粗砂や小礫が混入し、やや粗い。7 は甕 E2 類である。

8a・b は甕の脇部である。繩文 (LR) 施文後、平行沈線文間に横位の羽状沈線文が描かれる。羽状沈線文

部には縄文が残る。9は深鉢B2類である。10は深鉢の底部で、底面はナデで整えられる。

SK1165 (11~13)

11a・bは蓋A2類である。12は甕B2類である。磨消縄文により文様が描かれる。13は鉢の底部で、縄文(LR) 施文後に、底面及び底部外面がナデで整えられる。

SK1166 (14~17)

14は甕B2類である。磨消縄文により、口縁部の三角形モチーフとその下の長方形モチーフが描かれる。また、内外面の摩耗が頗著である。15・16は深鉢A1類である。17は蓋のつまみ部C2類である。外面は摩耗や剥離が著しいが、わずかに縄文が残る。

SK1170 (18~24)

18は深鉢B3類である。口縁部に結節縄文が二段施文される。19a・bは甕A3類である。20は甕の胴部である。21は深鉢A2類である。内面はナデで、わずかに輪積み痕が残る。22a・bは深鉢B3類である。胎土や焼成、土器の厚みなどから同一個体と考えた。22bの上位にわずかに結節縄文が残る。22aの破片と合わせ、口縁部から体部にかけて少なくとも二段一組の結節縄文が二組施文される深鉢と考えられる。23は肩部に縄文(反撫RR)が施される大型の壺の破片の可能性がある。24は蓋A3類である。口縁端部にのみススが付着していることから、蓋として使用されたものと考えた。

SK1176 (25~28)

25・26は甕B1類である。25の文様帶は、変形工字文の特徴である二等辺三角形は間延びして菱形状になったものと考えられる。中点1も省略されるが、交点1と中点2はわずかに盛りあがる。文様帶と口縁部内面には丁寧なミガキが加えられる。また、外面に付着した炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行い、BP2,330 ± 30との結果を得た(第VI章3)。26の無文部分は丁寧なミガキが加えられ、縄文部とのコントラストが明瞭である。内面にも丁寧なミガキが加えられる。27は深鉢A1類である。外面には縱方向の条痕文が施文され、口縁端部のみ強いナデで整えられる。28は深鉢A4類である。やや厚手の作りで、外面に横方向の条痕文が施文されるが、これが密な部分とそうではない部分がある。口縁部外面上には幅5mm程度の工具を用い、強く押してから右方向に弱く引くことの繰り返しによりキザミ状の押し引き文が施文される。猫山遺跡でも同様の深鉢が出土しており、押し引き文を引く間隔は28のほうが短い。29は甕の胴部と考えられる。

SK1214 (30・31)

30a・bは甕E2類であり、胎土や焼成の特徴から同一個体と考えた。縄文(反撫RR) 施文後、口縁部には四条の平行沈線文が横走し、部分的に沈線を指先でつまむことで匁字状の交点を作り出している。波状口縁を呈し、口縁端部には幅2mmの細い沈線が施文される。文様帶の上下には円形の刺突文が巡る。30bは体部で左上がりの条痕が施文される。31は甕の体部と考えられ、磨消縄文により重菱形文が描かれる。無文部分の磨消は丁寧なものではない。

SK1227・SX1397 (32~34・35)

32は甕F類である。内外面のナデは丁寧ではなく、わずかに輪積み痕が残る。縄文(LR) 施文後、頭部外面には二条の平行沈線文が横走する。口縁部外面は横方向の強いナデで整えるが、丁寧なものではない。底部片は確認していない。33は小型の鉢と考えられる。縦走する平行沈線文間に、先端が円形で鋭利な工具による刺突文が下方から施され、三列もしくは四列の刺突文となる。34は壺D類である。胴部片も出土しているが、いずれも細片のため接合不能であった。外面は摩耗し、わずかに細かな条痕文が残る。

内面は弾けたような剥離が顕著である。口縁部は肥厚し、頸部には9単位の眼鏡状隆帯があぐる。色調は灰白色で、胎土には粗砂を含み、やや粗い。35はSK1227の東側の遺物集中地点(SX1397)から出土した壺E類である。やや薄手の作りで、内面にはナデの痕跡が残る。34にみられる顕著な剥離は認められない。口縁部から胴部上半には横方向の、胴部下半には左上がりの条痕文が施文される。肩部には縄文(LR)が施文され結節部が残る。頸部には沈線幅4mm、浅い三条の平行沈線文が横走する。

SK1289 (36~39)

36・37は壺A3類である。36は磨消縄文により、変形工字文からの系譜と考えられる間延びした三角形の構図が描かれる。外面は摩耗気味であるが、三角形部分には縄文が残る。内面にはミガキが加えられる。38は深鉢B3類である。やや薄手の作りで、口縁部には結節縄文が二段施文される。39は鉢E1類である。薄手の作りで、口縁部外面には三条の平行沈線文が横走し、これを指先でつまむことで四字状の交点を作り出している。体部外面には、無文の縦区画帯が加わり、平行沈線文の無文帯から棘状部が付加される。角ばった長石と粗い金雲母の混入が目立つ胎土である。

SK1394 (40~42)

40は壺の口縁部と考えられるが、広口壺の可能性もある。41は深鉢B2類である。穿孔は焼成後のものである。42は壺の破片と考えられ、わずかに磨消浮帶文が確認できる。

SK1449 (43)

深鉢B1類である。

SK1502 (44)

磨消浮帶文が描かれた壺の胴部と考えられる。

SK1523 (45~51)

45~47は土坑の底面上から出土したものである。45は壺D類である。口縁部には二条の平行沈線文が横走し、肩部から胴部上半には変形工字文が描かれる。46は深鉢B2類である。大型の器形であるが、やや薄手の作りといえる。縄文(LR)施文後に、口縁部外面に三条の平行沈線文が横走するが、上下にぶれて粗雑である。底面の網代圧痕は特徴的である。46に使用された網代には多重菱形文が編まれている。網代の条材は綺条、経条ともに2mm程度とやや細く、圧痕自体がやや深い。拓本の上位を見ると紐による結び目が確認できる。土器製作時の網代ではなく、籠状製品の転用の可能性を指摘しておく。また、拓本のみでは表現しきれない部分もあると考え、粘土を用いたモデリング陽像も合わせて提示してある(図版119)。なお、新潟市西郷遺跡〔土橋ほか2009〕でも同様の網代を持つ底部が出土している。47は鉢E類である。波状口縁を呈し、その頂部は二股に割れ、口縁端部には刻みが加えられる。平方沈線文が一定の間隔を空け、四段横走する。頸部と胴部には先端が角ばった工具による刺突文が、二段の刺突文として巡る。胴部の刺突文にはわずかに赤彩が残る。底部には摩耗しているがわずかに縄文が残る。二段目の平行沈線文は、上下の抉り込みから四字状の交点を作り出している。内面のナデは丁寧なものではなく、輪積み痕が残る。

48a・bは壺の体部片である。磨消縄文により棒状モチーフが描かれ、その内部に縄文が残る。49a・bは深鉢A3類である。波状口縁を呈し、やや薄手の作りである。やや左上がりの条痕文を施文後、口縁部外面には幅4.5cm程度の縄文帯が巡る。50は鉢C類である。縄文(LR)が施文されるが、方向は一定ではなく、粗雑な感を受ける。また、縄文施文前の工具によるナデの痕跡が残っている。口縁部には二条の平行沈線文が横走するが地文同様に粗雑である。内面にも外面同様に工具による右上がりのナデの痕

跡が残る。51 は台付き鉢と考えられ、波状口縁の形態がやや異なるが、120 と同一個体の可能性もある。波状口縁を呈し、外面には縱走する繩文 (LR) が残る。横走する平行沈線文には丁寧なミガキが加えられ、粘土粒を押し付けた交点も丁寧に調整されている。沈線溝には赤彩が残る。

SK1536 (52)

深鉢 B2 類である。やや薄手の作りで、波状文の間隔は狭い。

SK1611 (53・54)

53 は甕の胴部と考えられる。54 は甕 B2 類である。変形工字文が描かれ、工字状の交点は上下の沈線文に寄せられてやや盛り上がる。

SK1640 (55・56)

SK1640 からは 55 と 56 のみが出土した。55 は蓋 A1 類で、内面に沈線文が施文される。56 は深鉢の底部で、底面には箒による平行葉脈圧痕が残る。

5) ピツト

P1024 (57)

甕の胴部と考えられる。磨消繩文により重菱形モチーフの文様が描かれる。重菱形の下方の平行沈線文に着目すると、下からの抉り込みにより四字状の交点を作り出している。

P1051 (58～62)

58 は甕の胴部上半である。59 は甕 C 類である。内外面ともに丁寧なミガキが加えられる。60 は蓋 B4 類である。口縁部には沈線文が一条巡る。口縁端部から沈線文まではナデが行われる。体部にかけては摩耗しているが、わずかに繩文を確認できる。61 は蓋 B1 類である。内面のナデと比べ外側のナデは雑である。62 はつまみ部を持たない蓋の天井部である。

P1352 (63)

深鉢 B2 類である。施文工具が竹管状で、溝の中央部はやや盛り上がる。

P1428 (64)

深鉢 B3 類で、燃りが弱い繩文 (LR) 施文後に、口縁部に結節繩文が施文される。

SH1167 (65)

深鉢の胴部下半である。二次焼成の影響で著しく摩耗し、部分的に剥離している。胴部下半ではわずかに左上がりの条痕文が確認できる。

6) 遺構外出土土器

甕形土器 (66～87)

66 は甕 A1 類である。復元実測のため、器高については若干上下する可能性がある。口縁部は外反し、沈線文が一条横走する。肩部には四字文が、胴部上半には横位の羽状沈線文が描かれる。胴部下半から底部にかけては平行沈線文が横走する。四字文と羽状沈線文の組み合わせはやや古い様相を留めるといえる。しかし、口縁部の短かさ、筒状に近い器形、胴部下半の横走する平行沈線文は弁生前期の特徴といえるものである。外面は二次焼成の影響でかなり摩耗している。67 は甕 A2 類である。頸部には二条の平行沈線文からなる四字文が、肩部には工字文が二段施文される。68・69 は甕 A3 類である。68 は波状口縁を呈する。口縁部には間延びした変形工字文が描かれ、これには丁寧なミガキが加えられる。内面にも丁

率なミガキが加えられている。交点 1 及び中点 1・2 は匁字状で表現される。胎土には多量の金雲母が混入する。69 は幅 2mm の細めの沈線によりやや間延びした変形工字文が口縁部に描かれ、浮線文状にも見える。文様帶のうち口縁端部から二～三条目の匁字状をなす平行沈線部分でのみ縄文が磨り消されている。胴部には横走する三条一組の平行沈線文が等間隔に三段施される。二次焼成の影響で、外面は全体に淡いススが付着し、部分的に剥離が見られる。内面は口縁部のみ薄くコゲが付着する。

70・71 は甕 B1 類である。70 は変形工字文がかなり崩れ、粗雑な沈線で文様が描かれている。沈線幅は 3mm で、沈線溝は非常に浅い。文様帶は弱いナデで整えられ、その際に使用された工具痕が残る。胴部には縄文が施文されるが、摩耗しているため明瞭には捉えられない。内面はナデで輪積み痕が残る。72～79 は甕 B2 類である。72・73 には変形工字文が描かれる。73 は 72 と比べ、流れるような沈線で描かれ、変形工字文の特徴でもある二等辺三角形もやや丸みを帯びている。74 は平行沈線文間に梢円形の文様が描かれ、磨消縄文手法は見られない。75～77 には波状文が描かれる。79 になると変形工字文がかなり崩れ、三角形や重菱形モチーフの文様が描かれる。80a・b・81 は甕 B 類の体部片と考えられる。

82 は甕 C 類で、いわゆる筒形土器である。磨消縄文で王字状の沈線文が描かれ、その部分に縄文 (LR) が充填される。構図は硬化せずやや緩い。沈線幅は 2mm とほかの個体と比べて細く、浅い。83 は甕 C 類の胴部で、磨消縄文で左下に延びる棘が描かれ、底部近くには平行沈線文が三条横走する。

84a・b は甕 E1 類で、同一個体 2 点を図示した。条痕文を施文後に、口縁部から胴部上半に縄文 (反撲 LL) が施され、結節部も残る。85a～e は甕 E2 類で、同一個体の各部位 5 点を図示した。胴部下半には右下がりやや深めの条痕文を施文後に、口縁部から胴部上半に縄文 (LR) が施され、条痕文部分と縄文部分との境には結節部が残る。その後、平行沈線文と下向きの連弧文が組み合わされた構図が描かれる。85a は波状口縁を呈し、口縁端部は横方向のナデで整えられる。その頂部は二股に割れ、その両側には刻目文が加えられる。86 は甕 F 類である。86 の肩～胴部上半に右下がりの条痕文が施され、口縁部から頸部の外面は強めのナデで整えられる。口縁部はわずかに波状口縁様を呈する。

87 は非常に薄手の作りである。外面の摩耗が顕著で、頭部と胴部上半の一部で縄文 (RL) がわずかに確認できるのみである。内面はいわゆるハケメ調整であるが、粗雑なせいか輪積み痕が残る。弥生前期～中期前半の所産というよりも、やや新しくなるものと考えられる。

深鉢形土器 (88～100)

88～90 は深鉢 A1 類である。条痕文のみ施文された深鉢でも 88 や 89 のように口縁部が内湾するものと、90 のように条痕文施文後に、口縁端部を横方向のナデで整えながら外反させ、さらに指頭痕を加え波状口縁を作り出すものの 2 種類が確認された。91 は深鉢 A2 類である。92a・b は深鉢 A3 類である。92a は口縁端部がナデで整えられ、口縁部は波状口縁を呈し、その頂部は二股に割れる。91b は体部には右下がりの条痕文施文後に縄文 LR が施され、結節縄文も残る。93 は深鉢 A5 類で口縁部がやや内湾する。胴部上半では右下がりの、口縁部では横方向の条痕文を施文した後に結節縄文が二段施される。口縁端部は横方向の強いナデで整えられる。

94～97 は深鉢 B2 類である。94 のように口縁部の内湾が強いものと、95・96 のように内湾が弱いものがある。97 は横走する三条の平行沈線文と縄文が施される。この沈線の一部は縄文に切られているため、平行沈線施文後に縦走する縄文 (LR) が施文されたと考えられる。98 は深鉢 B3 類である。ほかの深鉢と比べ、やや薄手の作りである。98 には横走する縄文 (LR) 施文した後に、口縁部に結節縄文が施される。99 は深鉢 C 類である。二条の横走する平行沈線文間に右上がりの沈線文が描かれ、沈線羽状

文に似る。沈線幅は4mmで浅い。100は深鉢D類で、細片のみの少量出土であった。

鉢形土器（101～116）

101は鉢A1類である。外面には変形工字文が描かれ、その交点及び中点は縦方向の沈線のみで表現される。文様帶にはミガキが加えられ、口縁部のみ縄文（LR）が施文される。内面にも丁寧なミガキが加えられる。102は鉢A2類である。内外面は強めのナデで整えられる。特に口縁端部から内部へ4mm程の部分でより強くナデられ、口縁端部をやや鋭利なものとする。口縁部の外面には二次焼成によりスグがわずかに付着する。特徴的な口縁端部やスグの付着から蓋として使用した可能性も指摘できる。

103は鉢B類である。二次焼成を受け、外面は摩耗しているが口縁部にはわずかに縄文（LR）が残る。沈線幅3～4mmのやや浅めの沈線で変形工字文が描かれる。交点1は下から抉り込みを入れて、その両側に粘土を押して作出される。104a～dは胎土や焼成具合、沈線文や沈線幅の特徴から同一個体4点を図示し、鉢B類と考えた。内外面の摩耗が著しいが、わずかに縄文（LR）が残る。口縁部から胴部上半には変形工字文が描かれる。底部の沈線文の構図は不明瞭であるが、右下がりの二条の短い平行沈線文は特徴的に描かれており、底面にも二条の平行沈線文が確認できる。

105・106は鉢C類である。105の外面の平行沈線はやや粗雑で、調整はナデのみである。

107は鉢E1類である。頭部が屈曲し、口縁部が聞く器形と考えられる。体部には二条の平行沈線文が横走し、丸底の底部にかけては縦区画が設けられ、三角形をモチーフとした文様が描かれる。沈線の太さは約3mmとやや太い。体部には右方向から刺突文が施され、刺突列として巡る。108は鉢E2類である。109は鉢の底部片で、外面には匹字文が描かれ、底面には縄文（LR）が施文される。

110は鉢D1類である。変形工字文が崩れ、平行沈線文間に三角形モチーフが磨消縄文で描かれる。口縁部近くの三角形の辺は閉じない。113・114は鉢D2類である。113の口縁部には変形工字文が描かれ、その文様帶には丁寧なミガキが加えられる。交点及び中点はやや盛り上がりを見せる。114は平行沈線間に、磨消縄文による三角形をモチーフとした文様が描かれる。111・112・115a・115bは鉢D3類である。111の口縁部外面には五条の平行沈線文が横走し、三条目の沈線文を上下に抉り込むことで匹字状の交点を作出する。匹字部は9単位で配置されると考えられるが、抉り込みも弱く、粗雑な印象を受ける。文様帶にはミガキが加えられる。胴部上半の内面には、幅10cm程度のコゲが帯状に付着する。115a・bには横走する三条の平行沈線と三条の波状文が描かれ、波状文は平行沈線文の三条目を切っている。

116の鉢は砂沢式もしくは生石2式の搬入品と考えられる。幅4mmのやや深めの沈線で変形工字文が丁寧に描かれる。中点1は沈線を下から抉り込み、その両側に粘土を押しやった後に粘土粒を貼り付けることで作出される。中点2にも粘土粒が貼り付けられている。内面には二条の平行沈線文が横走する。波状口縁の頂部には二股に分かれる突起が付き、そこには刺突文が施される。口縁端部にも沈線文が施される。胎土は非常に精良で、海面骨針が混入する。なお、同一個体片は報告分を含んでも3点のみの出土であった。

高杯・台付鉢（117～121）

117～119は高杯と考えられる。117は幅3mmのやや深めでしっかりした沈線により変形工字文が描かれる。縄文部分には赤彩がわずかに残る。胎土は非常に精良で、海面骨針が混入する。120は台付鉢と考えられるが、身が深めの鉢の可能性もある。縱走する縄文（LR）施文後、口縁部では二条、胴部では四条の横走する平行沈線文が施される。口縁部の沈線文は丁寧なミガキで整えられる。内面にも幅2mmの沈線文が施され、外面同様に丁寧なミガキで整えられている。121は台付き鉢の台部である。波

状文は並走する平行沈線文を切らずに描かれる。胎土には粗砂が混入し、精良とはいえない。

壺形土器（122～130）

122 は壺 A 類である。口縁部が肥厚し、その部分に沈線文が一条巡る。残存部では粘土粒がおよそ 60°間隔で貼り付けられることから、これは六单位であったと考えられる。123a～d は壺 F 類である。胴部最大径が 30cm を超える大型の壺である。口縁部から頸部、底部は不明であるが、胴部下半には条痕文が施文され、胴部上半には沈線文による文様が描かれる。構図は明らかではないが、胴部最大径となる部分には平行沈線文が横走し、その上位に連弧文が組み合わさるものと考えられる。沈線内には縄文が施文され、さらには刺突文が加えられる。沈線の外側はナデで整えられ、沈線文を強調する。内面はナデで、輪積み痕がわずかに残る。34 のような内面の顕著な剥離は認められない。外面にはわずかにススが付着し、123d の内面にはコゲが付着する。124 は壺の胴部で、撲りが弱い縄文（R）が施文され、二本描きによる短い下向き連弧文が描かれる。125 は壺 B 類である。肩部には、磨消縄文で工字状文が描かれる。工字状部分が磨り消され、棒状部分の縄文が残る。沈線は幅 3mm でやや深いものである。

126・127 は壺の破片と考えられる。126 は磨消縄文手法により縱方向の鎌形文が描かれる。沈線幅 3mm でやや深い沈線が丁寧に施文される。磨消縄文による鎌形文は器種を問わず、新潟県内では出土例が少ない。しかし、福島県や宮城県では定量確認されるものであり、県内の類例としては新潟市西郷遺跡〔土橋ほか 2009〕の丸底鉢があげられる。127 も磨消縄文により文様が描かれる。

128・129a・b は磨消浮帶文が施された壺と考えられる。129a・b は土器の厚みから小型壺の可能性がある。

130a・b は 1.5mm 程度の角張った白色の粗砂を多く混入する胎土や焼成、色調などから同一個体と判断した。破片のみで全体像は把握できない。

蓋形土器（131～143）

131～135 は蓋の口縁部から体部である。131 は蓋 A1 類である。132 は蓋 B2 類である。間延びした変形工字文が三単位配置されると考えられる。幅約 4mm の沈線溝には赤彩がわずかに残る。内面にも沈線文が施文され、強めのナデで調整されている。133 は蓋 B3 類である。体部には沈線文により四重の同心円が描かれる。口縁部には二条の平行沈線文が施される。文様にはミガキなどの調整は認められない。内面には沈線文が施され、ミガキが加えられる。沈線は幅約 4mm を基本とするが不安定で部分的に細くなったり、太くなったりする。口縁部内外面には二次焼成によるススが付着している。134 は蓋 B5 類で、体部外面はかなり摩耗しているが、口縁部では結節縄文が認められる。ほかに縄文施文の痕跡が残らないところから、結節縄文のみが施されたものと考えられる。135 は蓋 A4 類で、磨消浮帶文手法により約 3cm の小円文が描かれる。同一個体片の観察から、口縁部に小円文が一周するように 7 単位で配列するものと考えられる。

136～142 は蓋のつまみ部である。136 は蓋 C1 類、137・138 は蓋 C2 類である。139 は蓋 D 類で、外面には丁寧な横方向及びやや右下がりのミガキが加えられ、内面はナデで整えられる。140 は蓋 E 類で、出土したつまみ部のなかでもっとも背丈がある。内外面共にナデで整えられる。

141 はつまみ部で体部もわずかに残る。体部には縄文が施文され、つまみ部の外側が強くナデられ、一段下がり、体部の縄文部がやや盛り上がる。142 はつまみ部の破片で、つまみ部には等間隔に 5 か所、焼成前に穿孔が施される。143 はつまみを持たない蓋である。143 の天井部には縄文が施され、天井部側縁部はナデられたことで縄文が消され、部分的には指頭圧痕も残る。

試掘トレンチ出土（144）

144a～cは弥生中期後半の宇津ノ台式と考えられる。基本的に内外面共にハケ調整であるが、144cは輪積み痕を境に上位がハケ調整、下位はナデである。144aは口縁端部に内面と外面から交互に刻目文が施される。口縁部外面には幅2mmと細い沈線で二本描きによる平行沈線文、下向き連弧文、上向き連弧文が施される。144b・144cでは、胴部上半には平行沈線文区画に横位の羽状沈線文が、その文様帶の下位には下向き連弧文が施される。

B 土製品・焼粘土塊（145～154）

145はミニチュア土器で蓋形または高杯形を呈している。本報告では蓋形として図示した。滑車形耳飾りにも似るが、内外面の調整が粗雑なことからミニチュア土器と判断した。焼成は均一で、にぶい黄橙色である。胎土には粗砂や小礫を含まず、比較的精良である。146は環状土製品をして図示した。欠損のため全形は不明であるが、口縁部は一段肥厚し、下方に向かいやや窄まるように見える。厚みは4mm、一段肥厚する口縁部は5mmと薄手の作りで、現状は風化により非常にてもろい。肥厚部には3mm程度の沈線文が巡るが、やや粗雑である。内外面には赤彩が施されるが、そのほとんどが剥落し、わずかに残存するのみである。147は粘土板を折り返して山形状の突起を作出するが、下半は欠損しており全体形は不明である。これを折り返し接着部分が認められる側を下、その逆を上に置き図示した。土器の突起部分の可能性と共に、土偶や土偶形容器類の一部である可能性も否定できない。上半には植物の茎の痕のような沈線状の痕跡が、突起部には指頭による調整の痕跡が残る。下半の粘土板接着部は波状に整形されている。胎土には粗い金雲母、粗砂の混入が目立つ。焼成は均一で色調は外面がにぶい黄橙色、内面及び断面は外面よりも赤みを帯びたにぶい橙色である。

148～154は焼粘土塊である。その大半がV層からの出土であり、弥生時代の所産としてよい。焼粘土塊は総数24点が出土し、その総量は295.46gである。その内、鉱物などの混和材が混入するものが22点、混入しないものも2点（計18.03g）ある。混和材には石英、長石、角閃石、金雲母が認められ、粗砂や小礫の混入量にはそれぞればらつきがある。これら焼粘土塊は、もとは土器の素地であった可能性があるが、小塊が多いことから別の用途も考えなければならない。固化に際しては自然面、もしくは指頭痕や植物痕が目立つ方を便宜的に表とし、欠損や剥離が見られるほうを裏とした。側面については必要に応じて固化した。

148は表面には指頭痕が残り、裏面は指頭痕が目立たず偏平な形状を呈する。裏面の上半には指紋が残る。表裏で色調が異なり、表面はにぶい橙色と明るく、裏面は褐色とやや暗い。径6mm程度の焼成前の穿孔が確認できる。穿孔の内面上部には沈線状の切れ込みが確認でき、出口右側は上方に引っ張られるようにな形形成され楕円状を呈する。胎土には赤色粘土が混入し、少量ながら3～6mm程度の小礫も目立つ。

149～154は指頭痕が残るものである。149は表面に指頭痕が残る。裏面では凹凸が見られるが意図的なものではないと考えた。150は下半を両側面から指で摘んだ指の痕と表面からの指頭痕が残る。裏面には剥離した痕跡が認められる。151は焼粘土塊の中でもっとも重く55.5gとなる。左側面には粘土を握った状態に付いた指の跡が深く残る。表面では握った際に粘土が寄せられて生じた皺も確認できる。焼成のむらは見られず、表裏面共ににぶい黄橙色である。152～154は植物痕が残るものである。152の表面には植物の茎の痕跡が残る。裏面には両側面から寄せられた際に生じた粘土の皺が確認できる。153の表面には沈線のような筋がみられる。これは断面形状の観察から、成形時の植物の茎による圧痕、

もしくは焼成により付着していた植物が燃焼して圧痕の痕跡として残ったものと考えられる。154の下半では剥離が認められる。表裏面で刺突のような痕跡が見られるが、意図的なものか断定できない。

C 石 器 (155 ~ 277)

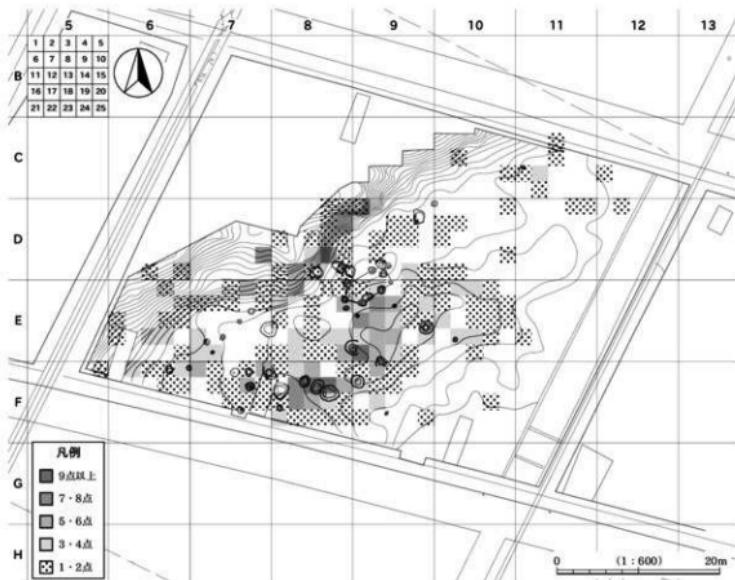
出土した石器は第3表のとおり、合計で680点（剥片類を除く）である。器種組成は、剥片石器では石鐵の出土が多く、これに不定形石器、両極剥離痕のある石器、石錐が続く。砾石器は磨製石斧、敲磨石類、石皿、砥石・台石類が出土している。また石器製作についても石核、剥片類、原石の出土からうかがわれる。器種組成を含む様相は、獣山遺跡との類似性が指摘できる。

包含層からの石器の出土の様相は、大きくは土器と同様の傾向を示す。剥片石器では石鐵、石錐、不定形石器、両極石器、剥片類は、遺構の位置する高位面で遺構に近接した分布を示す。特に剥片類については8F・9Eグリッドに集中を見出せる。一方、石核は高位面でも一定の出土量を示すが、他器種より斜面部での出土割合が高い。

器種名	石 鐵	石 錐	石 皿	不 定 形 石 器	の 両 極 剥 離 痕 有 る 石 器	磨 製 石 斧	敲 磨 石 類	石 石 台 石 等	小 石 器	異 形 石 器	石 核	剥 片 類	合 計
出 土 分 類													
出 土 数	97	43	49	95	62	7	149	21	523	4	153	3,554	4,234
百分率(%)	19	8	9	18	12	1	28	4	100	-	-	-	-

※ 各項目の百分率は、小数点第2位を四捨五入して表記しているため、この合計は100とならない。

第3表 器種別石器出土表



第9図 石器出土分布図

掲載にあたっては、土器と異なり、遺構の内外を問わず、器種ごとに行った。遺構に関わる出土状況については遺構各説でも一部記述した。以下、器種ごとの記載に関し、分類の定義及び細分類の視点、観察表の項目など基本的な部分については、猫山遺跡〔古澤ほか2003〕、西郷遺跡〔土橋ほか2009〕を参考にした。

1) 石 鐛 (155 ~ 179)

「扁平で鋭い先端部を持つ」〔阿部1979〕石器を石鎧とした。総数97点出土している。分類は完形の47点を対象に、形状により行った。

A類 (155 ~ 164) 形状が柳葉状となるものである。凸基有茎鎧が主体であるが、いわゆる尖基鎧は1点のみの出土であるためここに含めた。19点出土している。長さは、最大のもので31.33mm、最小のもので18.56mm、平均では24.86mmとなる。平均幅は10.53mm、平均厚は5.04mm、平均の重さは1.05gである。

B類 (165 ~ 168) 有茎石鎧で、基部が平基状となるものである。10点出土している。長さは、最大のもので31.15mm、最小のもので12.98mm、平均では22.07mmとなり、平均値では最小となる。平均幅は11.53mm、平均厚は4.54mm、重さは平均で0.80gとなり、平均値では最小となる。

C類 (169 ~ 176) 有茎石鎧で、基部が凹基状となるものである。ここでは、左右のどちらかが凹基状を呈するものであれば本類に含めた。14点出土している。長さは、最大のもので34.37mm、最小のもので18.14mm、平均では25.34mmとなる。平均幅は12.46mm、平均厚は4.48mm、平均の重さは0.93gである。

D類 (177 ~ 179) 有茎石鎧で、両側縁が屈曲して形状が五角形となるものである。4点出土している。長さは、最大のもので34.32mm、最小のもので22.02mm、平均では28.37mmとなる。平均幅は12.57mm、平均厚は4.52mm、平均の重さは1.06gである。

石 材 流紋岩を用いるものが60点と62%を占める。次いで頁岩(含む珪質頁岩、以下同)が18点(19%)で続き、以下はメノウ14点(14%)、黒曜石3点(3%)、緑色凝灰岩1点(1%)となる。詳細は後述(VI章4)するが黒曜石製の3点については蛍光X線分析による産地分析を行い、170と171については新発田市板山産、159については宮城県湯ノ倉産との結果を得た。

欠損品 欠損品が50点出土しており、これは総数の52%を占める。その性格上、石鎧失敗品を含むものであるが、ここでは製作途中の可能性が低いと考えたものを扱う。基部のわずかな欠損も含めるため、残存率に大きな差があり、上記の分類が可能なものも含む。欠損部位は基部、もしくは先端部に集中している。

2) 石鎧失敗品 (180・181)

「石鎧を意図して製作されたと推定されるが、何らかの理由で製作を断念(失敗)したと考えられるもの」〔阿部2000〕で、その可能性のあるものも含む。総数43点出土している。その性格上、石鎧の欠損品を含むものであるが、ここでは製作途中の可能性が高いと考えたものを扱う。180は左側縁の二次加工が進み、A類を意図して製作されていたことがわかる。181は横長剥片を素材に、先端部が作出されている。

石 材 流紋岩を用いるものが37点で86%を占め、石鎧の完形品及び欠損品より割合が高い。次いでメノウが4点(9%)で続き、以下は緑色凝灰岩1点(2%)、鉄石英1点(2点)となる。

3) 石 錐 (182 ~ 196)

意識的に先端部を形成している石器の中で、石錐を除いたものである。総数49点出土している。分類は、可能であるものを対象に、つまみ部の有無・形態により行った。

A類 (182 ~ 189) 全体形状が棒状のもの。25点出土している。長さは、最大のもので43.72mm、最小のもので19.04mm、平均では28.97mmとなる。平均幅は9.37mm、平均厚は6.99mm、平均の重さは1.83gである。184・185・187・188は、先端に頭著に摩耗痕が認められる。摩耗痕は両端部が作出されるものでも、一方の端部で頭著に発達するものが多い。

B類 (190 ~ 194) つまみ部が作出されるもので、つまみ部と錐部の境が明瞭なもの。17点出土している。長さは、最大のもので54.04mm、最小のもので21.24mm、平均では30.49mmとなる。平均幅は24.52mm、平均厚は8.84mm、平均の重さは5.96gである。

C類 (195 ~ 196) つまみ部が作出されるもので、つまみ部と錐部の境が不明瞭なもの。4点出土している。長さは、最大のもので45.28mm、最小のもので27.16mm、平均では34.53mmとなる。平均幅は19.10mm、平均厚は7.14mm、平均の重さは1.83gである。195は、先端に頭著に摩耗痕が認められる。

石 材 流紋岩を用いるものが36点で73%を占める。次いで頁岩が6点(12%)で続き、以下はメノウが4点(8%)、緑色凝灰岩1点(2%)、鉄石英1点(2%)となる。

遺存状態 B・C類では錐部の欠損が7点(33%)で認められる。なお、錐部の破片は3点出土している。

4) 不定形石器 (197 ~ 204)

剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕が認められる不定形な石器である。連続的な押圧剥離による刃部ラインを持つ、いわゆるスクレイパー、削器などと呼称されるものは出土していない。これは猫山遺跡の様相[酒井2003b]とも一致する。総数95点出土している。分類は、刃部形状により行った。

A類 (197 ~ 199) 連続剥離または連続剥離状による鋸歯状刃部をもつもの。13点出土している。長さは、最大のもので93.74mm、最小のもので35.14mm、平均では50.37mmとなる。平均幅は35.61mm、平均厚は12.38mm、平均の重さは19.91gである。

B類 (200) 捕入状の刃部を有するもの。4点出土している。長さは、最大のもので86.32mm、最小のもので22.68mm、平均では49.95mmとなる。平均幅は36.15mm、平均厚は11.14mm、平均の重さは22.77gである。

C類 (201) 素材の端部に連続剥離状の端部を有するもの。1点出土している。

D類 (202 ~ 204) 刃部の加工はないものの、使用の結果生じたものと推定される微細剥離が認められるもの。77点出土している。長さは、最大のもので104.71mm、最小のもので19.48mm、平均では44.70mmとなる。平均幅は30.81mm、平均厚は9.17mm、平均の重さは14.35gである。

石 材 流紋岩を用いるものが85点で89%を占め、石錐の完形品及び欠損品より割合が高い。次いで頁岩が7点(7%)で続き、以下はメノウ2点(2%)、凝灰岩1点(1%)となる。

5) 両極剥離痕のある石器 (205 ~ 214)

ピエス・エスキュー、両極石器、楔形石器などと呼称され、両極から剥離痕のある石器を一括した。両

極技法で剥片を剥離したと考えられる両極石核、両極剥片も含む。総数 62 点出土している。分類は、両極剥離痕の数により行った。

A 類 (205 ~ 210) 2 極一対の両極剥離痕を持つもの。42 点出土している。長さは、最大のもので 12.80mm、最小のもので 10.17mm、平均では 33.86mm となる。平均幅は 28.85mm、平均厚は 11.06mm、平均の重さは 22.22g である。

B 類 (211 ~ 212) 4 極二対の両極剥離痕を持つもの。3 点出土している。長さは、最大のもので 50.54mm、最小のもので 33.55mm、平均では 42.67mm となる。平均幅は 36.42mm、平均厚は 12.52mm、平均の重さは 24.78g である。

C 類 (213 ~ 214) 両極技法によって得られたと考えられる剥片である。17 点出土している。長さは、最大のもので 55.30mm、最小のもので 13.65mm、平均では 25.97mm となる。平均幅は 19.61mm、平均厚は 7.56mm、平均の重さは 5.68g である。

石 材 流紋岩を用いるものが 38 点と 61% を占める。次いで頁岩が 13 点 (21%) で続き、以下はメノウ 9 点 (15%)、凝灰岩 2 点 (3%) となる。

6) 磨 製 石 斧 (215 ~ 220)

剥離・敲打を基本に形成され、研磨で仕上げた一端に刃部を有する斧形の磨製石器である。出土は試掘時の 1 点 (表面採集) を除き、すべて包含層からの出土で、総数 7 点である。215 ~ 217 は装着に伴うと考えられるツブレが観察でき、刃部でも使用痕と考えられる剥離が見られる。いずれも輝緑岩である。218 は残存厚 3.1cm の大型品である。石材は輝緑岩である。219・220 は小形品である。219 は、結晶片岩を用い、細身の形態を呈する。220 は中心軸に明瞭に稜線があり、横断面は六角形に近い。研磨痕も明瞭に残る。石材は蛇紋岩である。

7) 敲 磨 石 類 (221 ~ 256)

片手ないしは両手で把持できる大きさの礫の表面に、使用の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められる石器である。側縁以外の敲打痕の集中は、いわゆる凹痕と理解した。総数 149 点出土しているが、このうちの 30 点は分類が不可能な破片であった。分類は使用痕の種類、使用部位等で行ったが、残存率によるところも大きい。

A 類 (221 ~ 229) 磨痕のみ認められるもの。60 点出土しているが、欠損品の残存部位が磨面のみのもの (229 ほか) を含むため、本類内での組成比率は実際より高い数値になっていると考えられる。

B 類 (230 ~ 235) 磨痕と凹痕が認められるもの。11 点出土している。230 は、割れ口に接して敲打痕が認められることから、使用に伴い欠損したものと考えられる。扁平な礫の中央に凹痕が発達するもの (231・232) と、棒状の礫に凹痕が複数並ぶもの (233・234・235) がある。

C 類 (236 ~ 242) 磨痕と側縁に敲打痕が認められるもの。24 点出土している。扁平な円礫を用いるものが多いが、240 は破損により生じた角をつぶすように新しい磨面が形成されており、破損後も使用が継続された様子がうかがえる。形状の差異とともに、ほかとは異なる用途も想定される。

D 類 (243 ~ 246) 磨痕・凹痕・敲打痕すべてが認められるもの。4 点出土している。

E 類 (247) 凹痕のみ認められるもの。8 点出土している。8 点中 6 点が比較的軟質な凝灰岩である。そのため、ほかの使用痕の有無が風化により読み取れないものを含むと考えられる。図化した 247 に関

しても、石材が軟質な凝灰岩であるため、顕著な凹痕は認識できたが、ほかの使用痕に関しては風化により読み取れないものの可能性がある。

F類（248～256） 敲打痕のみが認められるもの。12点出土している。いずれも端部、もしくは側縁部で敲打痕が発達するが、249・251については細長く深い線状の圧痕が認められる。

石材 石材鑑定は破片を除く119点を対象に行った。花崗岩を用いるものが62点と52%を占める。次いで安山岩（石英安山岩1点を含む）が35点（29%）で続き、以下は凝灰岩11点（9%）、流紋岩3点（3%）、ホルンフェルス2点（2%）、ピン岩1点、斑レイ岩1点、砂岩1点、軽石1点となる。

8) 石皿・砥石・台石類（257～267）

それぞれ異なる機能、形態を持つ3器種であるが、本遺跡からは絶対的な出土量が少なく、その性格上明確な線引きが難しい。そのため、ここでは「扁平な大形の礫の表面または表裏面に、使用の結果と推定される磨面や敲打痕が認められるもの」として一括して扱うこととした。総数21点出土しているが、このうちの9点は本類のものと考えられる破片であった。

257～259は扁平な円礫に使用痕が認められるものである。いずれも表裏面に平滑面がある。石材は花崗岩である。この3点を除くと、ほかはいずれも粒子の粗い石材を選択しているといえる。

石材 石材鑑定は破片を除く12点を対象に行った。流紋岩5点、凝灰岩3点、安山岩1点、閃綠岩1点、砂岩1点、軽石1点であった。265は軽石を用い、使用面が平坦であることから、手持ち砥石と考えたが、石製品、もしくはその未成品の可能性を残す。なお、265とほぼ同じ大きさの軽石の原石はわずかではあるが遺跡内に持ち込まれている。

9) 石核（268～275）

剥片剥離作業中に何らかの理由により剥離作業を断念した残核、剥片剥離作業終了後の残核である。総数153点出土した。西郷遺跡〔土橋^は2009〕の分類を参考に分類した。

A類（268・271～273） 剥片を素材とするものである。69点出土している。平均の重さは64.23gである。268は出土した内で最大のものである。下端にも剥離が形成されることから、台石などに置いた状態で剥離作業を行ったと考えられる。石材は頁岩である。271は両極技法による可能性がある。

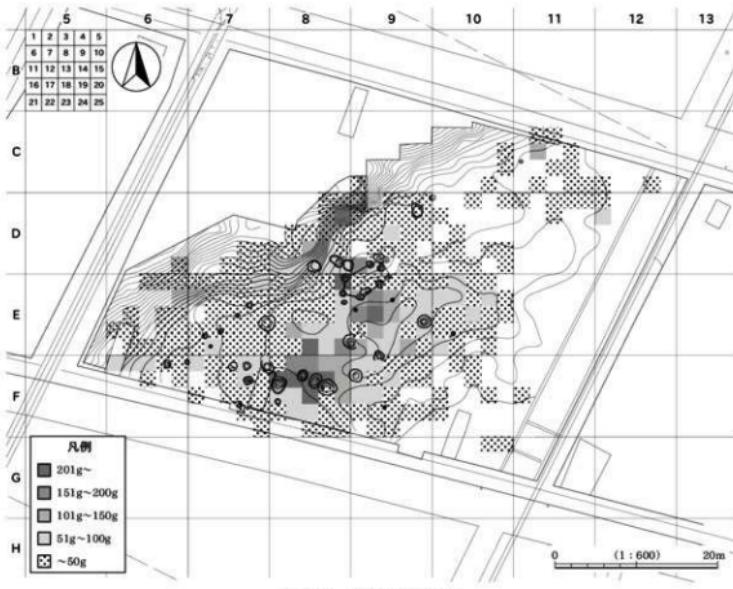
B類（269・270・274・275） 磨を素材とするものである。84点出土している。平均の重さは98.82gである。275は、石材はメノウで礫面を残す。

石材 流紋岩を用いるものが121点と79%を占める。次いで頁岩が19点（12%）で続き、以下はメノウ8点（5%）、凝灰岩5点（3%）となる。

10) 剥片類

二次加工及び使用痕の観察できない剥片をここで一括した。3,554個出土し、重量は13111.41gであった。このうち包含層（V層）からは2,742個、11651.88gが出土した。

出土分布（第10図）は土器や定形的な石器と大きくは変わらないが、これらよりは斜面部への集中が弱く、土坑周辺での出土が顕著といえる。



第10図 剥片類出土分布図

11) 異形石器 (276 ~ 278)

上記の石器の内に含まれず、かつ用途の想定がし難いもの 4 点をここで扱う。

276・277 は 2 点とも押圧剥離によって製作されており、石鎌及び石錐との類似性も指摘されるが、側面形態が湾曲して三日月形を呈していることから分離した。276 は流紋岩、277 は黒色橄密安山岩である。278 はいわゆる「雨垂れ石」と呼称されているものである。時期を明確にし得ないため古代・中世の遺物である可能性を残すが、ひとまずここで報告する。表裏面共に敲打による無数の凹痕が発達し、独特的な形態を呈する。石材は軽石である。時期は明確にし難い。加えて、出土は「第 2 面」で確認した古代のピットからではあるが、弥生時代の包含層を掘り込んで遺構が構築されていた点に留意し、ここで報告することとした。

D 玉類 (279 ~ 285)

穿孔が施され、垂飾と推定されるものである。総数 4 点出土しているが、遺構からは SK1289 から出土した 281 の 1 点のみである。ここではヒスイ・蛇紋岩の原石 3 点も関連を考慮し、ここで扱う。なお、石材鑑定についてはほかの石材と同様に肉眼で行ったが、ヒスイについては簡易的な比重計測も合わせて行い、値がヒスイに近似することを確認した。

279 はヒスイ製の垂玉である。形状は原石をそのまま用いたもので、研磨などの整形痕跡は認められない。これに穿孔が施されている。孔の位置は穿孔が可能な細薄部ともいえる側縁近くで、正裏面の双

方から穿たれる。280・281は蛇紋岩製の垂玉である。280は整形が顕著で、刻み状の装飾が施される。研磨による擦痕も全面で認められる。孔は正裏面の双方から穿たれている。281は比較的、原石の形状を残していると考えられ、擦痕は孔の周囲で顕著に認められる。孔は正裏面の双方から穿たれている。282は凝灰岩製である。軟質の原石を用いているのが異質で、造りも粗雑である。

283～285は玉との関連がうかがわれる原石である。283はヒスイの角礫状の原石である。掘立柱建物を構成する柱穴、P1392からの出土である。284・285は283より緑色が強い蛇紋岩の原石で、狭義ではいわゆるロデイン岩の範疇に入るものである。

E 搬入 磠

遺跡内に持ち込まれた加工痕の見出せない砾である。今回、弥生時代調査範囲内から回収できた砾の合計は72.67kgである。これらは建物の構築材として、あるいは石器の原石としてなど様々な用途を意図して持ち込まれたものと考えられる。

第VI章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社¹⁾・有限会社遺物材料研究所²⁾

1 はじめに

新潟県阿賀野市山口字城ヶ窪に所在する山口遺跡は、阿賀野川右岸沖積地の自然堤防上に立地する。発掘調査の結果、3面の遺構検出面が確認され、弥生時代及び古代～中世の集落であることが明らかとされている。

本章では、山口遺跡における古環境変遷、遺構の性格及び内容物、土器の年代観、黒曜石の産地分析等の検討を目的とした自然科学分析調査結果を報告する。

2 古環境推定及び植物利用

A 試 料

試料は、斜面を下った低地部（以下、低地部）の基本土層（第5図・柱状図⑨）から採取された土壌（VI・V・IV・III b・III a層）と、弥生時代の土坑群が検出された付近（以下、微高地部）の基本土層（第5図・柱状図⑩）から採取された土壌（VI・IV層）、炭化物が多量に混じる状況が観察された弥生時代の土坑であるSK1289 覆土2層から採取された土壌である。

これらの試料のうち、微高地部・低地部のVI・IV層を対象に珪藻分析を行う。また、低地部から採取されたVI・IV・III b・III a層を対象に花粉分析・植物珪酸体分析を行う。SK1289 覆土2層は、弥生時代の植物利用等の検討を目的として微細物分析を行う。

B 分析方法

1) 硅藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は【原口ほか1998】、【Krammer1992】、【Krammer & Lange-Bertalot1986・1988・1991a・1991b】、【渡辺ほか2005】、【小林ほか2006】、【Witkowski et al.2000】などを参照し、分類基準は【Round et al.1990】に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は【柳沢2000】に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms；広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類

1) パリノ・サーヴェイ株式会社（千葉博後・齊藤崇人・伊藤良永・馬場健司・松本美由紀・高橋敦・齊藤紀之・中根秀二）

2) 有限会社遺物材料研究所（藤井哲男）

(Pennate diatoms) に分け、羽状類は無縫溝羽状珪藻類 (Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱 Fragilariorophyceae) と有縫溝羽状珪藻類 (Raphid pennate diatoms; 広義のカサリケイソウ綱 Bacillariophyceae) に分ける。また、有縫溝類は、単縫溝類、双縫溝類、管縫溝類、翼管縫溝類、短縫溝類に細分する。

各種類の生態性については [Vos & de Wolf 1993] を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は [Lowe 1974] に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水生種（真塩性種）～汽水生種（中塩性種）については [小杉 1988]、淡水生種（貧塩性種）については [安藤 1990]、陸生珪藻については [伊藤・堀内 1991]、汚濁耐性については [渡辺ほか 2005] の環境指標種を参考とする。

2) 花粉分析・寄生虫卵分析

花粉分析は試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現するすべての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭（微細な炭化植物片）の含量も求める。微粒炭は 20 μm 以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

寄生虫卵分析は花粉分析と同様の処理手順を施し、重液による有機物の分離が終了した時点で処理を止める。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現するすべての寄生虫卵と花粉・胞子化石について同定・計数する。

結果は、花粉・胞子化石については同定及び計数結果の一覧表として、寄生虫卵・微粒炭については 1ccあたりに含まれる個数として表示する。寄生虫卵・微粒炭の個数については有効数字を考慮し、100 単位として表示する。

3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由來した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）及び葉身機動細胞に由來した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、[近藤 2004] の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は10の位を四捨五入して100単位に丸め、100個/g未満は「<100」で表示する。合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位の変化を図示する。

4) 微細物分析

試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材（主に4mm角以上）などの遺物を抽出する。

現生標本及び【石川1994】、【中山ほか2000】等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。炭化材は、70°C 48時間乾燥後の重量と最大径を表示する。分析後は、種実等を種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液で液浸し保管する。

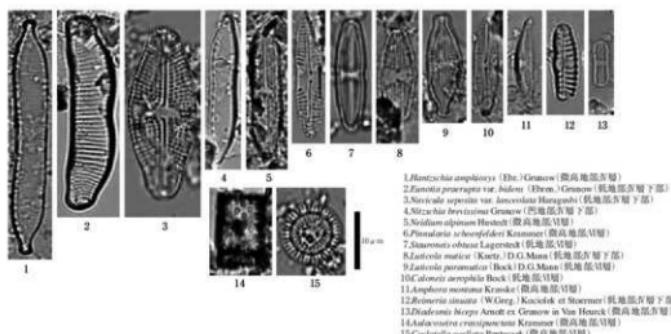
C 結 果

1) 珪藻分析

結果を第4・5表、第11・12図に示す。いずれの試料も堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出する。産出分類群数は、合計で43属90分類群である。以下に、各地点の産状を示す。

a 低 地 部

VI層は、陸生珪藻の産出割合が約60%、水生珪藻が約30%産出する。また、海水生種が約10%産出する。主要種は、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群の*Pinnularia schoenfelderi*が約13%、陸生珪藻A群の*Luticola mutica*と*Hantzschia amphioxys*が10%産出し、次いで同じく陸生珪藻A群の*Diadesmis biceps*、*Neidium alpinum*、陸生珪藻B群の*Stauroneis obtusa*、*Pinnularia subcapitata*等を伴う。水生珪藻では特に多産するものではなく、流水不定性の*Gomphonema parvulum*、止水性種の*Autacoseira lacvissima*、*Cyclotella ocellata*、海水浮遊性の*Coscinodiscus marginatus*等を伴う。



第11図 珪藻化石

IV層下部では、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻の産出割合が約60%と高く、次いで水生珪藻が約30%産出する。主な産出種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群の*Luticola mutica*と*Hantzschia amphioxys*が約20%産出し、同じく陸生珪藻A群の*Diadesmis biceps*、*Luticola cohnii*等を伴う。水生珪藻では、好止水性種の*Navicula seposita* var. *lanceolata*が約10%と多産するほか、好流水性で中～下流性河川指標種の*Planothidium lanceolatum*、*Reimeria sinuata*等を伴う。

分類群	生物性			環境指標種	IV層下部	VI層	最高地帯
	現分	pH	淡水				
Bacillariophyta (浮遊植物門)							
Cerco- Diatoms (中心型藻類)							
Arachnodiscus spp.	Fult						
<i>Arachnodiscus alpinus</i> (Grun.) Kutzner	Ogb-hol	al-il	1.6	N.U.	-	-	-
<i>Arachnodiscus compressus</i> Kutzner	Ogb-ind	al-il	1ph	-	-	1	-
<i>Arachnodiscus granulosus</i> (Hedw.) Simonov	Ogb-ind	al-il	1.6	M.U.	-	1	1
<i>Arachnodiscus italicus</i> (Hedw.) Simonov	Ogb-ind	ind	1ph	U	1	-	-
<i>Arachnodiscus levicostatus</i> (Osten.) Kutzner	Ogb-hol	al-il	1ph	-	3	2	1
<i>Arachnodiscus sp.</i>	Ogb-ind	unk	unk	-	1	-	-
<i>Coscinodiscus marginatus</i> Ehrenberg	Fult				-	3	-
<i>Coscinodiscus sp.</i>	Fult				-	1	3
<i>Actinoptychus seminudus</i> (Hedw.) Ehrenberg	Fult			A	-	1	-
<i>Orthoceras testaceum</i> (Walis.) OMeara	Ogb-ind	ind	ind	RA	1	1	-
<i>Cyclotella fusiformis</i> Grunow	Ogb-ind	ind	1.6	M	-	1	-
<i>Cyclotella costata</i> Pottsius	Ogb-ind	al-il	1ph	U	1	3	-
<i>Thalassiosira eccentrica</i> (Roux) Cleve	Fult			A	-	1	-
Angiosperm Diatoms (被子植物門珪藻)							
<i>Diatoma meadowii</i> (Ehren.) Kuetzing	Ogb-ind	al-il	r-hi	K.T	1	-	1
<i>Fragilaria capillaris</i> (Grev.) J.B.Petersen	Ogb-ind	al-il	ind	T	1	-	-
<i>Fragilaria capillaris</i> Desmarest	Ogb-ind	al-il	ind	T	1	-	-
<i>Fragilaria ramosissima</i> (Kutz.) Petersen	Ogb-ind	al-il	r-ph	K.T	1	-	-
<i>Meridion circinatum</i> Ralfs	Ogb-ind	al-il	r-hi	K.T	2	1	-
<i>Spirogyra contracta</i> Ehrenberg	Ogb-ind	al-il	1ph	U	1	-	-
<i>Gloesia alata</i> (Nitzsch.) Compte	Ogb-ind	al-il	ind	U	1	1	-
<i>Taeniellula fuscoviridis</i> (Lyngb.) Kuetzing	Ogb-ind	ind	1-ph	O.U.	-	1	-
<i>Thalassiosira hirsutissima</i> (Kutz.) Schmid	Fult			-	-	-	1
<i>Thalassiosira nitida</i> (Grun.) Grunow	Fult			A,B	-	2	1
Rigid Pennate Diatoms (硬質藻類珪藻類)							
Monoraphid Pennate Diatoms (單核藻類珪藻類)							
<i>Academia crenulata</i> Grunow	Ogb-ind	al-il	r-ph	T	-	2	-
<i>Lemnocalis longaria</i> (Grunow) Rosend & Basson	Ogb-ind	al-il	ind	U	-	1	-
<i>Planothidium rotundatum</i> (Brett & Kutz.) Lange-Bertalot	Ogb-ind	ind	r-ph	K.T	4	-	-
<i>Acmonothidium liposphaeum</i> (Kutz.) H.Kobayasi	Ogb-ind	ind	r-ph	T	-	1	-
<i>Acmonothidium subfuscum</i> (Benth.) H.Kobayasi	Ogb-ind	ind	r-ph	T	-	1	-
<i>Cocconeis engelii</i> Ehrenberg	Ogb-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-
<i>Cocconeis planata</i> Ehrenberg	Ogb-ind	al-il	ind	U	2	-	1
Brachial Pennate Diatoms (枝條藻類珪藻類)							
<i>Amphora monema</i> Kutzek	Ogb-ind	ind	ind	R.A.U.	-	-	2
<i>Cymbella strobila</i> (Bieb.) Kirchner	Ogb-ind	al-il	1ph	O.T	1	-	1
<i>Cymbella subapiculata</i> Grunow	Ogb-ind	al-il	1ph	O.T	-	1	-
<i>Cymbella tenuis</i> (Benth.) Van Heeck	Ogb-ind	al-il	ind	T	1	1	-
<i>Cymbella turgida</i> Grunow	Ogb-ind	al-il	r-ph	K.T	1	-	-
<i>Cyathopleura nivalis</i> (Averaald) Kutzner	Ogb-ind	ind	ind	O.U.	-	1	-
<i>Encyonema ulvarium</i> (Bleisch.) D.G.Mann	Ogb-ind	ind	ind	T	1	-	-
<i>Placonema elongatum</i> var. <i>neglecta</i> (Kutz.) H.Kobayasi	Ogb-ind	al-il	r-ph	U	-	-	1
<i>Gomphonema thorelli</i> (Fricker) Merino et al.	Ogb-ind	ind	r-hi	J	-	-	1
<i>Gomphonema clevei</i> Fricker	Ogb-ind	ind	r-ph	T	1	-	1
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kutz.) Kuetzing	Ogb-ind	ind	ind	U	1	3	-
<i>Gomphonema pusillum</i> var. <i>rigidum</i> E.Kleinbach et Lange-B.	Ogb-ind	al-il	ind	U	2	-	-
<i>Gomphonema sp.</i>	Ogb-ind	unk	unk	-	2	-	-
<i>Reimeria sinuata</i> (W.Greg.) Koscielok et Stoermer	Ogb-ind	ind	r-ph	K.T	5	1	1
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i> (C.Agardh) Lange-B.	Ogb-hol	al-il	r-ph	K.T	1	-	-
<i>Nasula pseudodiscoidalis</i> Lange-Bertalot	Ogb-ind	al-il	ind	T	1	-	-
<i>Nasula repanda</i> var. <i>longirostra</i> Harapoli	Ogb-ind	ind	1ph	-	15	-	1
<i>Staurodes brevisetis</i> (Pfe.) Lind	Ogb-ind	ind	ind	RI	-	1	-
<i>Staurodes integrifilum</i> Patrick	Ogb-ind	ind	ind	T	-	-	1
<i>Staurodes oblongus</i> Lagatelli	Ogb-ind	ind	ind	RI	-	4	1
<i>Frustulia vulgaris</i> (Trevatt.) De Totti	Ogb-ind	al-il	ind	U	2	-	-
<i>Diadema flexuosa</i> Amst ex Grunow in Van Heeck	Ogb-ind	al-il	ind	R.A.T.	15	4	3
<i>Diadema constricta</i> (Grunex Van Heeck) D.G.Mann	Ogb-ind	al-il	ind	R.A.T.	2	1	4
<i>Laticula papparissae</i> (Bleisch.) D.G.Mann	Ogb-hol	al-il	ind	S	1	-	1
<i>Laticula robusta</i> (Bleisch.) D.G.Mann	Ogb-ind	al-il	ind	RI	11	1	-
<i>Laticula minor</i> (Bleisch.) Miyake	Ogb-ind	al-il	ind	-	-	1	-
<i>Laticula mutica</i> (Kutz.) D.G.Mann	Ogb-ind	al-il	ind	R.A.S.	28	7	16
<i>Laticula permutans</i> (Bleisch.) D.G.Mann	Ogb-ind	ind	RI	-	3	13	6

第4表 珪藻分析結果(1)

分類群	生理性			環境指標種	汚染指標		地図地帯	
	塩分	pH	流水		IV層下部	VI層	汚染地帯	おもな VI層
<i>Littorella pumila</i> (Burm.f.) Spreng. / D.G.Marr	Ogh-ind	ind	ind	-	3	-	-	-
<i>Neidium oligosporum</i> Hostm.	Ogh-ind	ac-bl	ind	RA	3	4	5	7
<i>Neidium gracileanum</i> (Laport.) Cleve	Ogh-ind	ac-bl	ind	RI	1	-	-	-
<i>Calomeria amplexula</i> Beck	Ogh-ind	ac-bl	ind	RAS	-	3	2	4
<i>Calomeria angustifolia</i> Brey-P.	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	2	-	-
<i>Calomeria laeta</i> Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	al-bl	ind	U	-	-	1	-
<i>Calomeria transvaalica</i> (Gronov)	Ogh-ind	al-bl	ind	RB	1	-	-	-
<i>Dianella multiflora</i> (W.Smith) Greville	Ogh-ind	ind	ind	RA, U	5	2	3	1
<i>Pimularia brevifolia</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	S	-	1	-	-
<i>Pimularia microstoma</i> (Blk.) Cleve	Ogh-ind	ac-bl	ind	RA	-	1	-	1
<i>Pimularia obscurata</i> Koste	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1	-	-
<i>Pimularia rugosa</i> Hartmann	Ogh-ind	ac-bl	ind	O	-	1	-	-
<i>Pimularia schenckiana</i> Kramer	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	13	4	13
<i>Pimularia schreberiana</i> (Hedw.) Kramer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	1	1
<i>Pimularia subspatulata</i> Grayay	Ogh-ind	ac-bl	ind	RBS	5	4	4	3
<i>Pimularia subspatulata</i> var. <i>elongata</i> Kramer	Ogh-ind	ac-bl	ind	RB	1	-	-	-
<i>Pimularia subspatulata</i> var. <i>persecutaria</i> (Griseb.) Cleve	Ogh-ind	ac-bl	ind	U	1	-	-	-
<i>Pimularia subspatulata</i> Kramer	Ogh-hob	ac-bl	ind	U	-	-	-	-
<i>Pimularia calycina</i> Schleicher	Ogh-hob	ac-bl	1-pb	-	1	-	-	-
<i>Pimularia acuta</i> Skarpe	Ogh-hob	ac-bl	1-pb	-	-	-	-	1
<i>Pimularia subcordata</i> Mayena et H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-bl	1-pb	S	1	-	-	-
<i>Pimularia stricta</i> (Nak.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O.U	2	-	-	-
<i>Pimularia</i> spp.	Ogh-ind	unk	unk	-	3	-	-	-
苔類地帯								
<i>Heterzia amplissima</i> (Bis.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA, U	31	9	20	16
<i>Nazodia brevistylis</i> Grunow	Ogh-Meh	al-bl	ind	RBU	7	1	-	1
<i>Nazodia primaria</i> (Grim.) Pasquale	Ogh-ind	al-bl	ind	RBU	-	-	3	2
<i>Nazodia uncinata</i> (Pursh) Hoshii	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-
<i>Epidendrum adnatum</i> (Kuntze) Brummitt	Ogh-ind	al-bl	ind	T	1	-	-	-
<i>Akipetelia gibberula</i> (Hedw.) O. Moller	Ogh-Meh	al-bl	ind	U	3	1	1	-
苔類地帯								
<i>Asplenium angustum</i> Konig	Ogh-ind	al-bl	1-pb	U	-	1	-	1
苔類地帯								
<i>Ensatina ilicis</i> (Hedw.) Mitt.	Ogh-hob	ac-bl	ind	U	1	-	-	-
<i>Ensatina incisa</i> (Schleicher) Gregory	Ogh-hob	ac-bl	ind	O.U	1	-	-	-
<i>Ensatina megalosoma</i> (Kuntze) Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O.T	1	-	-	-
<i>Ensatina primaria</i> (Kuntze) Reichenbardi	Ogh-hob	ac-bl	ind	O.T	-	-	-	-
<i>Ensatina tigris</i> (Soler.) Ehrenb.	Ogh-hob	ac-bl	1-pb	RBU, O.T	8	2	1	-
<i>Ensatina cyanea</i> (Kuntze) De Boer	Ogh-hob	ac-bl	ind	T	1	-	-	-
苔類地帯								
海水・陸生					0	8	2	8
海水・汽水生境					0	0	0	0
汽水生境					0	0	0	0
淡水・汽水生境					10	2	1	1
淡水生境					190	90	99	92
井湯化石類似					200	103	102	101

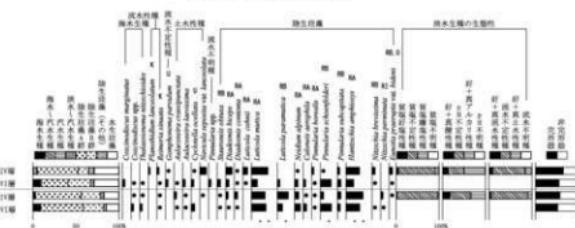
<構成>

II層: 塩分濃度に対する適応性	pH: 水素イオン濃度に対する適応性	C.R.: 流水に対する適応性
Ind : 海水不耐性	ab-bl : 高アルカリ性耐性	I-fa : 真正耐性種
Meh : 汽水不耐性	ab-bl : 好アルカリ性耐性	1-pb : 好不耐性種
Ogh-ind : 脱塩適応性耐性	ind : pH不耐性耐性	ind : 淡水不耐性種
Ogh-ind : 淡水不耐性耐性	ac-bl : 酸性耐性	rpbs : 好淡水流性種
Ogh-hob : 汽水適応性耐性	ac-bl : 酸性耐性	rfd : 汽水不耐性種
Ogh-ind : 汽水適応性耐性	unk : pH不耐性耐性	unk : 流水不耐性種

<環境指標群>

A: 外海指標: J1: 海水沈没干渉地帯, J2: 海水沈没干渉地帯 (以上は小村, 1988), K: 中一下段の河川指標群, M: 沿岸带の河川指標群, O: 沿岸地帯の新生帶 (以上は安藤, 1990), S: 良泥炭地帯, U: 汽水適応性耐性, T: 新淡水地帯 (以上はAsada & Watanabe, 1991), R: 陸生群落 (DAI & BIE, RI: 未区分, 伊: 相内, 1991)

第5表 珪藻分析結果(2)



第12図 主要珪藻化石群集の層位分布

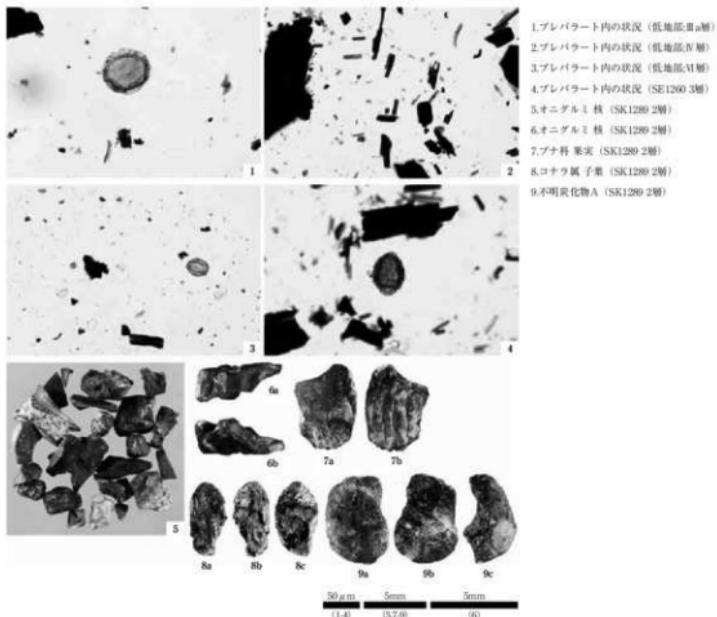
b 微高地部

低地部と同様に陸生珪藻が多産し、約80%を占める。これに次いで、水生珪藻が約20%産出する。なお、VI層では海水生種が約10%産出する。陸生珪藻の主要種は、IV層もVI層も近似し、陸生珪藻A群の *Luticola mutica* と *Hantzschia amphioxys* が約20%産出し、陸生珪藻B群の *Luticola paramutica*, *Pinnularia schoenfelderi*, *Pinnularia subcapitata*、陸生珪藻A群の *Neidium alpinum* 等を伴う。水生珪藻も特に多産するものではなく、止水性の *Aulacoseira crassipunctata*, *Aulacoseira laevissima*、海水浮遊性の *Thalassionema nitzschiooides*, *Coscinodiscus* spp. 等が低率ながら産出する。

2) 花粉分析・寄生虫卵分析

結果を第6表に示す。低地部のIIIa・IIIb・IV・V・VI層からは、花粉化石がほとんど検出されず、検出された花粉も保存状態は極めて不良である。検出された花粉は、木本花粉ではツガ属、コナラ属アカガシ属が、草本花粉ではイネ科がわずかに認められるのみである。

各試料における微粒炭量は、IIIa層は約6,400個/cc、IIIb層は約3,000個/cc、V層は約1,600個/cc、IV層は約8,200個/cc、VI層は約400個/cc、SE1260覆土3層は約20,300個/ccである。



第13図 花粉分析・寄生虫卵分析プレバラート内の状況写真・種実遺体

分類群	低地部					SE1260 3層
	III a 層	III b 層	IV 層	V 層	VI 層	
木本花粉						
ツガ属	1	-	-	-	-	-
ブナ属	-	-	-	-	-	1
コナラ属アカシキ亜属	-	-	-	-	1	-
草本花粉						
イネ科	-	-	-	1	1	-
ベニバナ属	-	-	-	-	-	1
不明花粉	-	-	-	-	-	1
シダ類胞子						
シダ類胞子	23	15	13	101	20	152
合計						
木本花粉	1	0	0	0	1	1
草本花粉	0	0	0	1	1	1
不明花粉	0	0	0	0	0	1
シダ類胞子	23	15	13	101	20	152
総計 (不明を除く)	24	15	13	102	22	154
寄生虫卵 [個 /cc]	-	-	-	-	-	0
1ccあたりの微粒質量 [mg]	6400	3000	8200	1600	400	20300

第6表 花粉分析・寄生虫卵分析結果

3) 植物珪酸体分析

結果を第7表、第14・15図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下、各地点の産状を記す。

a 低 地 部

VI層は、植物珪酸体含量は約6,500個/gである。クマザサ属を含むタケア科やヨシ属等が検出される。IV層下部は、植物珪酸体含量は約1.6万個/gであり、VI層と同様にクマザサ属を含むタケア科やヨシ属、スキ属を含むウシクサ族が検出される。III b 層は、植物珪酸体含量は約9,100個/gであり、クマザサ属を含むタケア科やヨシ属、スキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亞科が検出される。また、栽培植物であるイネ属の葉部や穀殻に形成される植物珪酸体も検出される。その含量は、短細胞珪酸体と機動細

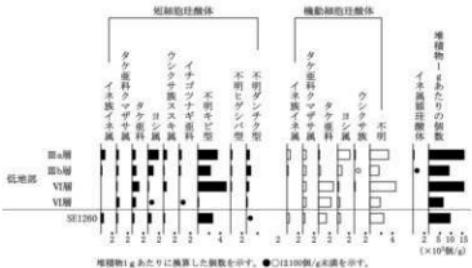
試料名	低地部					(個/g)
	III a 層	III b 層	IV 層	V 層	VI 層	
分類群						
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	700	200	-	-	-	500
タケ科クマザサ属	300	300	100	400	200	
タケ科	600	700	1,200	600	300	
ヨシ属	1,900	900	100	<100	600	
ウシクサ族スキ属	600	100	500	-	200	
イチゴツナギ亞科	400	200	-	<100	-	
不育キビ型	3,500	2,200	5,100	100	2,600	
不育ヒゲンバ型	200	200	100	-	-	
不育ダンチク型	600	800	400	200	<100	
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	600	200	-	-	-	400
タケ科クマザサ属	600	500	600	600	400	
タケ科	200	400	2,700	2,200	1,400	
ヨシ属	2,200	700	200	400	500	
ウシクサ族	200	<100	100	-	-	
不明	3,300	1,600	4,600	1,800	2,500	
珪化組織片						
イネ族珪化組織片	200	<100	-	-	-	
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	8,700	5,600	7,600	1,500	4,500	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	7,000	3,400	8,200	5,900	5,100	
珪化組織片	200	100	0	0	0	
総計	15,800	9,100	15,800	6,500	9,600	

第7表 植物珪酸体含量

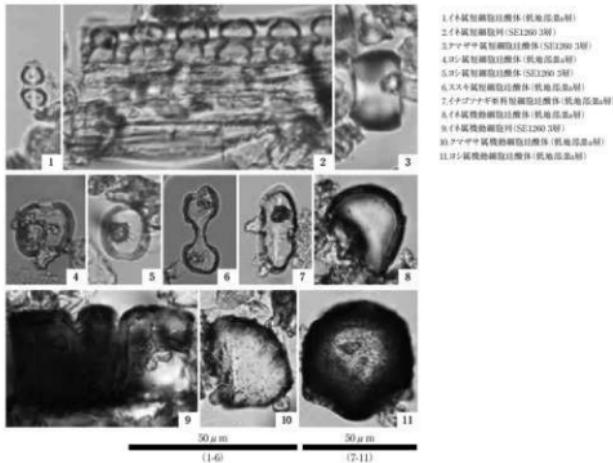
胞珪酸体はそれぞれ約 200 個 /g、頸珪酸体は 100 個 /g 未満である。III a 層は、植物珪酸体含量は約 1.6 万個 /g である。III b 層と同様の分類群が検出され、ヨシ属の含量が高い。また、イネ属も検出され、その含量は、短細胞珪酸体が約 700 個 /g、機動細胞珪酸体が約 600 個 /g、頸珪酸体が約 200 個 /g である。

b SE1260 覆土 3 層

SE1260 覆土 3 層は、植物珪酸体含量は約 9,600 個 /g である。クマザサ属を含むタケア科やヨシ属、スキ属が検出されるほか、栽培植物のイネ属も検出される。イネ属の含量は、短細胞珪酸体は約 500 個 /g、機動細胞珪酸体は約 400 個 /g である。



第 14 図 植物珪酸体含量



第 15 図 植物珪酸体

4) 微細物分析

結果を第 8 表に示す。SK1289 覆土 2 層からは、落葉広葉樹のオニグルミの核 24 個、落葉または常緑広葉樹のコナラ属の子葉 3 個、ブナ科の果実 2 個の計 29 個が検出され、いずれも炭化が認められる破

分類群	部位	状態	2 個	備考
木本類				
オニグルミ	核	破片	炭化 24	最大径 5.5mm
コナラ属	子葉	破片	炭化 3	
ブナ科	果実	破片	炭化 2	
不明炭化物 A			2	長さ 7mm、幅 5mm
不明炭化物 B			2	
炭化材			0.77g	最大径 1.5cm <樹種同定結果 > マツ属複数 資料來源 (3), ヌルデ? (2)
			分析量 100cc	
			168.4g	

第 8 表 微細物分析結果

片である。このほかに、最大径 1.5cm 程度の炭化材 (0.77g)、不明炭化物 4 個が確認された。

また、検出された炭化材について樹種同定を行った結果、針葉樹のマツ属複雑管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxyylon*) と落葉広葉樹のヌルデ? (*Rhus javanica* L...?) が確認された。以下に、検出された種実の形態的特徴等を記す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ 3-4cm、径 2.5-3cm 程度の頂部が尖る広卵体で、1 本の明瞭な縫合線がある。破片は最大で 5.5mm 程度。核は木質、硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る 2 つの大きな窪みと隔壁がある。

・コナラ属 (*Quercus*) ブナ科

子葉の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば卵~球状楕円体。破片は子葉の合わせ目に沿って割れた半分未満で、最大で長さ 6mm、径 3mm 程度。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る縦管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上はわずかに窪み、頂部にある小さな孔(主根)を欠損する。

・ブナ科 (Fagaceae)

果実の破片が検出された。炭化しており黒色。破片は丸みを帯びるが、全形は不明。大きさは最大で長さ 7mm、幅 5mm 程度。(外) 果皮表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。内面(内果皮)は材質が異なり、粗い縦筋がある。コナラ属の可能性がある。

・不明炭化物 (Unknown)

木材組織が確認されない、部位・種類共に不明の炭化物の破片が検出された。炭化しており黒色。うち 2 個は類似することから、不明炭化物 A としている。不明炭化物 A は、丸みを帯びることから、全形は球状の可能性がある。大きさは最大で長さ 7mm、径 5mm 程度。表面は平滑で内部はやや海綿状。子葉の合わせ目は確認されない。

D 考 察

1) 古 環 境

a 堆 積 環 境

VI 層に認められた珪藻化石群集は、低地部、微高地部ともに陸生珪藻が多産し、これとは生育環境を異なる中~下流性河川指標種群を含む流水性種や止水性種、海水生種が低率ながら混在する状況が認められた。このような様々な生育環境を示す珪藻化石が混在する群集は、河川の氾濫等に伴う一過性の堆積物中に認められる混合群集 [堀内ほか 1996] に近い特徴と言える。なお、陸生珪藻が他の種類に比べ多産し

したことから、陸生珪藻の生育に適した好気的環境にあったことが推定される。本遺跡は、阿賀野川右岸の自然堤坊上に立地することから、河川等の氾濫や増水等の影響を受けていた可能性もあるが、基本的には好気的環境であったと考えられる。

一方、古代の遺物包含層とされるIV層も、低地部及び微高地部いずれも陸生珪藻が多産したことから、好気的環境であったことが推定される。なお、低地部のIV層（試料番号10）からは好止水性種の *Navicula seposita* var. *lanceolata* が比較的多く検出された。本種は、[原口 2000] が管生沼で記載した種で、止水域に生育する種類である。現地性種とすれば、IV層堆積時に部分的（あるいは一時的）に、沼地・沼沢湿地のような水域環境であった可能性がある。

b 古 植 生

花粉分析の結果、低地部の基本土層試料及びSE1260 覆土 3層のいずれの試料も花粉化石がほとんど検出されなかつたことから、古植生の検討は困難であった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（[中村 1967]、[徳永・山内 1971]、[三宅・中越 1998]など）。上記した珪藻分析結果では、陸生珪藻が多産したことから好気的環境が推定されており、わずかに検出された花粉も花粉外膜が破損・溶解するなど保存状態が悪かったことを考慮すると、経年変化の影響を受け分解・消失したと考えられる。

なお、わずかに検出された花粉から、針葉樹のツガ属、落葉広葉樹のブナ属、常緑広葉樹のコナラ属アカガシア属等の木本類が周辺に生育していたと推定される。また、弥生時代前期の土坑覆土（SK1289 覆土 2層）からは、落葉広葉樹のオニグルミ、落葉または常緑広葉樹のコナラ属を含むブナ科の炭化種実、マツ属複雑管束亞属及びヌルデ？の炭化材が検出された。オニグルミは、河川沿いなどの適湿地に生育する高木である。針葉樹のツガ属やマツ属、ブナ属・コナラ属を含むブナ科、ヌルデ等は、現在の本遺跡周辺域の山野に普通に生育することから、これらは当時の本遺跡周辺の森林や林縁、河畔等に生育していたと考えられる。

また、オニグルミは核内部の種子が生食可能であり、コナラ属を含むブナ科は、一部を除いてアグ抜きすれば子葉が食用可能である。これらの堅果は、長期保存可能で収量も多いことから、植物質食糧として利用された痕跡の可能性がある。これらの種実の破片が炭化した状態で検出されたこと、マツ属複雑管束亞属やヌルデ？等の炭化材が検出されたことから、燃料材等としての利用も推定される。

植物珪酸体分析結果では、VI層及びIV層からクマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出された。このことから、タケ亜科やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等は、周辺の微高地や低地部の開けた明るい場所に生育していたと推定される。特にヨシ属は、温潤な環境を好みことから、低地部周辺に生育した可能性がある。また、クマザサ属は、落葉広葉樹林の林床に生育する分類群が含まれることから、上流域の落葉広葉樹林の林床等に生育したものも含まれる可能性がある。

一方、III a・b 層では、下位のVI層やIV層と同様の分類群が検出されたほか、栽培植物のイネ属も検出された。その含量は、III b 層では短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに約 200 個/g、頸珪酸体は 100 個/g未満、III a 層では、短細胞珪酸体は約 700 個/g、機動細胞珪酸体は約 600 個/g、頸珪酸体は約 200 個/g であった。イネ属の含量が低いことや、III 層に相当する堆積物の所見を考慮すると、これらの本土層における稻作の可能性は低い。また、SE1260 覆土 3 層からは、栽培植物のイネ属の植物珪酸体や、

栽培種のベニバナ属の花粉が検出されたことから、イネの植物体の利用や周辺域でのベニバナ属の栽培・利用等が推定される。本地域における栽培植物の利用状況については、隣接する柄目木跡で検出された中世の井戸から検出された種実遺体の検討の結果、モモやイネ、アワ、ヒエ、ムギ類、アサ、マメ類、シソ、ナス科、メロン類等の栽培植物の種実遺体群が確認されており（未公表資料）、多くの栽培植物が利用されていたことが明らかとされている。

3 遺物の年代観及び遺構の性格の検討

A 試 料

試料は、弥生時代前期～中期初頭の土坑4基（SK1165・1170・1289・1394）の覆土等から採取された土壤、SE1260 覆土3層から採取された土壤、SK1176の4層から出土した弥生時代前期～中期初頭と考えられる土器（図版58-25）である。以下に、各試料の概要を記す。

1) 土坑試料

土坑試料は、発掘調査時に土坑を埋積する堆積物の観察と合わせて試料の採取を行っている。なお、試料採取位置は、土層断面に限定されたため、発掘調査時に区分された各土層及び土坑底面を構成する堆積物を層毎に採取している。以下に、各土坑覆土の観察所見及び採取試料を記す。

a SK1165・1170

2基の土坑は隣接する。覆土は、SK1165・1176とともに、それぞれ1・2層からなる。SK1165 覆土1層は局所的に炭化物が混じる褐灰色シルト～粘土、2層は炭化物が混じる褐灰色粘土、土坑底面（地山）は褐灰色粘土であるが、1・2層に比べ塊状をなす。本土坑では、1層から土器や石器などが多量に出土している。試料は、1層、2層上部・下部、地山から採取している。一方、SK1176では、1層は褐灰色シルト～粘土、2層は褐灰色粘土である。試料は、1層上部・下部、2層から採取している。

b SK1289

覆土は1～3層からなる。1層は、炭化物がわずかに混じる褐灰色シルト、2層は炭化物が多量に混じる褐灰色シルト～粘土、3層は炭化物が混じる褐灰色シルト～粘土であり、2～3層から土器がまとまって出土する。試料は、1層上部・下部、2層、3層から採取しており、炭化物が多量混じる2層については上記した微細物分析用の試料を合せて採取している。

c SK1394

覆土は1・2層からなり、1・2層ともに褐灰色を呈するシルトである。1層からは土器片が多量出土する。なお、土坑底面（地山）は、覆土1・2層に比べやや泥質である。試料は、1層上部・下部、2層、地山から採取している。

上記した各土坑は、いずれも基本土層VI層を検出面としており、土坑覆土はVI層の基質との変化はほとんど認められず、土器や石器等の出土状況や炭化物の混入の程度、土坑底部の堆積物（地山）と比較して、偽縞化した堆積物からなるという特徴が認められた。

2) SE1260

試料は、SE1260 覆土 3 層から採取された灰色シルト混じり粘土である。

3) 弥生土器

試料は、SK1176 の底面直上の 4 層から出土した弥生土器片（図版 58 - 25）に付着した炭化物である。炭化物は、土器口縁部外面に施文された沈線内に多く認められ、器面の一部にも付着する状況が観察された。

これらの試料のうち、上記した土坑試料と、比較対照試料として微高地部から採取された基本土層 VI、V、IV 層を対象に土壤理化分析（腐植含量、リン酸含量、カルシウム含量）を行う。また、SE1260 覆土 3 層を対象に寄生虫卵分析、土器の外面に付着した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を行う。

B 分析方法

1) 放射性炭素年代測定

炭化物について、HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によるアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じ切り、500°C (30 分) 850°C (2 時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素 + エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄、水素を投入し、封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシユウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ¹³C/¹²C の測定も行うため、この値を用いて δ ¹³C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。測定年代は 1,950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差 (One Sigma: 68%) に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴C の半減期 5,730 ± 40 年) を校正することである。暦年較正は、CALIB 5.02 のマニュアルに従い、1 年単位まで表された同位体効果の補正をした年代値を用いて行う。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、暦年較正結果は σ + 2 σ (σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲) の値を示す。表中の相対比（確立分布）は、σ、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

2) 寄生虫卵分析

本分析方法については、本章 2 - B - 2) を参照されたい。

3) 土壤理化学分析

腐植含量はチューリング法〔土壤標準分析・測定法委員会 1986〕、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法〔土壤養分測定法委員会 1981〕、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法〔土壤養分測定法委員会 1981〕でそれぞれ行う。以下に、各項目の操作工程を示す。

a 分析試料調製

試料を風乾後、軽く粉碎して 2.00mm の篩いを通過させる（風乾細土）。風乾細土の一部を細かく粉碎し、0.5mm φ の篩いを全通させる（粉碎土）。風乾細土の水分を加熱減量法（105°C、4 時間）により測定する。

b 腐植含量

粉碎土 0.100～0.500g を 100ml 三角フラスコに正確に秤量し、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200°C の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2N 硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C 乾土%) を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量 (乾土%) を算出する。

c リン酸含量

風乾細土 2.00g をケルダールフラスコに秤量し、はじめに硝酸 (HNO_3) 5ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 (HClO_4) 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で 100ml に定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計でリン酸濃度を測定する。測定値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 ($\text{P}_2\text{O}_5 \text{mg/g}$) を算出する。

d カルシウム含量

リン酸含量測定においてろ過したろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加入了後に原子吸光光度計でカルシウム濃度を測定する。測定値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのカルシウム含量 ($\text{CaO} \text{mg/g}$) を求める。

C 結 果

1) 放射性炭素年代測定

土器（図版 58-25）の炭化物の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、2,330 ± 30yrBP を示す（第 9 表）。また、この補正年代に基づく曆年較正結果（ σ ）は calBC 405-calBC384 である（第 10 表）。

2) 寄生虫卵分析

結果を第 6 表に示す。SE1260 覆土 3 層からは寄生虫卵は 1 個体も検出されない。また、顕鏡時にブレバート中における花粉の産状の確認も行ったが、花粉化石の検出状況及び保存状況は極めて悪く、ブナ属やベニバナ属の花粉が検出されるのみである。

3) 土壤理化学分析

結果を第11表、第16・17図に示す。腐植含量は、比較対照とした微高地部のIV・V・VI層は2.08～0.82%の範囲にあり、含量はIV層からVI層へ減少する。土坑試料では、SK1165は1.29～0.75%、SK1170は0.97～0.77%、SK1289は1.92～1.07%、SK1394は0.95～0.79%の範囲にあり、ほぼ比較対照試料の含量範囲内にある。含量変化の特徴をみると、SK1165・1170・1394では1層から下位に向かって減少するが、SK1289は2層で増加が認められる。

リン酸含量は、微高地部のIV・V・VI層は2.03～1.71P₂O₅mg/gの範囲にあり、含量はIV層からVI層へ減少するが、V・VI層はほぼ程度である。土坑試料では、SK1165は2.37～1.54P₂O₅mg/g、SK1170は2.29～2.08P₂O₅mg/g、SK1289は3.16～2.44P₂O₅mg/g、SK1394は2.28～1.89P₂O₅mg/gの範囲にあり、比較対照試料とした微高地部のIV・V・VI層の含量より概して高い。含量変化の特徴をみると、SK1165・1170・1394ではおむね1層下位に向かって減少するが、SK1289の2・3層では増加が認められる。

カルシウム含量は、微高地部のIV・V・VI層で4.49～3.51CaOmg/gの範囲にあり、含量はリン酸

試料名	試料の質	補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 (yrBP)	測定機関 code.
SK1176 土器 土器付着炭化物	土器付着炭化物	2,350 ± 30	-24.93 ± 0.63	2,330 ± 30	IAAA-S2442

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,566年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として算出であることを示す。

3) 記した値とは、測定誤差（測定値の68%が入る範囲）を年代値に表示した値

第9表 放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代 (yrBP)	層年較正年代 (cal)					相対比	測定機関 Code.
		σ	cal BC 405	- cal BC 384	cal BP 2,355	- 2,334		
SK1176 土器 土器付着炭化物	2,327 ± 31	cal BC 506	- cal BC 457	cal BP 2,456	- 2,407	0.054	IAAA-S2442	IAAA-S2442
		cal BC 455	- cal BC 439	cal BP 2,405	- 2,389	0.015		
		cal BC 419	- cal BC 358	cal BP 2,369	- 2,308	0.898		
		cal BC 288	- cal BC 258	cal BP 2,230	- 2,208	0.031		
		cal BC 242	- cal BC 239	cal BP 2,192	- 2,189	0.002		

1) RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Straker and PJ Reimer) を使用。

2) 評価には直近に示した丸める法を使用している。

3) 燃料校正曲線や年代算出プログラムが存在しない他の算出方法を比較がいいやすいように、1桁目を丸めていよいよ。

4) 絶対的に正しい年代入力と計算結果との誤差は±5%である。

5) 相対比: σ 、 $\pm \sigma$ のそれぞれを±とした場合、標準的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第10表 層年較正結果

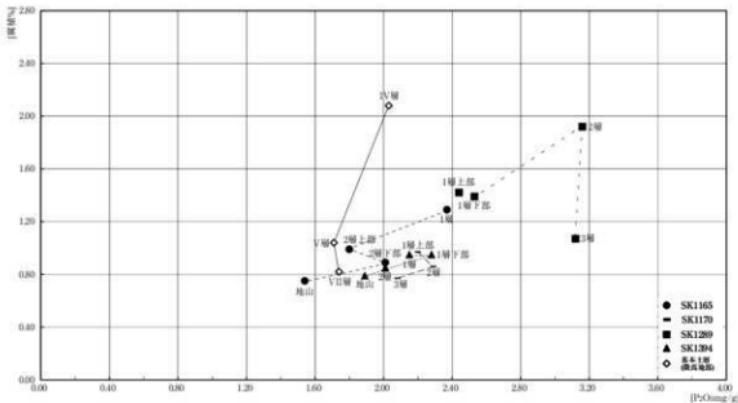
試料	土性	土色	腐植含量 (%)	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO (mg/g)
土壤名					
SK1165	1層 上部	LIC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	1.29	2.37	3.85
	2層 上部	LIC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.99	1.80	2.33
	2層 下部	LIC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.89	2.01	3.20
SK1170	地山	HC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.75	1.64	3.27
	1層	HC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.97	2.20	3.85
	2層	HC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.86	2.29	3.35
SK1289	3層	HC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.77	2.08	3.34
	1層 上部	LIC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	1.42	2.44	3.79
	1層 下部	LIC: 2.5Y4/4 オリーブ褐色	1.39	2.53	3.57
SK1394	2層	HC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	1.93	3.16	3.94
	3層	HC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	1.07	3.12	4.07
	1層 上部	LIC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.95	2.15	3.51
微高地部	1層 下部	LIC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.95	2.28	3.28
	SIC:	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.85	2.01	3.13
	地山	LIC: 2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.79	1.89	3.02
IV層					
微高地部	IV層	HC: 2.5Y2/3 暗オリーブ褐色	2.08	2.03	4.49
	V層	HC: 2.5Y4/4 オリーブ褐色	1.04	1.71	3.51
	VI層	HC: 2.5Y4/4 オリーブ褐色	0.82	1.74	3.81

1) 土色: マンセル色系に準じた新版標準土色版(農林省森林資源技術会議会編、1967)による。

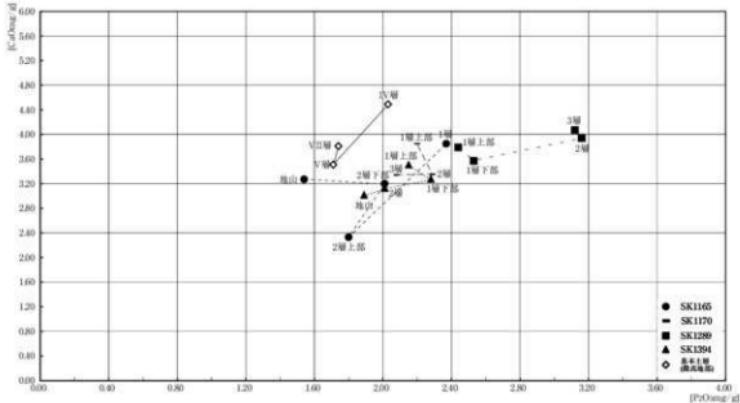
2) 土性: 上部濃青ハンドブック(ハドジット選定会編、1964)の野外地名による。

SIC: シルト質粘土(粘土25～40%、シルト45～75%、砂7～20%)、LIC: 粘土土(粘土25～45%、シルト9～45%、砂10～55%)、HC: 砂粘土(粘土45～100%、砂10～55%、砂0～5%)

第11表 土壤理化学分析結果



第16図 リン酸・腐植含量分布図



第17図 リン酸・カルシウム含量分布図

含量と同様にIV層からVI層へ減少する。土坑試料では、SK1165は3.85～2.33CaOmg/g、SK1170は3.85～3.34CaOmg/g、SK1289は4.07～3.57CaOmg/g、SK1394は3.51～3.02CaOmg/gの範囲にあり、微高地部のIV・V・VI層の含量幅がある。含量変化の特徴を見ると、SK1170・1394はおむね1層から下位に向かって含量が減少する。一方、SK1165では、1層が最も高い含量であるが、2層・地山でも高い含量が認められる。SK1289は、リン酸含量と同様に2・3層で増加が認められる。

D 考 察

1) SE1260

古代～中世の井戸とされるSE1260は、このほかに検出された大型の井戸と覆土の特徴が異なることから、井戸以外の性格が推定された。本分析ではトイレ造構の可能性を検討するため寄生虫卵分析を実施

したが、寄生虫卵は1個体も検出されなかった。

寄生虫は、それに感染した中間宿主、あるいは寄生虫卵に汚染されたものなどを摂取することで、終宿主（ヒト）に感染する。寄生虫卵は普通の土壤中にも含まれるが、糞便などの堆積物で多産する調査事例も報告されている（例えば〔金原・金原 1992, 1993〕、〔金原ほか 1995〕など）。今回分析対象としたSE1260 覆土3層の産状をみる限り、トイレ遺構としての利用を支持することはできない。

2) 土 坑

土壤に供給された動植物遺体は、土壤動物や土壤微生物によって分解されるが、その分解過程で一部の低分子有機化合物が生成され、これが重結合して暗色無定形の高分子化合物となる。これがいわゆる腐植（腐植物質）である。腐植の集積量は、富加された有機物量（動植物遺体量）と腐植の分解量に左右されるが、その天然賦存量（自然含有量）は、主に気候、植生、母材（砂・シルト・粘土の鉱物など）、地形等の土壤生成因子によって規制される有機物の動態に対応し、定常状態を示す。したがって、天然賦存量範囲は、生成された土壤の種類で大きく異なり、水田耕作土層で0.9～3.6%、黒ボク土壤A層（表層）で3～26%、褐色森林土A層（表層）で1～19%、泥炭土壤の低位泥炭で22～56%、高位泥炭で46～55%が通常範囲とされる〔久馬ほか 1993〕。なお、自然土壤の腐植集積は、土壤表層の粘土画分にあることから、通常は表層で最も高く、下層になるにしたがい低くなるが、耕作が頻繁に行われた土壤では腐植の分解のみが進行するため、表層の腐植含量は減少する。

これを踏まえて今回の分析結果を見ると、比較対照とした微高地部の基本土層IV・V・VI層は、下位に向かって腐植含量が減少し、自然土壤の腐植集積パターンと調和的である。また、土坑試料においても、SK1165・1170・1394の含量変化はそれに類似し、含量幅は微高地部のV・VI層に近似する（第16図）。土性や土色もこれに類似することから、SK1165・1170・1394はV層やVI層が埋積した可能性が高く、土坑試料の地山はVI層土壤に類することがうかがわれる。一方、SK1289の含量変化は、上記した3基の土坑とは異なり、2層で高い含量を示した（第16図）。これは自然土壤の腐植集積パターンとして解釈しにくい含量変化であり、動・植物遺体富加による含量増加が示唆される。

次にリン酸及びカルシウムについて考察する。リン酸、カルシウムの含量は、遺体等の痕跡を判断できる点で重要とされる。リン酸の天然賦存量については、いくつかの報告事例があり（〔Bowen 1983〕、〔Bolt・Bruggenwert 1980〕、〔川崎ほか 1991〕、〔田野ほか 1991〕）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P₂O₅mg/g程度と推定される。一方、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P₂O₅mg/g〔川崎ほか 1991〕という報告例があるほか、遺構等を対象とした調査事例では、骨片等の痕跡が認められる土壤では6.0P₂O₅mg/gを超える場合が多い。また、カルシウムの天然賦存量は、普通1～50CaOmg/g〔藤賀 1979〕とされ、リン酸よりも含量幅が大きい。また、土壤中を比較的移動しやすく、下層方向に拡散する成分である。なお、遺体等が土壤中に分解した直後は、リン酸、カルシウム含量は当然多いが、その成分は時間経過とともに徐々に系外へと広がる（特にカルシウムでは顕著）という特性があるため、天然賦存量内に収まってしまうケースも考えられる。そのため、リン酸・カルシウム含量による遺体等の痕跡を検討する場合、天然賦存量との比較による評価のほか、遺構覆土と同質、かつ人为的影響が低いとされる基本土層との比較や、同一遺構内覆土における含量変化による評価が必要となる。

今回の分析では、これらの土坑が検出された地点付近の基本土層（微高地部）のIV・V・VI層と、SK1165・1394の土坑底面を構成する堆積物（地山）を比較対照試料とし、土坑覆土を発掘調査時の土

層区分に基づき調査を行った。その結果、リン酸・カルシウム含量とともに天然賦存量の上限値を明らかに越える試料は認められなかつた。また、基本土層におけるリン酸・カルシウム含量のうち、土色・土性から埋積物の母材となつたと見られるV・VI層の含量幅との比較においても、SK1165・1170・1394は同程度あるいは、それより低い含量を示す(第17図)。これらの産状から、遺体の痕跡を示唆するリン酸・カルシウム(骨の主成分)の富加を支持することはできない。

一方、SK1289では、2層においてV・VI層の腐植・リン酸含量に比べ高く、カルシウム含量は1層に対して2・3層で高い含量を示した。SK1289覆土2層は、試料採取時の所見や上記した微細物分析結果から木本類に由来する炭化物が混じる状況が確認されており、腐植・リン酸含量はこれらの影響を受けていることが推定される。3層では、腐植含量が低く、カルシウム含量が高いという特徴も見出されるが、基本土層V・VI層やSK1289覆土2層のカルシウム含量との比較では明瞭な有意差を認められず、遺体等の痕跡の存在を支持するに至らない。

4 黒曜石産地分析

遺跡から出土した黒曜石製石器、石片は風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。黒曜石製の石器で、水和層の影響を考慮するとすれば、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられる。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行った場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。ほかの元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。また、安山岩製の遺物は、白っぽく表面が風化しているために、アルミニナ粉末を風化面に吹き付け、新鮮面を出して分析している。今回分析した山口遺跡出土黒曜石製造物の分析結果を第13表に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えると、第13表の試料番号102559番の遺物ではRb/Zrの値は1.725で、板山群の〔平均値〕±〔標準偏差値〕は、 1.772 ± 0.098 である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると、この遺物は原石群から 0.48σ 離れている。ところで板山原産地から100個の原石を探ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.48\sigma$ のずれより大きいものが63個ある。すなわち、この遺物が、板山群の原石から作られていたと仮定しても、 0.48σ 以上離れる確率は63%であると言える。だから、板山群の平均値から 0.48σ しか離れていないときには、この遺物が板山群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を霧ヶ峰群に比較すると、霧ヶ峰群の〔平均値〕±〔標準偏差値〕は、 1.052 ± 0.051 であるので遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると、この遺物は原石群から 13σ である。これを確率の言葉で表現すると、霧ヶ峰群の原石を探ってきて分析したとき、平均値から 13σ 以上離れている確率は、一兆分の一であると言える。このように、一兆個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、霧ヶ峰群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は板山群に63%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから板山原産石が使用されていると同定され、さらに霧ヶ峰群に百億分の一%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%に満たないことから霧ヶ峰群の原石でないと同定される」。遺物が一

か所の産地（板山産地）と一致したからと言って、例え板山群と霧ヶ峰群の原石は成分が異なっていても、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形（非破壊分析）であることから、ほかの産地に一致しないとは言えない。同種岩石の中での分類である以上、ほかの産地にも一致する可能性は推測される。すなわち、ある産地（板山産地）に一致し、必要条件を満足したと言っても、一致した産地の原石は限らないので、帰属確率による判断を305個すべての原石群について行い十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群の原石は使用していないとして消していくことで、はじめて板山産地の石材のみが使用されていると判定される。九州産黒曜石原石の十分条件がないと、板山産原石の可能性はあるが、九州産原石の可能性も否定できないと言う結果になる。実際はRb/Zrといった唯1つの変量だけではなく、前述した8つの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えば、A原産地のA群でCa元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相間を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングのT₂乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する〔東村1976・1980〕。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製では305個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については、低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち板山産原石と判定された遺物に対して、カムチャッカ産原石とかロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石及び九州産、信州和田岬産の原石の可能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を第14表に記入した。原石群を作った原石試料は直径2cm以上で精度良く分析される。遺物は、大きさ、形がさまざま、これらの影響により分析値が少しは変化していることを推測し、判定の信頼限界を0.1%に設定した。今回分析した山口遺跡出土の黒曜石製石器及び剥片5個

原産地 原石群名	元 素 比							分析 回数
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	
宮城・瀬ノ倉 1.174 ± 0.0680, 0.359 ± 0.017, 0.057 ± 0.005, 2.544 ± 0.149, 0.116 ± 0.090, 0.598 ± 0.028, 0.138 ± 0.015, 0.020 ± 0.013, 0.073 ± 0.003, 0.956 ± 0.040								21
新潟・板山 0.232 ± 0.011, 0.068 ± 0.003, 0.169 ± 0.017, 1.178 ± 0.110, 1.772 ± 0.098, 0.772 ± 0.046, 0.374 ± 0.047, 0.154 ± 0.04, 0.027 ± 0.002, 0.359 ± 0.009								44

第12表 濑ノ倉・板山の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差差

分析 番号	元 素 比							Al/K	Si/K
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr		
102558	2.159	0.365	0.058	2.518	0.105	0.649	0.147	0.023	0.076
102559	0.229	0.066	0.169	2.179	1.725	0.691	0.338	0.158	0.027
102560	0.228	0.065	0.174	2.269	1.823	0.825	0.383	0.134	0.027
102561	0.228	0.065	0.171	2.260	1.797	0.770	0.370	0.154	0.027
102562	0.233	0.065	0.175	2.265	1.790	0.775	0.388	0.122	0.028
JG-1	0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031

JG-1: 標準試料 Ando & Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

第13表 山口遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果

分析 番号	番号	種類	取上番号	種類	ホテリングのT ₂ 検定結果	判定
102558	1	6FB グリッド	V瓶	3269	石器 瀬ノ倉(94%)	瀬ノ倉
102559	2	9E7 グリッド	V瓶		石器 板山(80%)	板山
102560	3	9E22 グリッド	V瓶		石器 板山(94%)	板山
102561	4	8FB グリッド	V瓶		剥片 板山(85%)	板山
102562	5	8FB グリッド	2瓶	SK1165 S-11	剥片 板山(82%)	板山

第14表 山口遺跡出土黒曜石製遺物の検定結果

は信頼限界の0.1%を越えて原石産地が同定された。各産地の原石使用頻度が高い産地と活発な交流があつたと推測すると、板山産が80%（4個）で、湯ノ倉産が20%（1個）で、地元の板山産原石が多用されていことから、地元産地と活発な交易・交流があったと推測される。これにより、湯ノ倉産原石の使用で、原石の伝播に伴って湯ノ倉産地地区の生活、文化情報を受け取り、また、逆に山口遺跡の生活、文化情報を伝えた可能性を推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

第VI章引用・参考文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信 1991 「中部日本以北の土壤型別蓄積リソースの形態別計量」『農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リソースの再生循環利用技術の開発』
- 安藤一男 1990 「淡水珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42
- 石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解説への応用」『珪藻学会誌』6
- 伊藤良永 2007 「珪藻分析の歩みと動向」『PALYNO No.5』パリノ・サーヴェイ株式会社出版刊行会
- 川崎 弘・吉田 隆・井上恒久 1991 「九州地域の土壤型別蓄積リソースの形態別計量」『農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リソースの再生循環利用技術の開発』
- 金原正明・金原正子 1992 「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構—右京七条一坊西北坪—』奈良国立文化財研究所
- 金原正明・金原正子 1993 「史跡松江城二ノ丸番所跡 SK-04 内堆積土の分析」『史跡松江城発掘調査報告書』松江市教育委員会
- 金原正明・金原正子・中村亮仁 1995 「大宮坊跡（廃跡）における自然科学的分析」『史跡石動山環境整備事業報告 II』石川県鹿島町教育委員会
- 久馬一剛・佐久間敏雄・庄司真雄・鈴木 晃・服部 勉・三土正明・和田光史編 1993 『土壤の事典』朝倉書店
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五 2006 『小林弘珪藻図鑑』第1巻 (株)内田老舗園
- 近藤錦三 2004 「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48
- 徳永重元・山内輝子 1971 「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社
- 土壤標準分析・測定法委員会編 1986 『土壤標準分析・測定法』博友社
- 土壤養分測定法委員会編 1981 『土壤養分分析法』養賢堂
- 藤賀 正 1979 「カルシウム」『地質調査所化学分析法』52
- 中村 純 1967 「花粉分析」古今書院
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』東北大学出版社
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 『新版標準土色帖』
- 原口和夫・三友清史・小林 弘 1998 「埼玉の藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会
- 原口和夫 2000 「昔生沼の珪藻類」『珪藻学会誌』16
- 東村武信 1976 「産地推定における統計的手法」『考古学と自然科学』9
- 東村武信 1980 『考古学と物理化学』学生社
- ペドロジスト懇談会 1984 「野外土性の判定」『ペドロジスト懇談会編 土壤調査ハンドブック』博友社
- 堀内誠示・高橋 敏・橋本真紀夫 1996 「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について—混合群集の認定と堆積環境の解説—」『日本文化財学会 第13回大会研究発表要旨集』日本文化財学会
- 三宅 尚・中越信和 1998 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6
- 柳沢幸夫 2000 「II-1-3-2-(5) 計数・同定」『化石の研究法—採集から最新の解析法まで—』化石研究会・共立出版株式会社
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子 2005 『淡水珪藻生態図鑑』内田老舗園
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 「Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological

- Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa
『Diatom』 10
- Bowen,H.J.M. 1983 『環境無機化学・元素の循環と生化学・浅見輝男・茅野充男訳』博友社
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M 1980 『土壤の化学・岩田進平・三輪容太郎・井上隆弘・鷹 捷行訳』学会出版センター
- Krammer, K. 1992 「PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa」『BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA』BAND26 J.CRAMER
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986 「Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae」『In: Suesswasserflora von Mitteleuropa』Band2/1 Gustav Fischer Verlag
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988 「Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,Suriellaceae」『In: Suesswasserflora von Mitteleuropa』Band2/2 Gustav Fischer Verlag
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a 「Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaeae,Eunotiaceae」『In: Suesswasserflora von Mitteleuropa』Band2/3 Gustav Fischer Verlag
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b 「Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema」『In: Suesswasserflora von Mitteleuropa』Band2/4 Gustav Fischer Verlag
- Vos, P.C. & H. de Wolf 1993 「Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects」『Hydrobiologica』 269/270
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990 「The diatoms」『Biology & morphology of the genera』 Cambridge University Press, Cambridge.
- Lowe, R.L 1974 Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p.
In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- Witkowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. 2000 「Iconographia Diatomologica 7」『Diatom flora of Marine coast I』 A.R.G.Gantner Verlag K.G.

第VII章 まとめ

1 弥生時代

A 弥生土器

1) 器種組成

今回の調査では弥生時代前期～中期前半、中期後半の土器が出土した。ここでは、存続時期が重なり合う猫山遺跡【古澤2003a】との器種組成¹⁾の比較を通して、本遺跡出土土器の検討を行う。

猫山遺跡の出土土器は、地区ごとで時期差があるものの、おおむね弥生前期～中期前半の所産と考えられている。比較は報告資料に基づき、器種ごとに行った（第15表）。なお、比較については出土量の差、掲載土器抽出の方法・視点の違いは考慮していない。また、両遺跡とも報告資料を用いた操作であるため厳密な個体数を示していないことも明示しておく。

以下、器種ごとに両遺跡の様相を概観する。

縦形土器

器種組成の比率は両遺跡ともにほぼ同じ数値を示し、縦立C4・D1・D2類の小型壺が多い。縦立遺跡の報告では縦立C類からE類へ、口縁部が変化することが指摘されており【渡邊1998b】、後続の縦立E類も両遺跡で認められる。このほか、猫山遺跡では縦立A類やB類が、山口遺跡では縦立F1・H類がある。

深鉢形土器

器種組成の比率は猫山遺跡の16%（24点）に対し、本遺跡は24%（34点）と高い比率を示す。なお、壺と深鉢を合わせた煮炊具（煮沸具）の比率でも、猫山遺跡の47.7%に対して、本遺跡は53.5%とわずかに上回っている。この煮炊具の比率の高さは、本遺跡の特徴のひとつにあげられる。

地文の比較では、猫山遺跡は地文が条痕文の深鉢（縦立A類）が深鉢の95.8%となり、圧倒的多数を占めるに対し、本遺跡での比率は38.2%と低い。一方、猫山遺跡では認められない地文が縄文の深鉢である縦立B類が52.9%とA類を上回っている。このように、本遺跡では縦立A類とB類の両者が認められることが猫山遺跡との違いとしてあげられる。なお、猫山遺跡については昭和43年刊行の『弥生式土器集成』をみると、掲載された深鉢2点（PL71-16・17）²⁾も地文は条痕文である【上原・磯崎1968】。ただし、平成19年度の試掘調査資料では、地文に縄文が施文され、口縁部に波状沈線文が施された深鉢2点が報告されている【古澤2008】。しかし、これを加えて考えたとしても、縦立B類が本遺跡ほどに出土している状況には至らないであろう。

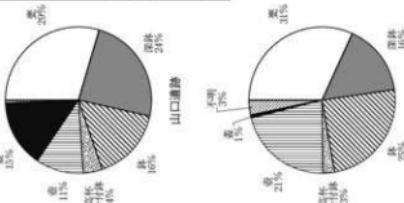
また、本遺跡の縦立A類には口縁部が明らかに内湾するもの（88）が認められる。口縁部が内湾する深鉢については、福島市孫六橋遺跡の出土遺物の検討から、福島県域では縄文晩期以来の伝統的な器形とされているものである【石川2002】。

1) 弥生時代前期から中期前半の土器の器種組成は、阿賀町下西ノ沢遺跡・人ヶ谷岩陰【阿部2006a】、村上市二又遺跡【阿部2006b】でも提示されている。

2) 16については、実測のやり直しにより資料の再提示がなされている。【古澤2003】。

部類	山口遺跡 資料点数	鍋山遺跡 資料点数		櫛谷遺跡 資料点数		鍋山遺跡 資料点数		鍋立今鋪 資料点数		鍋山遺跡 資料点数		鍋立今鋪 資料点数		鍋山遺跡 資料点数		鍋立今鋪 資料点数		鍋山遺跡 資料点数		
		櫛	鉢	櫛	鉢	櫛	鉢	櫛	鉢	櫛	鉢	櫛	鉢	櫛	鉢	櫛	鉢	櫛	鉢	
實	42	48	A	0	3	A	1	0	A	1	0	A1	0	0	A1	2	1	0	0	
深鉢	34	24	A1	0	2	A1	2	14	A1	0	0	A2	0	0	A2	1	0	0	0	
鉢	23	37	A2	0	0	A2	7	6	A2	1	4	B1	0	1	A3	1	0	0	0	
高杯 台付鉢	6	4	A3	0	1	A3	2	1	A3	0	2	B2	1	3	A4	1	0	0	0	
他	15	32	C1	1	2	B	2	0	A5	0	0	R3	0	0	B1	1	0	0	0	
柾	21	1	C2	1	2	B1	5	0	B	0	3	C2	0	1	B3	1	0	0	0	
中間	1	5	C3	0	0	B2	9	0	B1	0	3	C3	0	0	B4	1	0	0	0	
合計	142	151	C4	5	6	B3	2	0	B2	2	9	C4	0	0	B5	1	0	0	0	
				D	2	3	C	1	1	B3	0	0	C5	0	0	つまみ形	1	0	0	0
				D1	5	4	その他	2	0	C	3	6	D	0	2	つまみ形	4	0	0	0
				D2	11	19	合計	34	24	D1	1	0	E	0	0	つまみ形	1	0	0	0
				E	2	1				D2	2	0	F	1	0	つまみ形	1	0	0	0
				F1	1	0				D3	3	0	F1	0	2	つまみ形	2	0	0	0
				F2	0	0				D4	0	0	F2	0	0	その他の				
				G	1	1				E	1	2	G	0	2	つまみ形	2	0	0	0
				H	2	0				E1	0	0	H1	0	2	つまみ形	2	0	0	0
				I	0	1				E2	3	2	H2	0	2	つまみ形	2	0	0	0
				その他	11	0				E3	0	1	H3	0	2	つまみ形	2	0	0	0
				合計	42	48				その他	6	1	H4	0	0	つまみ形	2	0	0	0
				合計	23	37				合計	33	37	H5	0	0	つまみ形	2	0	0	0
												H6	0	0	つまみ形	2	0	0	0	
												I	0	0	つまみ形	2	0	0	0	
												その他	13	7	つまみ形	2	0	0	0	
												合計	15	32	つまみ形	2	0	0	0	

第15表 山口遺跡・鍋山遺跡出土土器の器種組成表



鉢形土器

器種組成の比率は猫山遺跡の 16%（37 点）に対し、本遺跡は 24%（23 点）と低い比率を示す。細片が多くの器種であるが、猫山遺跡では縦立 A 類・B 類の比較的小型の鉢が多く認められるのに対し、本遺跡では大型の鉢である縦立 D 類が認められる。縦立遺跡では D 類は二次焼成に伴うススやコケの痕跡が認められることから、煮炊きでの使用も推定される。本遺跡における煮炊具の比率の高さは先に触れたが、これに煮炊きに使用された可能性のある縦立鉢 D 類を加えると、その割合はさらに高くなる。

蓋形土器

器種組成の比率は猫山遺跡の 0.7%（1 点）に対して、本遺跡では 15%（22 点）と極めて高い比率を示す。縦立遺跡や猫山遺跡では蓋の報告例は少なく、器種組成のなかでも捉えがたい一群といえる。一方、本遺跡の出土量からは積極的な使用の状況がうかがえる。なお、猫山遺跡では『弥生式土器集成』[上原・磯崎 1968]において「壺用蓋形土器」として、つまみ部を持つ口径 26.5cm の変形工字文が施される蓋（Pl. 70 - 3 上）と、つまみ部を持たない口径 16.4cm の蓋（Pl. 70 - 5 上）の 2 点が報告されている。しかし、これを加えて考えたとしても、蓋が本遺跡ほどに出土している状況には至らないであろう。

蓋の使用状況としては、「煮炊き」と「内容物や貯蔵物の保護」を考えられ、両者の判断要素として法量や、ススやコケの付着の有無に着目した。器形から判断したものもあるが、山口遺跡の蓋の多くで炭化物の付着が認められたことから、その多くは煮炊きに用いられた可能性が高いと考えた。

壺形土器

器種組成の比率は本遺跡の 10.6%（15 点）に対し、猫山遺跡は 21.2%（32 点）と高い比率を示す。壺の割合が高くなる要因のひとつには、再葬墓（壺棺再葬墓）の存在があげられる。再葬墓の容骨器の器種組成は壺形土器が約 7 割と居住地での組成とは大差がある〔石川 1996〕とされており、猫山遺跡においても、特に調査区 2 区における壺の比率の高さから、墓域が存在する可能性が指摘されている〔古澤 2003c〕。このような視点からすると、本遺跡では土坑から再葬墓と関わる壺の出土例は認められず、器種組成における壺の割合も低いことから、再葬墓との関連性は低いといえる。ただし、ひとつ留意点もあり、34（図版 59・118）の内面には顕著な剥離痕（ハジケ）が、外面には著しい摩耗が認められる。再葬墓の容骨器には、小型土器では著しい煮沸痕、中・大型土器も口頸部欠損部の磨痕（再生）、穿孔（と結縛）や漆塗付による割れ目の補修・底部周縁部の摩滅痕などから日常容器の転用品が多いとの指摘がある〔石川 1996〕。胎内市分谷地遺跡（旧黒川村）の再葬墓から出土した壺（1 号 - 1, 3 号 - 1, 12 号 - 1）の内面には、ハジケ痕が報告されている〔伊藤 2003〕。また、新発田市村尻遺跡の再葬墓から出土した壺にも、ハジケやススの付着が報告されており〔石川 1982〕。資料の実見でも 34 と類似した剥離痕（ハジケ）を確認した。このようにハジケ痕と容骨器との相間は、周辺の遺跡においても強く認められるものである。ただし、壺に見られるそのような痕跡が、直接的に再葬墓に関わるものについてかは慎重な議論が必要である。

このように両遺跡の器種組成をみてみると、本遺跡は壺形土器の出土が少なく、再葬墓に関わる要素が希薄といえる。一方で日常生活に直接結びつくような器種組成の実態がうかがえた。

2) 編年的位置付け

ここでは、先行研究による編年案との対比により本遺跡出土資料に編年的位置付けを与えてみたい。

縦立遺跡の編年案〔渡邊 1998b〕は 1 期と 2 期に大きく分けられており、さらにこれを a ~ c 期に 3

細分することにより計 6 期が設定されている。時期は 1a 期を大洞 A'併行、1b 期を砂沢式併行、1c 期を青木烟式併行とし、2a 期と 2b 期の区分は明瞭でないしつつ 2c 期までを、福島県の西麻生式から南御山 2 式直前までとしている。ここでは、本遺跡出土資料数の不足から各期の細分は行わず、大きく『1 期』を前期、『2 期』を中期前半として捉えた。なお、2 期は細分可能なものについては渡邊裕之氏の論考〔渡邊 1999〕に基づき、「中期 1」、「中期 2」に細分した。これらの先行研究を基に本遺跡の器種（以下、「山口甕 C 類」のように表記する）の組み合わせと編年観を示したもののが第 18 図である。

前期

甕では筒形を呈する山口甕 C 類を除いたものが該当すると考えられる。66 の四字文と横位の沈線羽状文の文様構図は、晩期終末期の鳥屋 2b 式の伝統と見られる古い要素であるが、器形がやや筒形に近くなることや胴部下位の平行沈線文は弥生時代前期の特徴を示すと考えた。67 の口縁部から胴部上位の文様の分化も古い要素とみられる。この両者は、本遺跡で最も古相を示す資料に位置付けられる。

口縁が短く外反する甕（山口甕 A3 類）やその口縁がなくなる甕（山口甕 B 類）は、前期の主要器種のひとつである。法量の差で小型と中型のものがある。無地文に文様帶が描かれる 68 や 25 は、地文上施文手法で変形工字文が描かれるもの（73）や波状文が施されるもの（75）と比べ、古い要素と考えられる。それらには、文様帶や内面の調整には丁寧なミガキで整えられ、色調もやや暗味を帯びる。

口縁部に波状沈線文が施される深鉢は前期の主要器種のひとつで、中期前半まで出土すると見られる。前節でも触れたが、口縁部が内湾する深鉢（88）は、福島県域との交流を考える上で重要な器種のひとつである。これまでの深鉢の分類は、地文の種類と口縁部外面に施される文様の属性によるものであったが、今後は器形による要素も加味して検討していくかなくてはならない。また、深鉢のみの特徴で編年を考えることは難しく、有文の甕や鉢との組み合わせからの検討が必要である。

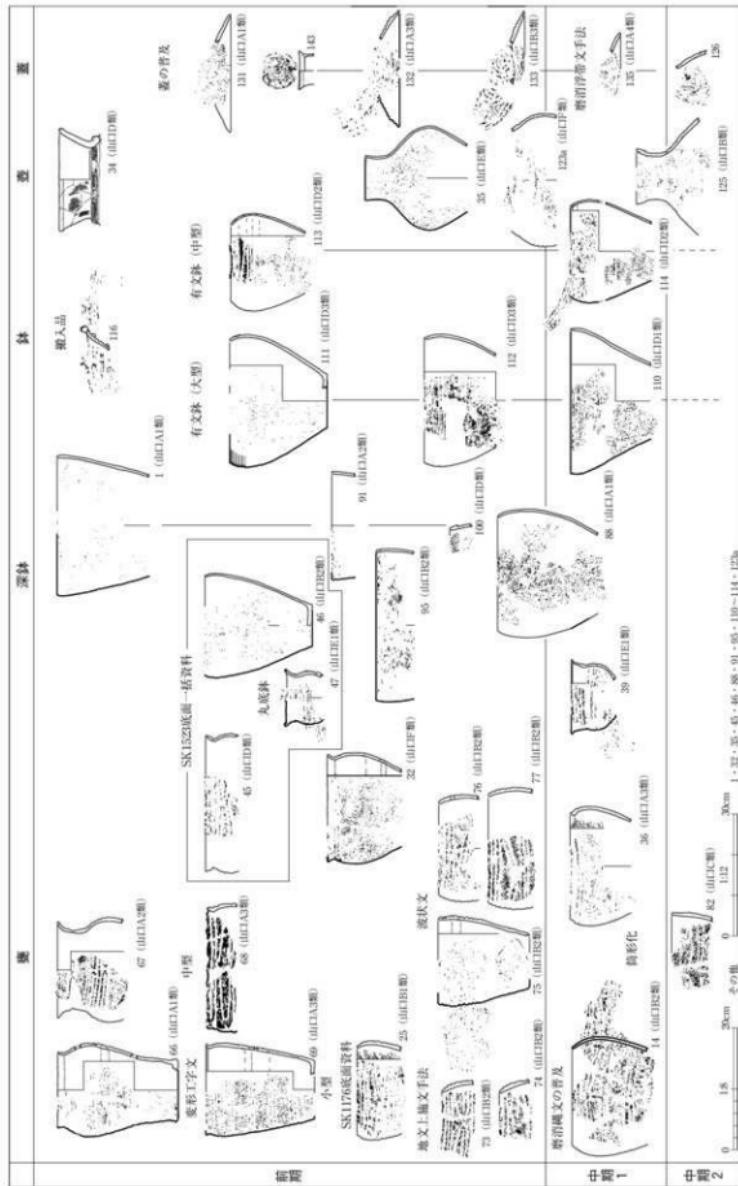
鉢を見てみると、搬入品の鉢（116）が認められる。変形工字文の重層化の特徴から前期の所産である。山口鉢 D 類は、その法量から大型の D1 類や D3 類、一回り小さい中型の D2 類がある。甕と同様に口縁部の文様帶の特徴から、無地文に四字文や変形工字文が描かれるもの（111・113）がやや古く、縄文地に変形工字文が施されるもの（112）がやや新しいとされるが、両者ともに前期の内に収まるものである。

甕の資料は少ないが、頭部に隆帯が巡るもの（34）は前期の所産である。なお、35 や 123a の甕は中期前半まで新しくなる可能性を含むものである。

前期の主体となる資料を見ると、緒立遺跡で示された編年案に沿った細分の可能性がうかがえた。今回は資料数の不足から、細分を果たせなかつたが、文様帶の手法や器形の変化及び器種組成の中での蓋の増加が細分の鍵になると考えられる。なお、緒立式については、砂沢式や生石 2 式の 2 時期区分から細分の可能性も指摘〔佐藤 2008〕されており、今後のさらなる資料の増加に期待したい。

中期

中期前半に位置付けられるものは、磨消繩文が主体となる一群で、甕では山口甕 B2 類（14）、鉢では山口鉢 D1 類（110）、山口鉢 D2 類（114）が相当するものと考えられる。磨消繩文は弥生時代中期において東日本で広く用いられている。福島県域では中期初頭の今和泉式から中頃の南御山 2 式まで用いられ、東北地方では福島県域でもっとも早く普及し、その後各地で普及したと考えられている〔石川 2005d〕。山口遺跡の資料でも、前期では変形工字文が主要な文様であるが、中期に入ると変形工字文の継承が弱くなり、三角形や棹状（工字状）モチーフの磨消繩文が多く認められるようになる。39 の丸底鉢の底部にも磨消繩文が描かれ、さらに、縦区画帯や無文帯から棘状部が付加されるのも中期前葉の特徴のひとつであ



第18図 山口通路における先土器の組合せとその編年観

る。また、猫山遺跡では認められない磨消浮帶文手法を伴う一群（135 ほか）がある。磨消浮帶文手法が用いられる資料は、弥生時代中期前半の福島市孫六橋遺跡で定量確認されており〔石川 2003〕、福島県域との関係がうかがわれる。

中期 2 の資料は少ない。筒形の山口壺 C 類（82）は山口壺 B 類が変化したものと考えられ、中期 1～2 の主要器種である。磨消縄文で棒状（工字状）が施されるが、細い沈線や文様のやや硬化気味の特徴から中期 2 と考えた。磨消縄文による錐形文も 1 点（126）認められる。錐形文を伴う土器は、上記の孫六橋遺跡でも出土しているが、宮城県や岩手県などが多く認められるモチーフで、中期前半から中頃の田中 B 式から中在家南式及び田舎館式の併行期に多いとされている〔石川 2002〕。

以上のように、猫山遺跡との比較により器種組成の差異について、緒立遺跡との比較により編年的位置付けについての検討を行った。結果、出土の主体は弥生時代前期の緒立式であること、中期前半（中期 1～2）のものは、出土量は少ないながらも磨消縄文や磨消浮帶文手法などが認められたことから、福島県域との関係がうかがえた。なお、これに後続する時期では中期後半の宇津ノ台系（144）が 1 個体のみではあるが出土している。このことから、今回の調査範囲内ではその痕跡は希薄であるが、遺跡周辺では断続的な土地利用が継続されたと考えられる。

今回の編年位置付けを与える作業を通しては、東北地方南部との文様や器種の類似性の高さを再認識した。本遺跡出土土器は、猫山遺跡や緒立遺跡などの県内の遺跡との比較だけでなく、東北地方南部の弥生土器編年を考える上でも多くの示唆を与える一群といえる。

今後の課題としては、弥生時代前期の資料が増加に呼応した緒立式の再評価の必要性があげられる。これにより緒立式の細分が果たされれば、これに後続する中期前葉の土器のさらなる理解につながるものと考えられる。

B 石器・玉について

本遺跡から出土した石器は、剥片石器では石鏃、石錐、不定形石器、両極刺離痕のある石器が、礫石器では磨製石斧、敲磨石類、石皿・砥石・台石類が出土しており、加えて異形石器としたものもある。このほか、多くの石核、剥片類に加えて原石と考えられる礫も出土しており、剥片石器製作も活発に行われていたと考えられる。

剥片石器は器種組成（異形石器、石核、剥片類を除く、以下同じ）の 66% を占めている。なかでも石鏃の出土が多く、失敗品を含む總点数は 140 点となり、全体の 26.7% となる。この石器組成における石鏃の比率は猫山遺跡とも近似（29.5%）するものである。一方、石鏃における両遺跡の相違点としては、本遺跡でのアメリカ式石鏃の欠落があげられる。4 点のアメリカ式石鏃が出土した西郷遺跡〔土橋ほか 2009〕では、その出現は中期中葉～後葉³⁾の可能性が指摘されている。これにより、本遺跡の石器組成を弥生時代前半でも、中期中葉以前に置くことも可能であろう。出土量の少ない器種のため出土の有無により断定まで至るものではないが、本遺跡出土の遺物群の時間幅や遺跡の特性を考える上では大きな示唆を与えるものと考える。

3) 西郷遺跡では縄文時代晚期～弥生時代中期後半の遺物が出土している。アメリカ式石鏃を出土するⅣ層は弥生時代前期から中期の時間幅を持つが、主体は中期中葉～後葉にあるとされている。

また、このほかの石器についても、剥片石器を主体とする石器組成などに猫山遺跡との類似性を強く感じさせるものであった。

石材選択においても、猫山遺跡と同様に流紋岩の多用が認められた。流紋岩の多用は、ひいては阿賀野市域の同時代の弥生時代前半の遺跡において普遍的に認められる。その状況は流紋岩への固執ともとれる様相を呈しており、当地域の特徴としてあげられている〔石川 2005a〕。本遺跡もその例に漏れず、周辺遺跡との強い関わりを想起させる。なお、阿賀野市域の遺跡で用いられる流紋岩の採取地点については近隣の阿賀野川流域が想定されている〔酒井 2003c〕。この在地を向いた石材選択は黒曜石の産地選択にも現れており、産地分析を行った 5 点中 4 点が新発田市板山産であることにも関連があると考えられる。

玉は縄文時代晚期の遺跡に形態が類似するものが散見され、弥生時代の玉のなかでもいわゆる「縄文系」〔木下 1996〕に大別されるものである。素材はヒスイ、蛇紋岩といった緑色を呈するものが用いられているが、軟質の緑色凝灰岩を用いるものもある。しかし、両者では材質の硬軟に大きな違いがある上、形態の類似性も弱く、有する性格の根本的な違いも想定される。また、ヒスイ・蛇紋岩（ロディン岩）は共に原石が出土しているが、未製品を含む玉製作をうかがわせる遺物や剥片類は確認できなかった。

以上のように、本遺跡の石器群は大枠では縄文時代以来の石器組成を存続させる状況が認められた。しかし一方で、石匙といった縄文時代に普遍的な器種の欠落、不定形石器における刃部の作り出しの省略及び粗雑化、形態変化の可能性を含む定形的な石皿の欠落といった変化も少なからず認められる。これは、西郷遺跡で指摘された弥生時代中期に至り起こる「縄文時代以来の石器組成や定型石器の製作工程が崩れていく」〔土橋ほか 2009〕という大きな変革の前段とも捉えられる状況と評価できるだろう。

C 総括と周辺遺跡との関連について

本遺跡は旧小里川の自然堤防状の微高地と後背地に立地しており、河川に近接した場所で営まれた遺跡と考えられる。土器は弥生時代前期から中期後半のものが出土しているが、主体は前期～中期前半にある。造構構築時期も同様に前期～中期前半に位置付けられるものが大半を占めると考えられる。

造構は、掘立柱建物、土坑、ピット、埋設土器がある。

掘立柱建物の亀甲形に柱を配置する平面形態は、古くは縄文時代後期からあり、晚期では胎内市野地遺跡〔渡邊ほか 2009〕、新発田市青田遺跡〔荒川ほか 2004〕などにその系譜を求めることができる。本遺跡でみつかった建物は、青田遺跡の形態分類では「B3」にあたり、復元では「落棟付平屋建物」が想定されている〔宮本 2002・2003〕。弥生時代のものでは長岡市尾立遺跡のほか、猫山遺跡の平成 13 年度の調査でも 3 棟が確認されており、すでにその報文中で「縄文時代終末期の文化を色濃く継承しているもの」〔古澤 2003b〕との指摘がなされている。また、その立地でも河川沿いの微高地の等高線と平行に長軸を置いて構築される点に青田遺跡との共通性を見出すことができる。

掘立柱建物の周囲に目を移すと、斜面部には造構は構築されず、遺物が廃棄される捨場として利用されている。この捨場の遺物は、建物に近接して多く出土する傾向を示し、建物との強い関連がうかがわれる。

土坑では、袋状土坑を 1 基、掘立柱建物から北東に約 7m 離れた地点で検出した。ほかの土坑と異なり単独で配置されている。また、一部の土坑が帶状に 10 基並んで配置される状況が認められた。これらの中には掘立柱建物に近接して集中的に配置される状況から猫山遺跡で確認された土坑墓群との類似性が想定された。そのため、本遺跡の調査段階においても土坑墓を意識した調査を行った。骨片の

確認や垂玉の出土が認められたものの、調査時にはその可能性を積極的に示す事象は認められなかった。加えて、土坑の覆土についても土壤理化分析を行ったが、遺体埋置の可能性は低いとの結果（第VI章3）であった。また、骨片も土坑以外のピットなどでも確認されるものがあり、包含土層中に普遍的に存在するものとも捉えられる。

このように、これらの土坑群が墓である確証を得ることはできなかった。しかし、自然科学分析では墓である可能性は低いとされたものの、それでも同形の土坑が複数並ぶ景観に変わりは無い。さらに、完形の石鎚の出土率の高さなどの特筆すべき特徴もあり、これらの土坑群の性格についてはさらなる議論の余地があると考える。

以上のような状況から、本遺跡は弥生時代前期～中期前半の集落の一端と考えられる。また、遺構の検出総数が少なく、遺構間の重複部分も少ないことから、存続期間は比較的短期間の可能性が指摘できる。

周辺の遺跡に目を向けると本遺跡の北約1.6kmに位置する猫山遺跡との類似性が強く、当地の弥生時代前半の典型的な様相を示していると評価できる。その内実は、縄文時代からの伝統を強く残し、その系譜をうかがわせる事象を多く確認した一方で、いわゆる弥生時代を特徴付ける稻作に関わる遺物や管玉等の西日本から波及したとされる文化要素については確認することができなかった。

また、当地域の弥生時代前半を考える上で、再葬墓との関連を欠くことはできない。本遺跡の位置する阿賀野市は再葬墓遺跡が集中し、3遺跡での存在が知られている。一方、弥生時代前半の集落については調査事例が少ない。そのため、再葬墓研究における検討対象が必然的に再葬墓自体に限定されてきたことが石川氏によって指摘されている〔石川2005a〕。さらに再葬墓を営んだ社会の復元のためには、わずかながらも同時代の生活痕跡を残す「遺跡を拾い上げる作業」の重要性をあげ、再葬墓造営期の遺跡を「再葬墓遺跡」「生活遺跡」「剥片剥離作業遺跡」の3つに類型化した。本遺跡は「土器組成とともに、石器類では石鎚や石錐といった狩猟具・加工具が明瞭である点や石核や剥片類が明瞭である」〔石川2005a〕ことから生活遺跡に当たるものと考えられる。このように本遺跡はこれまで確認事例が少なかった弥生時代前半の集落を調査したという点に加え、再葬墓を造営した集団の「生活遺跡」を調査し得たということでも、その意義は大きいと考える。

2 古代

古代において調査区の西半は第2面として調査した旧小里川へと下る斜面部が広がっていた。この斜面部は古代の遺物を残すものの、遺構は1基の土坑以外は小規模なピットが散見されるのみで、積極的な土地利用はされなかつたといえるだろう。必然的に遺跡の重心は斜面部から離れ、これより東に広がる高位面にあると考えられる。しかし、この高位面も今回の調査範囲の大部分が近年の耕地整理により削平されており、いわゆる生活面は捉え難い範囲が大部分であった。

ピットを除く遺構は第1面の東側ではSB1282・1324の2棟の掘立柱建物が確認されたが、時期は不明で古代と断定できるものではない。明確に古代に限定できるものとしては、土坑8基のほかではらかの焼成遺構の可能性があるSX1178や不整形の掘形を持つSX1624がある。しかし、明確に古代とできる建物は確認することができず、その様相は明確にし難い。遺構の数そのものが少ないとついては、近代の耕地整理時の消失という要因も考慮されなければならない。しかし、これを差し引いたとして

も遺跡内における主要な居住域を外れている可能性が指摘されよう。これは試掘時に検出された古代の遺物の出土のピークが、今回の調査範囲のさらに東側にあること〔加藤2008〕からも類推されるものである。

このように、今回の調査範囲における古代の様相はその全体像は明らかにし難いものの、斜面とこれに隣接した集落の外縁部である可能性が高いと考える。その実態の把握については、中世の溝から出土した石跨（巡方）の在り方と共に、今後の調査の東進により大きく集落という枠組みのなかでなされていくものと考える。

3 中世

中世に至り、古代に存在した調査区西半の斜面（第2面）は洪水によると考えられる堆積層（Ⅲb層）により埋没し、比較的平坦な地形に変わったと考えられる。この平坦地を活用することで、中世における活動領域は第1面全域へと拡大する。しかし、その痕跡は古代同様、近年の耕地整理による削平を受け、いわゆる生活面としては捉え難い範囲が大部分であった。

出土土器は貿易陶磁器では13世紀前後～前半のものが出土しているが、これと共に出土する珠洲焼の多くが13世紀後半から14世紀前半（珠洲Ⅲ～Ⅳ期）のものであることから、本遺跡の主体時期もここに置くことができると言える。しかし唯一、SD43については青磁碗とともにⅡ期と考えられる珠洲焼の擂鉢が出土しており、周囲の遺構よりもわずかに古く、13世紀前半の遺構となる。なお、珠洲焼については遺構外からⅠ期のもの（58）が出土していることから、調査区内を含む本調査区周辺にも12世紀後半にまで遡る生活痕跡を残している可能性がある。

遺構は第1面に広く展開するピットと点在する井戸や溝の状況から、これらが規則性を持って配置された居住域であったと考えられる。

掘立柱建物は3棟抽出した。しかし、広範間に及ぶ削平の状況を考えると、失われた柱穴も多数あることは想像に難くない。そのため今回の報告における掘立柱建物は、その存在を明示することに主眼があり、提示したプランが当時の建物を正確に復元し得るという確証を欠いていることを明示しておく。そのため、報告したもの以外に掘立柱建物や杭列など多数の遺構が存在したことは確実といえる。そのため、本調査区の中世の様相を明確にはし難いが、出土遺物の時間幅に加え、近接して構築される井戸（SE4とSE995、SE1173とSE1175）が作り替えによる結果と仮定すれば、一定以上の期間に渡って営まれた集落の居住域であったとしておくことには無理は無いようと思われる。

溝は、東西方向に構築される一群と北東～南西方向に構築される一群の2つに大別される。また、溝からは遺物の大半が出土しており、溝に関連した遺物の遺構間接合もSE4とSD583による珠洲焼擂鉢（1）、SD43とSD795による青磁碗（34）、同じくSD43とSX56による中世土師器（35）の3例を確認できた。このうちSD43は長方形に巡る溝であるが、接合関係が認められたSX56とは連續性のある位置関係にあり、遺構間接合の事実はその関連性をより強く示唆するものといえる。

このほかの遺構で特筆すべきものとしては焼骨片を伴う遺構の存在があげられる。6D・7Eグリッドで確認したSX144・153・154の3基からは、焼骨片と共に多量の炭化物も出土している。掘形の平面形は橢円形で土坑状のもの（SX144・153）のと溝状の張り出し部が突出するもの（SX154）がある。いずれも検出面からの深さは5～6cmと浅いが、これは遺構の検出面が現在の耕作土の直下であったことから削平により失われた結果と考えられる。ここでは、構築当時の姿を保っていないことに加え、地山への明

確な焼土の形成が認められないため断定にまでは至らなかったものの、これらには火葬土坑の可能性が想起される。県内では中世の火葬土坑の検出例は多くは無いが、特に張り出し部を有するものについては、東国に分布の中心があることが指摘されているものである〔栗瀬2009〕。しかし、今回確認した3基についてはいずれも時期を明確にする遺物を出土していない。このことから、構築時期は近世以降である可能性も否定できず、時期の決定には慎重にならなければならない。そのため今回検出した3基については、中世の火葬土坑である可能性を指摘するに留め、県内における類例の増加を待つものとしたい。

このように、今回の調査範囲における中世の様相は、掘立柱建物、井戸、溝が配置される居住域であったと考えられる。また、その一部では耕作痕の可能性のある歓間状造構や水田としての機能も想定〔高橋ほか2006〕されている凹地造構及び炭窯も配置される。これらからは生産域としての性格を読み取ることもでき、居住城に隣接して多用な生業活動が営まれた場所とも位置付けられる。さらには、これらの造構群との並存については明確にできないが、火葬土坑の可能性を持つ造構が存在しており、これが中世のものであるならば、集落の性格、土地利用の在り方やその変遷過程についてもさらなる幅を与えるものとなる。さらなる検討は古代同様、今後の調査の継続とそれによる成果の蓄積を受け、再度行うものとしたい。

要 約

- 1 山口遺跡は、新潟県阿賀野市山口字城ヶ庄3079番地ほかに所在する。遺跡は阿賀野川右岸の沖積地に立地し、標高は約6mを測る。
- 2 調査は一般国道49号阿賀野バイパスの建設に伴い、平成20年4月15日から12月1日まで実施した。調査面積は8,850m²である。
- 3 遺跡の西側には旧小里川が北流している。本調査区は旧小里川の沖積作用によって形成された斜面及び微高地、後背地に立地していると考えられる。この沖積作用によって地形は各時代ごとに異なり、遺跡の形成に大きく影響している。なお、自然科学分析の結果から、古代においてはタケア科やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ科等が生育した環境が推定されている。
- 4 第1面では調査区全域にて、古代及び中世に属する掘立柱建物3棟、井戸15基、土坑48基、竪穴状遺構1基、溝45条、炭窯1基、焼土遺構2基、畝間状遺構1群16条、凹地遺構1群14基、性格不明遺構22基、ビット1,167基を検出した。
- 5 第2面では調査区中央部から西側の斜面部にて、古代に属する土坑1基、ビット153基を検出した。
- 6 第3面では調査区中央部にて、弥生時代に属する掘立柱建物1棟、土坑19基、建物を構成するもの以外のビット15基、埋設土器1基を検出し、県内でも調査例の少ない弥生時代前期～中期前半の集落の調査となつた。
- 7 古代・中世の遺物は、土器・陶磁器を主体に石器、石製品（古代の石鉈（遙方）1点を含む）、鐵製品、銅製品、鐵生産関連遺物、木製品などが出土した。
- 8 中世の土器は貿易陶磁器である青磁・白磁、国内産陶磁器である珠洲焼、瀬戸・美濃焼、これに在地産の中世土器を加えて構成されている。出土量の大半を占める珠洲焼はⅠ期からⅤ期と考えられるものが出土しているが、主体はⅢ・Ⅳ期（13世紀第3四半期～14世紀第3四半期）にある。青磁は龍泉窯系の椀に限られ、時期は13世紀前後～前半となる。このほかの土器の年代観を合わせて考えても中世遺物の主体時期は、13世紀から14世紀に置くことができる。
- 9 古代の土器は須恵器と土師器が出土した。須恵器はⅣ～Ⅴ期（8世紀後葉～9世紀中葉）のものが出土し、產地では阿賀北産と小泊産の混在と、これ以外の可能性を残すものがわずかに混じる様相が読み取れた。
- 10 弥生時代の遺物は、弥生土器・土製品・石器・玉類・搬入器などが出土地した。
- 11 弥生土器は弥生時代前期～中期前半のものが主体となって出土し、これ以外ではわずかに中期後半のものが出土する。
- 12 石器は、剥片類を除き680点出土した。剥片石器は石鎌、石錐、不定形石器、両極利離痕のある石器が出土した。砾石器は磨製石斧、敲磨石類、石皿・砥石・台石類が出土した。その器種組成・石材組成については、本遺跡の北1.6kmに位置する猫山遺跡との強い類似性が指摘できる。また、石器製作も石核、剥片類、原石の出土から活発に行われていたと考えられる。
- 13 弥生時代の様相については、縄文時代からの伝統を強く残し、その系譜をうかがわせる事象を多く確認した一方で、いわゆる弥生時代を特徴付ける稻作に関わる遺物や管玉等の西日本から波及したとされる文化要素については確認することができなかった。

引用・参考文献

- 相沢 央 2004 「古代 第四章 蝦夷「征討」と竜久遺跡」『笛神村史』通史編 新潟県笛神村
- 阿部朝庵 2000 「先史時代人の失敗と練習」『考古学雑誌』第 86 卷第 1 号 日本考古学会
- 阿部泰之 2006a 「下西ノ沢遺跡・人ヶ谷岩陰」『東蒲原郡史』資料編 1 原始 東蒲原郡史編さん委員会
- 阿部泰之 2006b 「新潟県朝日村二又遺跡出土弥生土器の再検討(2)」『三面川流域の考古学』第 5 号 奥三面を考える会
- 荒川隆史 1999 「第 2 章 縄文時代 第 2 章 縄文土器 第 6 項 晩期 2 年編と地域性 後葉」『新潟県の考古学』 新潟県考古学協会編 高志書院
- 荒川隆史^{著者} 2004 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集 青田遺跡」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史^{著者} 2006 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第 153 集 大坪遺跡」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2007 「阿賀北・大坪遺跡—中世初期の居館跡—」『御館の時代—十二世紀の越後・会津・奥羽—』 柳原敏昭・飯村均編 古志書院
- 荒木繁雄 1970 「別篇 1. 水原郷の地形・地質について」『新潟県文化財調査年報第十 水原郷』 新潟県教育委員会
- アラタンホヤガ 2008 「新潟県阿賀野市大曲遺跡出土の土器について」『三面川流域の考古学』第 6 号 奥三面を考える会
- 石川日出志 1982 「V 考察 5. 村尻遺跡における弥生時代の墓群」『村尻遺跡 I』 新潟県新発田市教育委員会
- 石川日出志 1989 「(速報) 新潟県安田町・大曲遺跡弥生時代再葬墓群の発掘調査」『北越考古学』第 2 号 北越考古学研究会
- 石川日出志 1992 「V まとめ 3. まとめ」『六野瀬遺跡 1990 年調査報告書 立川ブラインド工業株式会社東日本工場増設に伴う新潟県北蒲原郡安田町六野瀬遺跡発掘調査報告書』 新潟県安田町教育委員会
- 石川日出志 1996 「9 墓地 10. 再葬墓」『弥生文化の研究』第 8 卷 祭と墓とまい 金閥惣・佐原真編 雄山閣
- 石川日出志 1999 「第Ⅲ章 弥生文化の東へ西へ—この世とあの世— 第 4 節 あの世の東と西 4 東日本弥生墓制の特質」『新弥生紀行—北の森から南の海へ—』 朝日新聞社
- 石川日出志 2000 「南御山 2 式土器の成立と小松式土器との接觸」『北越考古学』第 11 号 北越考古学研究会
- 石川日出志 2002 「福島市孫六遺跡出土弥生土器の再検討」『福島考古』第 44 号 福島県考古学会
- 石川日出志 2003 「関東・東北地方の土器」『考古資料大観』第 1 卷 小学館
- 石川日出志 2005a 「弥生時代再葬墓に近接する生活遺跡の試掘調査—新潟県阿賀野市山ノ下遺跡—」『考古学集刊』特別号 明治大学文学部考古学研究室
- 石川日出志 2005b 「第 2 部 資料編—再実測・拓本作成資料集成 1. 資料編実測図作成上の留意点」『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年(課題番号 14310189) 平成 14 年度～平成 15 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書』 明治大学文学部考古学研究室
- 石川日出志 2005c 「縄文晩期の彫刻手法から弥生土器の磨耗痕文へ」『地域と文化の研究 1』 明治大学文学部考古学研究室
- 伊東 崇 2003 「第 V 章 弥生時代(Ⅰ～Ⅴ 区) 1. II 区の造構と遺物」「分谷地 A 遺跡 I」上段(Ⅰ～Ⅳ 区)編 弥生時代再葬墓 新潟県黒川村教育委員会
- 上原甲子郎 1959 「新潟県笛山遺跡調査の概報」『日本考古学会会報第 24 回総会 研究発表要旨』 日本考古学会
- 上原甲子郎・磯崎正彦 1968 「北陸地方 II」『弥生土器集成本編 2』 小林行雄・杉原莊介編 東京堂出版発行
- 荻野正博 1986 「第 6 章 番号と武士 第 2 節 番号と国柄領」『新潟県史』通史編 1 原始・古代 新潟県
- 小田由美子 1999 「第 5 章 中世・近世 第 2 節 五頭山麓古窯跡群」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会 高志書院
- 小田由美子 2001 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第 99 集 福越館跡」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 春日真実 1999 「第4章古代 第2節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会 高志書院
- 春日真実 2004 「資料編 第II章沼垂郡(34) 五輪敷沢窯跡」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 春日真実 2006 「第二編歴史考古学 第3章古代越後の集団と地域」『日本海域歴史体系』第二巻古代篇II 熊田亮介・坂井秀弥編 青文堂出版株式会社
- 加藤 学 2008 「II 発掘調査受託事業の概要 4 試掘・確認調査 阿賀野バイパス17工区試掘調査」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成19年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川上真雄 1991 『笛神村文化財調査報告書8 発久遺跡』 新潟県笛神村教育委員会
- 川上真雄 1999 『笛神村文化財調査報告書9 前田遺跡・志本杉遺跡』 新潟県笛神村教育委員会
- 北野博司 1994 『総論』『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
- 京ヶ瀬村 1969 『村誌』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 木下尚子 1996 「11 装身具 3. 重飾」『弥生文化の研究』第8巻 祭と墓と装い 金関惣・佐原真編 雄山閣
- 鶴田克史 2004 「古代 第三章 笛神の律令制」『笛神村史』通史編 新潟県笛神村
- 小林青樹 2008 「第II部 様式各節〈晚期・統繩文〉浮線網状文系土器」『小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会 株式会社アム・プロモーション
- 小林 弘 2004 「(27) 清見寺A窯跡、(33) 猿沢2号窯跡 資料編 第II章 沼垂郡 1 生産遺跡」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 酒井亞紀 2003a 「第3編 猫山遺跡 第3章 遺物 2 石器 C 分類と分析 b 石器失敗品」『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 酒井亞紀 2003b 「第3編 猫山遺跡 第5章まとめ C 石器組成と出土分布状況」『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 酒井亞紀 2003c 「第3編 猫山遺跡 第5章まとめ D 石材について」『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 佐藤祐輔 2008 「東北地方南部における砂沢式並行期の土器について」『第6回 弥生時代土器における砂沢式の諸問題ー資料集ー』 海帙土器編年研究会
- 佐藤友子 2009 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第203集 壱塙遺跡・孤塚遺跡」 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 品田高志 1997 「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸――考古学が語る北陸――』 北陸中世土器研究会 桂書房
- 杉原莊介 1968 「新潟県・六野瀬遺跡の調査」『考古学集刊』第四卷第一号 東京考古学会
- 須藤 隆 1976 「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究』第23卷 第2号 考古研究会
- 高橋保雄 1996 「永久保遺跡 第IV章遺跡 3. 遺物 C. 土器転用品」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第79集 水久保遺跡・宮平遺跡II』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2006 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第172集 鴨深甲遺跡」 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中耕作 1991 「「村尻遺跡出土の「ねかせ」状態の焼粘土塊についてー村尻遺跡発掘出土遺物の紹介 その3ー」『北越考古学』第4号 北越考古学研究会
- 田中耕作 1999 「新発田市村尻遺跡出土の焼粘土塊(続)」『北越考古学』第10号 北越考古学研究会
- 田村 裕 2004 「中世 第三章 南北朝・室町前期の白河荘」『笛神村史』通史編 新潟県笛神村
- 鶴巻康志 1992 「Vまとめ 2. 六野瀬遺跡と赤坂窯」『新潟県安田町文化財調査報告書12 六野瀬遺跡 1990年調査報告書』 新潟県安田町教育委員会
- 鶴巻康志 2001 「新発田市ホーロク沢窯跡採集の須恵器」『北越考古学』第12号 北越考古学研究会
- 鶴巻康志 2004 「土師器からみた中世の小城圏—新潟県北部阿賀北地方を中心にー」『中世土器の基礎研究X V III』 日本中世土器研究会

- 土橋由理子^{註26} 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第200集 西郷遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中川成夫・倉田芳郎 1962 『新潟県北蒲原郡における二窓址の調査』 立教大学文学部史学研究室
- 中川成夫・川上貞夫・土井義夫 1973 『猿沢窓址群の調査』 笹神村文化財調査報告4 新潟県笹神村教育委員会
- 中野豈任 1988 『三・五頭山信仰と中世銅器』『忘れられた墓場－中世心性史の試み－』 平凡社選書123
- 新潟古代土器研究会 2004 『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 樋口真己 2004 『中世 第一章 白川荘の成立と城氏の展開』『笠神村史』通史編 新潟県笠神村
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
- 藤巻正信 1989 『土器片円盤について』『新潟考古学談話会報』第3号 新潟考古学談話会
- 古澤妥史 2003a 『第3編 猫山遺跡 第3章 遺物 1 土器』『京ヶ瀬村埋蔵文化財はれ調査報告書第2集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 古澤妥史 2003b 『第3編 猫山遺跡 第5章まとめ 1 遺構』『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 古澤妥史 2003c 『第3編 猫山遺跡 第5章まとめ 2 遺物 A 土器について』『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 古澤妥史^{註26} 2003 『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 大割遺跡 猫山遺跡 大曲川端遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 古澤妥史 2008 『II. 実施事業 2. 埋蔵文化財 B. 各種調査の状況(2) 試掘・確認調査 遺跡保存・整備を視野に入れた猫山遺跡範囲内容確認調査』『阿賀野市 文化財年報3 平成19年度(2007.4.1~2008.3.31)』 新潟県阿賀野市教育委員会 生涯学習課文化行政係
- 松永篤知 2008 『縄文土器底部の「敷物直底」について』『考古学雑誌』第92巻第2号 日本考古学会
- 宮本長二郎 2002 『青田遺跡の住居と集落』『よみがえる青田遺跡』資料集 川辺の縄文集落 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
- 宮本長二郎 2003 『第VII章まとめ 1 青田遺跡の住居と集落』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 青田遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 望月精司 2006 『第二編歴史考古古代篇 第5章日本海地域の古代土器生産』『日本海域歴史体系』第二巻古代篇 II 熊田亮介・坂井秀弥編 青文堂出版株式会社
- 八木勝枝 2002 『第V章 遺物 4 土製品 C 烧成粘土塊』『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 元星敷遺跡 上段II(上段) (本文編)』朝日村文化財報告書第22集 新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 栗瀬裕一 2009 『房總の中世墓』『日本の中世墓』 高志書院
- 山田秀雄 1986 『第5章 律令制下の越後・佐渡国 第2節 国都制の成立・整備』『新潟県史』通史編1 原始・古代 新潟県
- 山本信夫 2000 『太宰府条坊跡XV 陶磁器分類編一』 太宰府市の文化財 第49集 太宰府市教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 渡邊朋和 1998a 『第二章原始・古代 一緒に立跡 第3節出土遺物 三、縦立遺跡B地区出土土器』『黒崎町史』資料編一 原始・古代・中世 新潟県黒崎町
- 渡邊朋和 1998b 『第二章原始・古代 一緒に立跡 第3節出土遺物 五、小結』『黒崎町史』資料編一 原始・古代・中世 新潟県黒崎町
- 渡邊裕之 1999 『第3章 弥生時代・縄文時代 第2節 土器 第1項 弥生前期・中期前葉』『新潟県の考古学』 新潟県考古学協会編 高志書院
- 渡邊裕之^{註26} 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第196集 野地遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

造構（古代・中世）観察表

掘立柱建物（SB）観察表

() 検定値、< > 残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置 (グリッド)	面積 (m ²)	柱径 (mm) × 高さ (mm)	柱行長 (m)	柱間柱間長 (m)	梁行長 (m)	梁間柱間長 (m)	方位	面積 (m ²)	備考
SB1282	28	29	12E-F	2 × 1	4.16 × 4.27	1.80 ~ 2.26	2.49 ~ 2.59	—	N°T-W	10.63	P1278 ~ 1279-1280-1629-1630により構成される。	
SB1324	35	36	14 + 15G	2 × 2	2.63 ~ 3.01	1.31 ~ 1.64	2.88 ~ 2.97	1.36 ~ 1.52	N°L-W	8.25	P1315 ~ 1323により構成される。	
SB1500	8	9	6E-F	2 × 1	2.70 ~ 2.79	1.27 ~ 1.48	1.28 ~ 1.47	—	N°H-W	2.75	P239-241-1218-1435-1436-1460 Cにより構成される。	

井戸（SE）観察表

切り合いの記号は「日<薪」、「#」は新旧不明を表す。() 検定値、< > 残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置 (グリッド)	切り合い	平面形	断面形	覆土層構 成	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SE4	14	15	7D10 + 15- 8E6 + 11	—	円形	台形状	レンズ状	193	172	164	sondage (SD0683 出土升と合意)、青磁、中世土師器、和田石、種実出土。
SE513	18	19	10D7 + 8- 12 + 13	—	円形	U字状	レンズ状	173	159	211	断面形 V 字形に近い、中世土師器、種実出土。
SE722	16	17	8F18 + 19	—	円形	範状	レンズ状	92	78	95	中世土師器出土。
SK799	21 + 23	23	9F24 + 25- 9G4 + 5 + 9	SK799 < P956	円形	範状	レンズ状	292	246	132	sondage、廻り口・火薬袋、青磁、中世土師器、和田石、博文出土。
SE857	21	23	9F2 + 3	SD149 < SE857	円形	U字状	レンズ状	153	141	183	8 個上面に薄い灰化物層が確認。
SE995	10	11	7D9 + 14 + 15	# P1005	円形	台形状	レンズ状	254	234	160	6 個灰化物多く含む。青磁、中世土師器出土。
SE1052	32	33	14D23	—	円形	U字状	水平レンズ	122	111	193	調査出土。
SE1173	30	31	14C9 + 10	SD1201 < SE1173	円形	U字状	レンズ状	122	105	188	sondage、種実出土。
SE1176	28 + 29	29	14F21 + 14G1	SD1603 < SK1175, + SD1250	円形	範状	レンズ状	101	96	85	sondage、刀子、跳洋出土。
SE1211	28	29	13B23 + 24- 13C3 + 4	SD1403 + 1032 < SE1211	円形	台形状	レンズ状	292	262	118	sondage、廻り口・火薬袋、中世土師器、磁石、鉄製品、和田石、種実出土。
SE1220	30	31	13G12 + 13- 17 + 18	—	梢円形	台形状	レンズ状	97	75	117	底面に段があり、 sondage、跳洋出土。
SE1230	30 + 31	31	12G25 + 13G21	SD1207 + SK1231 < SK1230	円形	範状	水平レンズ	183	162	96	sondage、青磁、中世土師器、磁石、鉄製品、桃或竈土師器出土。
SE1260	28	29	12F17 + 17	—	円形	範状	レンズ状	97	87	93	断面形は緩やかな脇子状に傾く。
SE1538	24	25	11F9	P1586 < SE1538	円形	台形状	レンズ状	128	116	82	
SE1554	34 + 36	36	15D7 + 12	SE1554 < SK1542	円形	U字状	レンズ状	108	103	216	sondage、磁石、木製品出土。

土坑（SK）観察表（1）

切り合いの記号は「日<薪」、「#」は新旧不明を表す。() 検定値、< > 残存値

遺構番号	平面図	断面図	位置 (グリッド)	切り合い	平面形	断面形	覆土層構 成	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	方位	備考	
SK7	6	5	SD1 - 7	—	梢円形	台形状	水平	63	47	28	N°S-E	sondage 出土。	
SK15	6	5	4C24	—	(梢円形)	台形状	レンズ状	(118)	70	20	N°7-E		
SK20	6	5	SD12 + 13	SD27 < SK20 < P6	梢円形	範状	レンズ状	112	55	54	N°7-E	和田石出土。	
SK48	2	3	SA42 + 25, SB4 + 5	—	(梢円形)	台形状	レンズ状	160	76	32	N°12-E		
SK49	2	3	9C2	P101 < SK49	円形	台形状	單層	102	87	14	—		
SK52	14	15	8C16 + 17 + 21 + 22	SD60 < SK52	(梢円形)	半円状	レンズ状	161	(110)	45	N°67-E		
SK53	2	3	SB10 + 15, 6B6 + 11	—	方形	台形状	水平	138	128	49	N°21-W		
SK67	2	3	6C3	—	半円	台形状	レンズ状	<145°	<30°	93	不規		
SK94	10	11	6C15 + 19 + 20	—	(丸方形)	(張状)	レンズ状	110	<330°	<230°	110	N°4-W	
SK149	12	13	7F4	SK149 < SK764	円形	半円状	フリップ 状	90	79	41	—		
SK150	16	17	8F9	—	梢円形	台形状	单層	65	43	21	N°32-E		
SK152	8	9	6E17 + 18 + 23	—	円形	半円状	レンズ状	91	80	25	—	sondage 出土。	
SK507	16	17	8F7 + 8	—	円形	範状	单層	123	117	15	—		
SK530	8	9	6E18 + 19	SK520 < P203 + 204 + 208 + 525	円形	範状	单層	114	98	8	N°16-W		
SK521	8	9	6E19	SK521 < P206 + 208 + 209 + 213	梢円形	範状	单層	100	72	13	N°62-W		
SK545	8	9	6F22 + 23	—	円形	台形状	レンズ状	84	71	17	N°59-E		
SK578	18 + 19	19	9C23 + 24, 9H3 + 4- 8 + 9	—	円形	台形状	レンズ状	315	287	115	—	sondage、中世土師器、刀子、和田石、磁石、種実出土。	
SK694	12	—	7F9 + 10	SK694 < P690	(梢円形)	範状	单層	105	72	10	N°51-W		
SK721	16	17	8F4 + 5 + 9 + 10	P1014 < SK721	長方形	範状	单層	180	151	29	N°26-W	直線形、上縁崩れ。	

土坑（SK）観察表（2）

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	覆土埋積 形状	長幅 (cm)	短幅 (cm)	深さ (cm)	方位	備考
SK763	12	13	7E20・25	SK764 < SK763	(内周)	弧状	レンズ状	195	102	16	-	1層変化物多く含む。
SK764	12	13	7E24・25, 7F4	SK149 < SK764 < SK763	(長方形)	凸形状	レンズ状	<222>	153	30	N-57°-E	1層変化物多く含む。珠鋼鏡。中世土器出土。
SK828	6	5	4C19・24	-	(内周)	半円状	水平	東西 125 -66-	46	-	-	-
SK829	6	7	5C21・22	-	方形	台形状	レンズ状	79	69	20	N-7°-W	-
SK830	6	7	5C23	-	梯形状	台形状	レンズ状	75	52	24	N-72°-W	-
SK920	12	13	7D24, 7E4	SD920 < PD983・ 6B4	梯形状	台形状	单壁	184	53	14	N-20°-W	1層変化物多く含む。
SK922	16	17	8F19	-	梯形状	弧状	单壁	75	60	18	N-19°-E	-
SK960	14	15	9B17・18・21～24, 9C1・3～7・8	SD960・SD1 #. SK960	不規則	弧状	レンズ状	580	480	75	N-34°-W	珠鋼鏡。青磁、磁石、刀子、和田玉出土。
SK969	12	13	7E23, 7F3	SD969 < SD148	円形	弧状	レンズ状	83	78	12	-	-
SK988	12	13	7D23・7E3	SK988 < SD795	(梯形)	台形状	レンズ状	82	66	13	N-55°-E	-
SK991	10	11	7D13・14	-	(内周)	半円状	水平	57	54	34	-	-
SK997	10	11	6D5・10	SD996 < SK997	梯形状	弧状	レンズ状	70	52	14	N-09°-E	-
SK1053	26	27	12E9・10	-	梯形状	弧状	单壁	(102)	71	12	N-69°-W	鐵器出土。
SK1054	26	27	13E15・20	-	円形	台形状	レンズ状	79	67	20	-	鐵器出土。
SK1055	26	27	13E11・16	-	梯形状	台形状	レンズ状	71	67	13	N-47°-E	-
SK1056	26	27	12E10・13B6	-	梯形状	台形状	レンズ状	132	104	19	N-10°-E	鐵器。土師器出土。
SK1057	32	33	13E13・14	-	方形	矩状	レンズ状	65	57	23	N-14°-W	-
SK1058	32	33	13D15, 14D11	# SK1178	円形	台形状	水平	112	97	34	-	銅鏡出土。
SK1174	30	31	14F22・23, 14G2・3	-	長方形	台形状	レンズ状	174	87	29	N-60°-E	-
SK1177	28	27	12E9・10	(梯形)	半円状	レンズ状	145	105	23	N-76°-W	土師器出土。	
SK1179	32	33	13E15・20	-	円形	弧状	单壁	92	82	12	-	-
SK1180	32	33	13E8・9・13・14	SK1210 < SK1180	梯形状	弧状	单壁	261	96	11	N-89°-E	鐵器出土。
SK1210	32	33	13E8・9	SK1210 < SK1180	長方形	台形状	水平	166	46	38	N-88°-W	-
SK1212	30	31	13G4・9	-	長方形	台形状	レンズ状	124	58	20	N-73°-E	-
SK1213	32	33	13E10・15	-	梯形状	半円状	レンズ状	77	58	19	N-35°-W	扇貝口。
SK1225	28	29	12F20	-	円形	半円状	レンズ状	69	62	32	-	-
SK1255	18	20	10C1	-	(梯形)	半円状	レンズ状	<74>	85	25	N-19°-E	1層変化物多く含む。
SK1414	40	40	6D22・23, 6B2・3	-	円形	有段の 蓋状	レンズ状	183	155	27	N-52°-W	-
SK1621	30	31	14G1	-	円形	台形状	レンズ状	75	71	37	-	2層変化物多く含む。
SK1639	22	23	13C11	-	梯形状	弧状	レンズ状	97	47	6	N-67°-W	土師器出土。

堅穴造構（SX）観察表

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	覆土埋積 形状	長幅 (cm)	短幅 (cm)	深さ (cm)	方位	備考
SX1555	34	36	15D20・25, 16D16	SK1555 < SX1610	(長方形)	台形状	レンズ状	<166>	187	16	N-89°-E	中空か。

溝（SD）観察表（1）

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	覆土埋積 形状	残存幅 (cm)	上部幅 (cm)	底部幅 (cm)	深さ (cm)	備考
SD22	4・6	5・7	2E ~ SD	SD26 < SD22 < SD27	V字型・ 台形状	レンズ状	直角状	321	34 ~ 170 平均150	10 ~ 111 平均10 ~ 20	29 ~ 71	SD50と同一溝か。 珠鋼鏡、青磁、磁石、和田玉出土。
SD23	4・6	7	2E ~ SD	-	台形状	レンズ状	直角状	30.7	36 ~ 345 平均150	7 ~ 294 平均10 ~ 20	34	SD797と同一溝か。 珠鋼鏡、铁 錫鉛鉱等出土。
SD24	4・6	5・7	3E ~ 4E	SD24 < SD25	台形状	水平	直角状	17.4	67 ~ 95	19 ~ 53	18 ~ 48	中空か。
SD25	6	7	4・5E	SD24 < SD25	台形状	レンズ状	直角状	10.4	45 ~ 60	23 ~ 41	28	SD546と同一溝か。
SD26	6	-	4D	SD26 < SD22	弧状	单壁	直角状	6.7	72 ~ 93	49 ~ 68	28	SD27・962と同一溝か。

溝（SD）観察表（2）

遺構番号	平山岡	斯面岡	位置（グリッド）	切り合N°	斯面形	施工場所 形状	残存長 (m)	上端幅 (m)	底部幅 (m)	深さ (m)	備考
SD327	6	7	SD	SD22 < SD27 < SK20	台形状	水平	4.3	94 ~ 104	64 ~ 80	67	SD106 - 962 と同一溝か。4 / 0
SD34	6	—	SC - D	—	台形状	单層	3.8	35 ~ 73	17 ~ 38	23	中世か。
SD43	10	11	TB - C	—	台形状～ 半円状	单層	22.1	51 ~ 150	23 ~ 128	23 ~ 42	楕圓形。青磁（SD795出土片と 接合）。中世土師器。焼成窯生出。
SD50	8 - 12 10 - 14	9 - 11 15	6D ~ 9C	SD524 < 796 < SD50 < SK52. # SD583	台形状～ 半円状	レンズ状	36.4	53 ~ 253	23 ~ 102	18 ~ 52	楕圓形。青磁。中世土師器。 焼成窯生出。古代の石器（刀器）混入。
SD77	2	3	6C	SD77 < SX54	台形状	单層	1.2	25 ~ 34	10 ~ 19	22	真鍮地出土。
SD110	2	3	5C	SD110 < P136	台形状	单層	0.6	58	—	7	中世か。
SD140	16	—	RE ~ 9E	SD140 < SE857 - P146	台形状	单層	10.6	36 ~ 55	21 ~ 34	5	SD652 - 1539 と同一溝か。土師 器出土。
SD148	12	13	6F ~ 7E	SD580 - SK969 < SD148	台形状	レンズ状	9.7	56 ~ 65	11 ~ 53	64	1. 壁面化物多く含む。楕圓形。延 4L。骨器出土。
SD646	8	9	6D	—	台形状	水平	1.6	47 ~ 60	34 ~ 41	16	SD25 と同一溝か。
SD574	14	15	8B - 9C	SD574 < SD560	弧状	单層	6.8	36 ~ 151	21 ~ 120	10	中世か。
SD580	16 - 18 26 - 27	17 - 20 22 - 23	7E ~ 9D	SD794 < SD1080 < SD1485 SD793 - SX647 - SX648	半円状～ 半円状	レンズ状	58.6	55 ~ 85	16 ~ 38	25	SD1042 と同一溝か。
SD583	8	9	6D - E	SD797 < SD643 < SD794. # SD50	弧状	レンズ状	11.5	88 ~ 110	47 ~ 75	17 ~ 37	楕圓形。SE4 出土片と接合) 土上。
SD624	12	13	6 - 7E	SD794 < SD654	半円状	レンズ状	3.8	34 ~ 47	13 ~ 26	20	中世か。
SD632	12	—	7E	SD794 < SD632	弧状	单層	2.8	38 ~ 49	14 ~ 29	4	SD140 - 1539 と同一溝か。
SD645	18 - 22 26	23 - 27	9C ~ 12C	SD1541 < SD645 < SD1521	台形状～ 半円状	レンズ状	35.4	32 ~ 73	14 ~ 38	14 ~ 28	SD1044 と同一溝か。
SD793	12	13	7D - E	SD580 - 795 - 798 < SD793	台形状～ 半円状	水マレーリ ンズ状	13	49 ~ 80	39 ~ 52	18 ~ 22	青磁。中世土師器。焼打出土。
SD794	8 - 12	13	6D - 7E	SD583 < SD794 < SD1080 624 - 632 - 836. SX144	台形状～ 半円状	レンズ状	12.5	54 ~ 86	28 ~ 68	21	楕圓形出土。
SD795	12	13	7D - E	SD988 < SD795 < SD793 SX144	台形状～ 半円状	レンズ状 ～水平	13.4	70 ~ 132	51 ~ 94	17 ~ 35	楕圓形。青磁 (SD43出土片と接 合) 土上。
SD796	8	9	6D	SD796 < SD560 - SD797 SX144	台形状	单層	3.3	59 ~ 98	47 ~ 75	10 ~ 38	中世か。
SD797	8	9	6D	SD796 < SD797 < SD583 < SD794	台形状～ 半円状	单層	6.7	40 ~ 104	15 ~ 31	18 ~ 21	SD23 と同一溝か。
SD798	12	13	6D, 7D - E	SD797 < SD798 < SD793	台形状	水平	7.2	49 ~ 61	21 ~ 43	23	中世か。
SD860	14 - 18	20	9 - 10C	# SD801 - SK960	台形状～ 弧状	水平	11.6	84 ~ 158	26 ~ 64	30 ~ 44	楕圓形。瀬戸 - 美濃焼。中世土師 器出土。
SD861	14 - 18	20	9 - 10C	# SD800 - SK960	台形状～ 弧状	斜傾	14.6	76 ~ 190	26 ~ 74	31 ~ 43	楕圓形。中世土師器。磁石。和打 出土。
SD836	12	—	7E	SD794 < SD836	台形状	台形状	2.2	39 ~ 50	15 ~ 30	12	中世か。
SD962	10	11	6D	SD962 < SX56	台形状	レンズ状	2.3	95	59	44	中世か。
SD996	10	—	6D	SD996 < SK997 - SX56	台形状	单層	1.5	36 ~ 40	18 ~ 23	11	楕圓形出土。
SD1001	26 - 29 30 - 35	27 - 29 36	13D ~ 15H	SD1032 < SD1031 < SI1175 - SE1211 - SD1209	台形状～ 弧状	レンズ状	43.2	60 ~ 101	41 ~ 90	10 ~ 22	中世土師器出土。
SD1002	26 - 30	27 - 29	13D ~ 13G	SD1032 < SI1211 - SD1031 - 1042 - 1201 - 1207	台形状	レンズ状	34.9	45 ~ 63	25 ~ 42	13 ~ 30	東北窯。中世土師器。和打出土。
SD1041	28 - 32	27	13 - 14D	SD1042 < SD1041 < SD1043	台形状～ 半円状	水平	11.3	55 ~ 78	12 ~ 58	11 ~ 16	1. 椎掛の上。
SD1042	26 - 32	27	13 - 14D	SD1032 < SD1042 < SD1041	台形状～ 半円状	水平	13.4	32 ~ 50	15 ~ 25	44	SD580 と同一溝か。
SD1043	26	27	13D	SD1041 < SD1043	半円状	单層	3.3	30 ~ 37	15 ~ 23	11	中世か。
SD1044	28 - 32	27	13 - 14D	—	台形状	レンズ状	7.3	45 ~ 62	20 ~ 35	16 ~ 34	SD645 と同一溝か。楕圓形出土。
SD1201	28 - 30 35	29 - 36	12F - G, 13F - G, 13F - H, 14G	SD1031 - 1032 < SD1201 < SK1173. # SD1209	台形状	レンズ状	27.8	60 ~ 160	27 ~ 62	23 ~ 68	楕圓形出土。
SD1207	28 - 30	29 - 31	12G - 13F - G H, 14G	SD1032 < SD1207 < SI1230	台形状	レンズ状	33.4	35 ~ 100	12 ~ 65	8 ~ 55	楕圓形。中世土師器。焼成窯生出 土。
SD1224	30	31	12G	—	台形状	レンズ状	8.8	79 ~ 98	49 ~ 74	13 ~ 37	楕圓形。青磁。和打。和打出土。
SD1259	28	29	14G	# SK1175 - SD1201	台形状	レンズ状	9.8	51 ~ 77	39 ~ 53	11	SK1175 - 1201 と同一溝か。
SD1521	26	27	12C - D, 13C	SD1541 < SD645 < SD1521	台形状	レンズ状	6.9	35 ~ 43	18 ~ 28	30	—
SD1539	24	25	11F	—	台形状	レンズ状	3.7	82 ~ 97	56 ~ 73	20	SD140 - 632 と同一溝か。東 窯。和打。
SD1540	24	25	10 - 11G	—	台形状	单層	2.4	40 ~ 53	17 ~ 32	19	古代か。
SD1541	26	27	12C - D	SD1541 < SD645 < SD1521	台形状～ 斜傾	水平	5.6	69 ~ 115	64 ~ 79	43	東北窯出土。

炭窯（SX）観察表

（）推定値、<>既存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	平面形	断面形	壁土堆積 形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	方位	備考
SX55	2	3	SC14・15, 6C11	（反方向）	円形状	レンズ状	<425>	105	43	N80°W	4壁炭化物多く含む。

焼土遺構（SX）観察表

（）推定値、<>既存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	地上分布範囲	長軸 (m)	短軸 (m)	方位	備考
SX1537	24・25	-	11F18・19	不整円形	南北73	東西73	-	地上範囲として焼土。南西に連続した同一縦造面で遺物集中範囲を確認。土壌器出土。
SX1626	24	-	11F8	不整椭円形	129	105	N38°E	地上範囲として焼土。北東側で遺物集中範囲を確認。

鉢窓間造構（SX）観察表

切り合いの記号は「田<新」、「*」は新旧不明を表す。（）推定値、<>既存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	壁土堆積 形状	地盤範囲 (m)	上端範 (m)	底端範 (m)	深さ (m)	方位	備考
SX1598～1601	SD1413～1619	34・35	36	14E・F, 15E～G	<SX1598～1601 1552～1600	円形状	單層	南北東15.8 南北西15.3	平均8.5	平均20	平均15	N60°E	
SX1598～1619	34	36	35	15D～F	鉢窓間造構～円地遺構	不整形	弧状	单層	<16.0>	<9.8>	496	11.4～11.0～ 235	SX1543 から 焼成灰土塊出土。

凹地遺構（SX）観察表

（）推定値、<>既存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	壁土堆積 形状	全体地盤範囲 (m)	個別規模 (m)	深さ (m)	備考	
SX1542～1553	34	36	15D～F	鉢窓間造構～円地遺構	不整形	弧状	单層	南北東11.4 南北西10.0	平均7.0	11.4～ 496	11.0～ 235	SX1543 から 焼成灰土塊出土。
SX1558～1610	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

性格不明遺構（SX）観察表

切り合いの記号は「田<新」、「*」は新旧不明を表す。（）推定値、<>既存値

遺構番号	平面図	断面図	位置（グリッド）	切り合い	平面形	断面形	壁土堆積 形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (m)	方位	備考
SX17	4	5	6E4	-	不整形	弧状	レンズ状	70	62	12	-	2壁炭化物多く含む。
SX54	2	3	SC9・10, 6C6	SX27 < SX54 < P28	楕円形	円形状	レンズ状	411	108	18	N49°W	4壁炭化物多く含む。青磁。中 央土壌器出土。
SX56	10	11	6C25, 6D4～5, 7C21, 7D1	SX662 < 596 < SX36 < P57, 58	（楕円形）	弧状	単層	<51.3>	138	18	N45°E	青磁。世界1層薄 （JRCと報告）。出土。
SX85	2	3	5B25, 5C5, 6B21, 6C1	SX85 < P66	不整形	不整形	-	378	258	-	N65°E	
SX141	10	11	6C25, 7C21	-	（楕円形）	弧状	単層	78	<17>	14	N75°E	
SX142	10	11	7C11	-	（楕円形）	弧状	単層	43	41	10	-	
SX144	8	9	6D14	SX724 < 796 < SX144 < P500	円形	弧状	単層	56	47	6	-	断面片含む。2壁炭化物多く含む。
SX153	12・13	13	7B16	-	楕円形	弧状	平滑	42	23	5	N54°E	炭化物と礫石片を多く含む。
SX154	12・13	13	7B21・22	-	円形	弧状	平滑	82	72	5	-	炭化物と礫石片を多く含む。
SX573	12・13	13	7B16・17	P221 < SX573	楕円形	円形状	単層	82	64	8	N78°E	珠頭器出土。
SX576	14	17	8C20～25, 9C16～ 17	-	楕円形	弧状	レンズ状	482	141	27	N67°W	2～3壁炭化物多く含む。中土壌 器出土。
SX577	14	17	8C24	-	方形	台形状	単層	72	64	15	N32°W	
SX610	14	17	8D2	-	（楕円形）	弧状	レンズ状	285	147	28	N35°W	中央土壌器出土。
SX647	18	20	10D12～13・17～ 18	SX680 < SX647	長方形	弧状	プロック 状	298	204	38	N80°E	
SX648	18	20	9D19～20・24～ 25	SX680 < SX648	長方形	円形状	平滑	272	94	56	N72°E	
SX780	14	17	8C22～23, 8D2～ 3	-	（楕円形）	弧状	単層	<65>	78	10	N72°W	1壁炭化物多く含む。
SX1178	32	33	13D20, 14D16	# SK1058	長方形	円形状	平滑	194	130	24	N81°W	弧状器。土壌器出土。
SX1208	32	33	13E25, 14E21	-	楕円形	弧状	平滑	48	27	7	N24°W	1壁炭化物多く含む。
SX1209	32	33	13E19～24	-	楕円形	円形状	レンズ状	39	28	2	N41°E	1壁炭化物多く含む。
SX1231	30	31	12G25, 13G21～ 22, 13H2	SX1231 < SX1230	（反方向）	矩状？	レンズ状	<414>	<85>	82	N46°W	2壁炭化物多く含む。珠頭器。 中土壌器。種室出土。
SX1623	30	31	14H11	-	楕円形	円形状	レンズ状	121	42	14	N82°W	1壁炭化物出土。
SX1624	24・25	25	11F22～23, 11G1～2	SX1624 < P1567～ 1568・1625	（楕円形）	台形状	平滑	<345>	240	14	N75°W	弧状器。土壌器出土。

土器・陶磁器（古代・中世）觀察表（1）

(1) 情況別、(2) 対照表

No.	測定場所	測定部位	測定	測定工具	測定結果	表面		色調	備考
						長径	短径		
1	SEI-50563	11 直・2 直	直筒	直筒	-	11.6	2.2	底: 3.3-3.6	口ヨコナラフ 直筒
2	SEI-4	7 直	直筒	直筒	-	4.6	<3.5	(6.2) -<2.5	口ヨコナラフ 直筒
3	SEI-4	7 筒	中空・直筒	直筒	-	7.6	1.5	(1.6) 3.9-4.3/3.16	口ヨコナラフ 直筒
4	SEI-722	7 直	中空・直筒	直筒	-	7.6	1.5	(1.6) 3.9-4.3/3.16	口ヨコナラフ 直筒
5	SEI-720	7 直	直筒	直筒	-	6.0	1.2	(1.2) 3.6-4.7/3.26	口ヨコナラフ 直筒
6	SEI-720	7 直	直筒	直筒	-	6.0	1.2	(1.2) 3.6-4.7/3.26	口ヨコナラフ 直筒
7	SEI-720	7 直	直筒	直筒	-	6.0	1.2	(1.2) 3.6-4.7/3.26	口ヨコナラフ 直筒
8	SEI-720	7 直	中空・直筒	直筒	-	6.0	1.2	(1.2) 3.6-4.7/3.26	口ヨコナラフ 直筒
9	SEI-720	7 直	中空・直筒	直筒	-	7.1	1.6	(1.6) 3.6-4.7/3.26	口ヨコナラフ 直筒
10	SEI-925	9 筒	中空・直筒	直筒	(8.1)	7.2	1.3	(1.5) 3.5-4.6/6.16	口ヨコナラフ 直筒
11	SEI-926	2 筒	中空・直筒	直筒	-	6.7	1.2	(1.2) 3.6-4.7/3.26	口ヨコナラフ 直筒
12	SEI-926	2 筒	直筒	直筒	(13.4)	-	(2.8) 1.3-9.5/26	口ヨコナラフ 直筒	
13	SEI-1211	2 筒・直筒	直筒	直筒	-	-	(1.5) 1.0-9.6/8.7	口ヨコナラフ 直筒	
14	SEI-1211	2 筒	直筒	直筒	(26.0)	-	(2.5) 1.0-9.6/8.7	口ヨコナラフ 直筒	
15	SEI-1211	2 筒	直筒	直筒	-	-	(4.2) 1.0-7.0/26	口ヨコナラフ 直筒	
16	SEI-215	2 筒	直筒・2 穴	直筒	-	-	(4.6) 2.6	口ヨコナラフ 直筒	
17	SEI-1211	3 筒	直筒・2 穴	直筒	(8.1)	-	(1.5) 1.0-9.6/8.7	口ヨコナラフ 直筒	
18	SEI-1220	3 筒	直筒	直筒	(26.0)	-	(4.5) 1.0-9.6/8.7	口ヨコナラフ 直筒	
19	SEI-1220	1 筒	直筒	直筒	-	-	(5.5) 1.0-7.0/26	口ヨコナラフ 直筒	
20	SEI-1220	4 筒	直筒	直筒	-	-	(2.5) 1.3-9.6	口ヨコナラフ 直筒	
21	SEI-1220	7 直・2 穴	直筒	直筒	-	(6.6) 1.1-9.6/36	口ヨコナラフ 直筒		
22	SEI-1554	3 筒	直筒	直筒	(8.4)	-	(3.0) 1.0-9.6/36	口ヨコナラフ 直筒	
23	SEI-1554	3 筒	直筒	直筒	(16.0)	-	(6.2) 1.0-9.6/36	口ヨコナラフ 直筒	
24	SEI-132	1 筒	直筒	直筒	(12.2)	-	(5.5) 1.0-9.6/36-4.6/36	口ヨコナラフ 直筒	
25	SEI-578	7 直・2 穴	直筒	直筒	(6.2)	-	(8.0) 1.0-9.6/36	口ヨコナラフ 直筒	
26	SEI-578	2・17 筒	直筒	直筒	(28.4)	-	(8.0) 1.0-9.6/36	口ヨコナラフ 直筒	
27	SEI-940	7 直	直筒	直筒	(13.8)	-	(3.0) 1.0-9.6/36	口ヨコナラフ 直筒	
28	SEI-940	7 直	直筒	直筒	-	-	(2.0) 1.0-9.6/36	口ヨコナラフ 直筒	
29	SEI-212	3 筒	直筒	直筒	(25.0)	-	(5.5) 1.0-9.6/36	口ヨコナラフ 直筒	
(1) 情況別、(2) 対照表									
(3) 対照表									
(4) 対照表									
(5) 対照表									
(6) 対照表									
(7) 対照表									
(8) 対照表									
(9) 対照表									
(10) 対照表									
(11) 対照表									
(12) 対照表									
(13) 対照表									
(14) 対照表									
(15) 対照表									
(16) 対照表									
(17) 対照表									
(18) 対照表									
(19) 対照表									
(20) 対照表									
(21) 対照表									
(22) 対照表									
(23) 対照表									
(24) 対照表									
(25) 対照表									
(26) 対照表									
(27) 対照表									
(28) 対照表									
(29) 対照表									

遺物觀察表

◎ 精行錄

瓷器·陶器(古代·中世) 程密著(2)

上器・陶磁器（古代・中世）觀察表（3）

No.	学名	日本語名	科	属	種	基部 (cm)	葉幅 (cm)	葉形		葉面	葉裏	葉脈	葉色	
								上部	下部					
59	SKS19	日本山蓼	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	-7.5	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG)	
60	SKS20	日本山蓼	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	<5.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL	
61	[SC]	日本山蓼	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	<1.3	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL	
62	SKS1005	1種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(11.1)	(11.3)	<3.5	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
63	SKS1006	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	1.0	7.6	3.6	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
64	SKS1008	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	(5.0)	<6.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
65	SKS1009	1種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	(5.0)	<2.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
66	SKS1177	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	(7.6)	<2.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
67	SKS1177	1種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	(6.0)	<1.3	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
68	SKS1180	1種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	(5.0)	<2.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
69	SKS1180	1種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	(7.2)	<2.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
70	SKS1012	4種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(11.5)	(8.2)	<3.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
71	SKS1012	方蓼	蓼科	蓼属	日本山蓼	(19.8)	-	<5.7	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
72	SKS1057	方蓼	蓼科	蓼属	日本山蓼	12.6	8.4	3.3	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
73	SKS1176	8種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	(8.0)	<1.7	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
74	SKS1176	3種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	(6.8)	<2.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
75	SKS1624	5種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(13.1)	(8.0)	3.8	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
76	SKS1624	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(8.0)	(3.8)	<3.7	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
77	SKS1624	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(12.3)	(7.8)	<1.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
78	SKS1624	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	(7.7)	<1.2	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
79	SKS1624	園生	蓼科	蓼属	日本山蓼	(12.6)	-	<2.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
80	SKS1054	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(12.2)	(7.4)	<3.3	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
81	SKS1054	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(12.6)	(13.6)	<2.7	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
82	SKS1624	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	-	<4.2	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
83	SKS1624	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	-	-	<4.2	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
84	SKS1176	4種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(12.1)	(7.1)	<3.0	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
85	SKS1176	1種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(12.2)	(9.1)	<3.5	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
86	SKS1176	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(12.2)	(7.6)	<3.2	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL
87	SKS1176	2種	蓼科	蓼属	日本山蓼	(12.2)	(7.6)	<3.2	11.0	26~38	10.0	口クロ子	-	青い葉 (NFG) = NGL

（1）精定稿：→> 跑行稿

土器・陶磁器（古代・中世）観察表（4）

(1) 情況欄、(2) 対応欄

No.	出土地点	出土状況	種類	目録番号	基盤 (cm)	蓋	通常の状態		基盤	蓋	通常の状態		基盤	蓋
							内面	外側			内面	外側		
88 14G27	方墳	施塗瓦	施瓦	13H	施瓦	施瓦	口29ナナ子	口29ナナ子	口29ナナ子	口29ナナ子	口29ナナ子	口29ナナ子	口29ナナ子	口29ナナ子
89 13G8	方墳	施塗瓦	施瓦	12.2	7.9	3.4	口28-底11/36	口28-底11/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
90 14H2	-	-	施瓦	-	(7.6)	-	口28-底10/36	口28-底10/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
91 11G25	方墳	施塗瓦	施瓦	-	(8.2)	-	口28-底9/36	口28-底9/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
92 14G12	-	-	施塗瓦	-	(7.4)	-	口28-底26/36	口28-底26/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
93 14H	-	-	施塗瓦	蓋	(12.6)	-	口28-底11/36	口28-底11/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
94 14G24	-	-	施塗瓦	蓋	(12.6)	-	口28-底10/36	口28-底10/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
95 11H	方墳	施塗瓦	施瓦	(13.7)	-	-	口28-底11/36	口28-底11/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
96 7H	方墳	施塗瓦	施瓦	(13.5)	-	-	口28-底10/36	口28-底10/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
97 8G12	方墳	施塗瓦	施瓦	-	(6.4)	-	口28-底8/36	口28-底8/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
98 9G9	-	-	施塗瓦	蓋	-	-	口28-底11/36	口28-底11/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
99 14G22-24	方墳	施塗瓦	施瓦	-	-	-	口28-底11/36	口28-底11/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
100 6G13	-	-	土器	施瓦	(12.2)	(7.4)	口28-底7/36	口28-底7/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
101 8G23	方墳	施塗瓦	施瓦	(10.8)	(7.0)	3.3	口28-底7/36	口28-底7/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
102 6G20	方墳	土器	施瓦	(13.6)	(6.6)	5.5	口28-底7/36	口28-底7/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
103 6G11	方墳	施塗瓦	施瓦	-	(7.1)	-	口28-底7/36	口28-底7/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
104 9G4	-	-	土器	小瓶	-	-	口28-底11/36	口28-底11/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
105 10G7	-	-	土器	小瓶	-	-	口28-底10/36	口28-底10/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
106 8G9	方墳	土器	施瓦	(22.6)	-	-	口28-底7/36	口28-底7/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
107 15G17-19	-	-	土器	施瓦	(22.2)	-	口28-底7/36	口28-底7/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
108 6G14	方墳	施塗瓦	施瓦	(13.2)	(9.2)	-	口28-底6/36	口28-底6/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
109 9G13	方墳	施塗瓦	施瓦	-	(8.1)	-	口28-底12/36	口28-底12/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
110 6G24-6G3	方墳	施塗瓦	施瓦	(11.4)	(8.2)	-	口28-底11/36	口28-底11/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
111 9G13	方墳	施塗瓦	施瓦	(13.8)	-	-	口28-底10/36	口28-底10/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
112 10G11	方墳	施塗瓦	施瓦	-	-	-	口28-底9/36	口28-底9/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
113 8G13	方墳	施塗瓦	施瓦	-	-	-	口28-底8/36	口28-底8/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子
114 8C11-8G3-7	方墳	施塗瓦	施瓦	-	-	-	口28-底8/36	口28-底8/36	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子	口28ナナ子

遺物観察表

石器観察表

No.	出土地点	出土層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
115	TC16	田中耕	砾石	8.1	3.3	0.7	28.58	鰐床岩	
116	SD148	覆土	砾石	7.2	4.3	2.7	77.13	鰐床岩	
117	SK960	3耕	砾石	5.6	2.8	2.4	43.45	鰐床岩	
118	ER1	1耕	砾石	4.7	4.0	1.9	52.61	鰐床岩	
119	SEI230	覆土	砾石	5.5	3.5	0.6	13.60	鰐床岩	
120	SEI211	覆土	砾石	5.6	2.6	1.0	18.95	鰐床岩	

石製品観察表

No.	通標名・出土地点	出土層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
121	BC9	-	砾石	<3.6>	3.6	0.5	13.33	墨色粘板岩	中井の通標SK50の覆土から出土。

鉄製品観察表

No.	通標名・出土地点	出土層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	保存状態	備考
122	SK578	17耕	刀子	<7.3>	2.0	0.6	18.08	刃部残存	
123	P29(6C)	3耕	刀子	<6.5>	1.8	0.4	10.19	刃部～茎部残存	
124	SD43	2耕	刀子	<7.2>	1.6	0.5	9.55	刃部～茎部残存	
125	SEI175	2耕	刀子	<6.4>	1.2	0.3	9.25	刃部～茎部残存	
126	SK960	8耕	刀子	<6.1>	0.8	0.3	12.40	基部残存	
127	SK960	覆土	刀子	<6.6>	0.6	0.3	4.76	基部残存	
128	P185(6E)	覆土	短刀	<3.1>	0.7	0.6	3.94		
129	SD43	覆土	短刀	<4.3>	0.8	0.7	8.44		
130	SK960	覆土	短刀	5.8	0.7	0.6	7.13		
131	SK4	7耕	短刀	<5.7>	0.4	0.3	4.77		
132	SD43	2耕	短刀	<7.1>	0.6	0.5	13.34		
133	SD601	1耕	短刀	<9.1>	0.7	0.5	17.36		
134	SK20	1耕	短刀	<7.3>	0.8	0.5	11.25		
135	SK578	5耕	短刀	<5.4>	0.9	0.4	10.95		
136	SD22	覆土	短刀	<2.2>	0.5	0.4	2.05		
137	SD22	覆土	短刀	<2.2>	0.4	0.4	1.43		
138	SD60	覆土	不明	11H 3.2	底詳 2.0	高さ 1.7	10.07	II-底詳 26/36	

銅製品観察表

No.	通標名・出土地点	出土層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	保存状態	備考
139	SEI211	覆土	鋸子	4.7	7.7	<3.6>	40.06	口端部、片口、つるの 裂け口付近部残存	丸穿たれ。

羽口観察表

No.	通標名・出土地点	出土層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	内径(cm)	重量(g)	保存状態	備考
140	13D20	古墳	羽口	<19.9>	(7.0)	2.5 - 2.8	51. 91	丸端部 1/2 残存	

鉄滓観察表

No.	通標名・出土地点	出土層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
141	13D20	古墳	鉄滓	7.7	6.4	2.2	130.01	木製箱
142	SD	古墳	鉄滓	7.0	7.0	2.3	165.92	木製箱
143	13E20	古墳	鉄滓	4.3	3.6	2.4	34.26	軸受けの一部？付着
144	13E19	古墳	鉄滓	4.6	3.2	1.6	17.32	
145	14F19	1耕	鉄滓	5.7	3.1	2.2	13.32	

木製品観察表

No.	通標名・出土地点	出土層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取り	備考
146	SEI554	6耕	下駄	24.2	<9.5>	2.0	板目	駄底板あり。
147	SEI554	6耕	縄	<12.5>	11.0	1.6	板目	

学生手册(1)

微生物觀察表 (2)

衍生土器觀察表(3)

圖 號 No.	件數及形狀/規格	說明	分類	殘存 部位	殘存 長寬 (mm)	厚度 (mm)	底面 長寬 (mm)	底面 厚度 (mm)	器物		說明		
									器形	表面			
41	SK1294 (791) / 1 直	圓盤	82	D	1.750	-	-	-	直 - 長 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E. - 有底直口盤	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：江戶後期 (1600E/2) -		
42	SK1294 (791) / 1 斜	直 - 長 - 角 - 全宮 - 鏽跡	82	-	-	-	-	-	直 - 長 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E. - 有底直口盤	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：江戶後期 (1600E/2) -		
43	SK1449 (916) / 1.2 直 - 角 - L	圓盤	81	D - 角	1.676	34	-	-	直 - 長 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E.	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：江戶後期 (1600E/2) -		
44	SK1502 (774) / 1 直	直 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	81	-	-	-	-	-	直 - 長 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E.	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：江戶後期 (1600E/2) -		
45	SK1523 / 2 直	直 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	81	D	1.746	526	23	21.4	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E.	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：江戶後期 (1600E/2) -		
46	SK1523 / 4 直	圓盤	82	D - 角	6.76	24.4	-	-	25.6	10	26.5 ± 長 - 角 - 全宮 - 鏽跡 (底缺)	L.E. - 有底直口盤	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -
47	SK1523 / 4 斜	直 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	81	D - 角	2.76	9.6	7.8	8.7	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E. - 有底直口盤	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -
48a ±	SK1523 (916) / 1 直	直 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	81	-	-	-	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	新潟燒文 (L.E. 鋼目)	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -		
48a b	SK1523 (916) / 1 斜	圓盤	82	A3	1 - 角	3.26	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E.	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -		
50	SK1523 / 1 直 - 角 - L	直 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	82	C	1.746	11.26	12.2	-	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E. - 有底直口盤	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -
51	SK1523 / 2 直 - 角 - L	直 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	82	-	11	2.26	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E. - 有底直口盤	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -		
52	SK1526 (694) / 2 直	圓盤	82	B	2.26	-	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E.	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -		
53	SK1561 / 2 直	直 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	81	-	-	-	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E.	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -		
54	SK1561 / 2 直 - 角 - L	直 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	82	D	4.26	-	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E.	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -		
55	SK1640 (8916) / 2 直	直 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	81	A1	直	6.26	16.8	-	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E.	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -		
56	SK1640 (8916) / 1.2 直	圓盤	82	B	斜 - 角	9.67	9.6	-	直 - 長 - 角 - 角 - 全宮 - 鏽跡	L.E. - 有底直口盤 (底缺)	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -		
57	P1024 (791) / 角 - L	直 - 角 - 角 - 角 - 鏽跡	81	-	測	-	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 角 - 鏽跡	新潟燒文 (L.E. 鋼目)	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -		
58	P1033 (8022) / 角 - L	直 - 角 - 角 - 角 - 鏽跡	84	-	測	-	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 角 - 鏽跡	新潟燒文 (L.E. 鋼目)	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -		
59	P1053 / 1 直	直 - 角 - 角 - 角 - 鏽跡	81	C	11	3.26	9.8	8.2	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 角 - 鏽跡	新潟燒文 (L.E. 鋼目)	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -
60	P1053 / 角 - L	直 - 角 - 角 - 角 - 鏽跡	84	直	9.4	5.26	12	-	-	-	直 - 長 - 角 - 角 - 角 - 鏽跡	新潟燒文 (L.E. 鋼目)	外：江戶後期 (1600E/2) - 內：直底盤 (1600E/2) -

衍生土壤鑑斷表(4)

剖面 No.	剖面土質/特點	地帶	分佈	腐殖 層組	1/10 米層	1/10 米層 厚度 (cm)	土壤 類型	土壤 組別	溫度-風文		植物	植被		
									溫度	風文				
61	P1051 / 墓土	溫	B1	高	2.295	-	-	-	高、真、內、全宮	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
62	P1051 / 墓土	高	-	瓦片	0.265	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：5.6cm 內：5.6cm		
63	P1052 (793-4) / 墓土	溫	B2	II	1.265	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
64	P1058 (797-16) / 墓土	溫	B2	II	2.265	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
65	SH1107 (918) / 1 號	溫	B2A	A	1.265	0.265	-	-	13.2	-	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
66	11C14-16 / V 地	高	A1	I+II	1.265	12.1	-	15.3	8.7	19.9	真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、	
67	H0322 / V 地	高	A2	I+II	3.265	1.55	12.8	17.2	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、	
68	H0311 / V 地	高	A3	II	0.265	18.4	-	-	高、真、內、全宮 (多) 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
69	H0313 / V 地	高	A3	I+II	0.265	14.8	-	15.3	9.6	17.4	真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、
70	H0310-18 / V 地	高	B1	I+II	0.265	13.4	-	14.9	-	真、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、	
71	784 / V 地	高	B1	II	4.295	-	-	-	真、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
72	H032 / V 地	高	B2	II	2.265	-	-	-	高、真、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
73	H0318 / V 地	高	B2	II	4.295	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
74	H0315 / V 地	高	B2	II	2.265	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
75	H0322 / V 地	高	B2	I+II	1.265	1.26	-	14.9	8.4	14.6	真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、
76	H0319 / V 地	高	B2	II	7.295	14.9	-	17.6	-	真、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、	
77	H0323 / V 地	高	B2	II	6.265	17.4	-	20	-	真、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、	
78	738 / N 地	高	B2	II	4.295	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
79	H0319 / V 地	高	B2	II	4.295	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
80a	9/13 / V 地	高	B2	II	-	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
80b	9/13 / V 地	高	B2	II	-	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
81	H0322 / V 地	高	B2	II	-	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
82	H0324 / V 地	高	C	II	1.265	-	-	-	高、真、內、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		
83	H0322 / V 地	高	C	II	27.736	-	-	-	高、真、全宮、細鈍 根毛毛子午	子午	外：江谷灌漿 內：江谷灌漿 外：江谷灌漿 內：江谷灌漿	外：3.5、 內：3.5、		

生土器觀察表 (5)

衍生土壤鑑斷表 (6)

剖面 No.	剖面位置/地點	地形	分佈	腐殖 土厚度 (cm)	土壤 類型	土壤 組別	土壤 剖面		土壤 剖面		植物	樹種
							深度 (cm)	顏色	性質	深度 (cm)	顏色	
102 9E12/V 剖	山丘	A2	1~3m	13.0	-	-	6.1	黑灰 色	堅硬 而 密	1.8	黑 色	半 硬
103 10E1/V 剖	路	B	1	5.26	F72	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
104 8E24/V 剖 8~4d	路	B	1	1.26	-	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
105 7E9/V 剖	路	C	1	2.26	-	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
106 8E5/V 剖	路	C	1	4.26	-	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
107 9E7/V 剖	路	E1	耕	8.96	-	12.3	14.1	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
108 8E5/V 剖	路	E2	荒	-	-	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
109 7E5/V 剖	路	-	荒	1.26	-	-	8	黑 色	金 黃 色	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
110 11E1/V 剖	路	D1	1~3m	5.26	25.4	-	35.8	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
111 9E17/V 剖 SK227 8E5(2)/3 墓 SK289 9F(2)/3 墓	路	D3	1~3m	5.26	20.4	-	32.6	13	24 厘米 的 土 壤	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
112 8E15/V 剖	路	D3	1~3m	4.26	20.4	-	34	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
113 8E17/V 剖	路	D2	1~3m	5.26	19	-	24	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
114 10E8/V 剖	路	D2	1~3m	11.26	22	-	25.4	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
115_a 7E7/V 剖	路	D3	8.1	3.26	-	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
116 8E11/V 剖	路	-	1~3m	4.26	20.4	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
117 7E5/V 剖	路	-	耕	-	-	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
118 8E25/V 剖	路	-	1	4.26	-	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
119 8E18/V 剖	路	-	1	6.26	-	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
120 8E19/V 剖	路	-	1~3m	4.26	-	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
121 10E2/V 剖	路	-	8	22.76	-	-	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬
122 9E17/V 剖	坐	A	1~3m	10.26	8	6.8	-	-	-	1.8~7.0 厘米 的 土 壤	黑 色	半 硬

弥生土器觀察表(7)

號 No.	出土地點/層位	形態	分類	殘存 部位 (X-Y)	直徑 mm	厚度 mm	器物		色調	材物	備註
							外觀	內觀			
123a 8013 - 14/V層	直 F	削	刮削器	8.26	-	32.7	圓底	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)
123b 8013 - 14/V層	直 F	削	刮削器	8.26	-	32.7	圓底	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)
124 8013/V層	直	削	刮削器	-	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
125 8013 - 14/V層	直 H	17.14	26.26	8.6	7.5	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
126 8013/V層	直D	-	刮削器	-	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
127 8013/V層	直D	-	刮削器	-	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
128a-b 8013 - V層	直D	-	刮削器	-	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
129 8013 - V層	直D	-	刮削器	-	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
130a-b 8013/V層	直D	-	刮削器	-	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
130c 8013/V層	直D	-	刮削器	-	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
130d 8013/V層	直D	-	刮削器	-	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
130e 8013/V層	直D	-	刮削器	-	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
131 8013/V層	直 A1	直	刮削器	6.26	19	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
132 1082/V層	直 B2	直	刮削器	11.26	18.9	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
133 9014/V層	直 B3	直	刮削器	6.26	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
134 8024/V層	直 B5	直	刮削器	4.26	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
135 807/V層	直 A4	直	刮削器	4.26	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
136 8072/V層	直 C1	直	刮削器	9.06	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
137 10817/V層	直 C2	直	刮削器	9.26	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
138 8023/V層	直 C2	直	刮削器	9.26	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
139 8022/V層	直 D	直	刮削器	9.26	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
140 8012/V層	直 E	直	刮削器	9.26	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
141 9013/V層	直	直	刮削器	12.26	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	
142 809/V層	直	直	刮削器	9.26	-	-	無	外: 深褐色 (10987.4) 內: 深褐色 (10987.5)	黑、灰、 綠	鐵製刀柄 (刀柄)	

衍生土器觀察表（8）

項目 No.	衍生土器／部位	形態	分類	現存 骨骸 部位	「198 骨骸 部位」 部位	出土物 部位	現存 部位	出土物 部位	現存 部位	出土物 部位	現存 部位
143 8/15/V 部	直	-	直	前部(26.26)	-	-	-	-	-	-	-
144b 8/17/V 部	直	-	直	2.26	-	-	-	-	-	-	-
144b 8/17/V 部	直	-	直	-	-	-	-	-	-	-	-
144c 8/25/V 部	直	-	直	-	-	-	-	-	-	-	-

土製品・焼成土塊觀察表

項目 No.	衍生土器／部位	形態	尺寸 (mm) / 厚 (mm)	出土物 部位	現存 部位	出土物 部位	現存 部位	出土物 部位	現存 部位	出土物 部位	現存 部位
145 8/13/V 部	手製土器	U字型アコギ脚	-	-	-	4.98	直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周
146 8/20/V 部	燒成土塊	手製土器	25	21	-	14.07	直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周
147 9/13/V 部	燒成土塊	燒成土塊	52	36	23	19.04	直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周
148 7/13/V 部	燒成土塊	燒成土塊	61	28	19	29.5	直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周
149 8/23/V 部	燒成土塊	燒成土塊	25	21	17	10.52	直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周
150 8/13/V 部	燒成土塊	燒成土塊	25	28	16	12.86	直・長・扁・圓・全周	燒成土器	燒成土器	燒成土器	燒成土器
151 7/25/V 部	燒成土塊	燒成土塊	60	36	26	35.52	直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周
152 SK1160_NP11) / 2	燒成土塊	燒成土塊	28	23	11	7.65	直・長・扁・圓・全周	灰燒土	灰燒土	灰燒土	灰燒土
153 8/25/V 部	燒成土塊	燒成土塊	25	22	18	11.09	直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周	U字型・直・長・扁・圓・全周
154 8/15/V 部	燒成土塊	燒成土塊	23	30	15	14.96	直・長・扁・圓・全周	燒成土器	燒成土器	燒成土器	燒成土器

石器観察表

No.	出土地点(通称名)	出土部位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	G材	素材	連用状態	備考
155	SK1040 (08E15)	層土	A	2.34	1.02	0.54	1.16	×ノウ	織長	完形	
156	RF25	V	A	2.53	0.88	0.62	1.11	織紋岩	織長	完形	
157	RF10	V	A	2.36	0.83	0.39	0.72	織紋岩	織長	完形	
158	RF3	V	A	2.51	0.98	0.56	1.14	織紋岩	織長	完形	
159	RF5	V	A	1.86	1.07	0.49	0.61	織紋岩	織長	完形	濃縮石質光X線複合分析番号1
160	TF22	V	A	2.01	1.08	0.49	0.78	織紋岩	織長	完形	
161	SK1170 (08F14)	I層	A	2.21	0.94	0.43	0.62	織紋岩	織長	完形	
162	SK1170 (08F14)	I層	B	2.61	1.36	0.69	1.48	織紋岩	織長	完形	
163	RF11	V	A	3.13	1.22	0.48	1.57	織紋岩	織長	完形	
164	SK1289 (09F2)	3層	A	2.95	1.20	0.51	1.39	織紋岩	織長	完形	
165	RD17	N	B	1.76	1.41	0.50	0.85	×ノウ	織長	完形	
166	SK1170 (08F14)	I層	B	2.07	1.16	0.31	0.57	織紋質岩	織長	完形	
167	SK1165 (08F2)	I層	B	2.68	1.19	0.59	1.09	織紋岩	織長	完形	
168	TF1	V	B	2.82	1.29	0.44	1.02	織紋岩	織長	完形	
169	RF14	V	C	2.00	1.27	0.42	0.64	×ノウ	織長	完形	
170	RF22	V	C	1.86	1.05	0.32	0.38	織紋岩	織長	完形	濃縮石質光X線複合分析番号3
171	RF7	V	C	2.13	1.17	0.42	0.60	織紋岩	織長	完形	濃縮石質光X線複合分析番号2
172	TD28	V	C	2.49	1.09	0.41	0.57	×ノウ	織長	完形	
173	SK1170 (08F14)	2層	C	2.22	1.32	0.43	0.72	織紋岩	織長	完形	
174	TF3	V	C	2.58	1.49	0.76	1.46	織紋岩	織長	完形	
175	SK1165 (08F2)	2層	C	3.44	1.66	0.47	1.99	×ノウ	織長	完形	
176	RD17	N	C	2.81	1.16	0.51	1.18	織紋岩	織長	完形	
177	SB1607 - P1508	I層	D	2.20	1.27	0.26	0.60	織紋岩	織長	完形	
178	RD25	I	D	2.43	1.18	0.47	1.05	3層	織長	完形	
179	RF1	V	D	3.43	1.34	0.46	1.13	織紋岩	織長	完形	

石器失敗品観察表

No.	出土地点(通称名)	出土部位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	G材	素材	備考
180	RD21	V		2.15	1.27	0.41	1.00	織紋岩		
181	RF12	N		5.17	2.97	1.12	14.13	織紋岩	織長	

石器観察表

No.	出土地点(通称名)	出土部位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	G材	素材	連用状態	備考
182	RF2	V	A	2.99	0.87	0.71	1.45	×ノウ	織長	完形	
183	RF18	V	A	4.37	0.85	0.62	2.01	織紋岩	織長	完形	
184	TF16	V	A	2.29	0.94	0.71	1.35	織紋岩	織長	先端に断著な摩耗部	
185	SK1523	層土	A	2.96	0.88	0.68	1.71	織紋岩	織長	先端に断著な摩耗部	
186	RF15	V	A	3.50	0.92	0.89	2.10	織紋岩	織長	完形	先端に断著な摩耗部
187	RF12	V	A	3.34	1.41	0.73	3.45	織紋岩	織長	完形	先端に断著な摩耗部
188	RF12	V	A	3.88	1.24	0.87	3.89	織紋岩	織長	完形	先端に断著な摩耗部
189	RD9	V	A	4.26	0.96	0.78	2.87	織紋岩	織長	完形	
190	RF14	V	B	2.89	2.01	0.76	2.20	織紋岩	織長	完形	
191	RF9	—	B	3.45	2.16	1.35	2.71	織紋岩	織長	古び、中世の遺物(SK507)への鉄人品	
192	RF22	V	B	3.83	3.56	1.71	11.32	織紋岩	織長	織部欠	
193	RF9	V	B	2.92	2.70	0.87	3.56	織紋岩	織長	完形	
194	RD18	V	B	2.49	2.60	0.53	1.72	織紋岩	織長	完形	
195	SK1227 (08E25)	I層	C	2.72	1.23	0.70	1.17	織紋岩	織長	先端に断著な摩耗部	
196	SK1823 (RD5)	層土	C	3.30	1.57	0.69	2.05	織紋質岩	織長	完形	

不定形石器観察表

No.	出土地点(通称名)	出土部位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	G材	素材	二次装飾部位	備考
197	SK1040 (08E15)	2層	A	9.37	3.63	2.77	54.78	織紋岩	織長	左側縫	
198	SK1227 (RF25)	3層	A	5.35	2.95	1.76	18.58	織紋岩	織長	左側縫	
199	TF9	V	A	5.14	4.54	1.16	22.25	織紋岩	織長	左側縫	
200	RD15	V	B	8.63	5.28	2.46	59.31	織紋岩	織長	右側縫	
201	RF9	V	C	5.62	4.53	1.64	37.14	織紋岩	織長	下縫	
202	RF25	V	D	1.95	1.73	0.37	1.08	×ノウ		使用感あり	
203	RF12	V	D	3.87	4.05	1.23	16.70	織紋岩	織長	使用感あり	
204	RF2	V	D	5.89	3.20	1.92	25.51	織紋岩	織長	使用感あり	

遺物観察表

両極剥離痕のある石器観察表

No.	出土地點(通称名)	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	LH	備考
205	6E15	V	A	2.22	1.85	0.97	3.34	海綿岩	
206	BD18	V	A	3.45	2.55	0.91	5.50	海綿岩	
207	8E20	V	A	5.27	4.61	2.91	63.81	メソウ	
208	RF14	V	A	3.66	3.45	1.31	34.61	海綿岩	
209	BD12	V	A	3.87	4.42	1.45	21.87	海綿岩	
210	9E18	V	A	3.38	1.89	0.89	6.58	海綿岩	
211	BD19	V	B	3.05	5.15	1.66	48.77	海綿岩	
212	10E17	V	B	3.35	2.45	0.72	5.26	海綿岩	
213	1105	V	C	2.43	1.48	0.63	1.66	海綿岩	
214	9E2	V	C	2.74	3.43	1.10	8.80	海綿岩	

磨製石斧観察表

No.	出土地點(通称名)	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	造作状態	備考
215	8E23	V	7.5	3.0	1.6	57.14	海綿岩	完形	使用者のツブレ
216	11C13	V	7.4	4.3	1.7	74.91	海綿岩	完形	鋸削時のツブレ
217	RF7	V	6.4	4.9	1.3	59.62	海綿岩	完形	鋸削時のツブレ
218	10F14	V	7.8	4.4	3.1	156.41	海綿岩	基部欠損	
219	試測5T	表面標集	4.0	1.2	0.8	5.82	花崗岩	基部欠損	
220	9E22	V	2.1	2.1	0.8	3.93	海綿岩	刃部欠損	

敲磨石類観察表

No.	出土地點(通称名)	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	表面由来				造作状態	備考
								粗	細	端	縫		
221	8E20	V	A	10.4	8.2	6.0	658.61	花崗岩	○			完形	
222	SK1611	4層	A	10.4	6.7	5.2	484.93	花崗岩	○			完形	
223	10E23	V	A	7.6	6.3	3.6	226.94	花崗岩	○			完形	
224	P1051 (BD25)	2層	A	9.0	8.2	5.9	600.37	花崗岩	○			完形	
225	SK1623 (9E05)	1層	A	11.1	8.7	6.3	837.37	花崗岩	○			完形	
226	9E7	V	A	11.9	10.9	3.1	622.28	花崗岩	○			完形	
227	8E2	V	A	14.8	12.4	2.8	800.09	ヒン岩	○			完形	
228	TE16	V	A	11.8	10.1	6.4	947.12	花崗岩	○			完形	
229	SK1040 (9E15)	2層	A	11.3	8.7	4.3	612.19	花崗岩	○			4／5	
230	9E8	V	B	8.6	7.9	5.4	439.73	花崗岩	○	○		3／5	
231	9E8	V	B	11.5	9.1	5.5	484.37	花崗岩	○	○		完形	
232	SK1040 (9E20)	2層	B	15.7	10.5	4.2	666.05	花崗岩	○	○		完形	
233	BD24	V	B	16.8	8.1	7.3	747.84	海綿岩	○	○		完形	
234	BD19	V	B	15.0	10.4	7.4	1019.17	海綿岩	○	○		3／5	
235	SK1165 (8E8) - P1392	1層／V	B	26.8	7.4	6.0	1400.00	海綿岩	○	○	○	完形(複合)	
236	9E7	V	C	8.9	8.1	4.9	475.20	花崗岩	○			完形	
237	P1352 (7E3)	1層	C	10.2	8.3	4.3	533.04	花崗岩	○	○		完形	
238	SH1607 - P1392	1層	C	10.8	9.4	6.0	853.91	花崗岩	○			完形	
239	8E5	V	C	10.8	8.5	5.7	777.45	花崗岩	○			完形	
240	SK1394 (7E5)	1層	C	6.5	4.6	2.5	113.15	花崗岩	○			○ 3／5	剥離面にも微痕
241	SK2124 (9E20)	2層	C	13.2	11.5	4.9	1000.65	花崗岩	○			完形	
242	SK1640 (8E11)	1層	C	9.9	8.6	4.8	564.97	花崗岩	○	○		4／5	
243	9E12	V	D	8.1	8.0	4.5	422.63	石英斑岩	○	○		完形	
244	BD10	V	D	8.6	6.6	4.6	220.68	海綿岩	○	○		○	完形
245	R15	V	D	11.8	9.5	4.5	768.77	花崗岩	○	○	○	完形	
246	BD22	V	D	9.3	7.8	5.6	611.03	花崗岩	○	○	○	4／5	
247	6E10	V	E	9.4	7.7	3.7	218.82	海綿岩	○			完形	
248	9E2	V	F	19.1	12.9	8.1	2120.17	花崗岩	○			○	4／5
249	9E20	V	F	8.4	5.5	3.7	274.73	海綿岩	○			○	鏡状の柱痕も顕打によるものと考ええた。
250	P1051 (BD25)	1層	F	10.9	5.9	5.8	330.49	海綿岩	○			○	完形
251	SK1523	覆土	F	7.8	6.2	3.4	205.34	カルシフュラスト	○			○ 3／5	鏡状の柱痕も顕打によるものと考ええた。
252	SK1397 (9E21)	V	F	13.0	6.5	4.1	366.03	花崗岩	○			○	完形
253	SK1397 (9E21)	V	F	15.4	8.9	7.2	1039.44	カルシフュラスト	○			○	完形
254	9E12	V	F	7.4	4.5	2.8	109.13	花崗岩	○			○ 4／5	
255	SH1607 - P1391	6層	F	8.9	4.5	2.6	130.24	花崗岩	○			○ 4／5	
256	SK1227 (8E20)	3層	F	8.5	6.4	3.0	203.74	海綿岩	○			○ 4／5	

石皿・砥石・台石類観察表

No.	出土地点(通称名)	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	G材	遺存状態	備考
257	RF12	V	23.2	21.8	4.5	3700.00	花崗岩	完形	
258	SK1523 (905)	1層	19.1	17.9	4.3	2400.00	花崗岩	完形	
259	13C16	V	30.5	15.3	8.2	4700.00	花崗岩	欠損	
260	RF9	V	16.6	8.2	2.4	448.53	砂岩	欠損	
261	10H15	V	17.0	13.7	6.1	1672.19	花崗岩	欠損	
262	6P2	V	17.3	19.5	6.4	2700.00	花崗岩	欠損	
263	SB1607 - P1507	1層	10.6	6.4	5.1	216.48	花崗岩	欠損	
264	10E2	V	13.9	12.6	7.1	1617.65	安山岩	欠損	円状の敲打痕あり。
265	BD25	V	4.6	3.7	3.1	11.67	軽石	完形	
266	6K11	V	7.4	10.3	8.8	1100.33	閃雲岩	欠損	
267	RD24	V	17.0	8.9	8.1	1471.72	花崗岩	欠損	

石核観察表

No.	出土地点(通称名)	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	G材	備考
268	SB1607 - P1392	1層	A	81.41	158.04	61.62	827.98	良石	
269	7E13	V	B	68.79	148.77	68.87	495.53	花崗岩	
270	9E7	V	B	81.93	111.75	43.35	352.23	花崗岩	
271	8H12	V	A	45.68	48.54	41.22	113.54	花崗岩	
272	SB1607 - P1241	1層	A	88.41	103.27	45.75	286.50	花崗岩	
273	RF2	V	A	27.55	51.94	29.35	29.67	花崗岩	
274	11C7	V	B	41.29	103.20	54.66	171.91	花崗岩	
275	P1024 (7H9)	2層	B	43.11	81.65	39.34	140.67	×ノフ	

異形石器観察表

No.	出土地点(通称名)	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	G材	基材	備考
276	7H10	V	48.17	13.06	11.07	5.52	泥灰岩	板瓦	
277	9H8	V	27.13	14.38	6.35	2.35	黑色細粒安山岩	板瓦	
278	6F8	—	18.0	12.8	4.8	532.50	軽石	—	いわゆる「雨垂れ石」。 古代のビットP1387の1層から出。

玉類観察表

No.	出土地点(通称名)	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	G材	基材	備考
279	8H2	V	3.9	2.0	1.8	18.29	ヒスイ	碧玉	
280	RF13	V	3.7	2.7	0.8	13.56	蛇紋岩	碧玉	
281	SK1289 (9E22)	2層	2.1	1.2	0.4	1.50	蛇紋岩	碧玉	
282	BD25	V	2.3	2.1	0.9	2.38	泥灰岩	碧玉	
283	SB1607 - P1392	9層	2.5	1.7	1.0	8.00	ヒスイ	原石	
284	7F1	V	3.0	2.3	1.9	21.84	蛇紋岩	原石、狹義のロディン岩	
285	P1413 (7E13-14)	2層	2.4	2.2	1.4	8.61	蛇紋岩	原石、狹義のロディン岩	

図 版

凡 例

- 1 造構平面図で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

焼土範囲 

炭化物範囲 

地山が変質（変色）したと考えられる範囲 

- 2 造構断面図で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

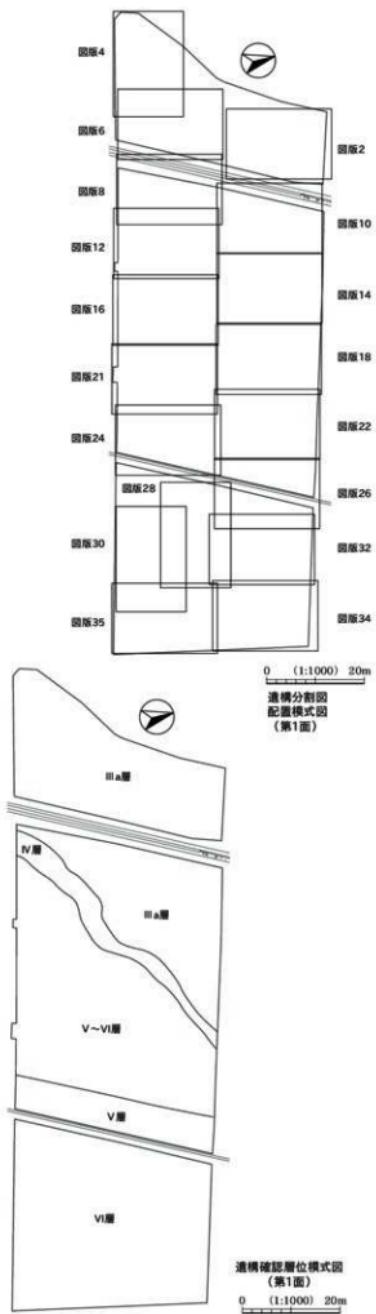
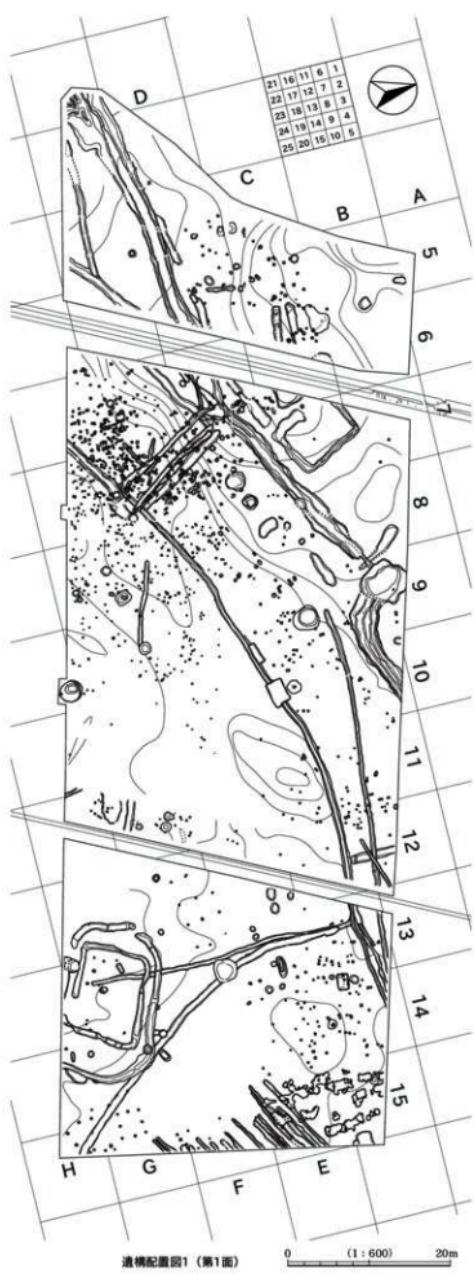
炭化物の混入が10%以上、もしくは主体とする堆積層 

- 3 造物図版で使用したスクリーントーンの凡例は実測図とともに個別に示した。

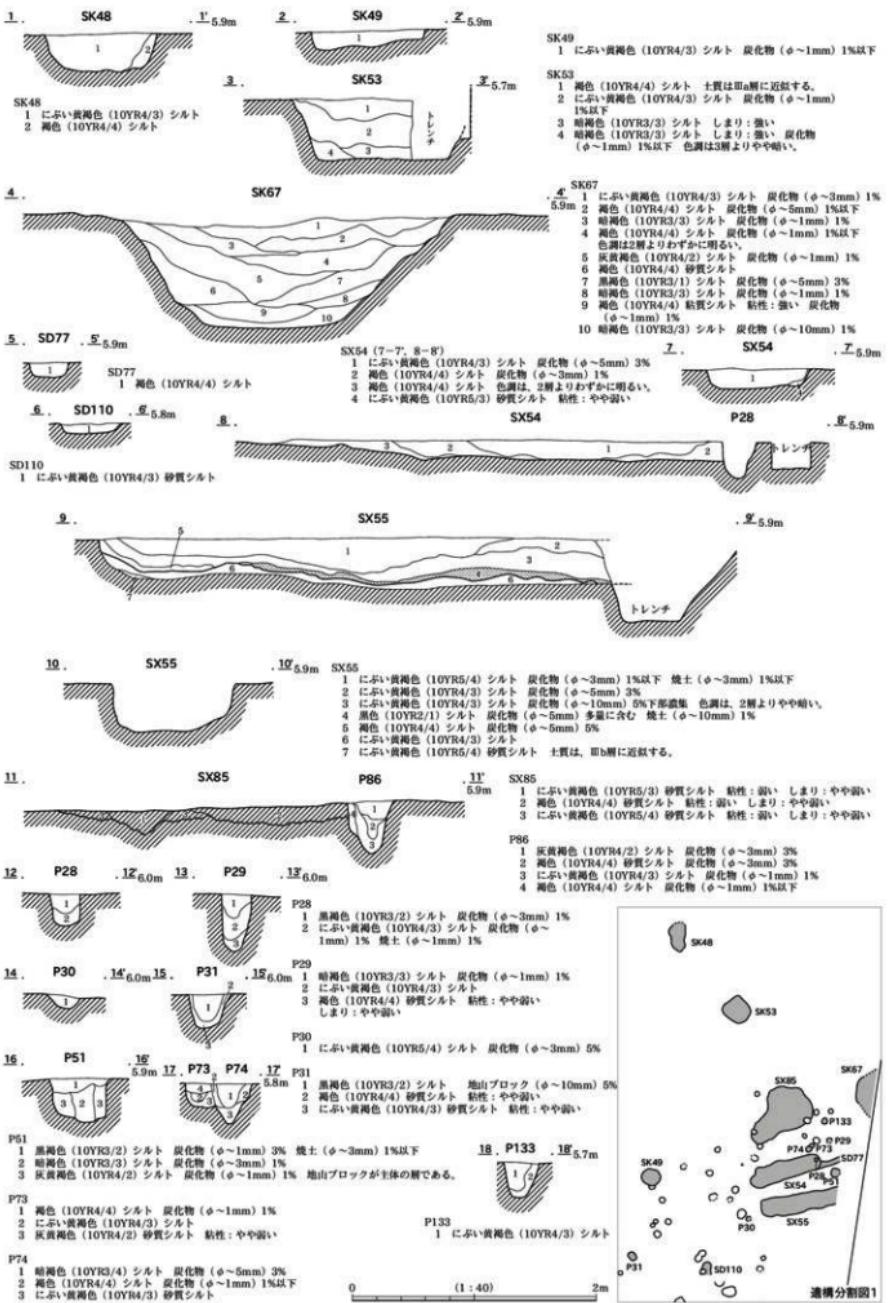
- 4 土器は須恵器を断面塗りつぶしとし、これ以外については白抜きとした。

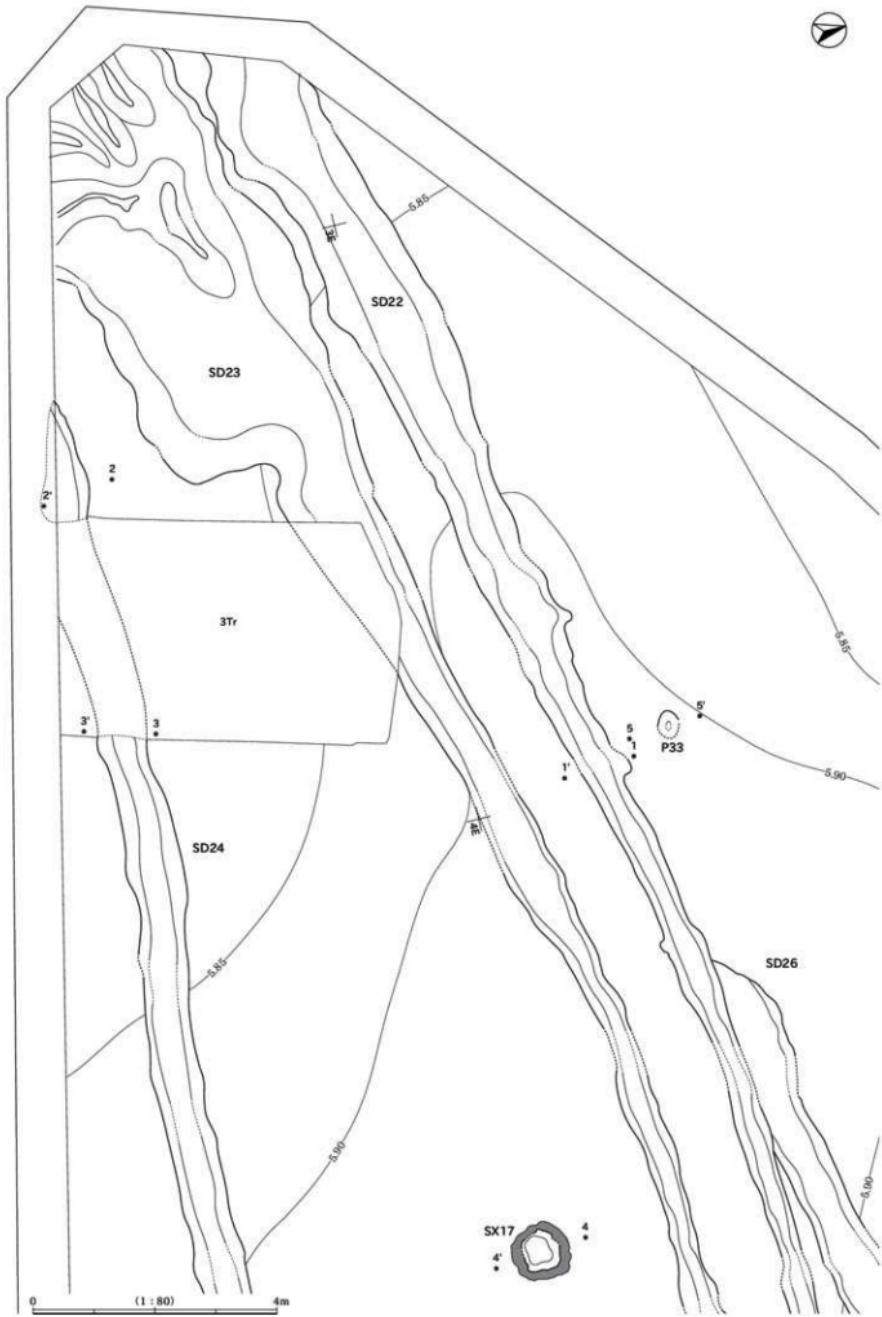
- 5 造構側別図において、据立柱建物を構成するピットに●記号を付した。

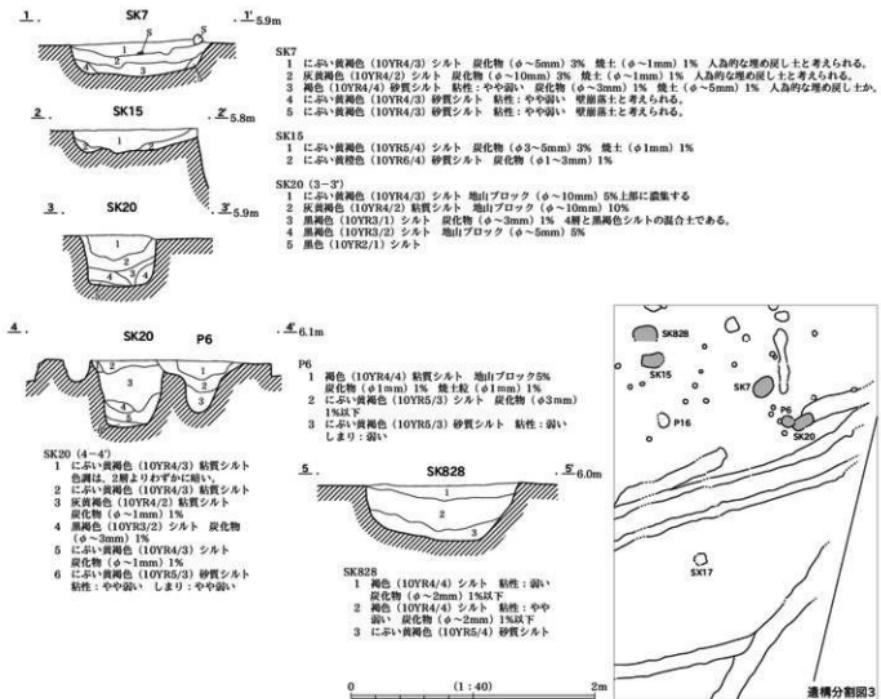
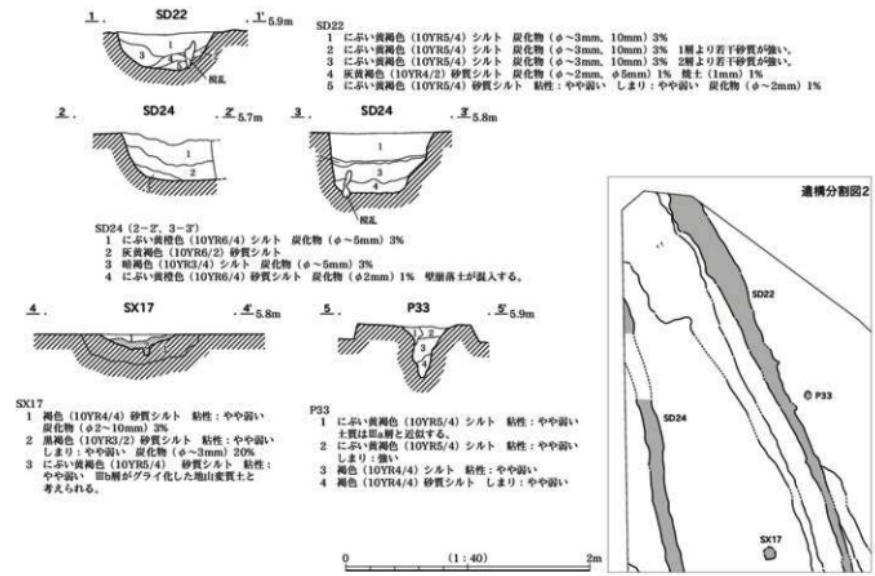
- 6 造物写真図版の縮尺は、図面図版と概ね同じである。

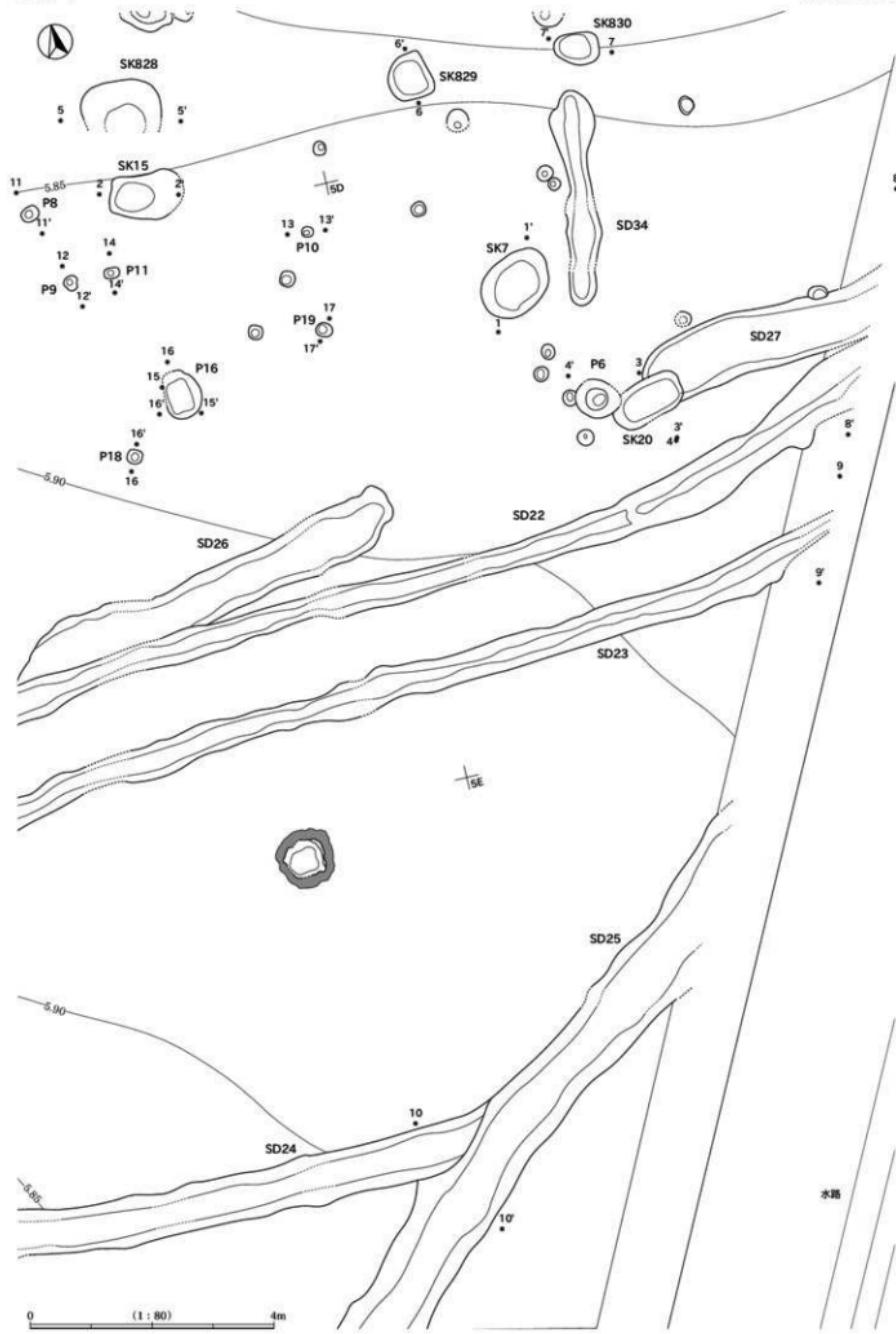




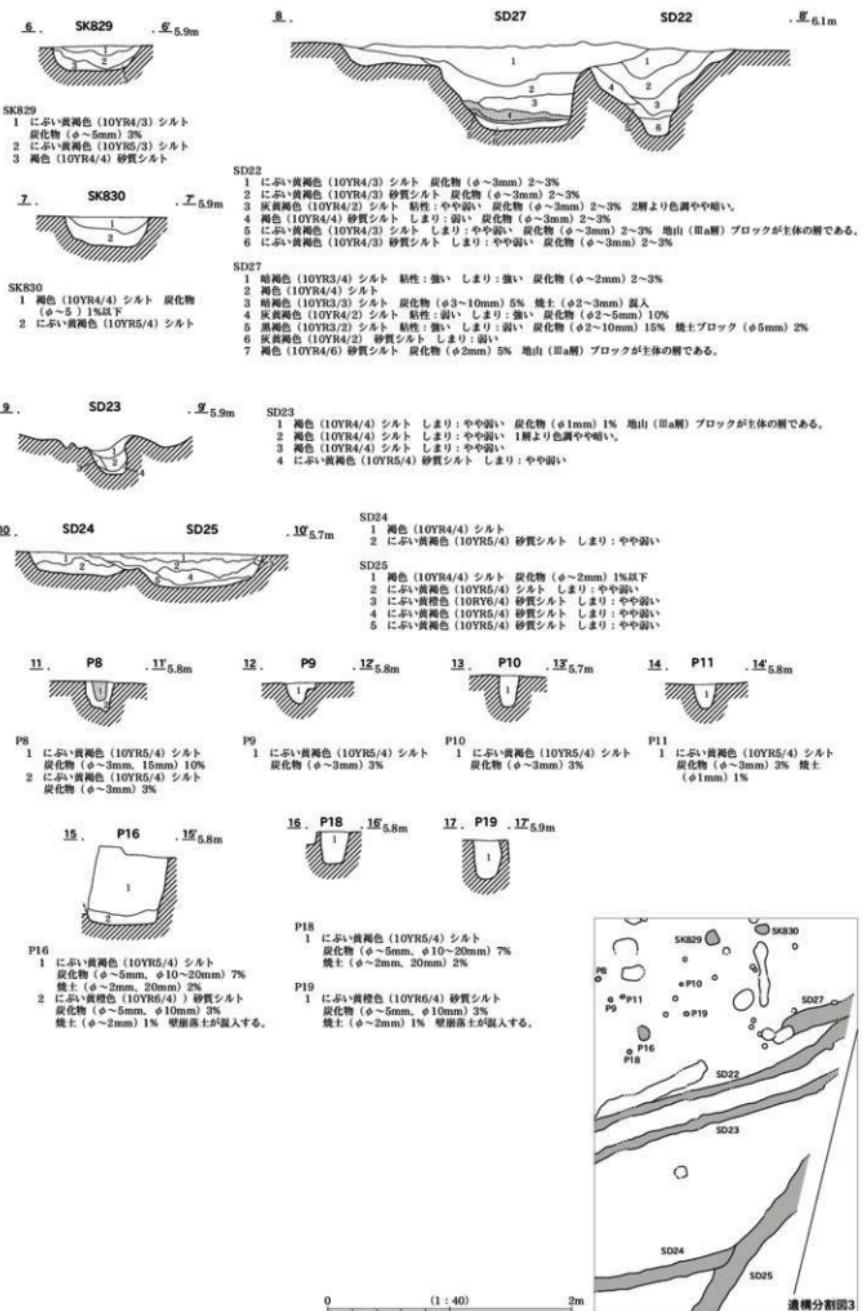








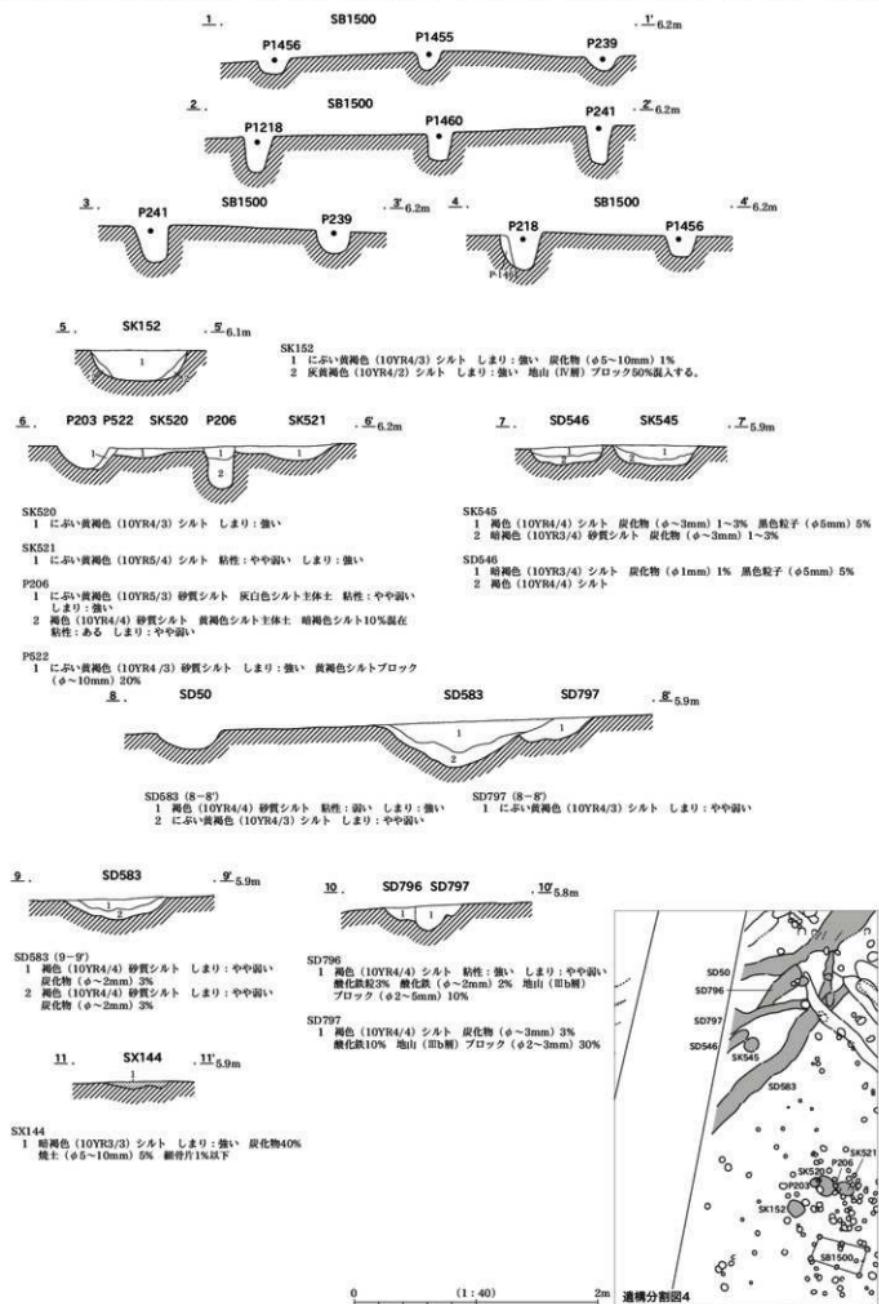
遺構個別図 3 (SK829・830, SD22~25・27, P8~11・16・18・19)



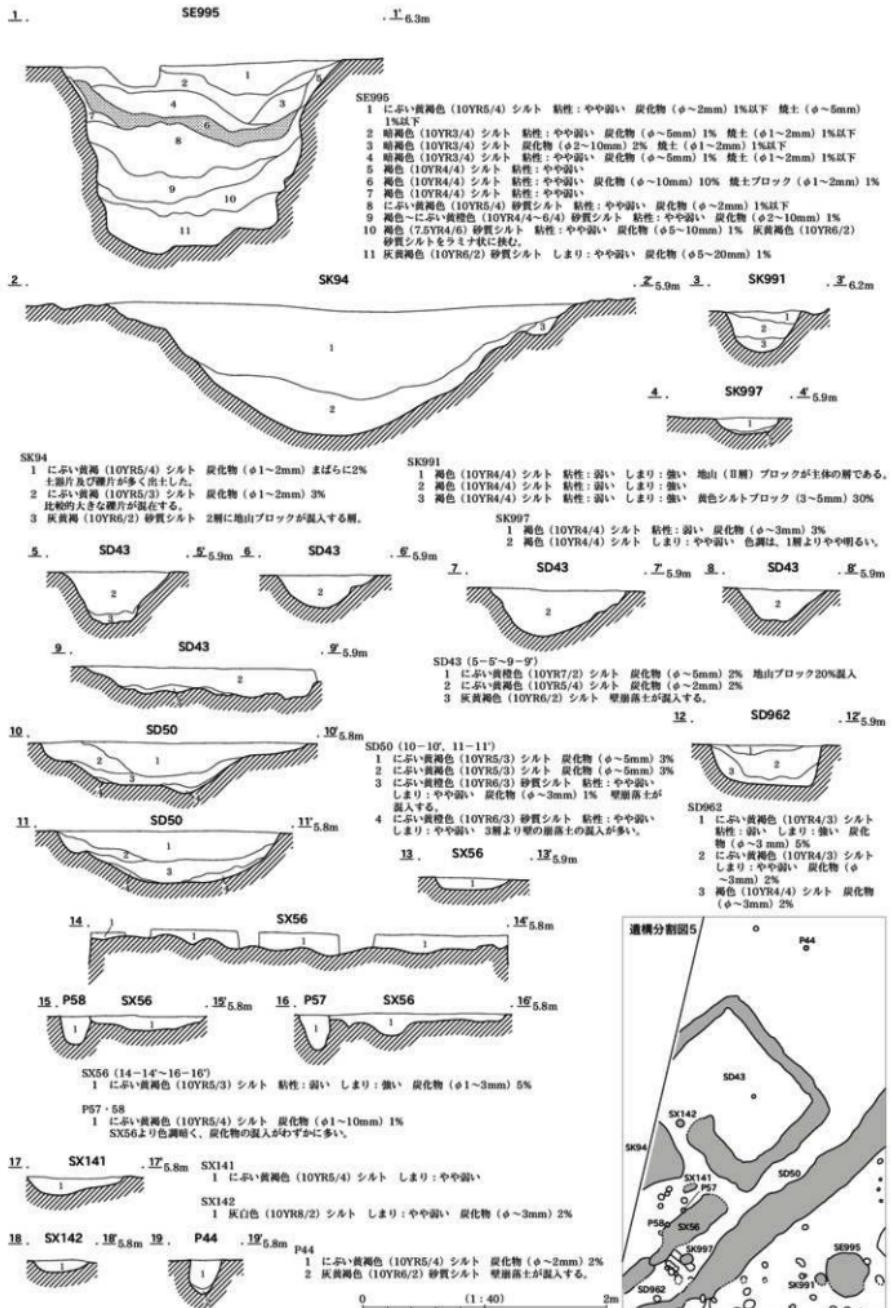
圖版 8

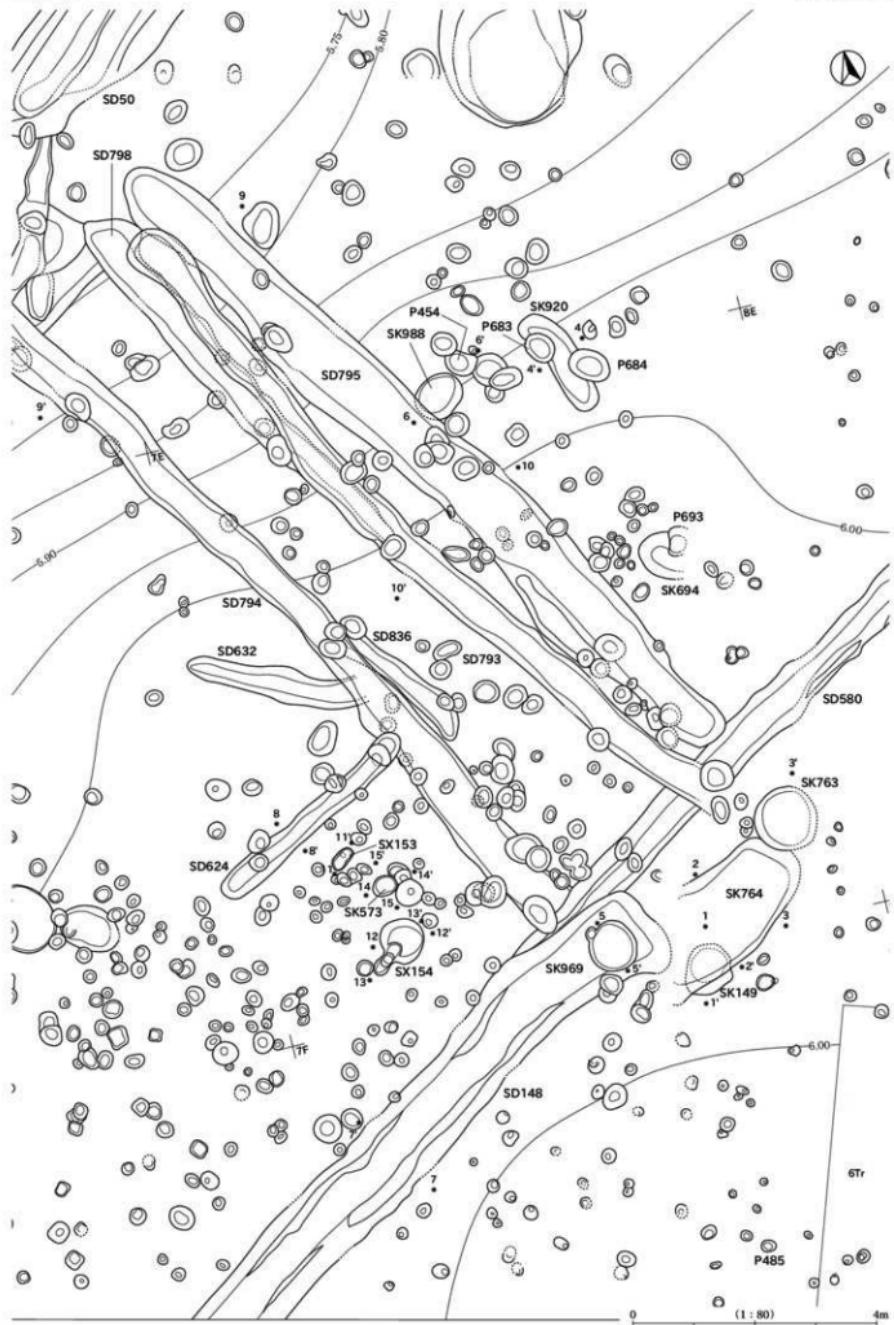
遺構分割図 4







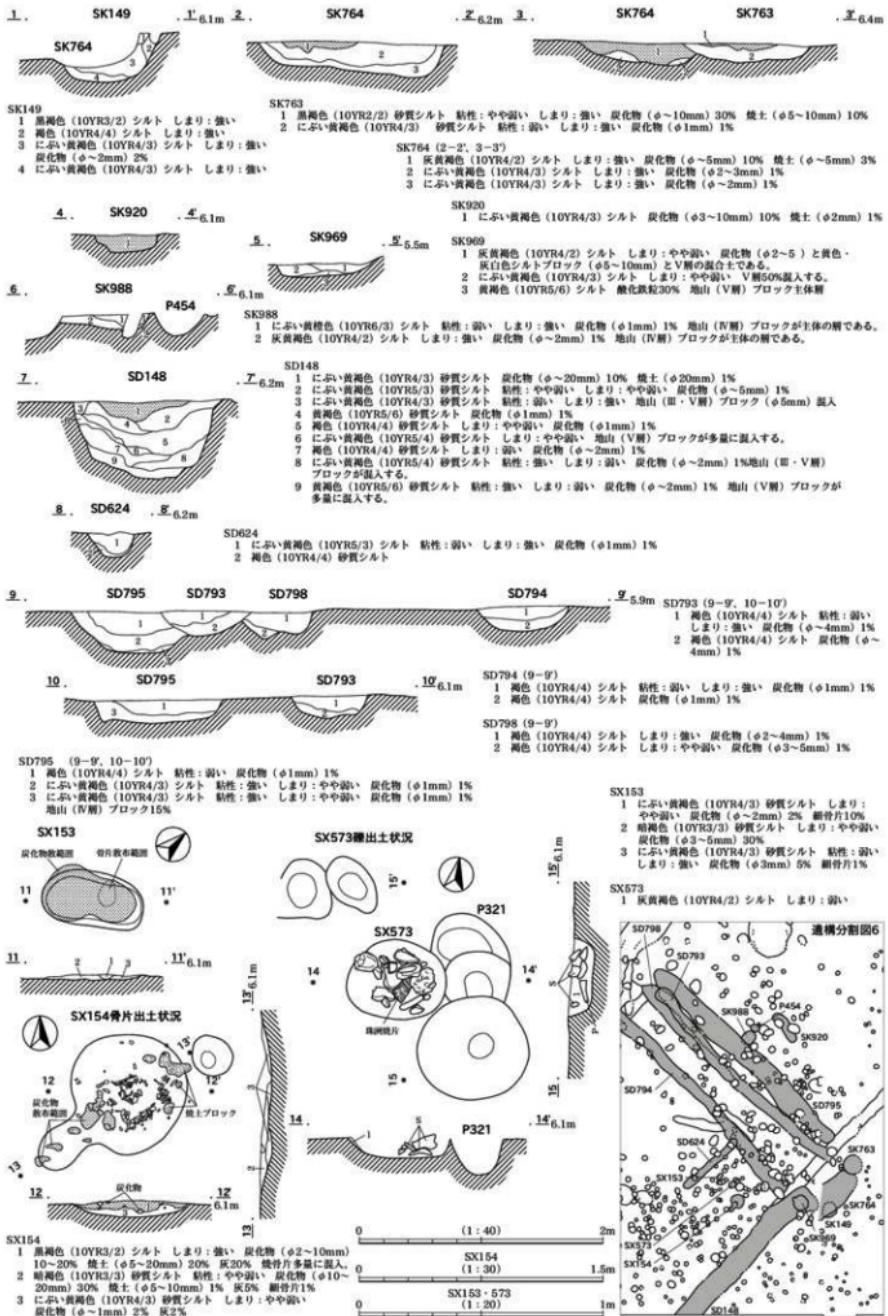


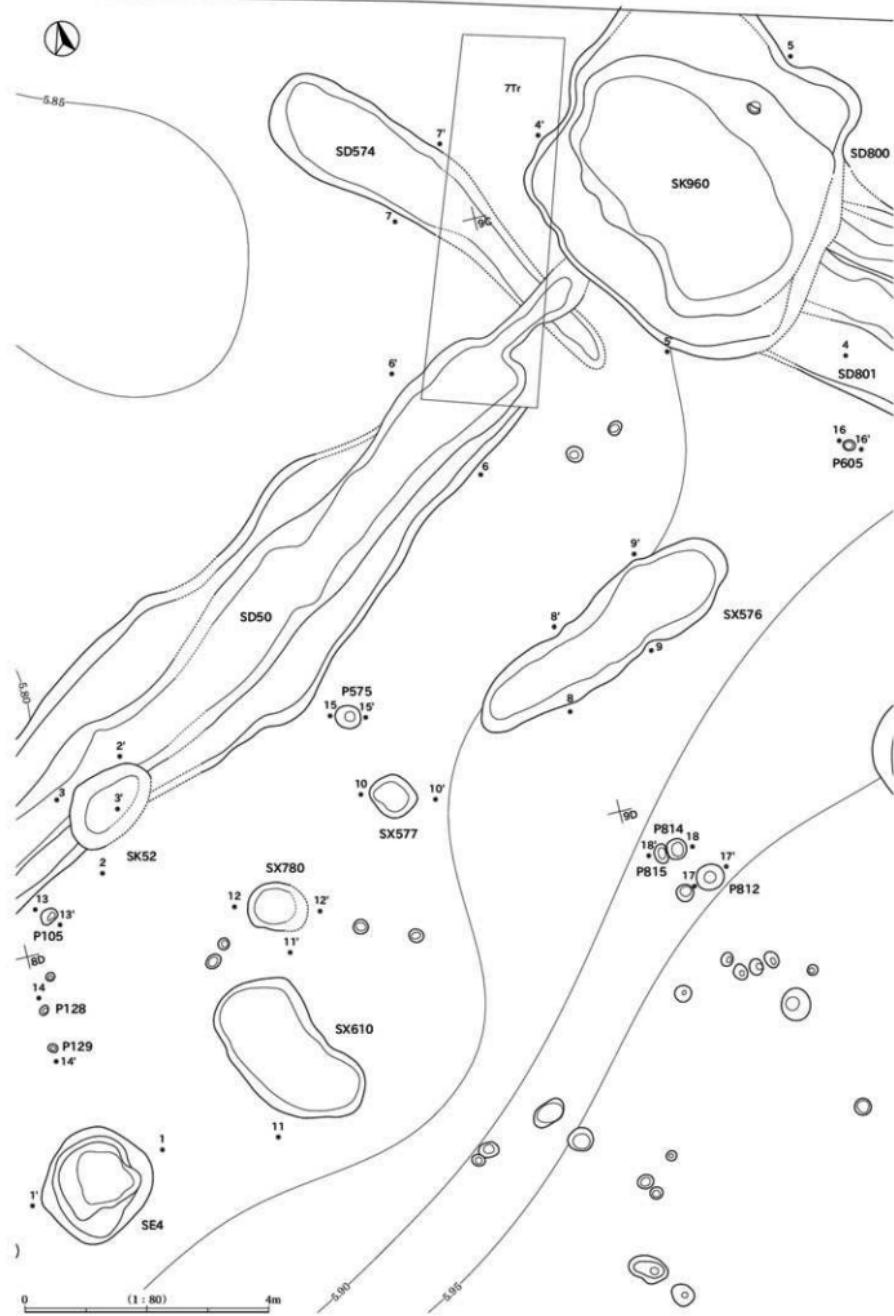


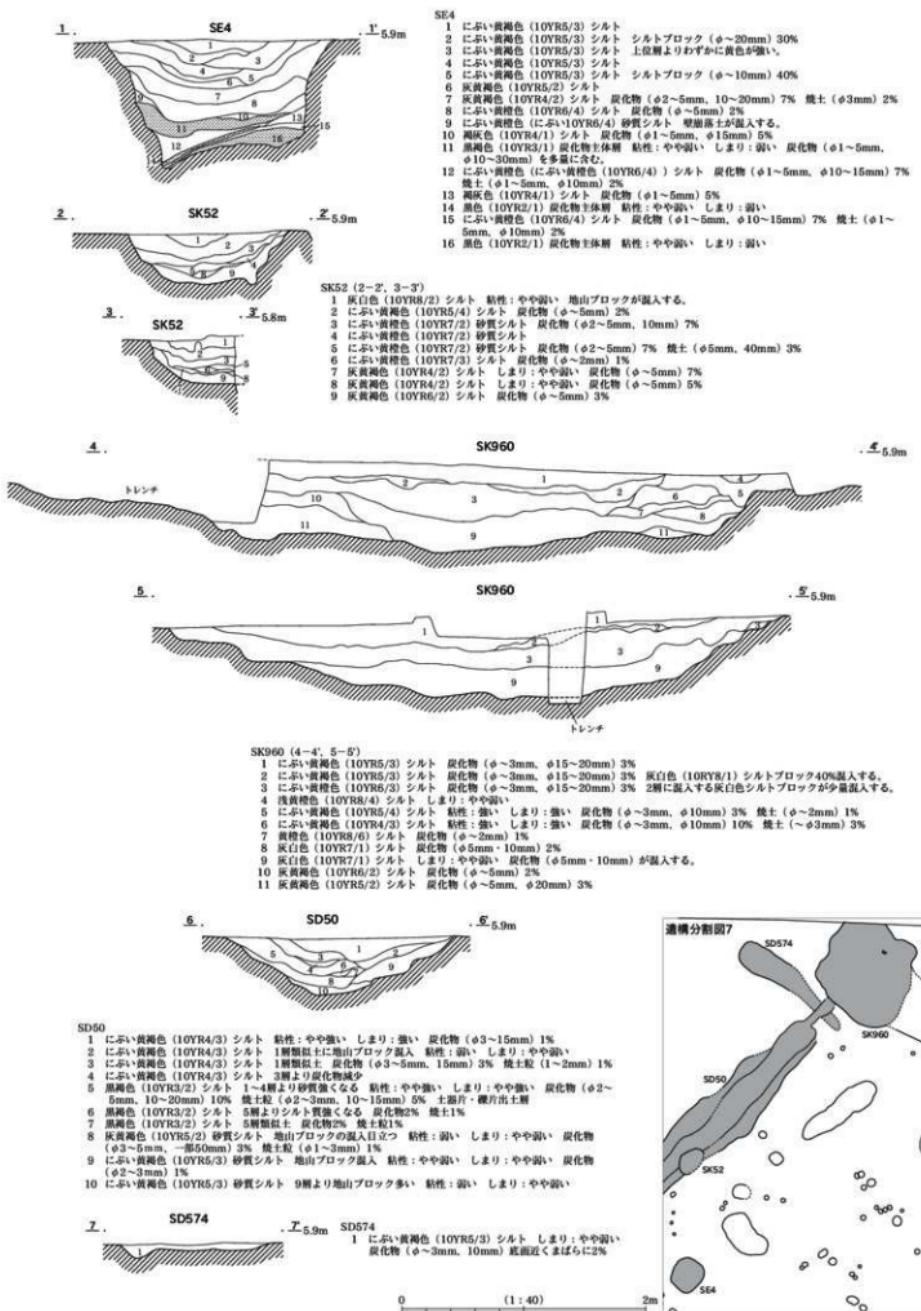
遺構個別図 6

(SK149 · 763 · 764 · 920 · 969 · 988, SD148 · 624 · 793 ~ 795 · 798, SX153 · 154 · 573, P321 · 454)

図版 13

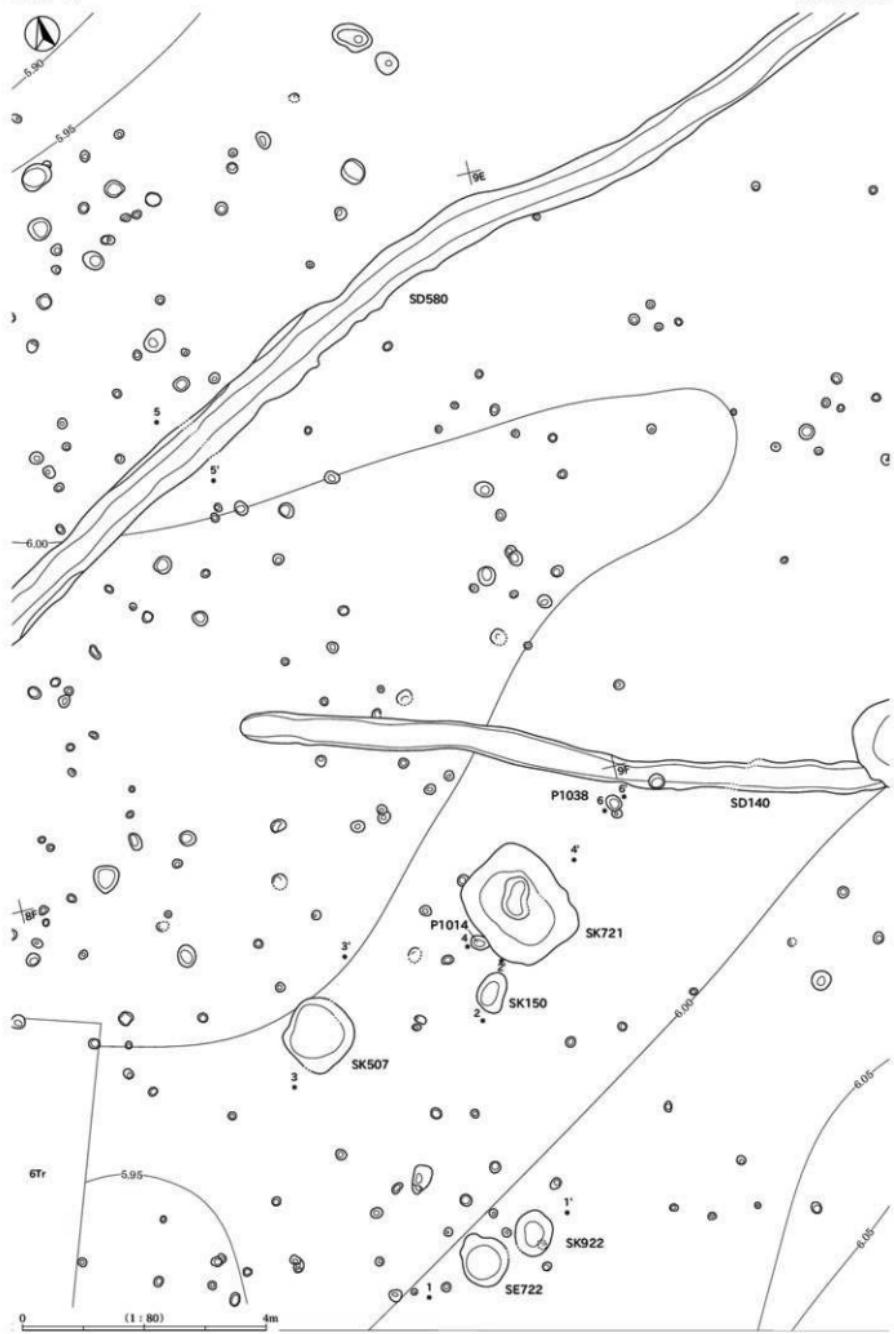


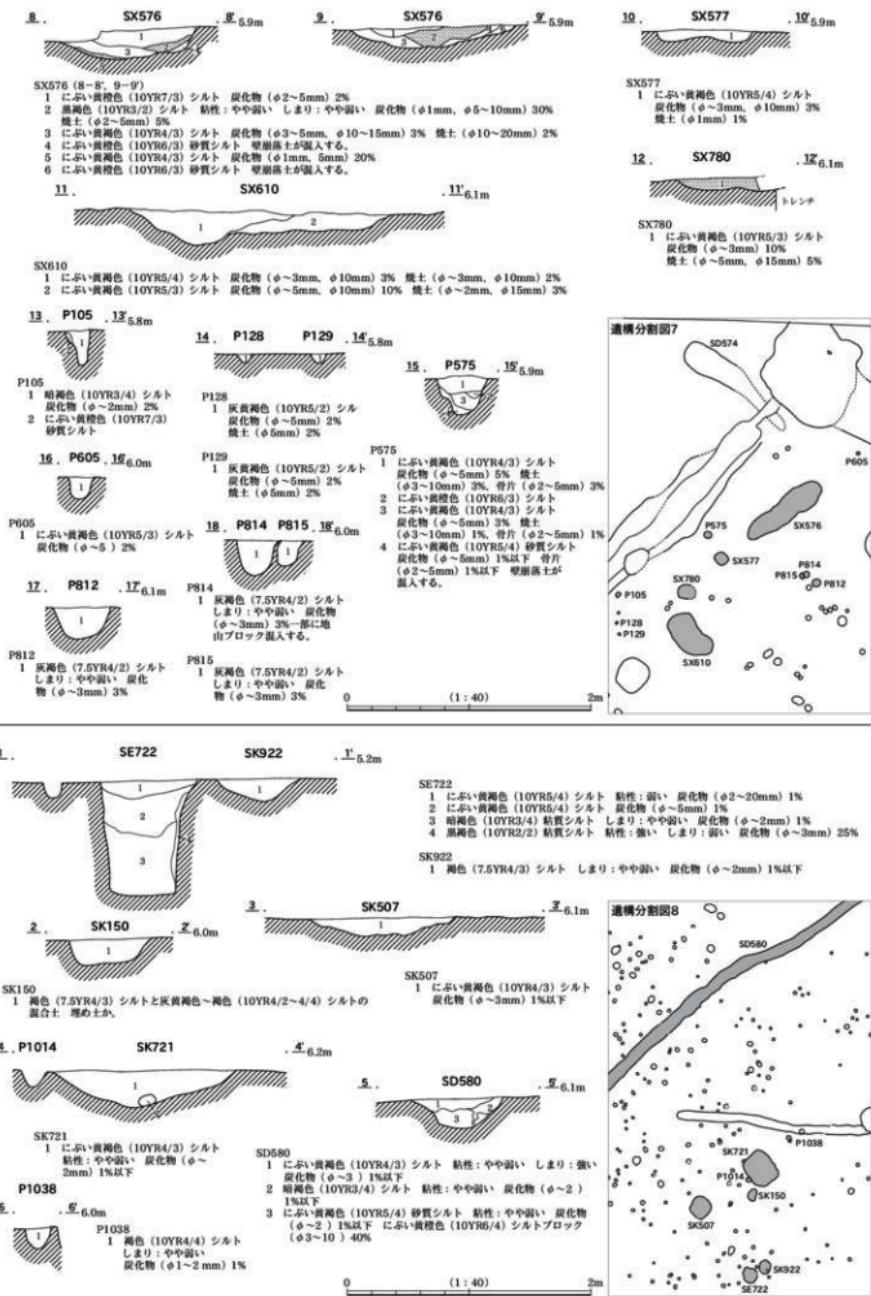


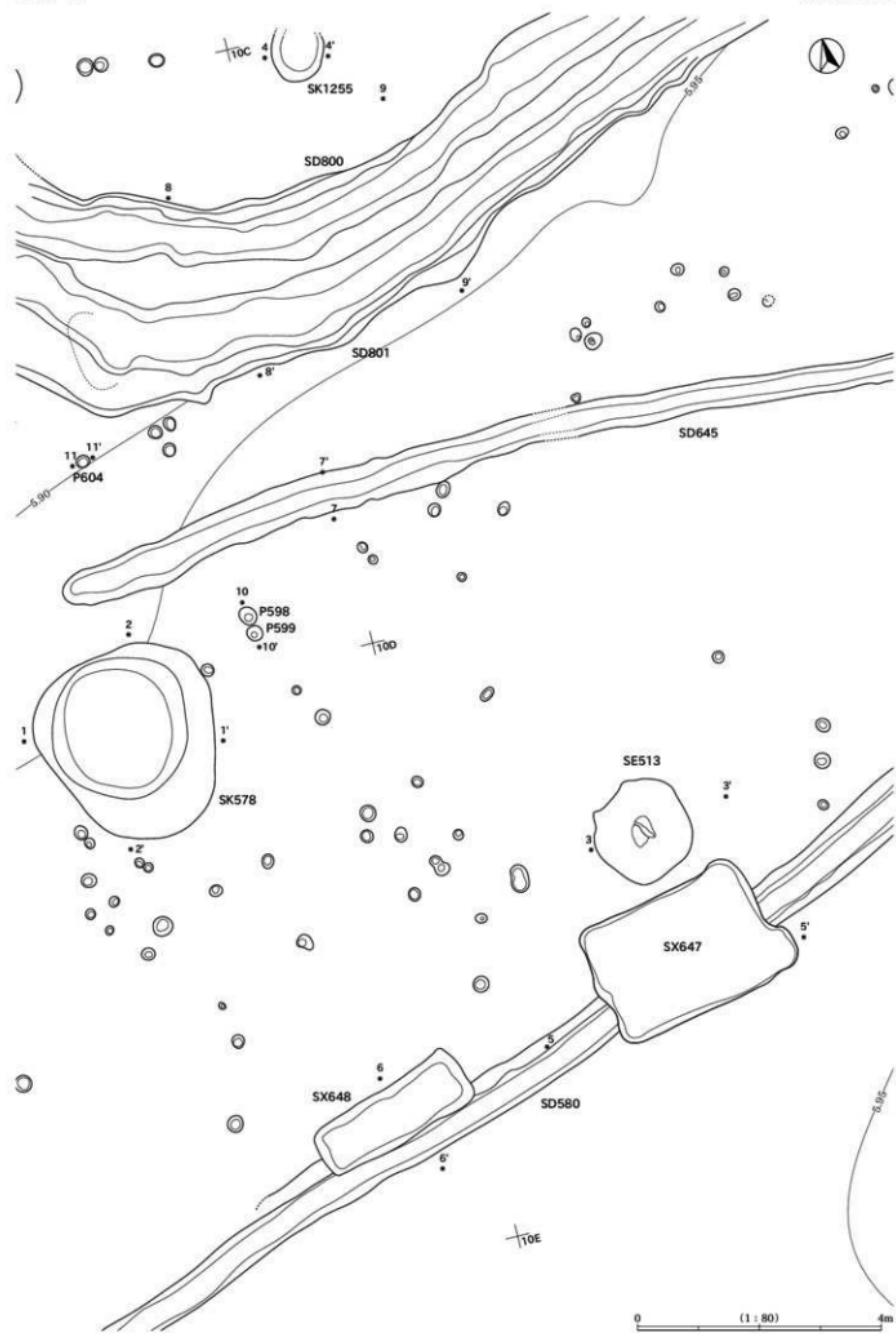


図版 16

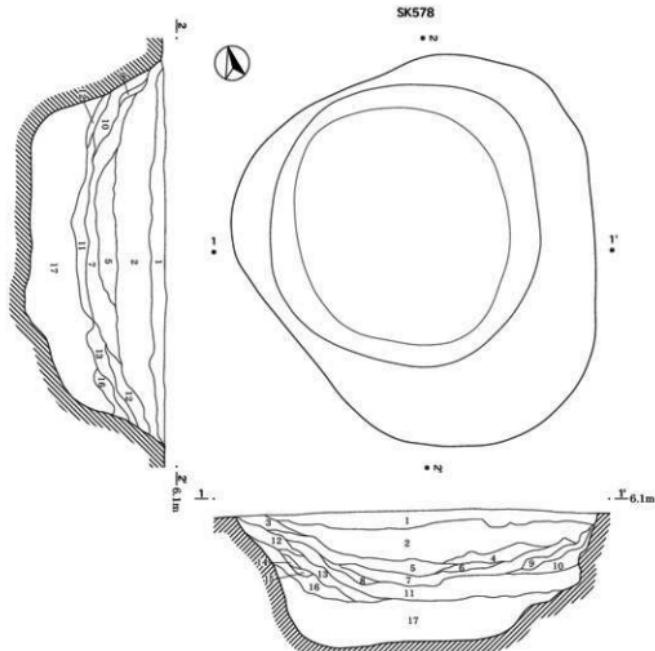
造構分割図 8





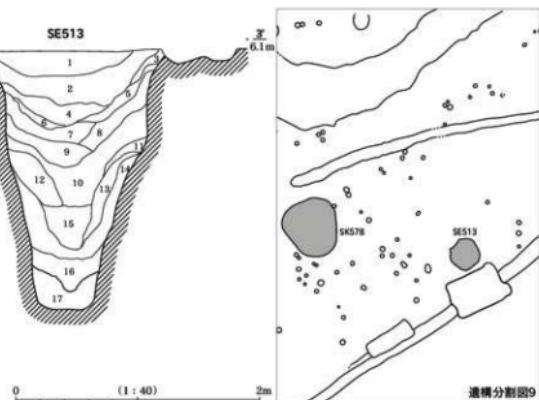


遺構別図 9 (SE513, SK578)

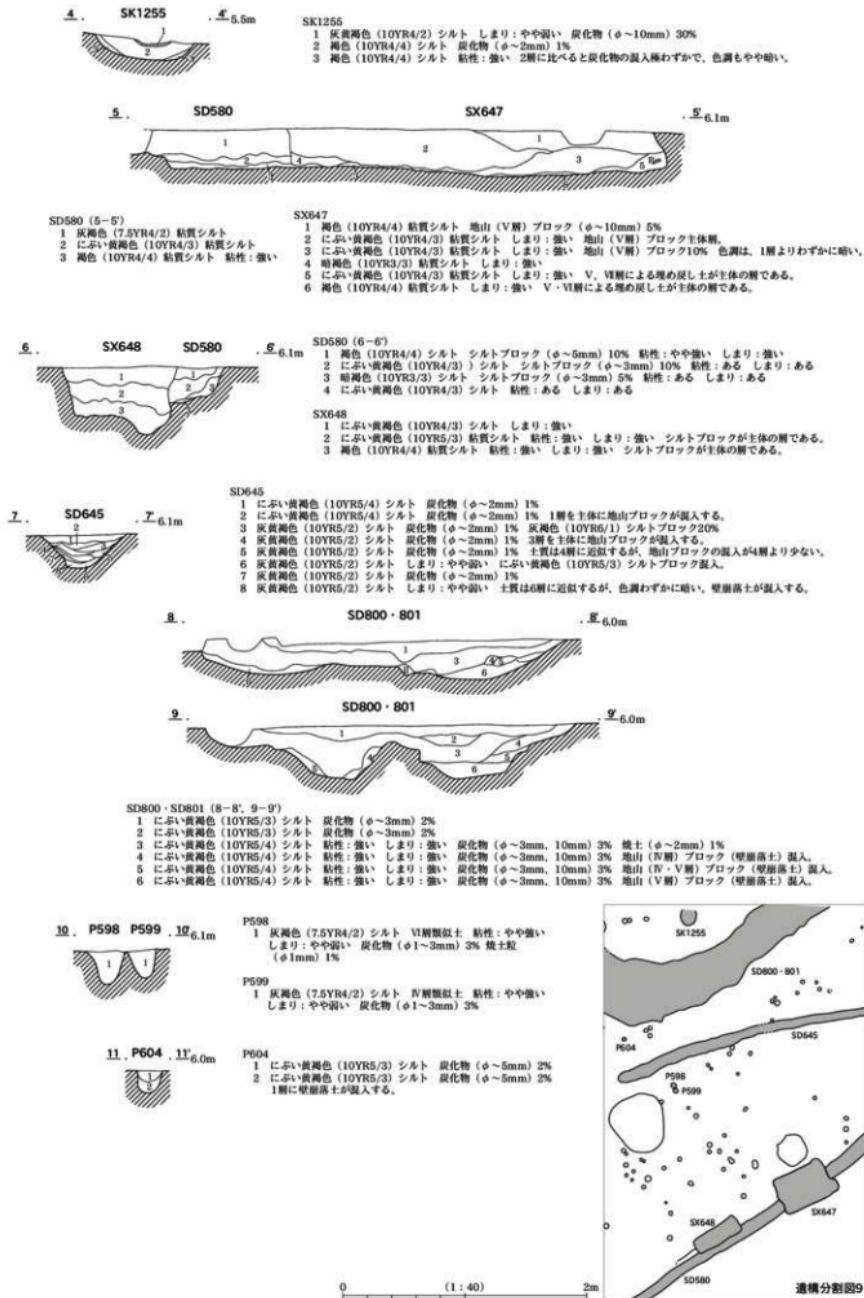


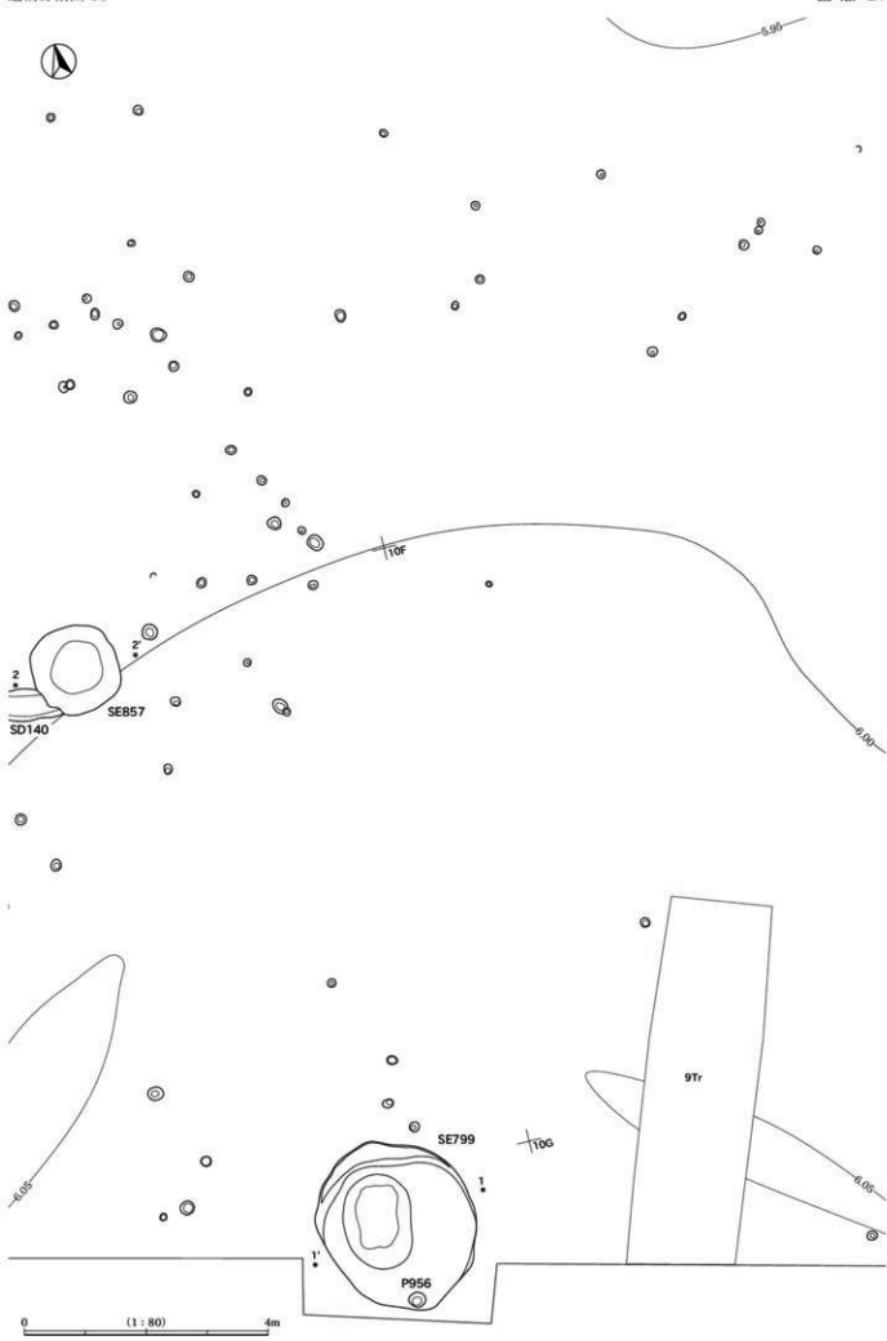
- SK578
1. 黒褐色 (10YR4/2) シルト 壊化物 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 1%
 2. にふい黄褐色 (10YR6/4) シルト 壊化物 ($\phi 2\sim10\text{mm}$, 20mm) 5% 硫土 ($5\sim10\text{mm}$) 2%
 3. にふい黄褐色 (10YR6/4) シルト 壊化物 ($\phi 2\sim10\text{mm}$, 20mm) 2%
 4. にふい黄褐色 (10YR6/4) シルト 壊化物 ($\phi 2\sim10\text{mm}$, 20mm) 3% 硫土 ($\phi 5\text{mm}$) 2%
 5. にふい黄褐色 (10YR6/4) シルト 壊化物 ($\phi 2\sim10\text{mm}$, 20mm) 3%
 6. にふい黄褐色 (10YR6/4) シルト 壊化物 ($\phi 2\sim10\text{mm}$, 20mm) 5%
 7. にふい黄褐色 (10YR6/3) シルト 壊化物 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 2%
 8. にふい黄褐色 (10YR6/3) シルト 壊化物 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 1%
 9. にふい黄褐色 (10YR6/3) シルト 壊化物 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 2% 壊化土が混入する。
 10. にふい黄褐色 (10YR6/3) シルト 壊化物 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 2% 壊化土が混入する。
 11. にふい黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルト 壊化物 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 2% 壊化土が混入する。
 12. にふい黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルト 壊化物 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 2% 硫土 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 1% 11層より堅壁落土が混入する。
 13. にふい黄褐色 (10YR6/3) シルト 粘性: やや弱い しまり: やや弱い 壊化物 ($\phi \sim 3\text{mm}$) 2% 硫土 (5mm) 1%
 14. にふい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト
 15. にふい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト 壊化物 ($\phi 10\text{mm}$) 1%
 16. にふい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト 壊化物 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 2% 壊化土が混入する。
 17. 湖底色 (10YR4/1) 砂質シルト

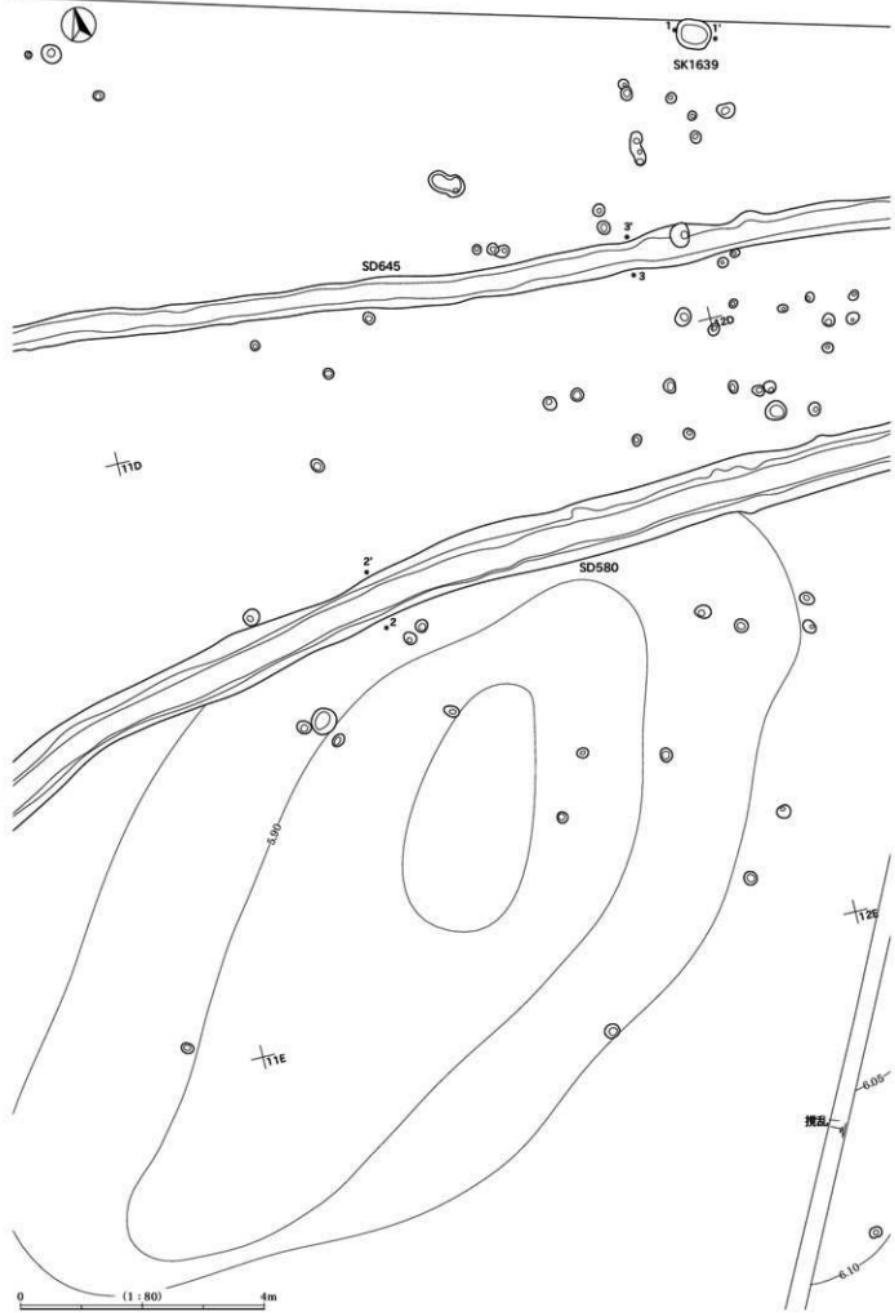
- SE513
1. 黒褐色 (10YR4/2) シルト 壊化物 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 1%以下
 2. 黄褐色 (10YR3/10) シルト 壊化物 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 1% 地山ブロック ($\phi \sim 10\text{cm}$) 3%
 3. 黑褐色 (10YR3/2) シルト 地山ブロック ($\phi \sim 10\text{cm}$) 3%
 4. 黄褐色 (10YR3/4) シルト 地山ブロック ($\phi \sim 10\text{mm}$) 5%
 5. 黑褐色 (10YR4/4) 粘質シルト 粘性: 強い 坚壁落土が全体の層である。
 6. 黑褐色 (10YR3/2) シルト 粘性: 強い 坚壁落土とを考えられる地山ブロックが全体の層である。
 7. 黑褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 壊化物 ($\phi \sim 3\text{mm}$) 1%以下
 8. 黄褐色 (10YR3/4) シルト
 9. 黄褐色 (10YR3/3) シルト
 10. にふい黄褐色 (10YR4/3) シルト 地山 (4層) ブロック ($\phi \sim 10\text{mm}$) 5%
 11. 黄褐色 (10YR4/4) 粘質シルト 粘性: 強い 坚壁落土が全体の層である。
 12. にふい黄褐色 (10YR4/4) 粘質シルト 粘性: 強い 地山ブロック ($\phi \sim 10\text{mm}$) 3%
 13. 黄褐色 (10YR3/3) シルト 地山ブロック ($\phi \sim 5\text{mm}$) 5%
 14. にふい黄褐色 (10YR5/4) 粘質シルト 地山ブロックが全体の層である。
 15. 黑褐色 (2.5Y3/2) 粘質シルト
 16. 黄褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト
 17. オリーブ黒色 (3Y3/1) 粘質シルト しまり: やや弱い



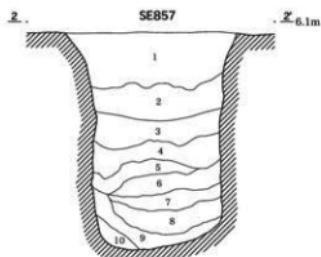
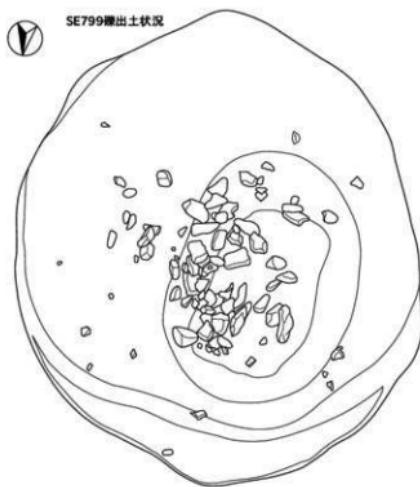
遺構別図 10 (SK1255, SD580・645・800・801, SX647・648, P598・599・604)



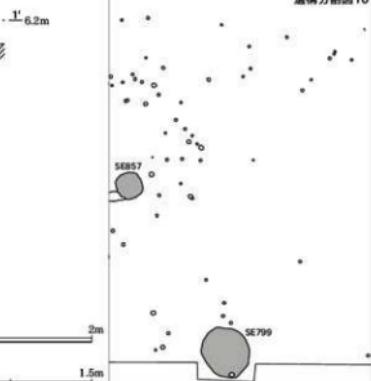
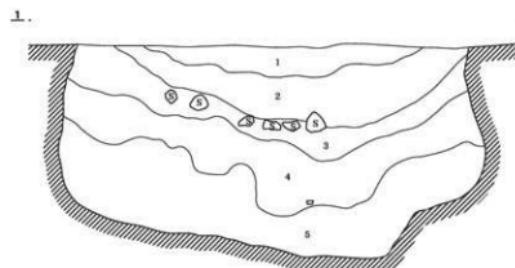




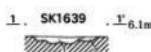
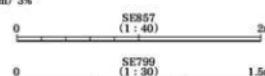
遺構個別図 11 (SE799・857) / (SK1639, SD580・645)



- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト 粘性：やや弱い 壩化物 ($\phi \sim 10mm$) 1%以下
 2 黄褐色 (10YR4/4) 砂質シルト しまり：やや弱い にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルトブロック ($\phi \sim 100mm$) 10%
 3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト 壩化物 ($\phi \sim 30mm$) 3%
 4 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト 壩化物 ($\phi \sim 10\sim20mm$) 2% 鋸材をとどめていた木片が混入する。土質は2層に近似する。
 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト 壩化物 ($\phi \sim 3, 10\sim20mm$) 2% 鋸分の次若者日立。
 6 黄褐色 (10YR5/2) シルト 壩化物 ($\phi \sim 5mm$) 2% 壩化物は3~5層と比べて粒径の大きな壩化物が少ない。鋸分の次若者日立。
 7 黄褐色 (10YR5/2) シルト 土質は6層に近似する。6層より鋸分の壩化物が減少する。
 8 黄 (NS6) 新質シルト 粘性：強い しまり：強い 8層上面に非常に薄い砕屑が形成される。
 9 黄 (NS5) 新質シルト 粘性：強い しまり強い 片状の自然木片が出土した。
 10 反 (NS5) 新質シルト 土質は9層に近似し、これに地山ブロックが混入する。

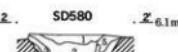


- SE799
 1 暗褐色 (10YR2/4) シルト 粘性：やや弱い 壩化物 ($\phi \sim 3mm$) 3%
 2 暗褐色 (10YR2/4) シルト 壩化物 ($\phi \sim 8mm$) 3%
 3 反暗褐色 (10YR4/2) シルト 壩化物 ($\phi \sim 5mm$) 3%
 4 暗褐色 (10YR3/3) シルト
 5 黄色 (10YR4/4) 砂質シルト しまり：やや弱い

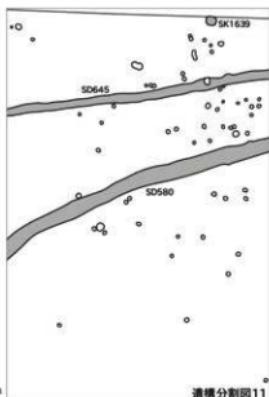


- SK1639
 1 暗褐色 (7.5YR2/3) シルト 壩化物 ($\phi \sim 3mm$) 1%以下
 2 暗褐色 (10YR4/6) シルト 壩化物 ($\phi \sim 1mm$) 1%

- SD645
 1 にぶい黄褐色 (10YR5/2) シルト N層ブロック少量混入 粘性：やや強い しまり：やや弱い 壩化物 ($\phi \sim 2mm$) 2%
 2 反黄褐色 (10YR5/2) シルト 壩化物 ($\phi \sim 2mm$) 1% しまり：やや弱い 壩化物 ($\phi \sim 2mm$) 1%
 3 黄褐色 (10YR5/2) シルト 2層より色濃い 壩化物 ($\phi \sim 2mm$) 1% しまり：ある
 4 黄褐色 (10YR5/2) シルト 壩化物 ($\phi \sim 2mm$) 1% 多量混入
 5 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト 粘性：強い しまり：やや弱い 壩化物 ($\phi \sim 2mm$) 1% 煙土 ($\phi \sim 3mm, 10\sim15mm$) 5% 壕土層、磧層
 6 黄褐色 (10YR5/2) シルト 壩化物シルトブロックによく多く混入
 7 黄褐色 (10YR5/2) シルト 壕土層

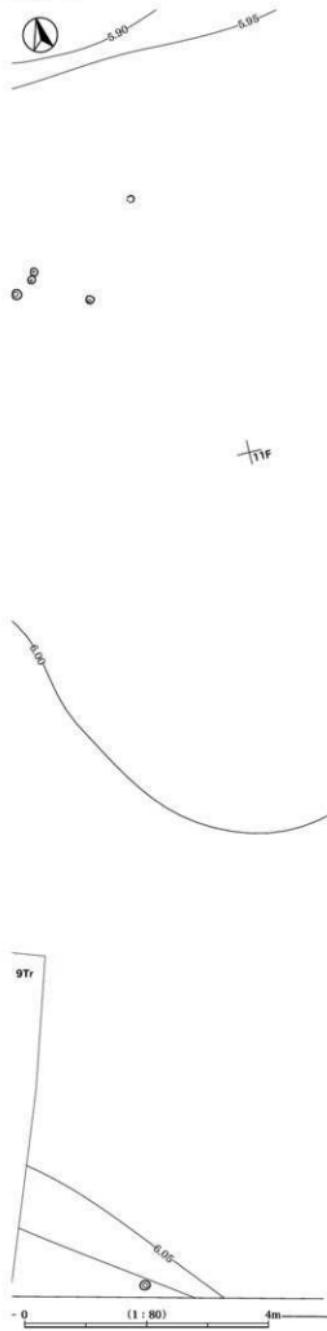


- SD645
 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト 壩化物 ($\phi \sim 2mm$) 1%
 2 黄褐色 (10YR5/2) シルト しまり：やや弱い にぶい黄褐色ブロック混入

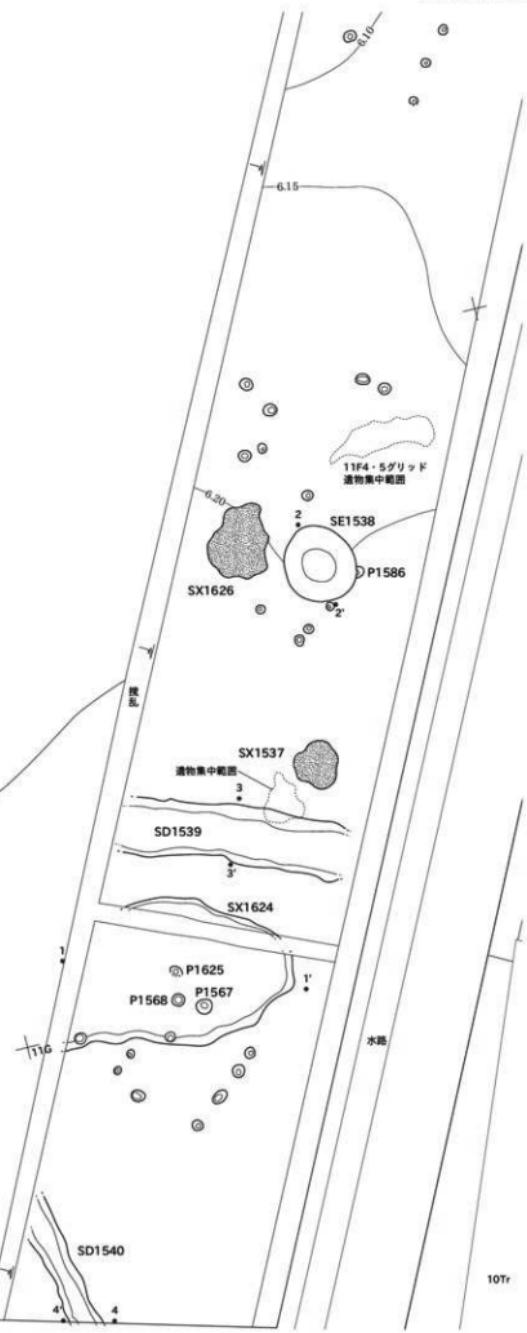


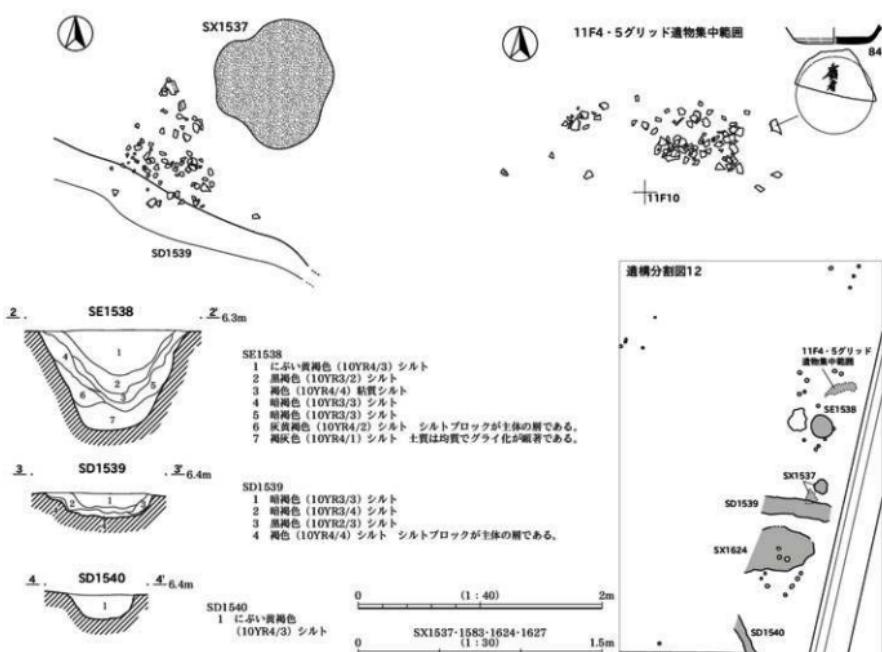
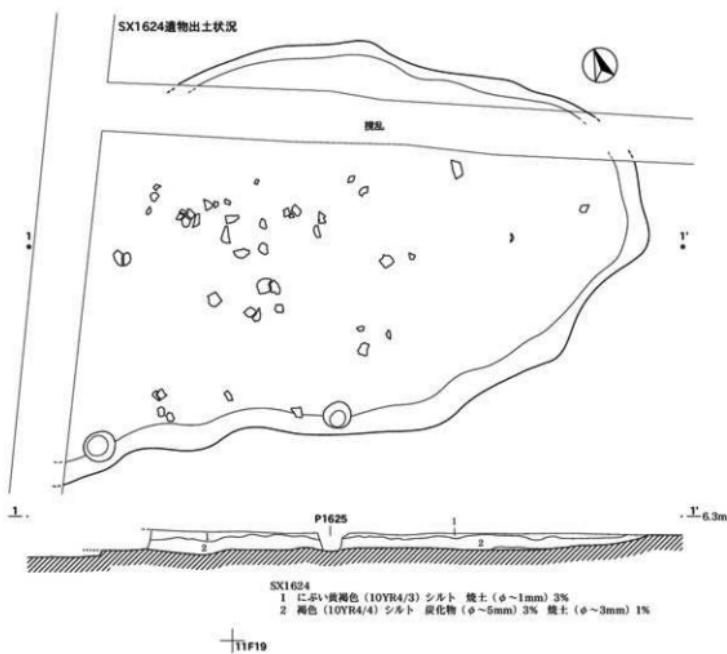
遺構分割図11

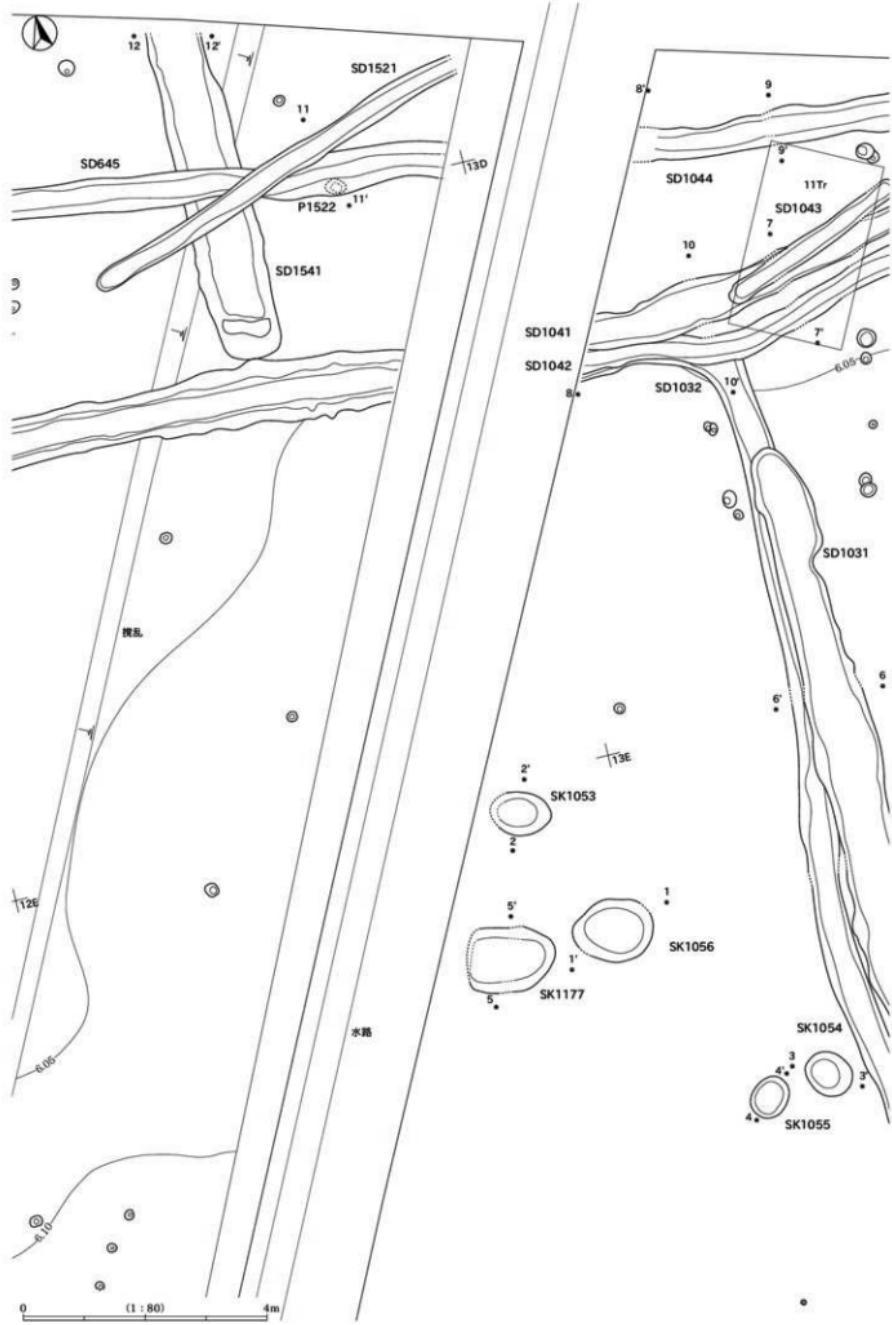
図版 24

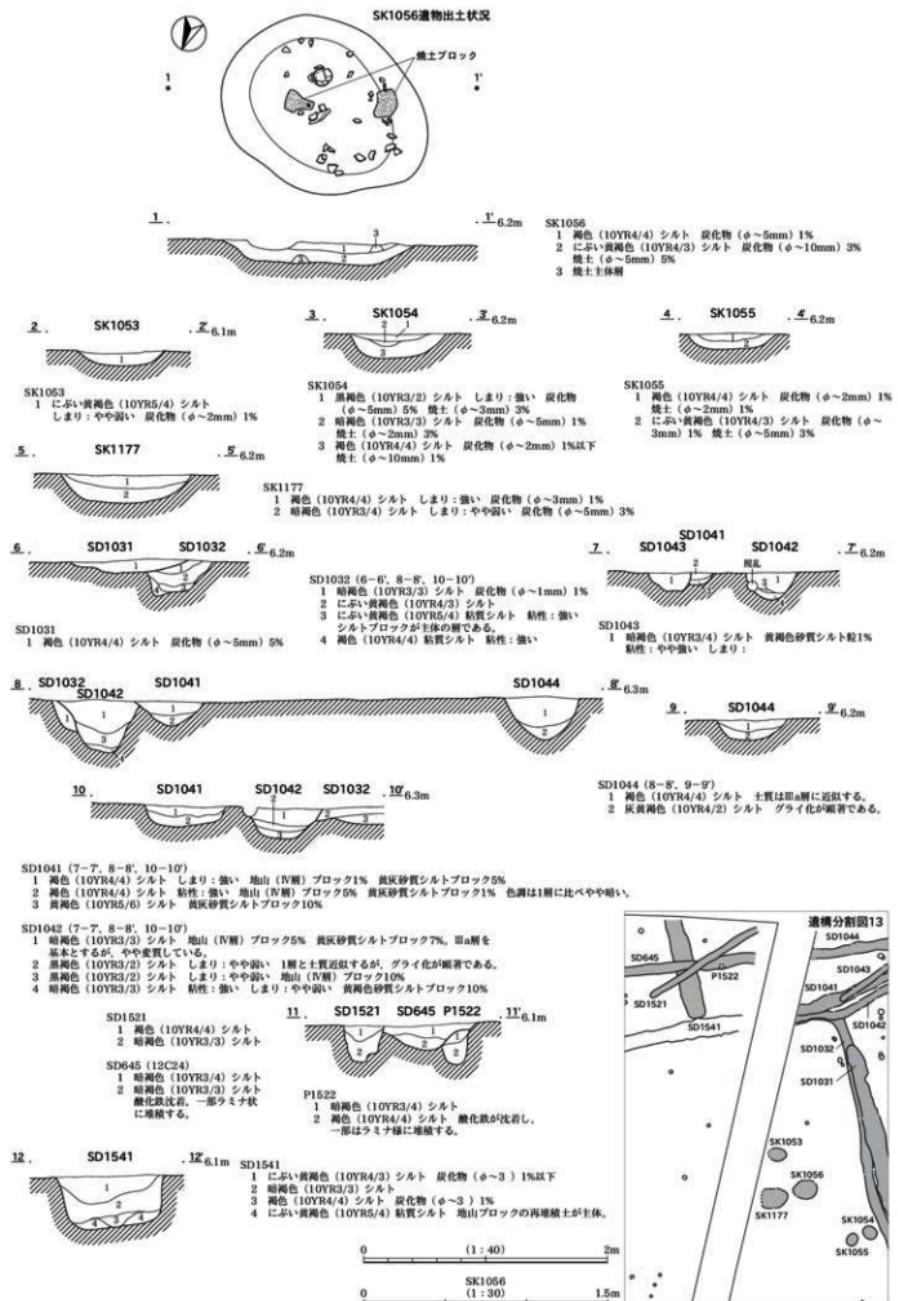


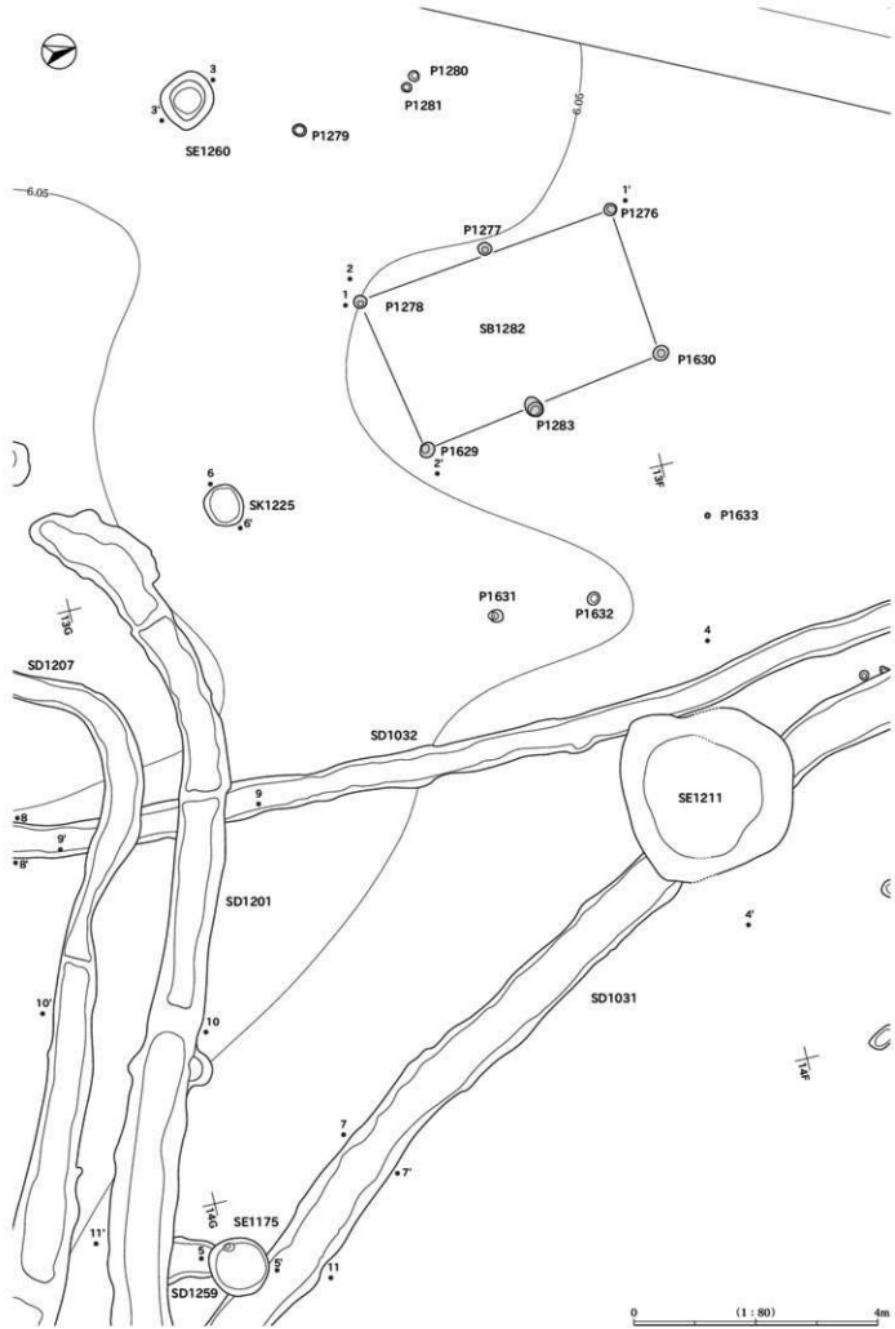
遺構分割図 12



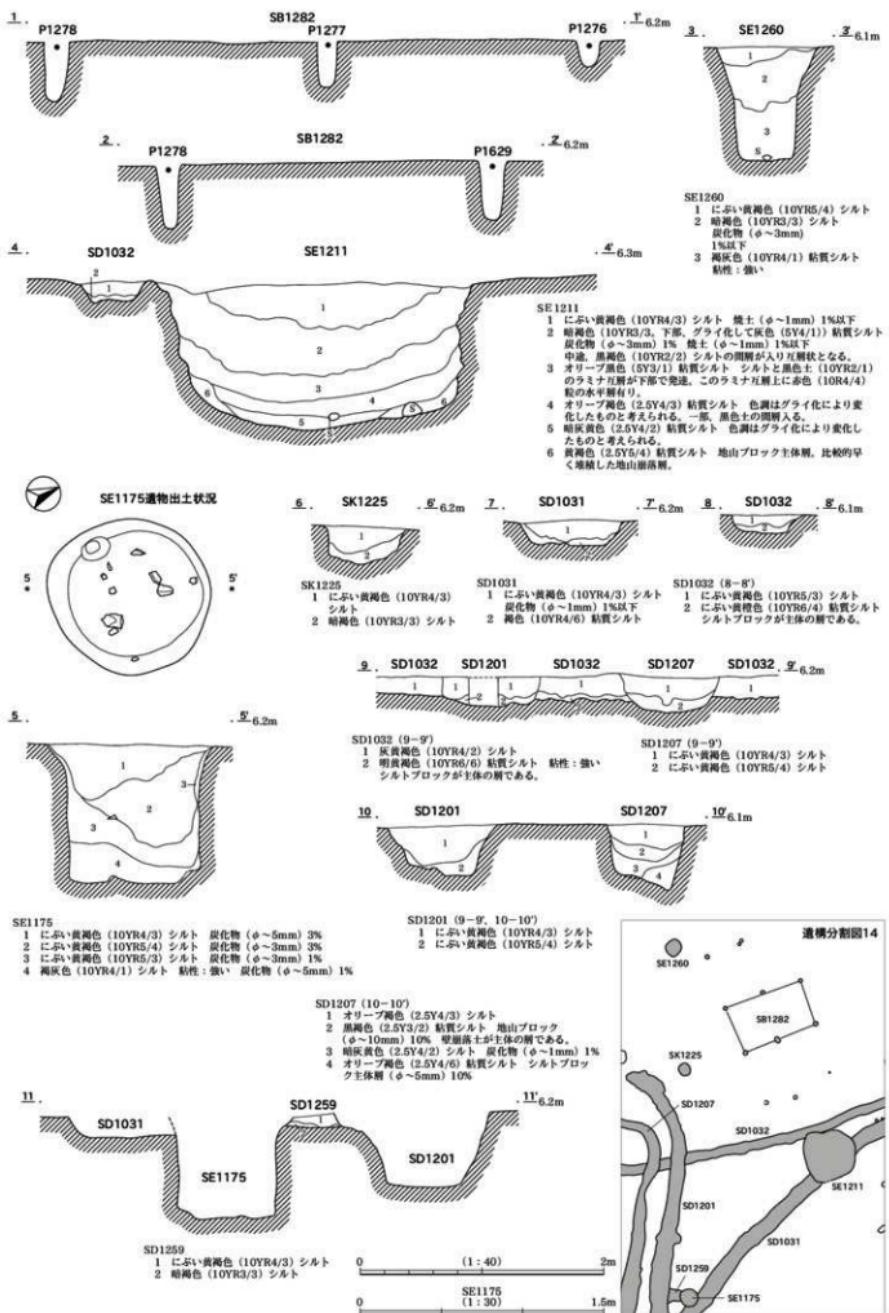


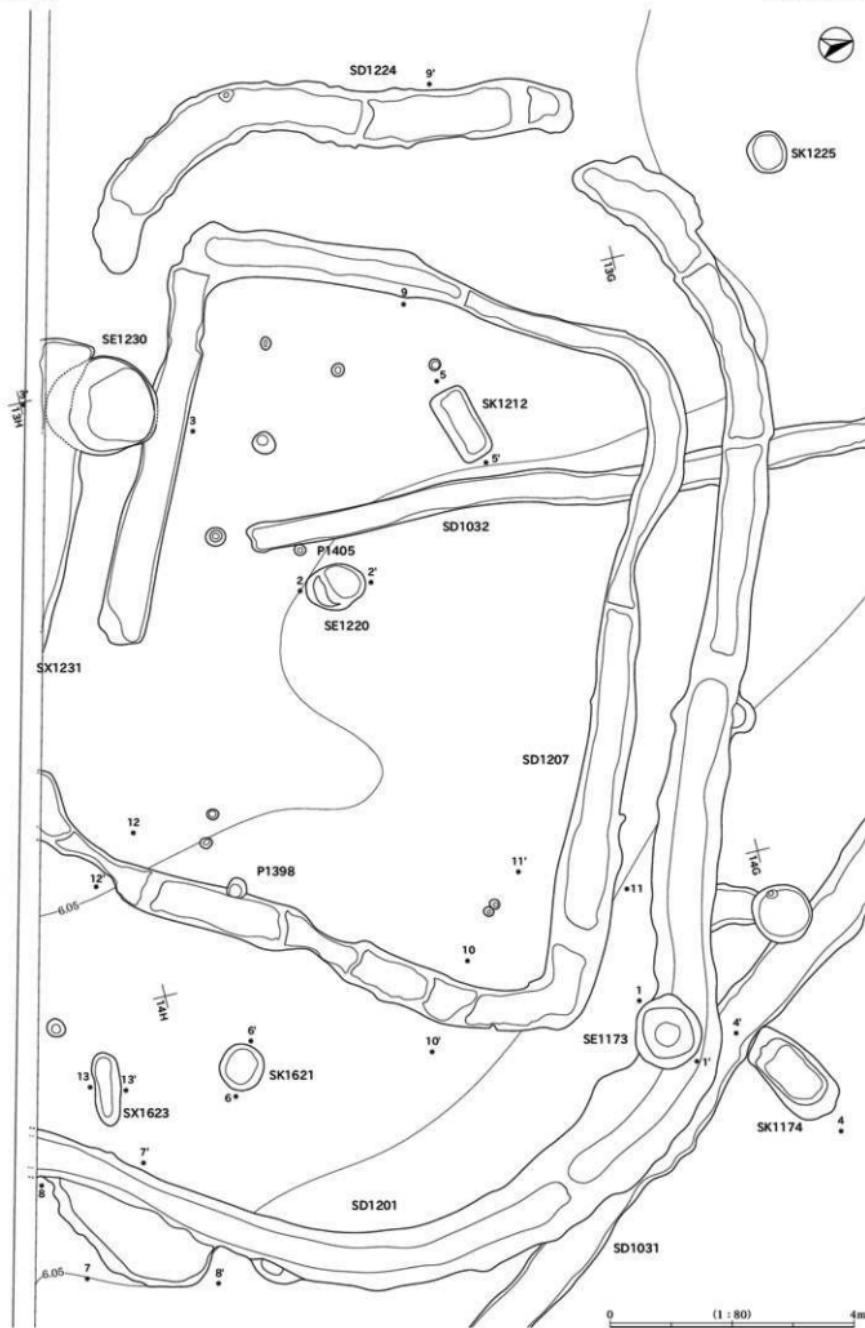


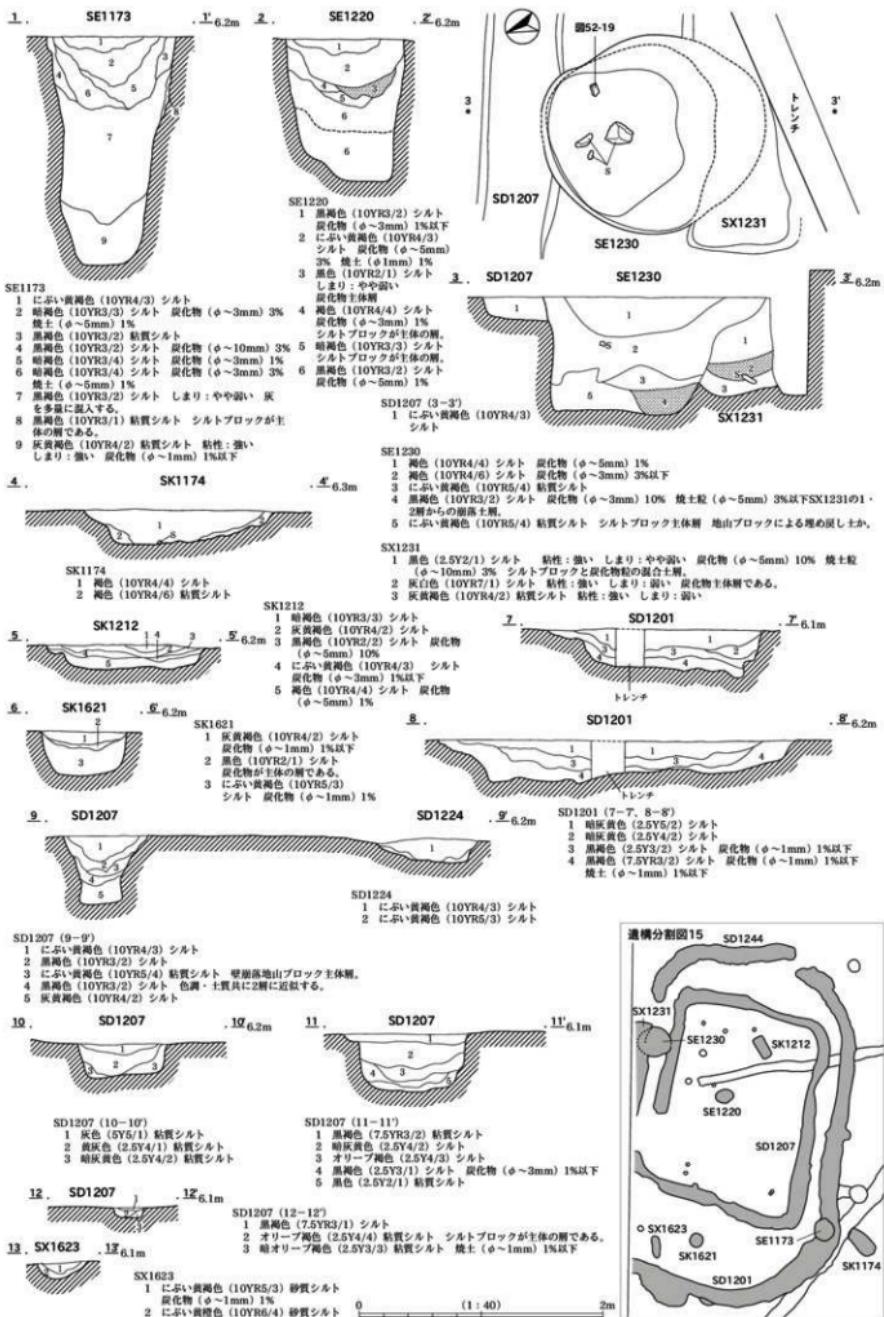




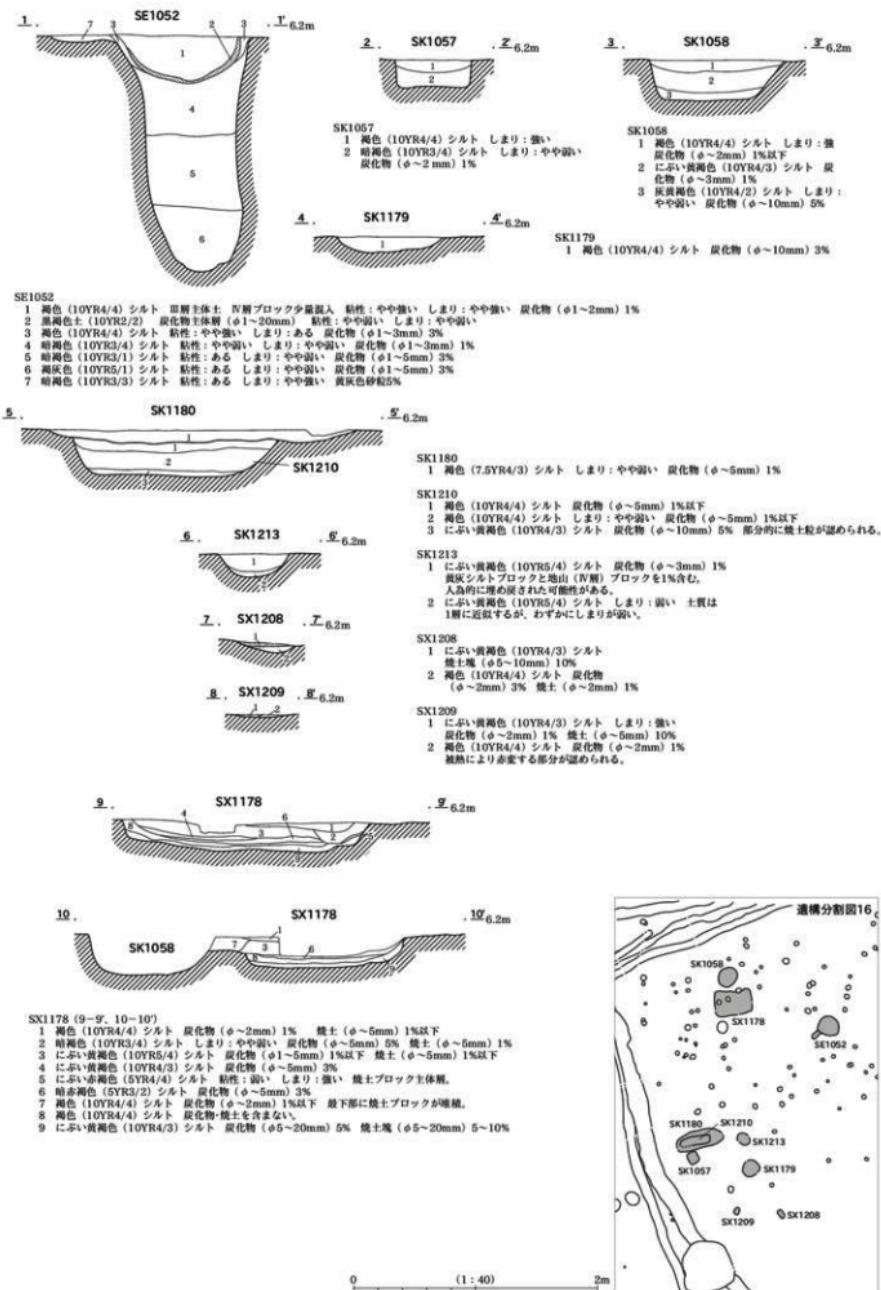
遺構個別図 14 (SB1282, SE1175・1211・1260, SK1225, SD1031・1032・1201・1207・1259)

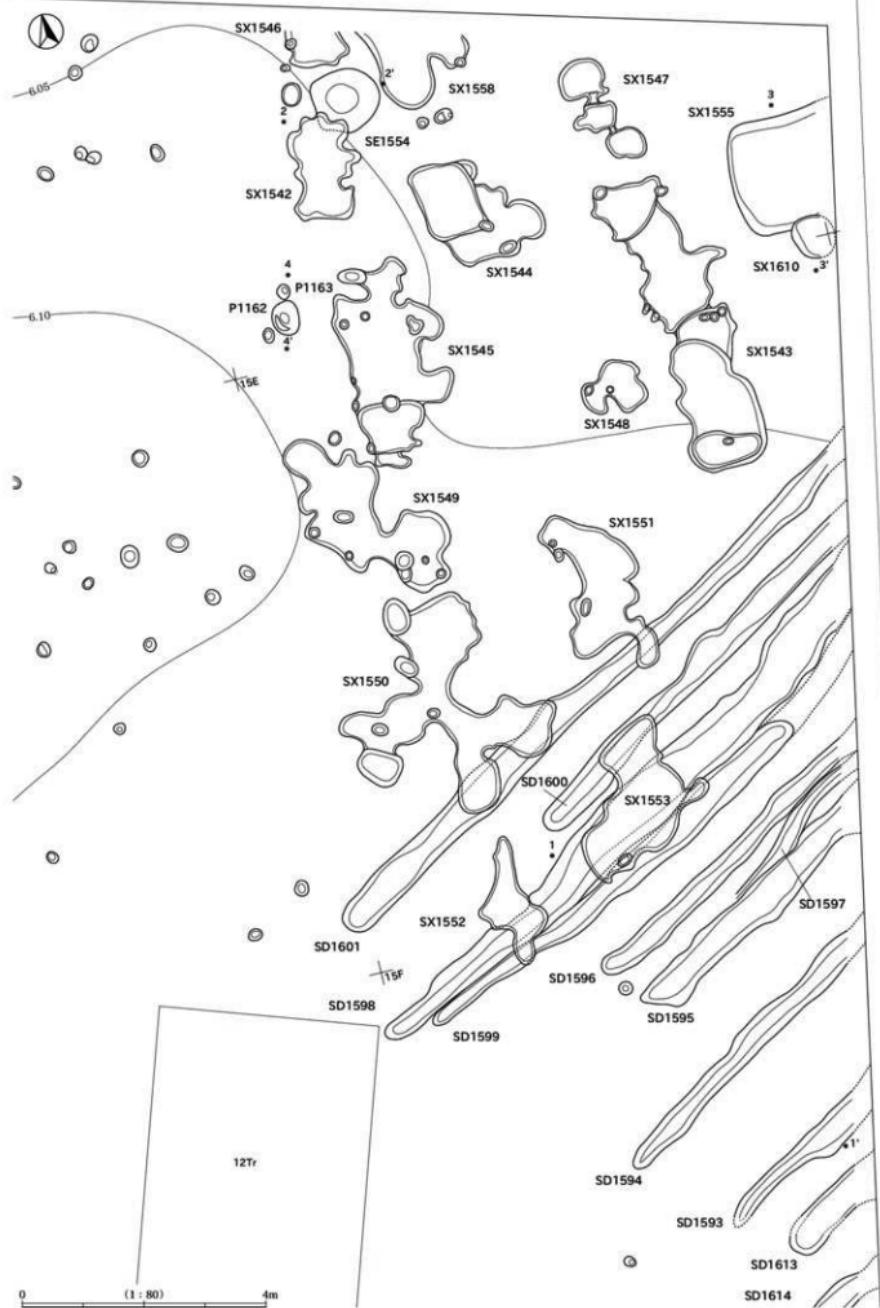


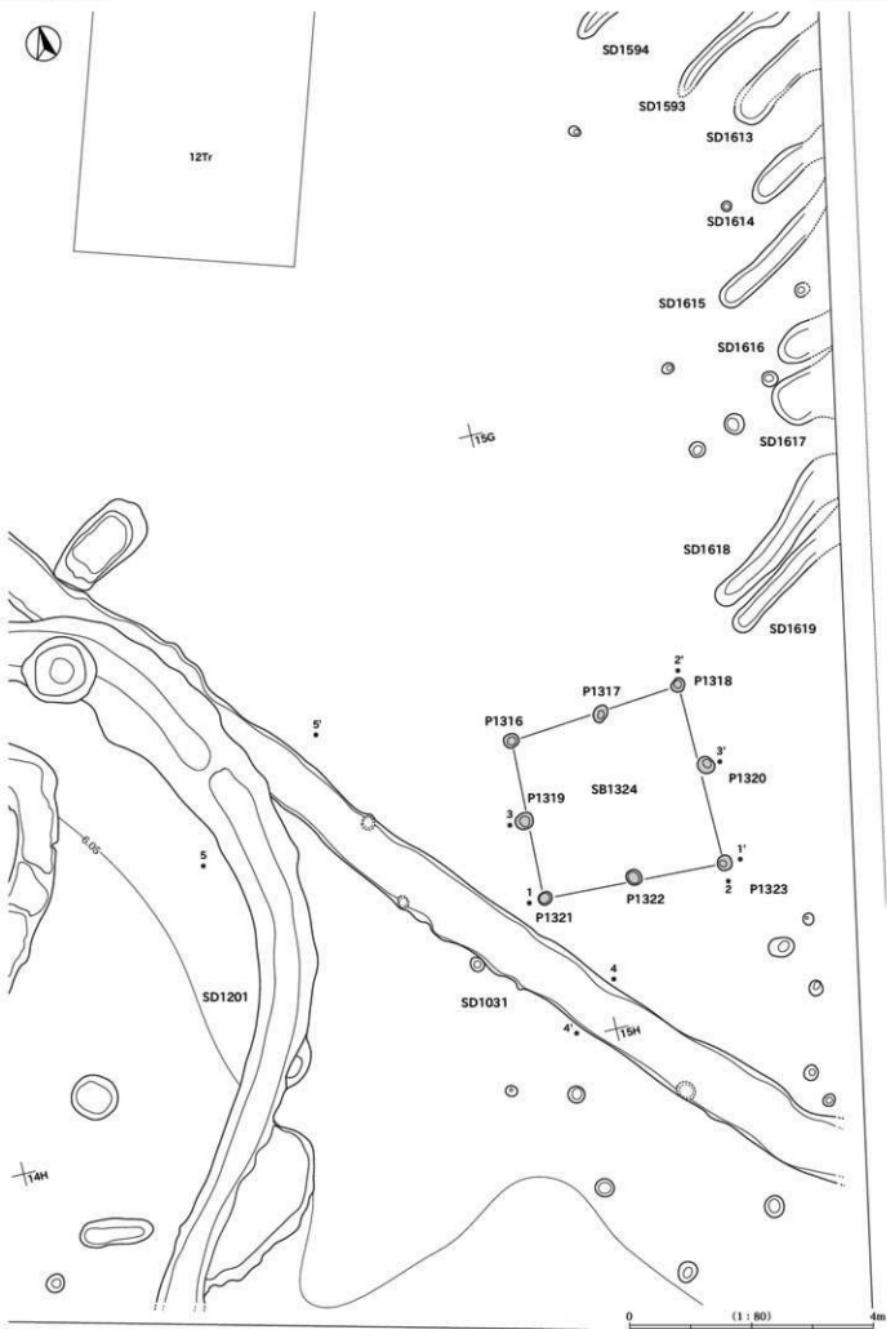


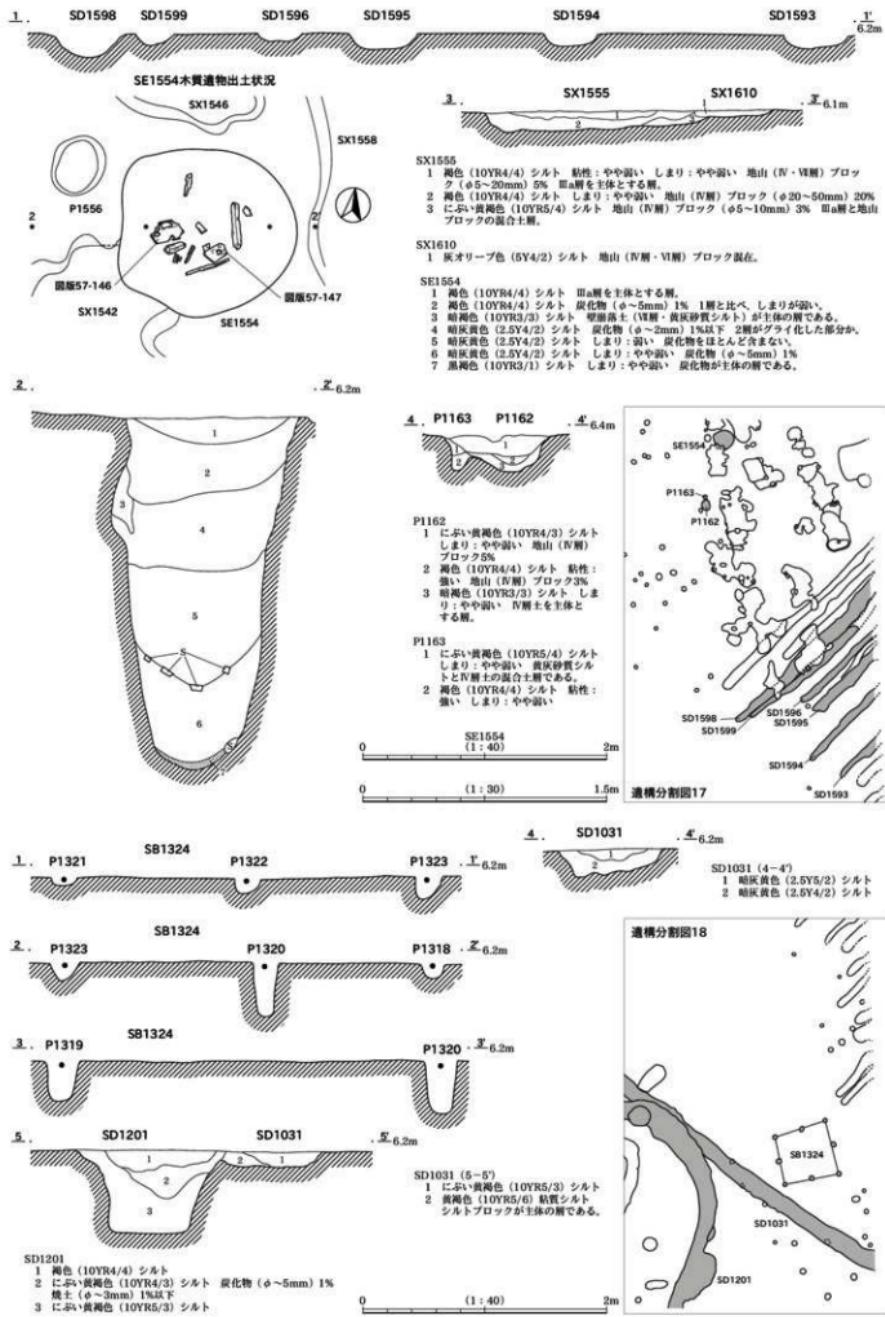


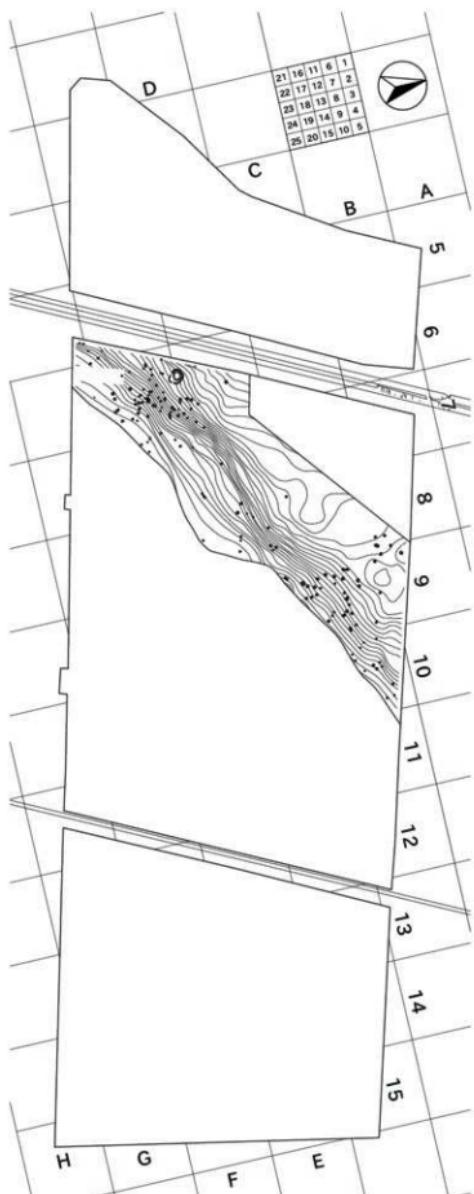




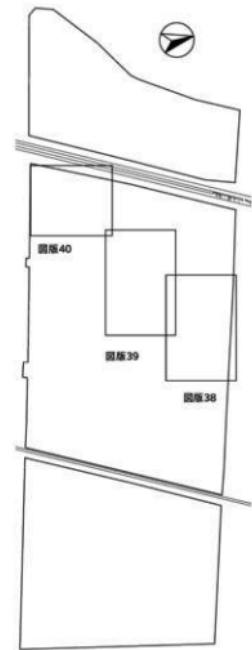




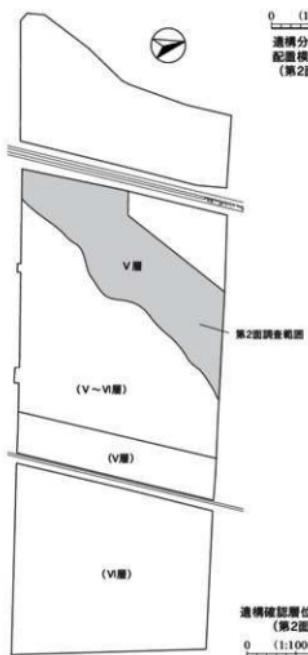




0 (1:600) 20m



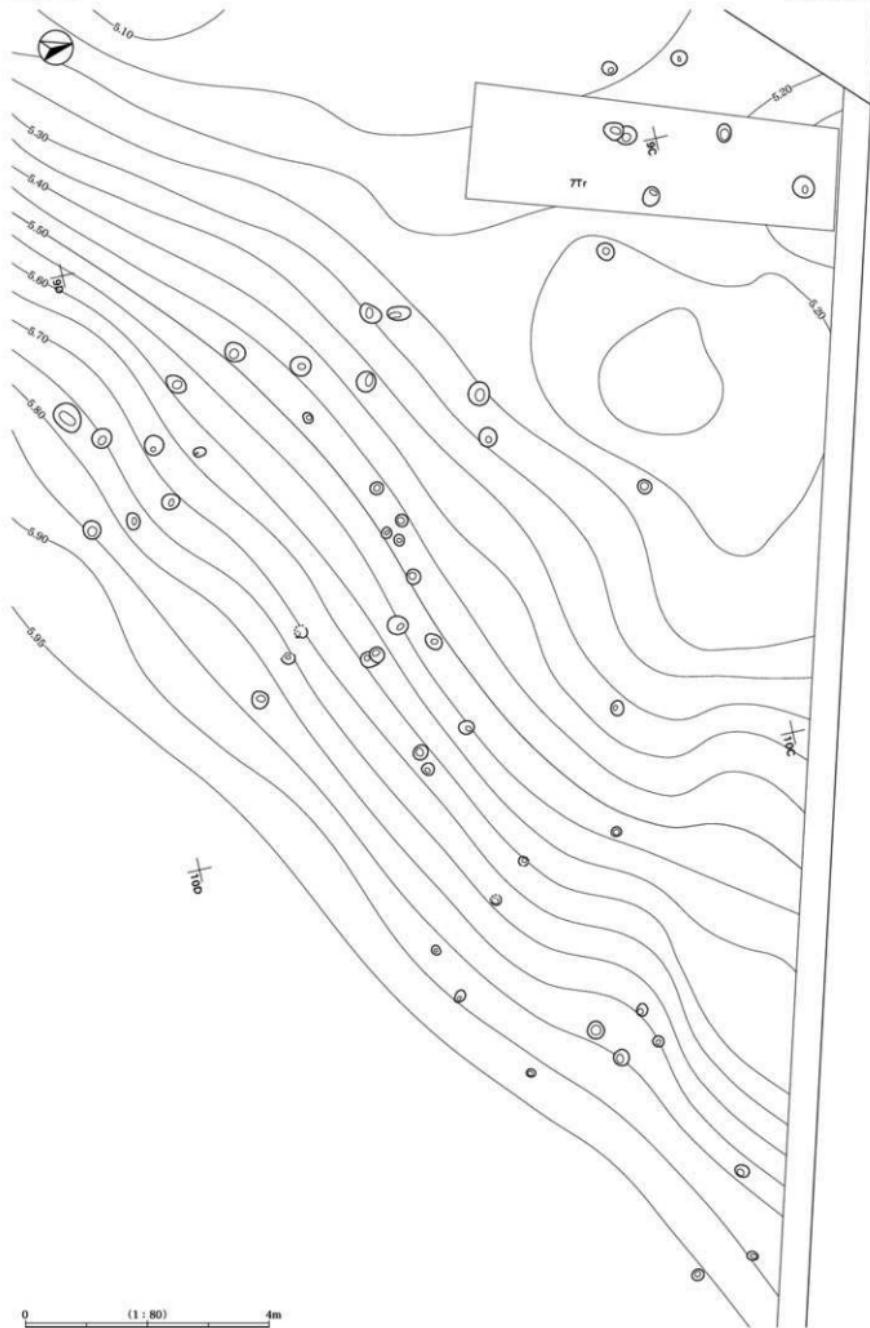
0 (1:1000) 20m
造構分割図
配置模式図
(第2面)

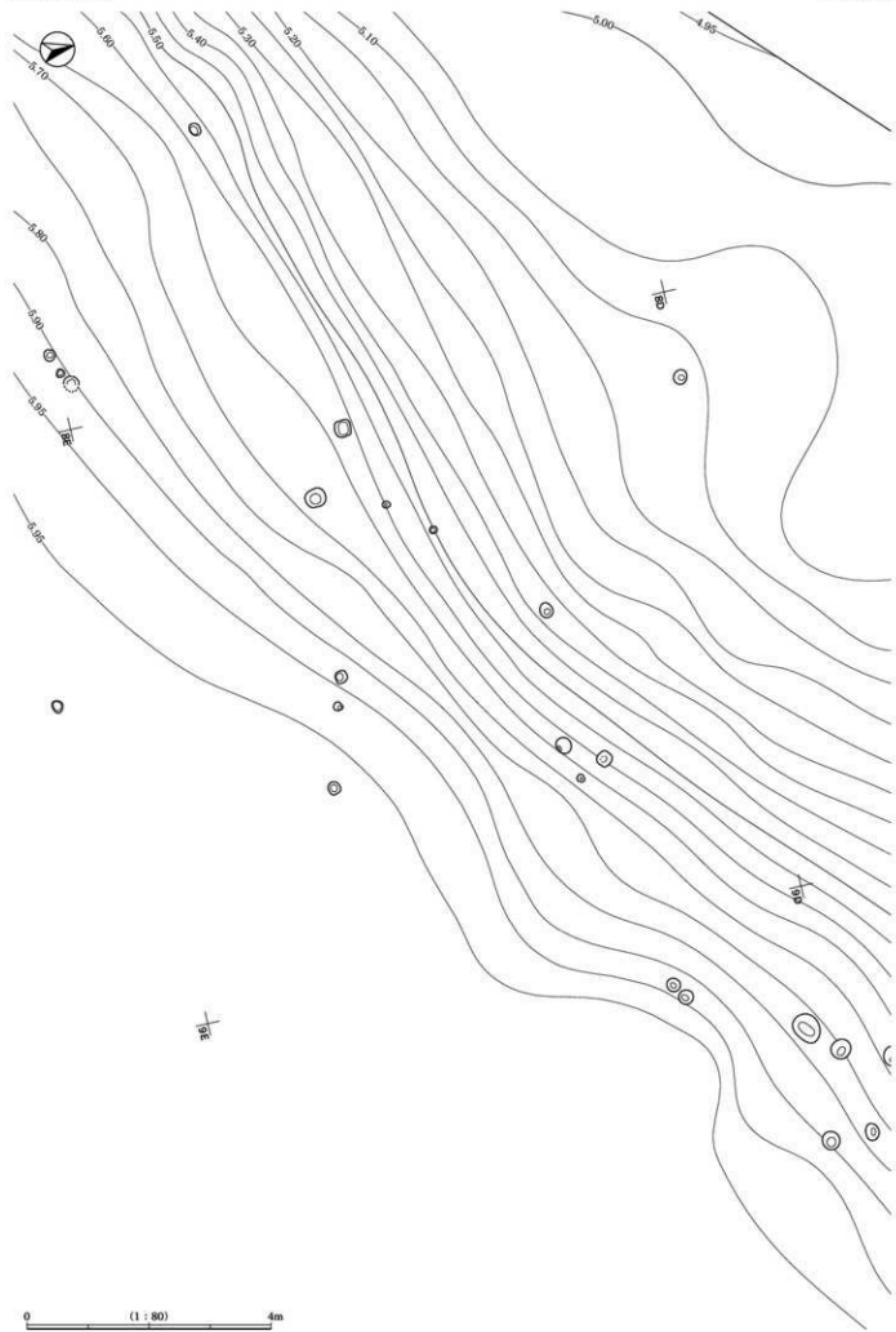


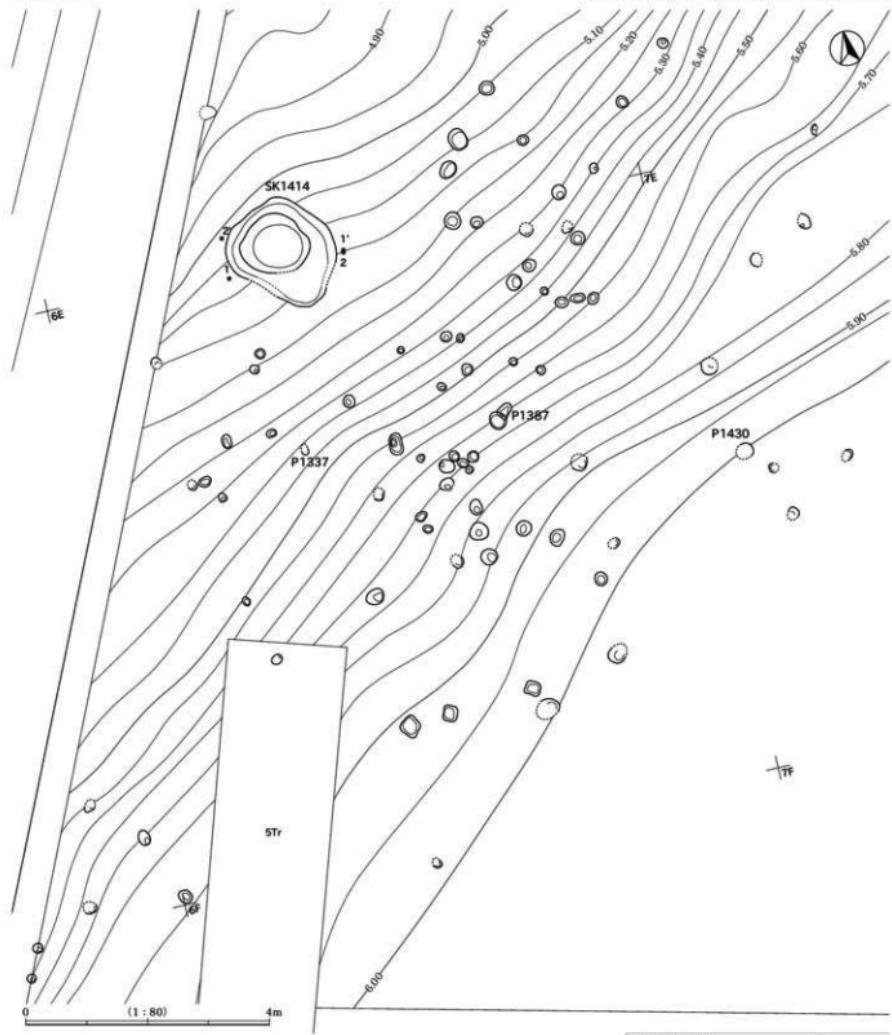
0 (1:1000) 20m
造構確認層位模式図
(第2面)

図版 38

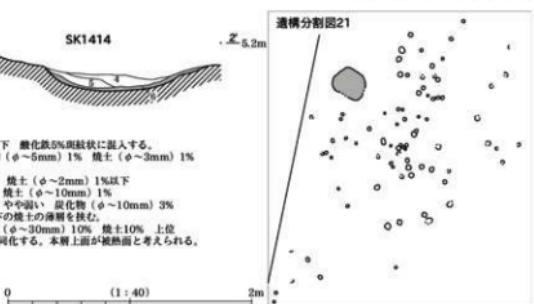
遺構分割図 19

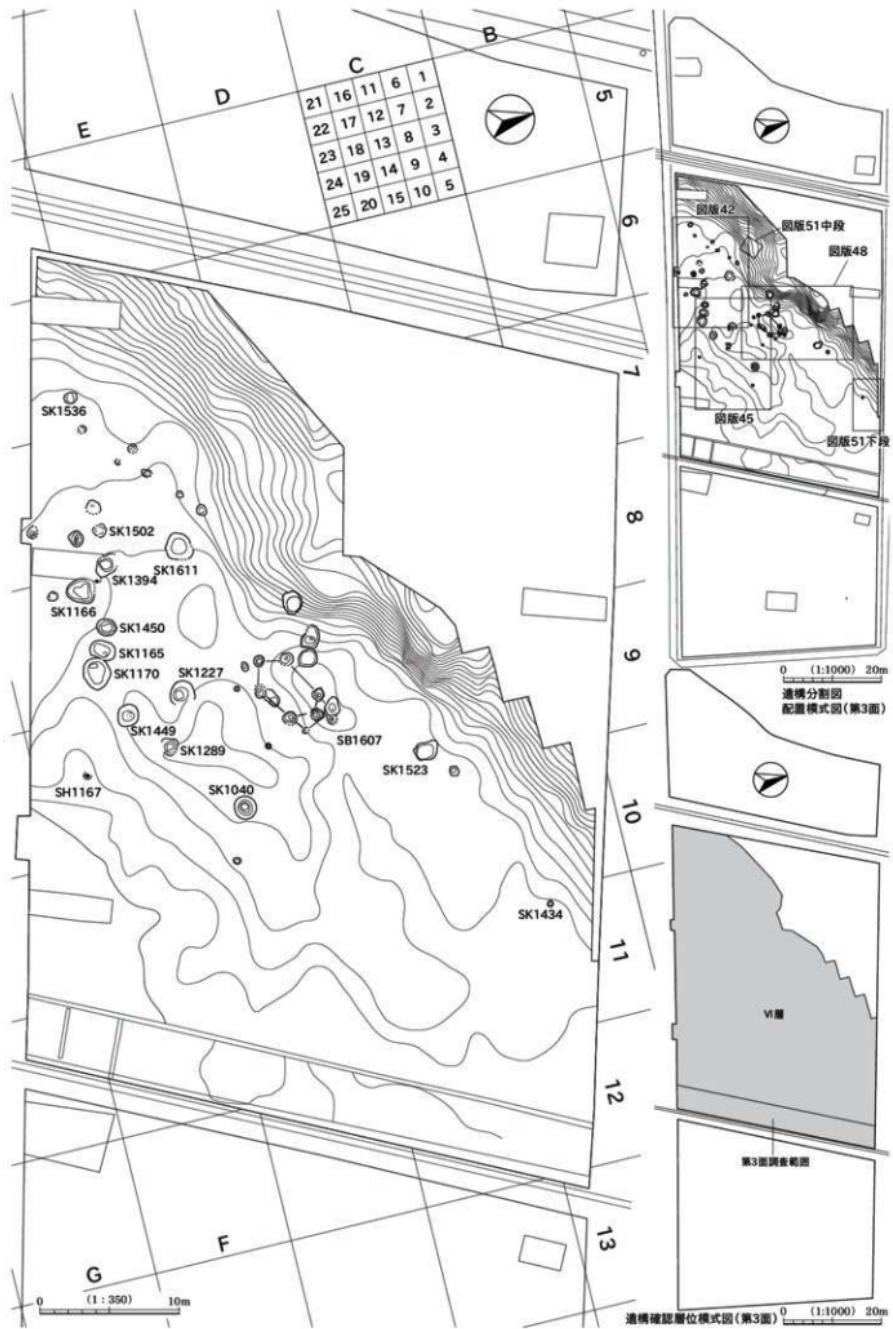


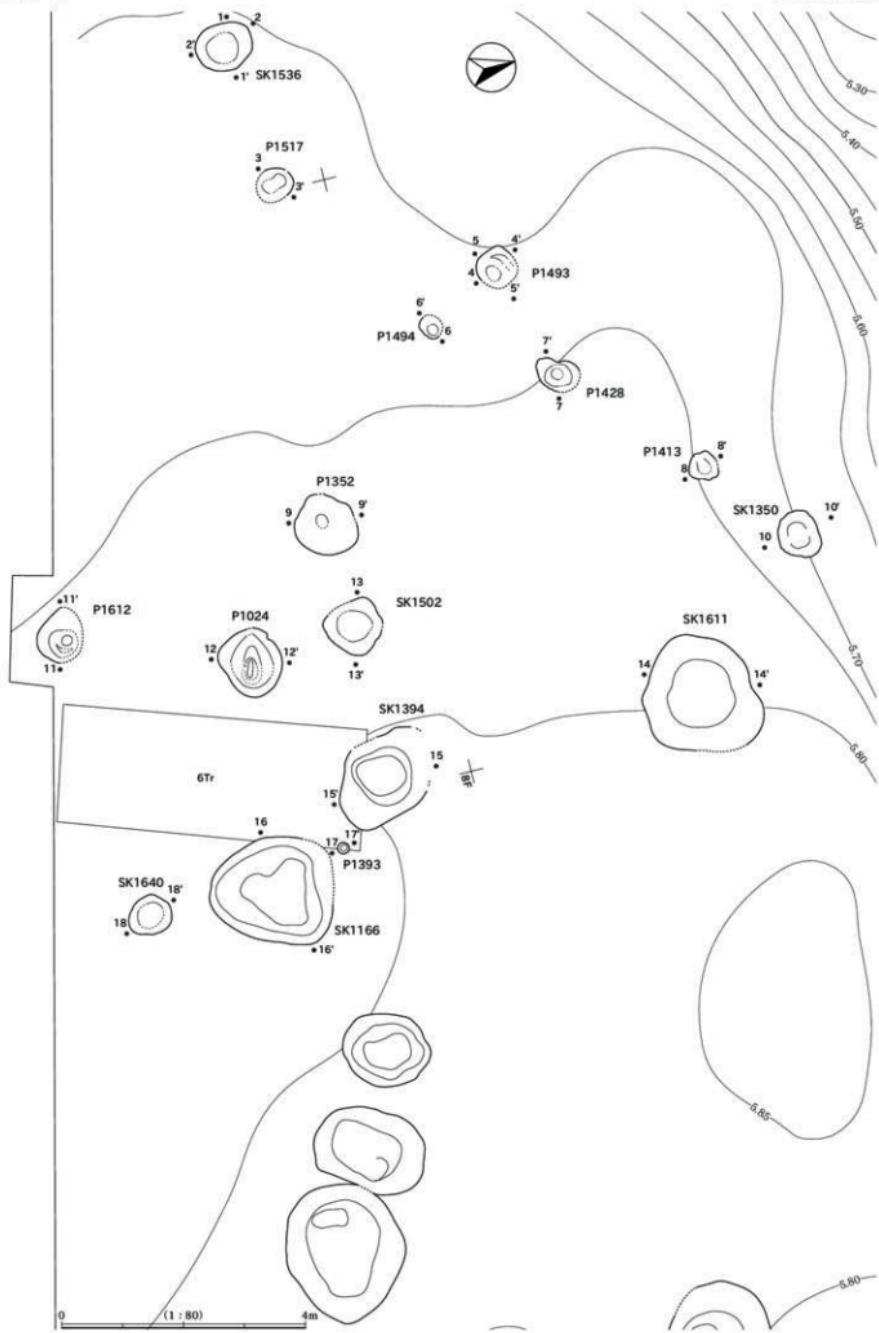


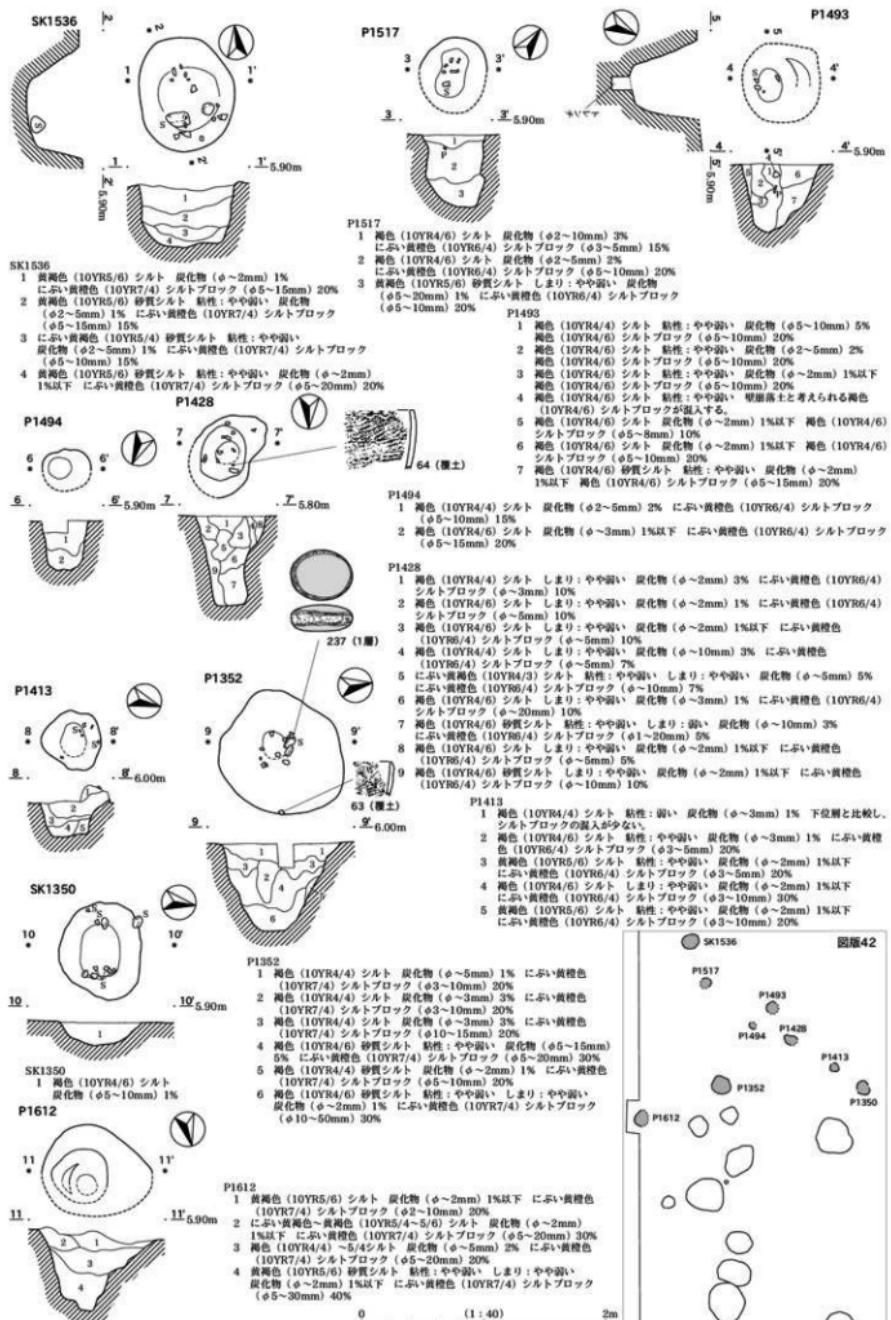


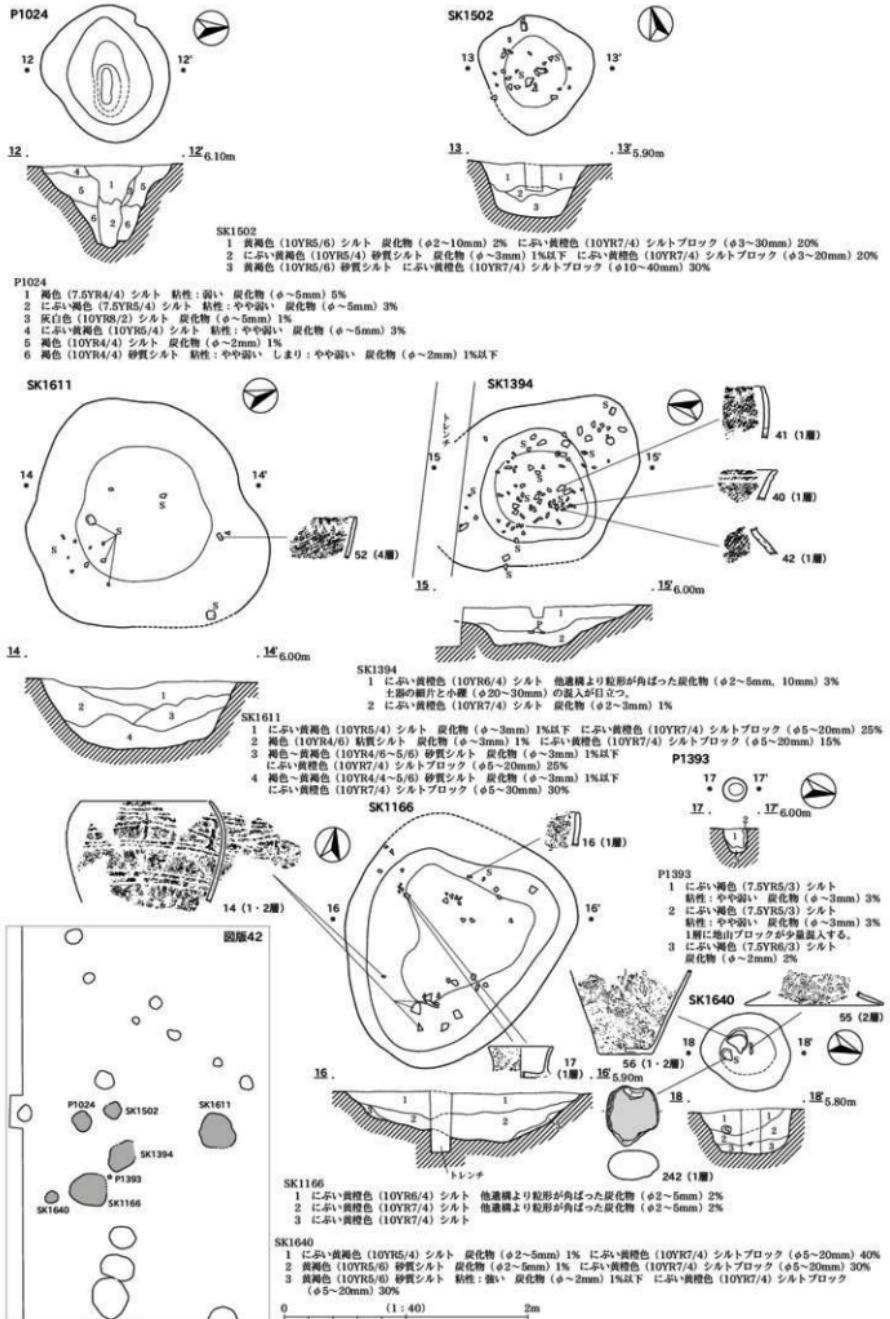
遺構分割図21





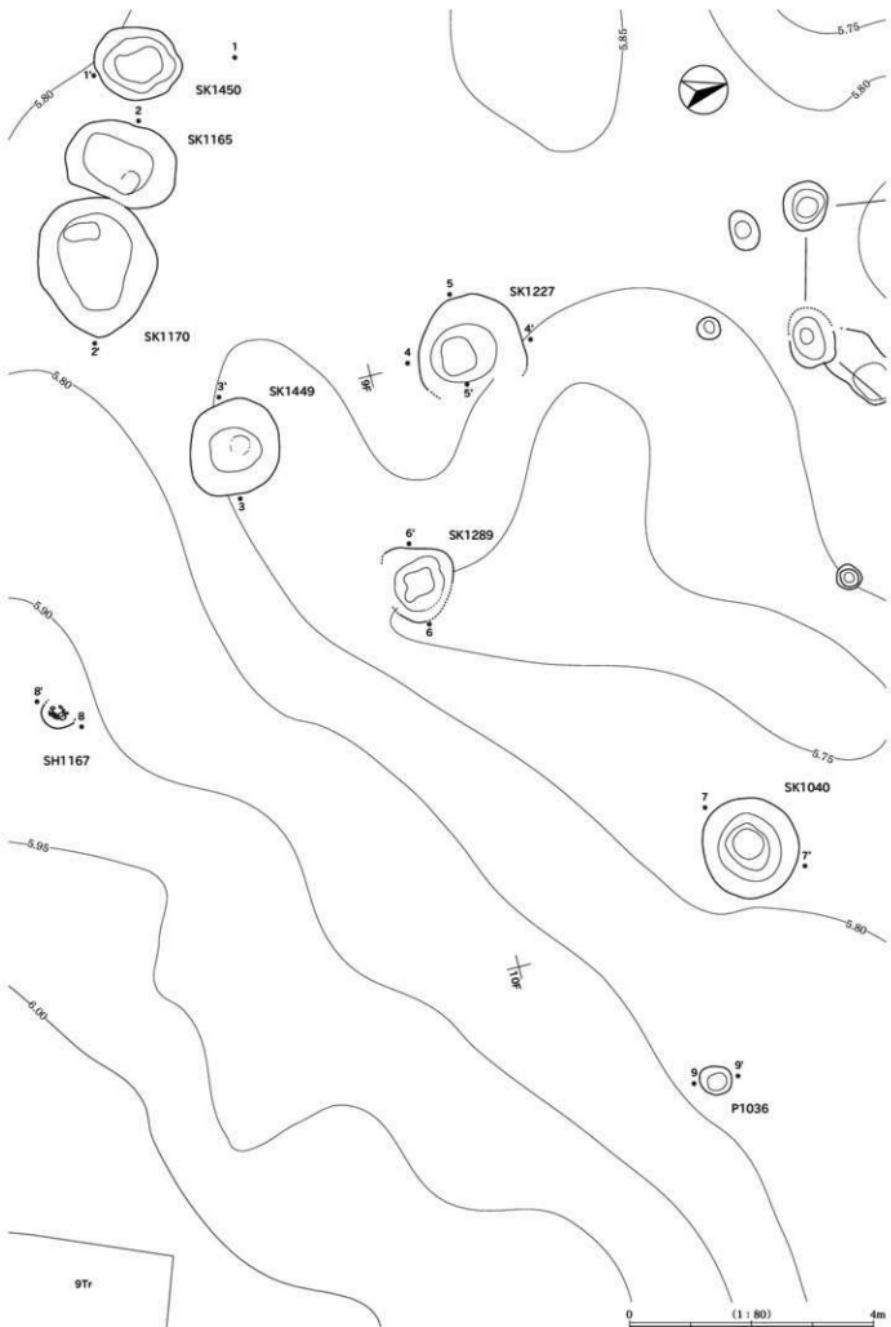


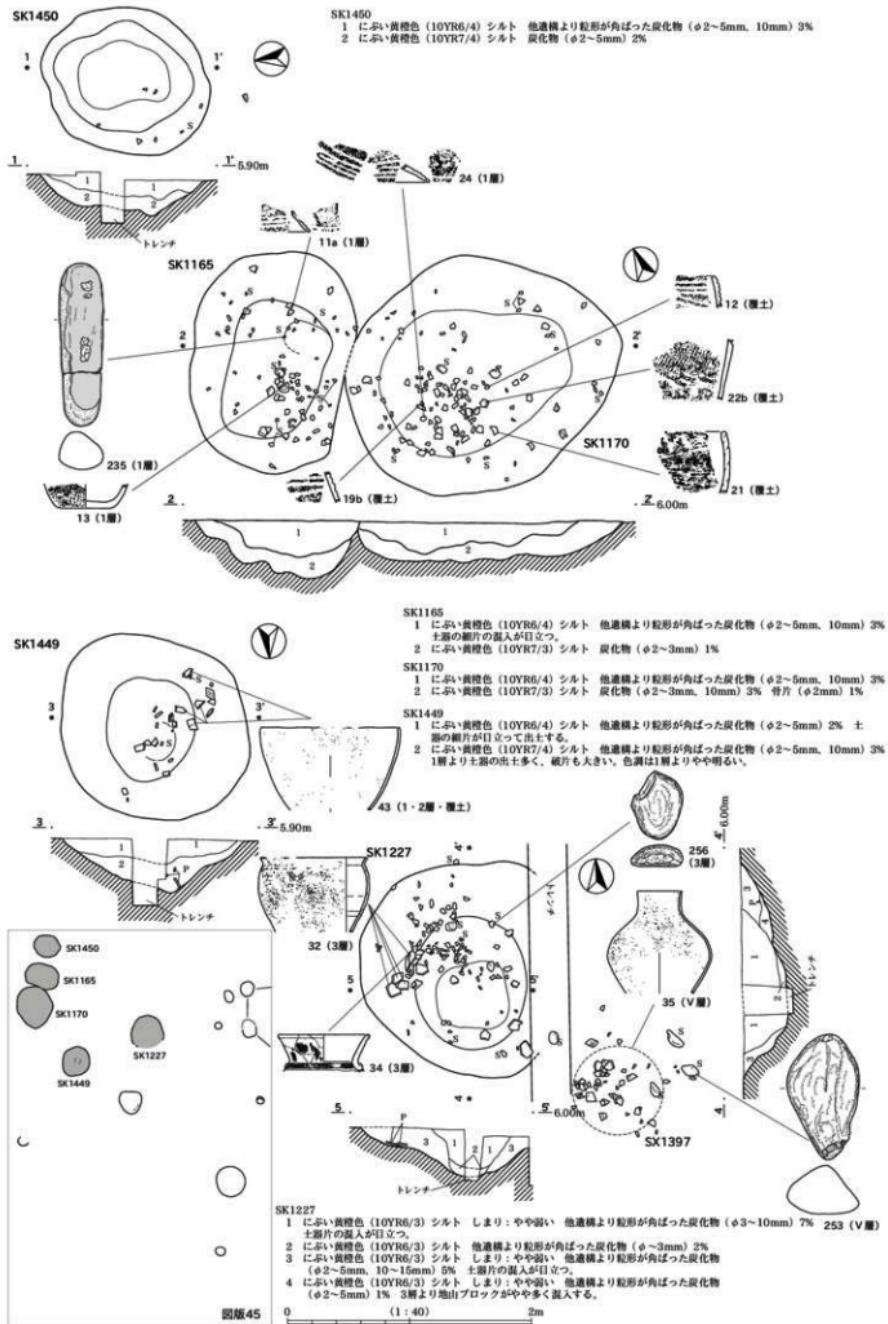




遺構分割図 23

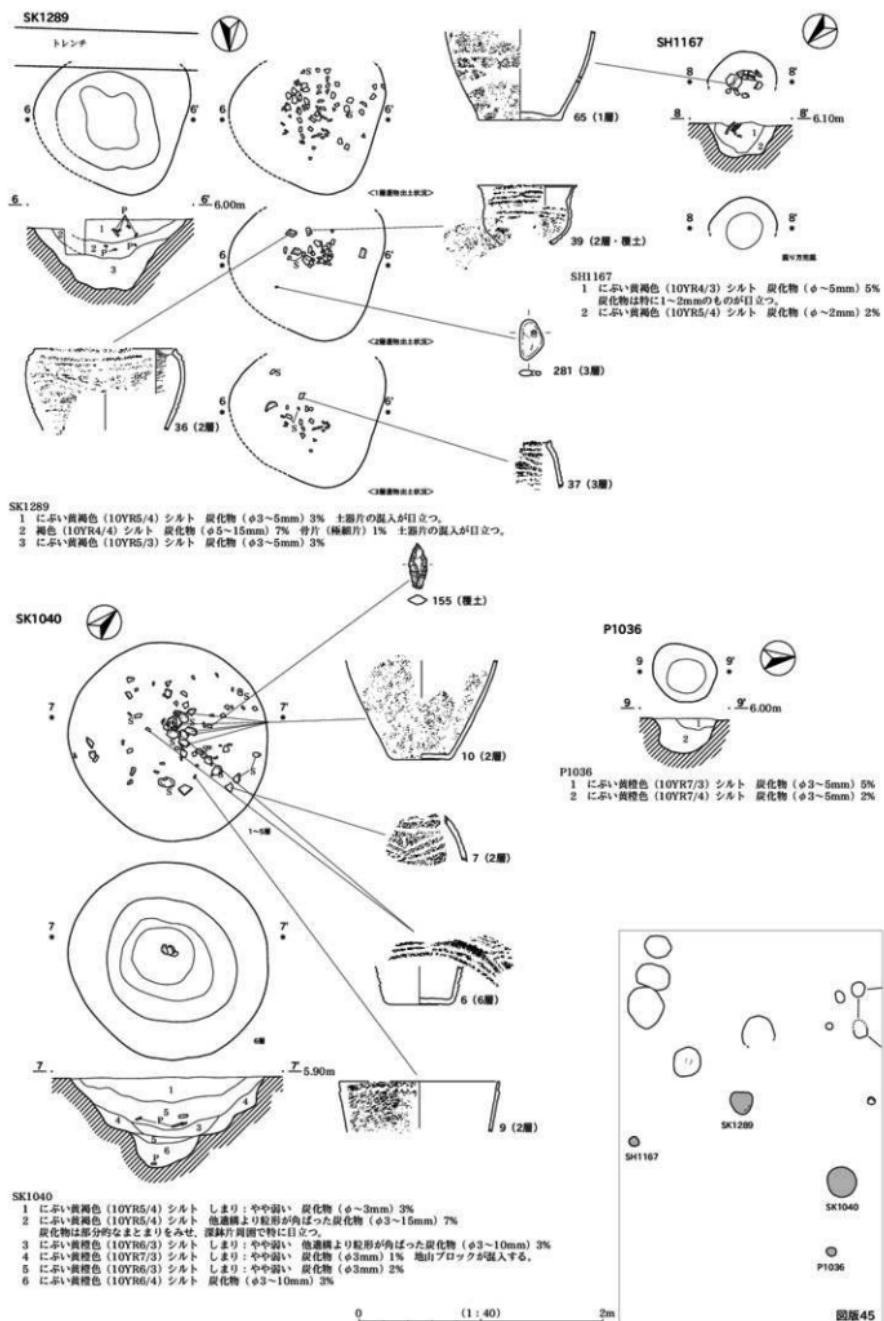
図版 45

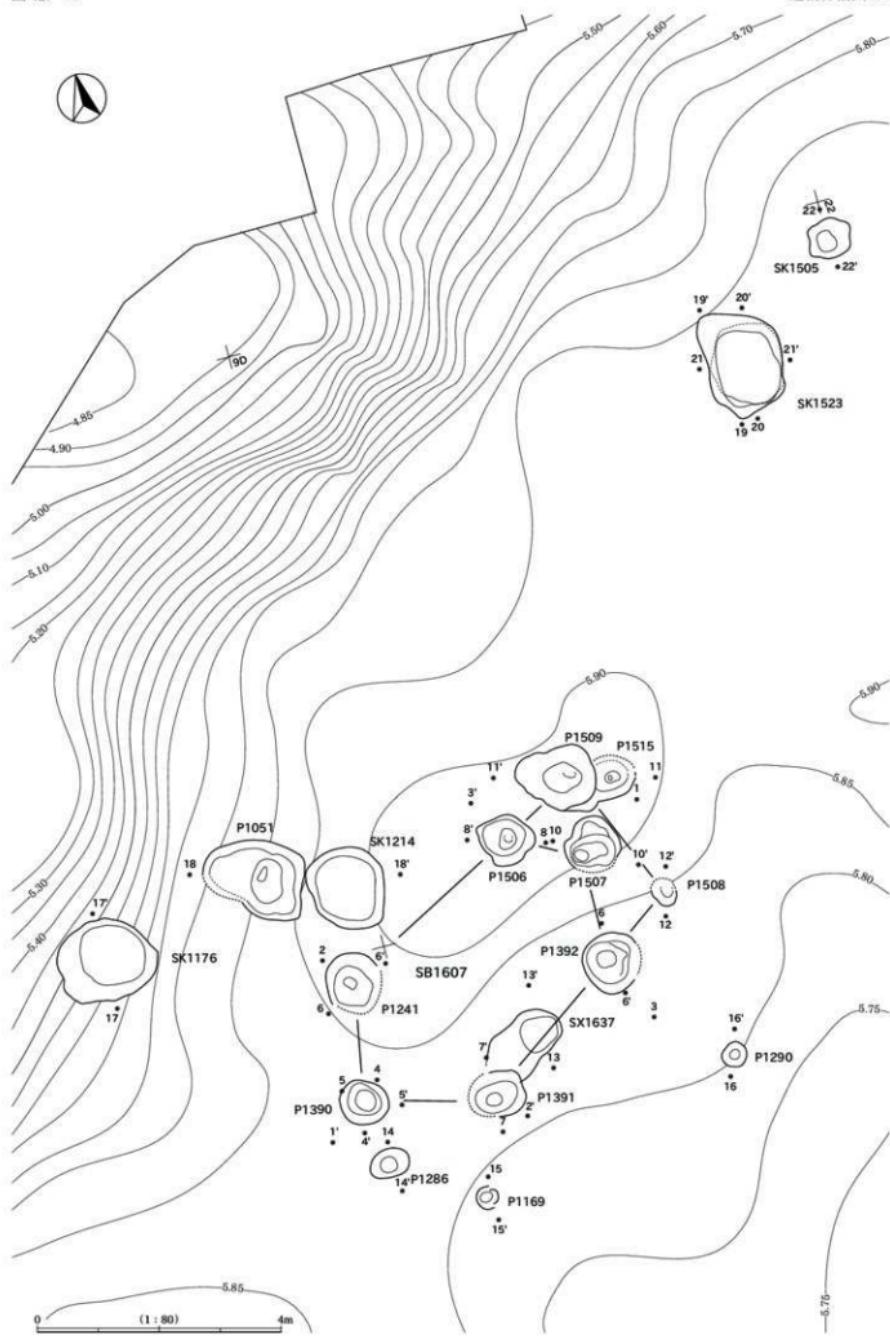




遺構個別図 22 (SK1040 : 1289, PI036, SH1167)

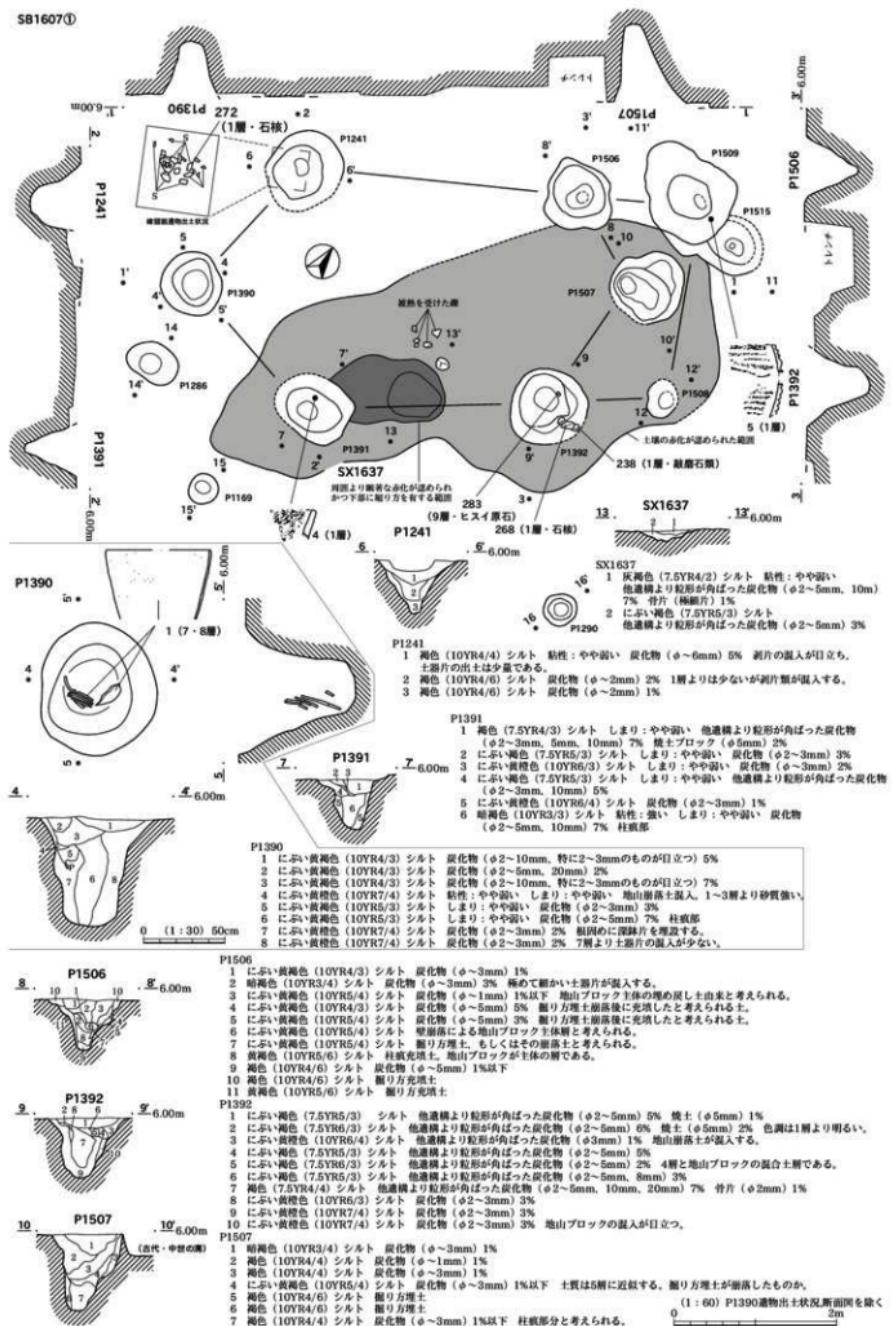
圖版 47



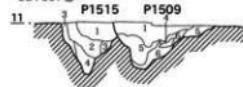


遺構個別図23 (SB1607①< P1241 : 1390 ~ 1392 : 1506 : 1507, SX1637 >)

SB1607①



SB1607②



- P1509
1 浅褐色 (10YR3/2) シルト 廃化物 ($\phi \sim 2mm$) 3%
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト 廃化物 ($\phi \sim 3mm$) 1% 裸り方理土。
3 黄褐色 (10YR4/4) シルト 廃化物 ($\phi \sim 1mm$) 1%
4 にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト 埋山 (埋積) ブロック主体層。堅屈屈土と考えられる。
5 黄褐色 (10YR4/4) シルト 廃化物 ($\phi \sim 1mm$) 1%以下 社会部分に相当する。人為的な埋め戻し土の可能性あり。
6 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト 埋山 (埋積) ブロック主体の裸り方理土。

P1508 . 12'.600m



- P1508
1 浅褐色 (10YR4/4) シルト 廃化物 ($\phi \sim 1mm$) 1% 人為的な埋め戻し土の可能性が高い。
2 にぶい黄褐色 (10YR4/4) シルト 廃化物 ($\phi \sim 1mm$) 1%以下 人為的な埋め戻し土の可能性高い。
3 黄褐色 (10YR4/6) シルト 埋山 (埋積) ブロック主体の裸り方理土。
4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト シルトブロック ($\phi \sim 5mm$) 3% 裸り方理土か。
5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト シルトブロック ($\phi \sim 3mm$) 1% 裸り方理土か。

P1286 . 14'.600m



- P1286
1 黄褐色 (10YR4/4) シルト 廃化物 ($\phi \sim 5mm$) 5%
2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト 廃化物 ($\phi \sim 2mm$) 1%以下
3 黄褐色 (10YR4/6) シルト 廃化物 ($\phi \sim 2mm$) 1%以下

P1169 . 15'.600m



- P1169
1 にぶい兩色 (7.5YR5/3) シルト 粘性: やや弱い 他遺構より粒形が角ばった廃化物 ($\phi \sim 2\sim 5mm$) 2%
2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト 他遺構より粒形が角ばった廃化物 ($\phi \sim 2\sim 5mm$) 3% 1層と地山ブロックの混合土層である。
3 黄褐色 (7.5YR4/3) シルト 粘性: やや弱い 他遺構より粒形が角ばった廃化物 ($\phi 5mm$) 1%
4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト 他遺構より粒形が角ばった廃化物 ($\phi 5mm$) 2%

P1290 . 16'.600m



- P1290
1 黄褐色 (10YR4/4) シルト しまり: やや弱い 他遺構より粒形が角ばった廃化物 ($\phi \sim 2\sim 5mm$) 5%
2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト 他遺構より粒形が角ばった廃化物 ($\phi \sim 2\sim 3mm$) 3%

SK1176 . 17'.600m



SK1176 <地盤上部>



SK1176



SK1176



SK1176



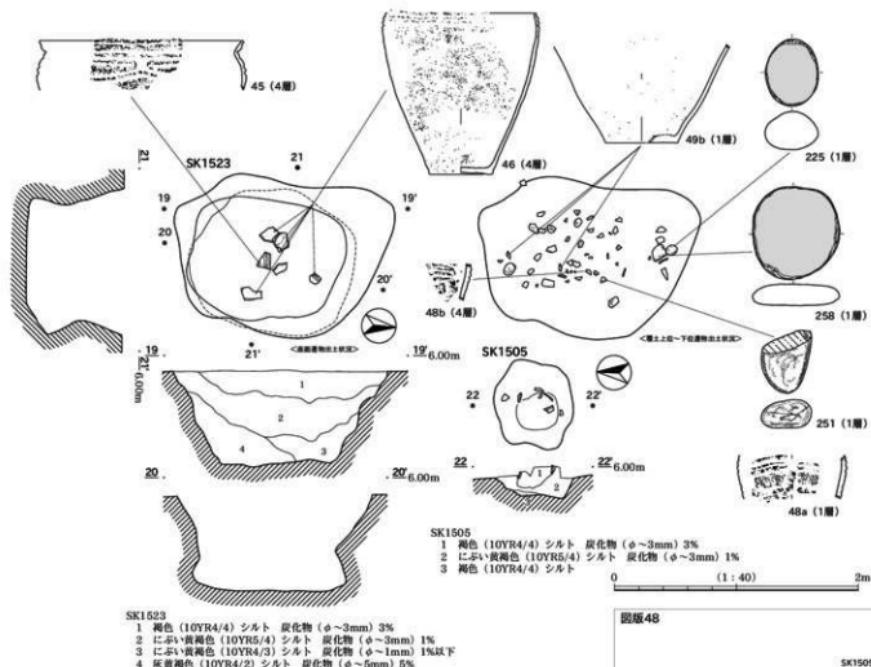
SK1176



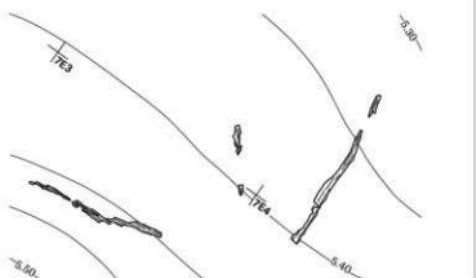
SK1176



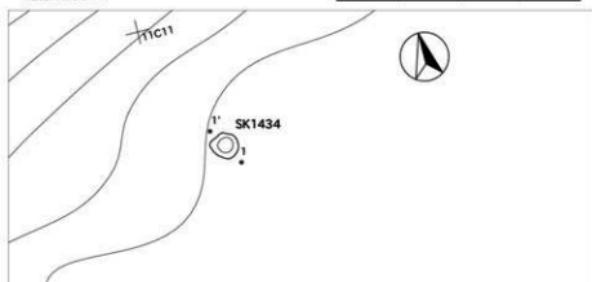
SK1176



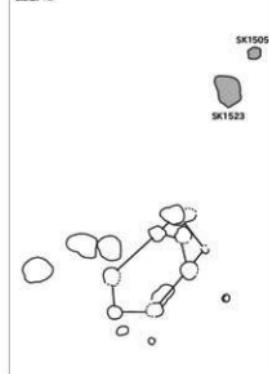
遺構分割図25 木質遺物出土状況



滑標分割圖26



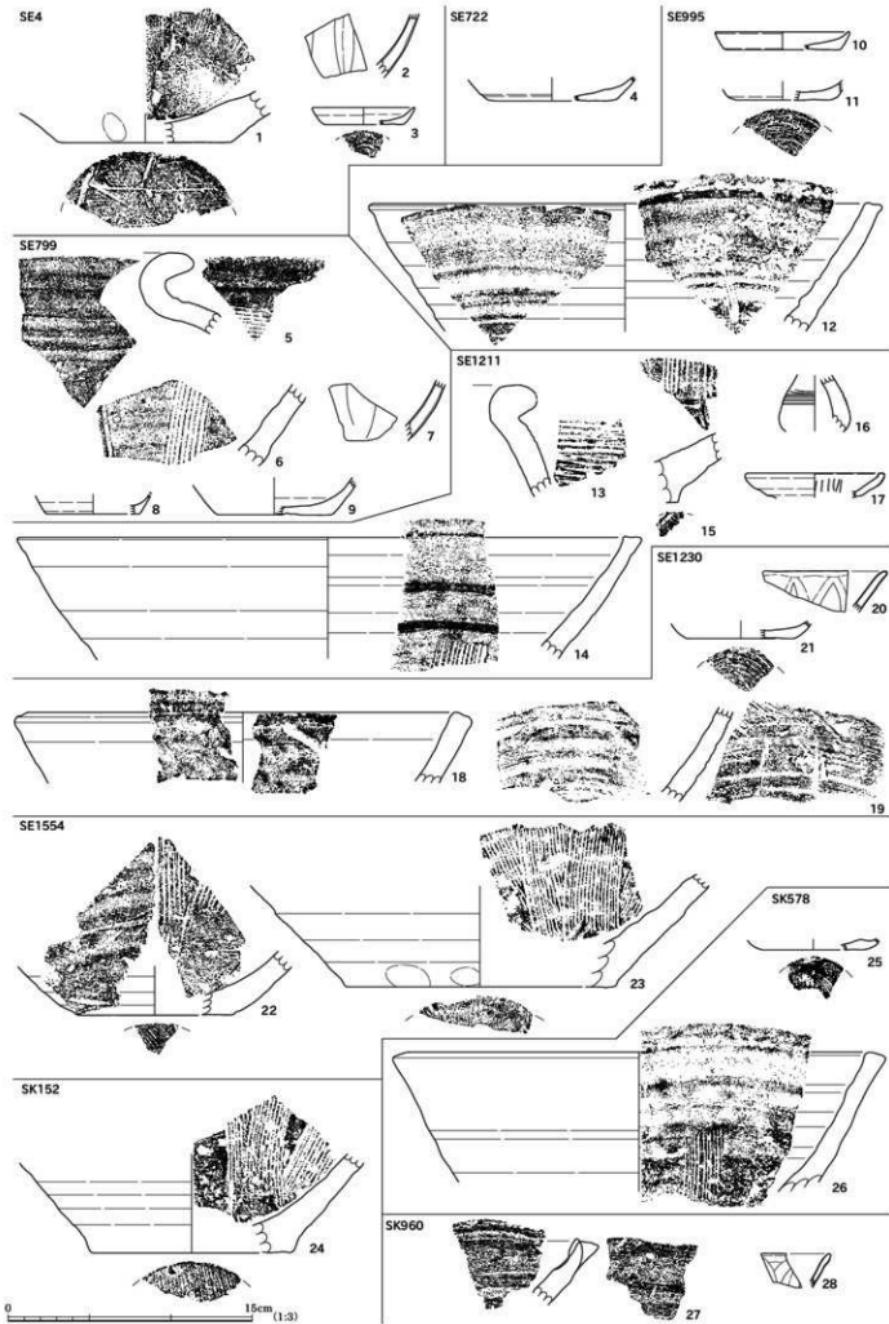
標題48

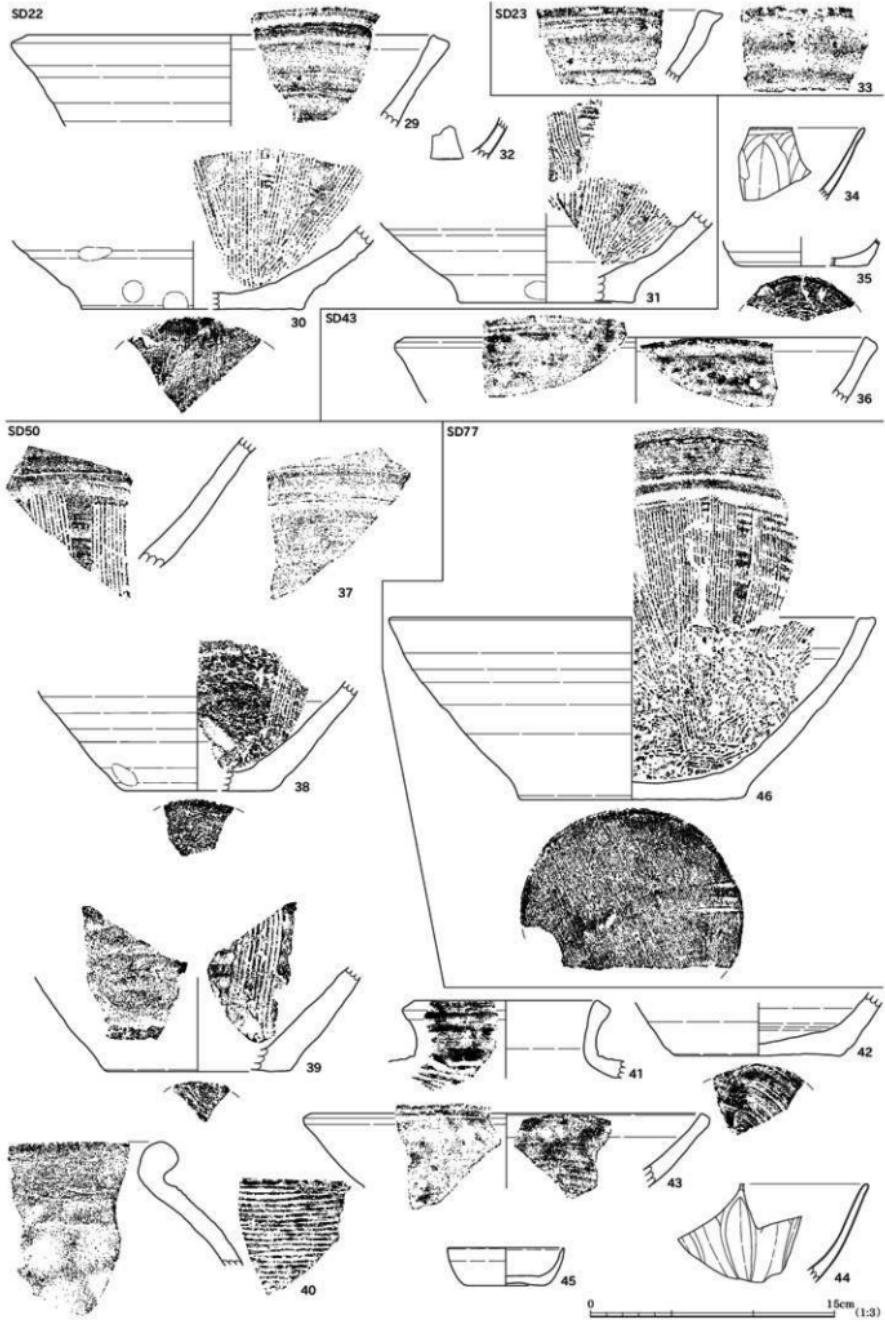


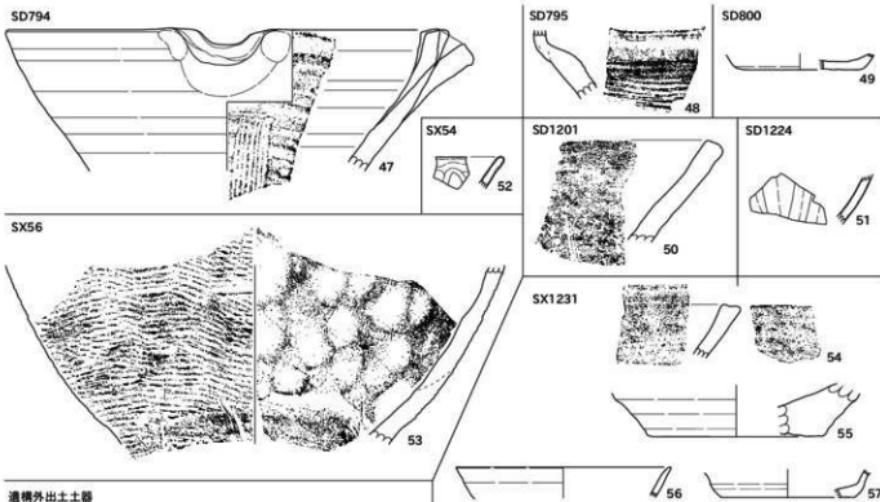
SK1434

1 褐色 (10YR4/4) シルト V層の落ち込みか。



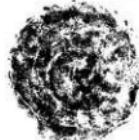




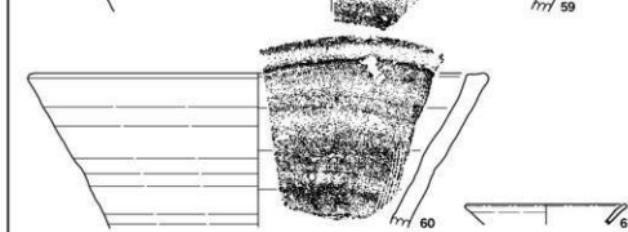
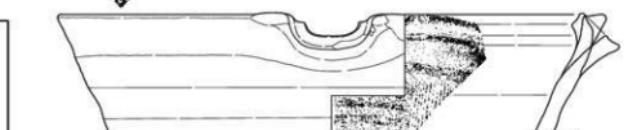
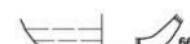


遺構外出土土器

SK1056



SK1177



SK1180

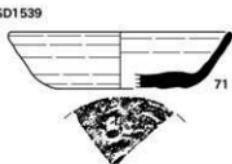


SK1180

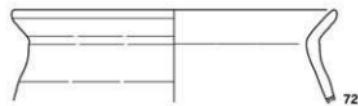


0

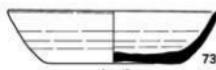
15cm (1:3)



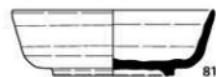
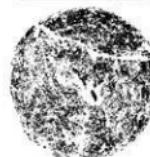
SX1537



SX1178



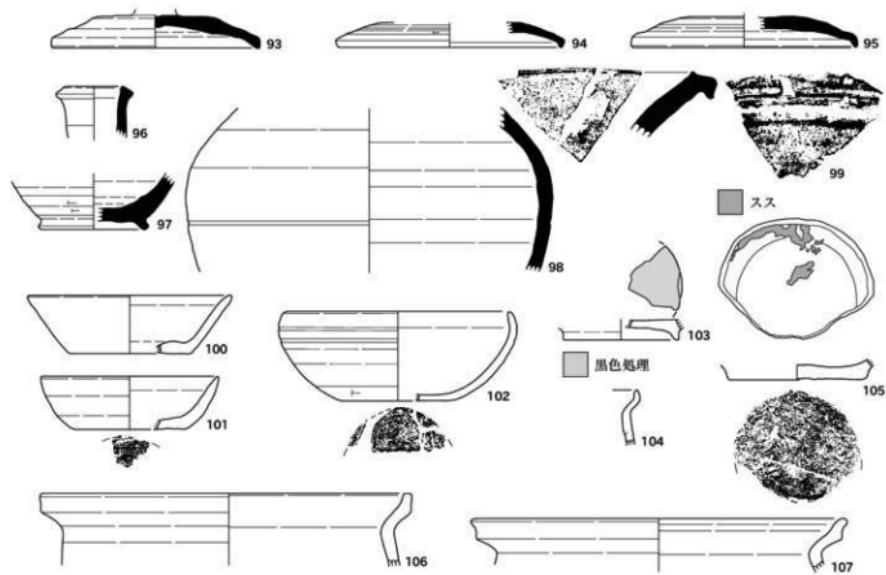
SX1624



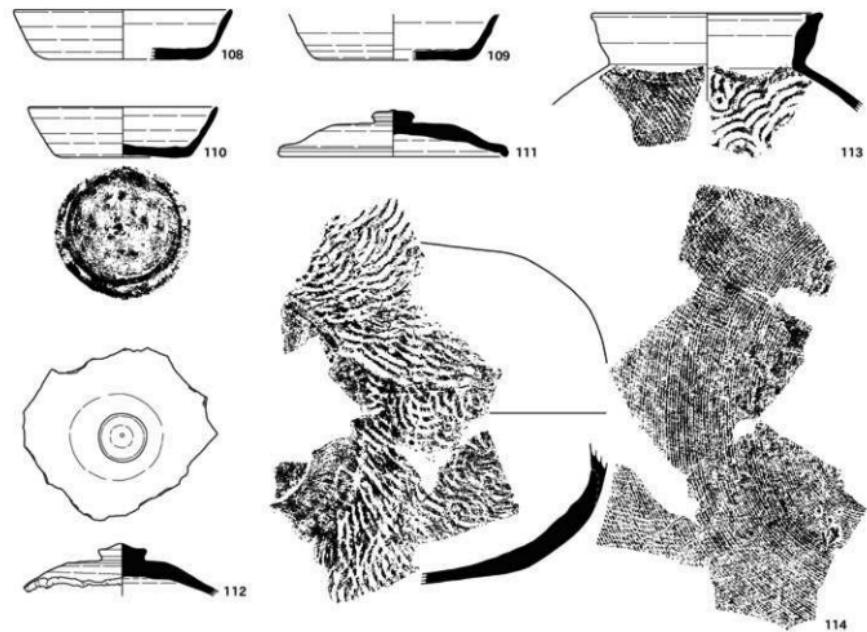
通常外出土土器（第1面）



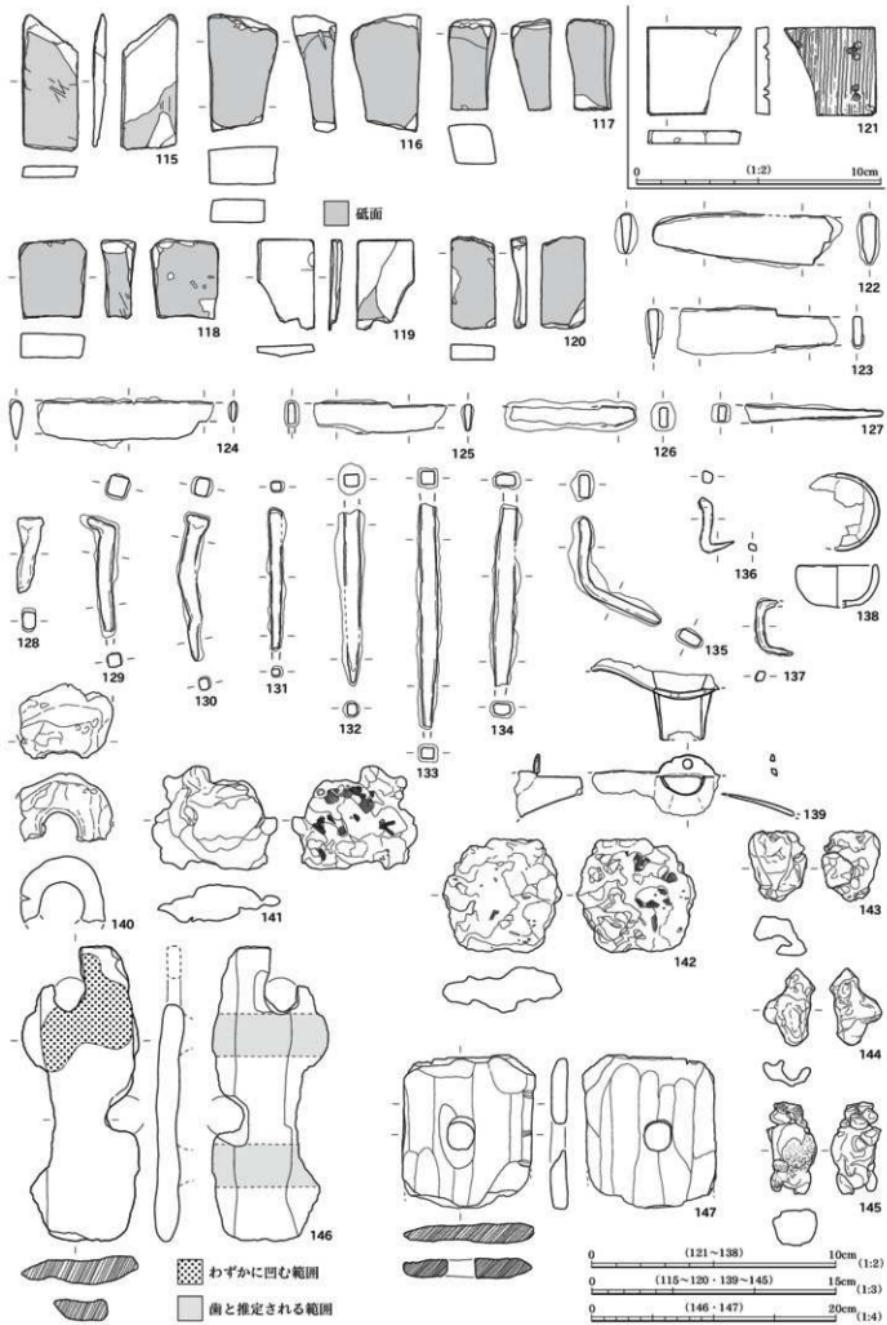
0 15cm (1:3)



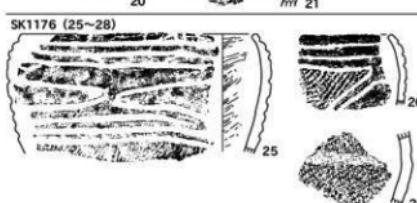
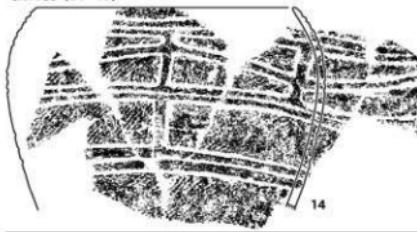
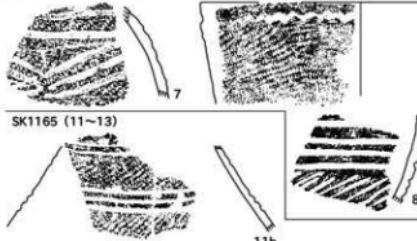
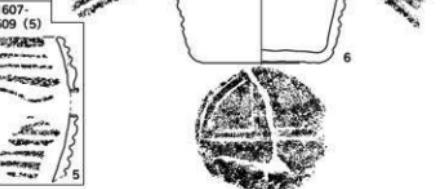
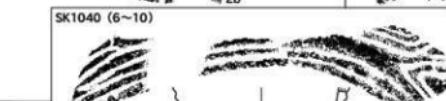
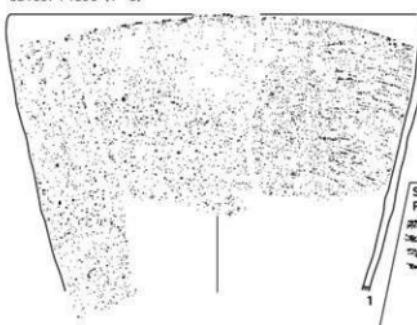
遺構外出土器（第2面）



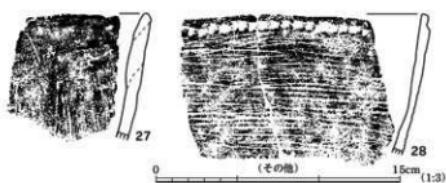
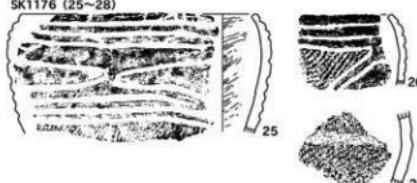
0 15cm (1:3)



SB1607-P1390 (1~3)

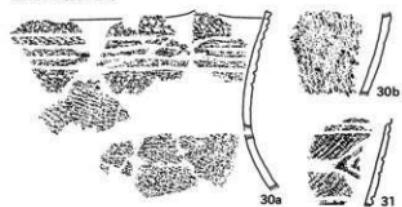


SK1176 (25~28)

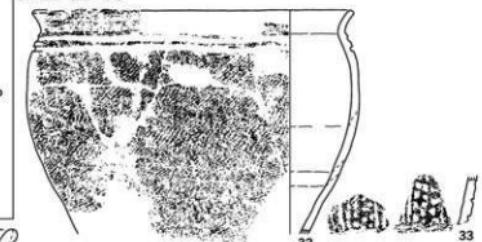


0 (その他) 15cm (1:3)
0 (1・9・10) 20cm (1:4)

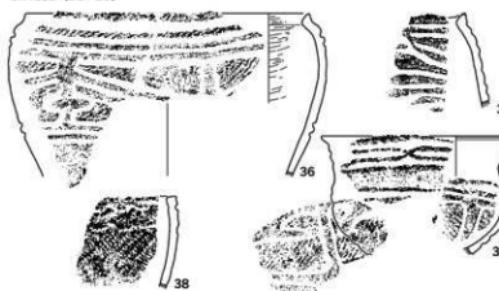
SK1214 (30・31)



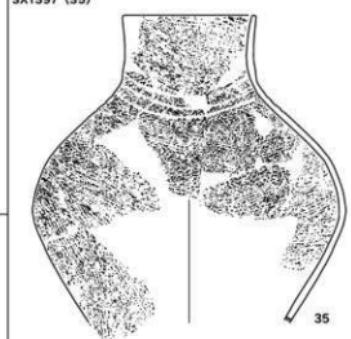
SK1227 (32~34)



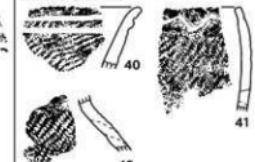
SK1289 (36~39)



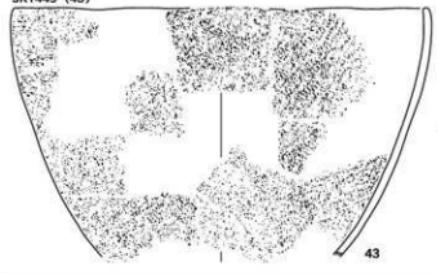
SX1397 (35)



SK1394 (40~42)



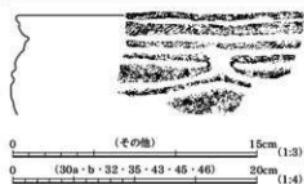
SK1449 (43)



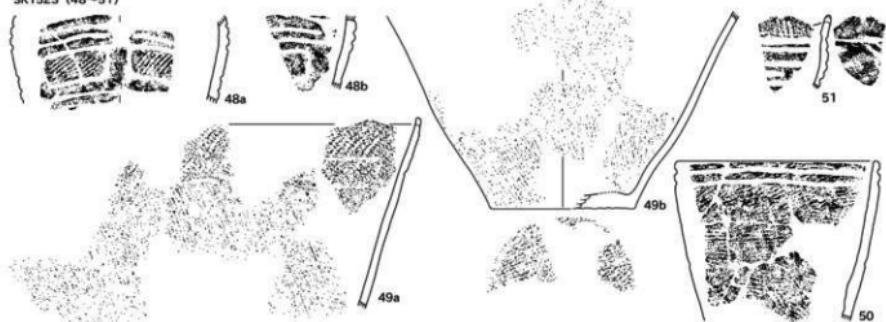
SK1502 (44)



SK1523 (45~47)



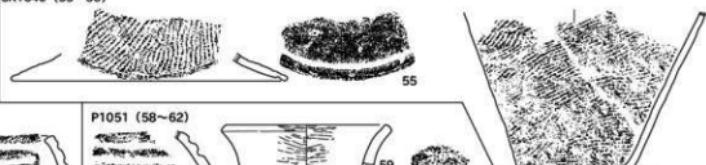
SK1523 (48~51)



SK1536 (52)



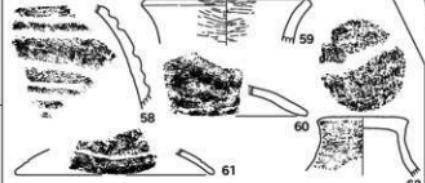
SK1640 (55~56)



SK1611 (53~54)



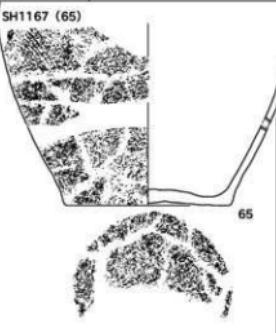
P1051 (58~62)



P1024 (57)



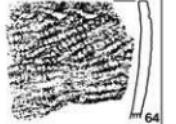
SH1167 (65)



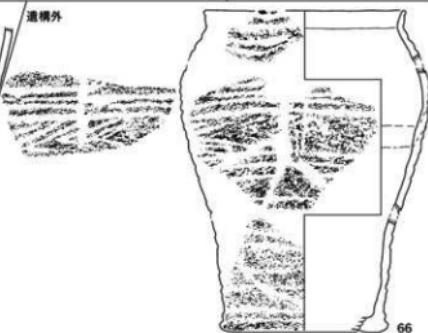
P1352 (63)



P1428 (64)



造模外



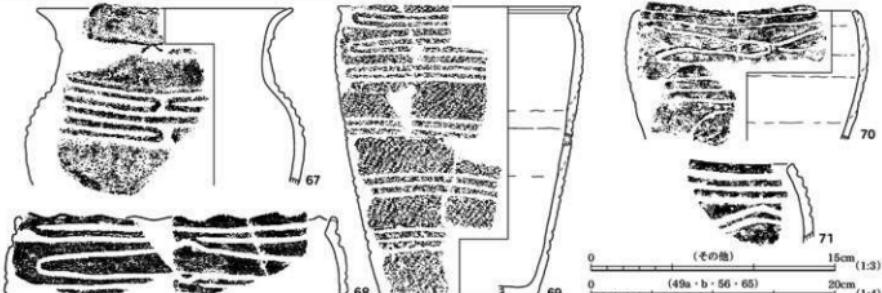
67



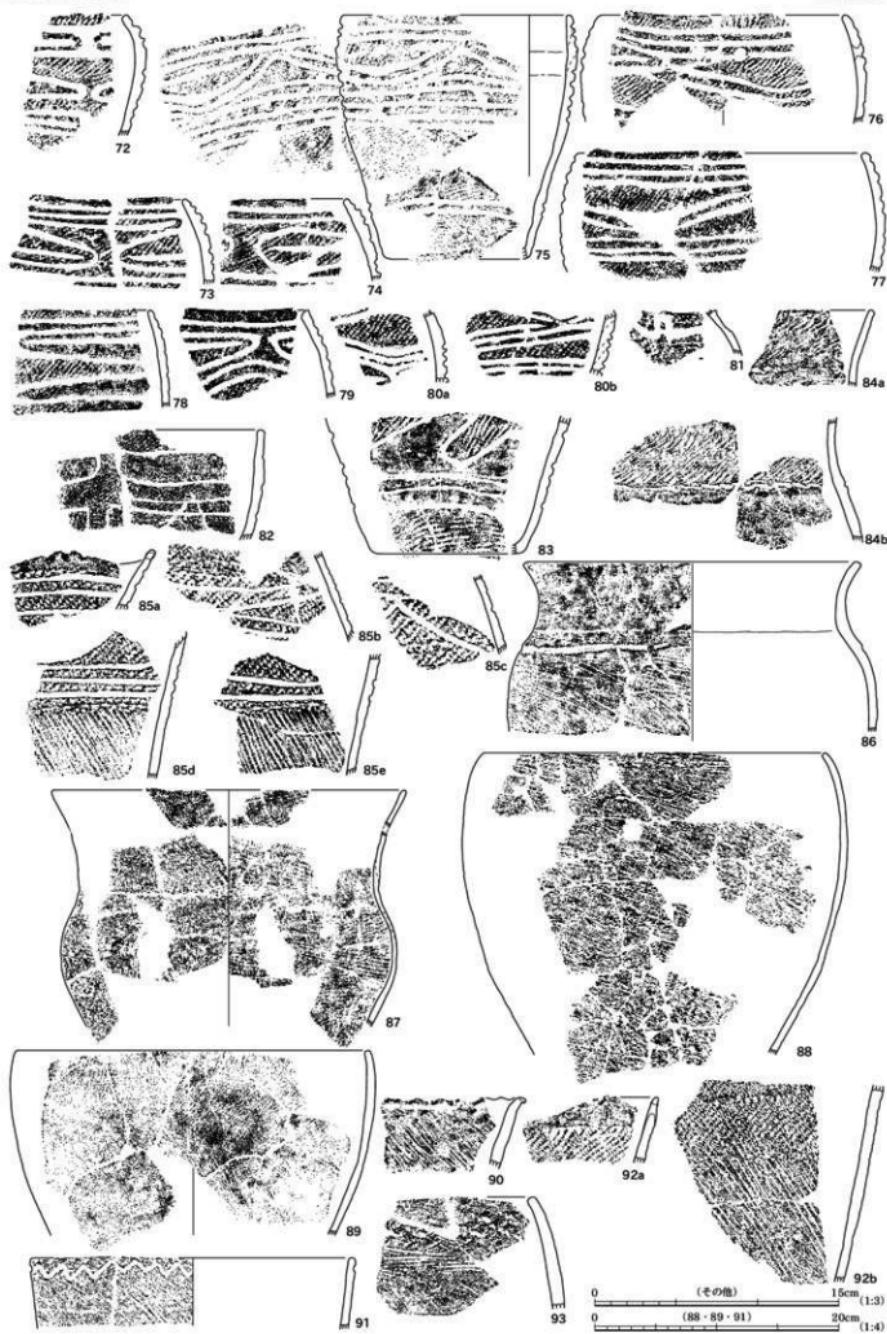
68

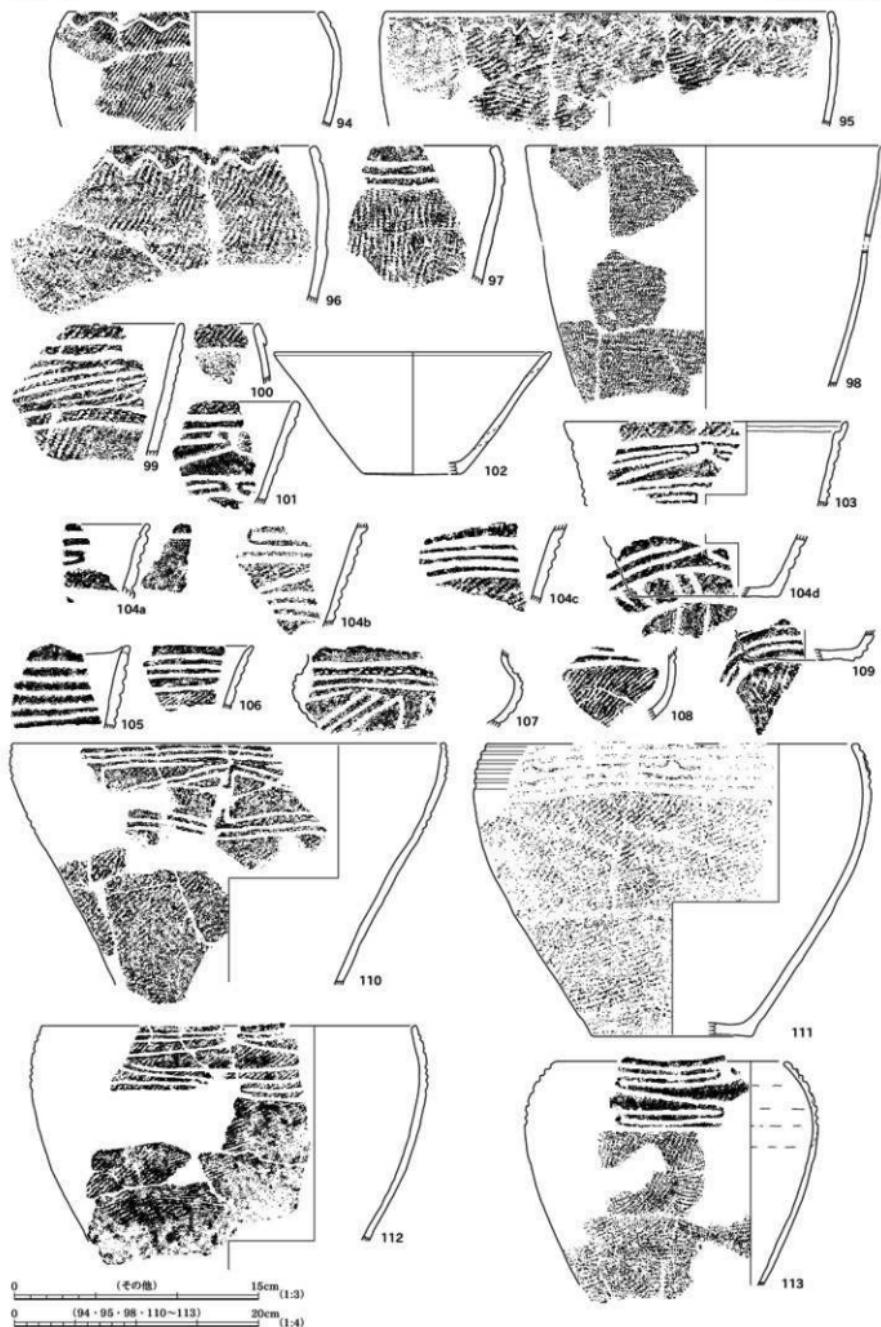


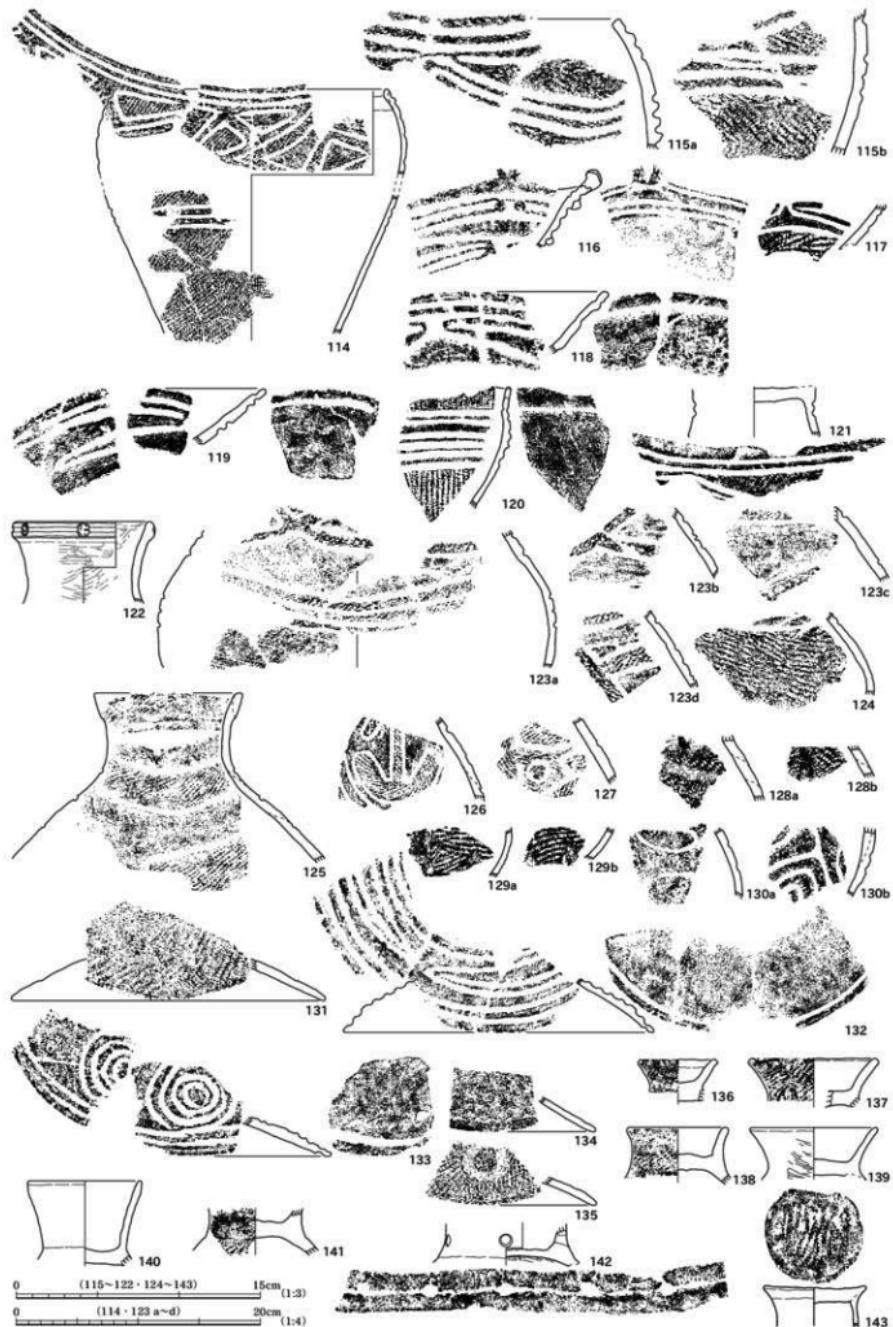
0 (その他) 15cm (1:3)
0 (49a・b・56・65) 20cm (1:4)

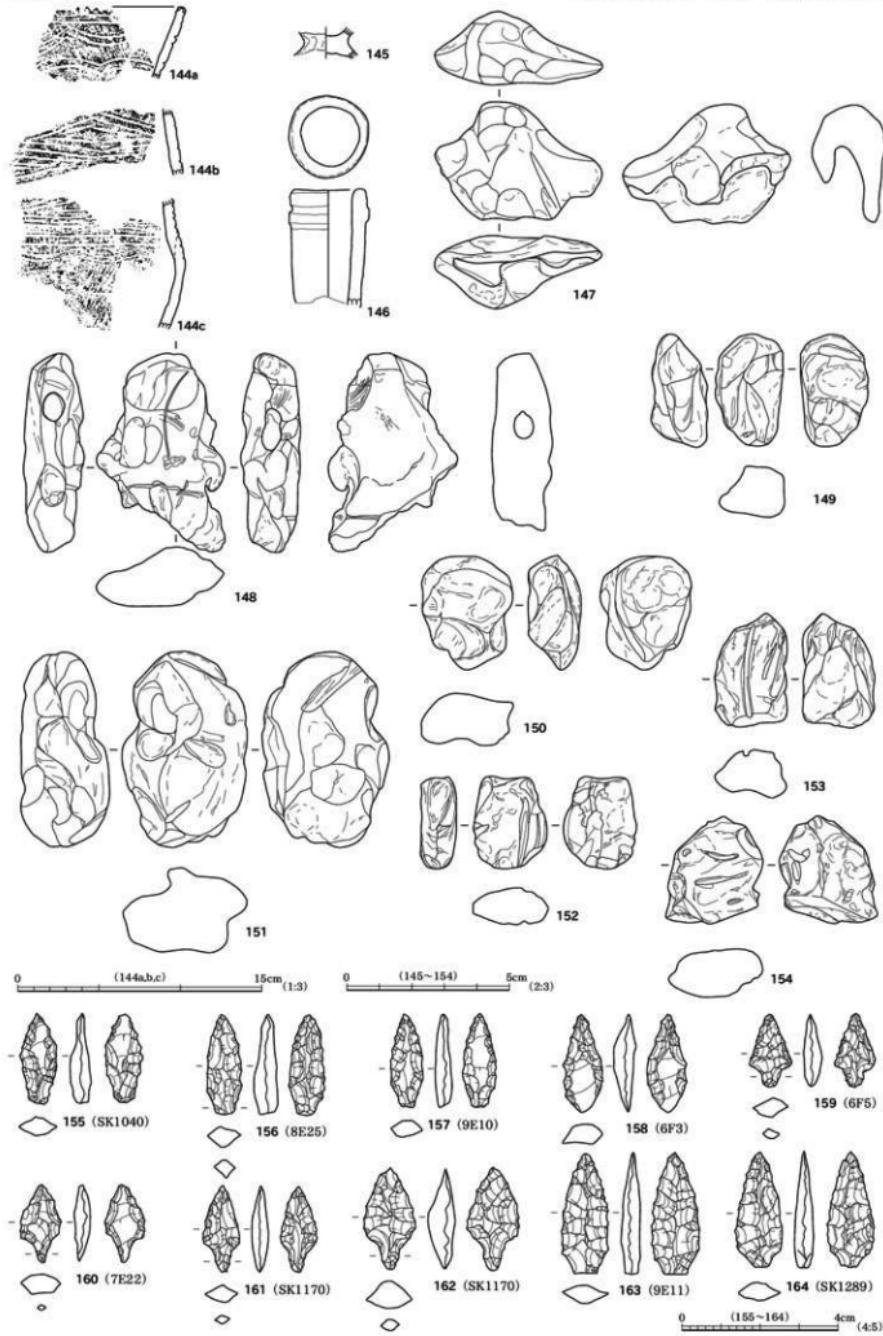


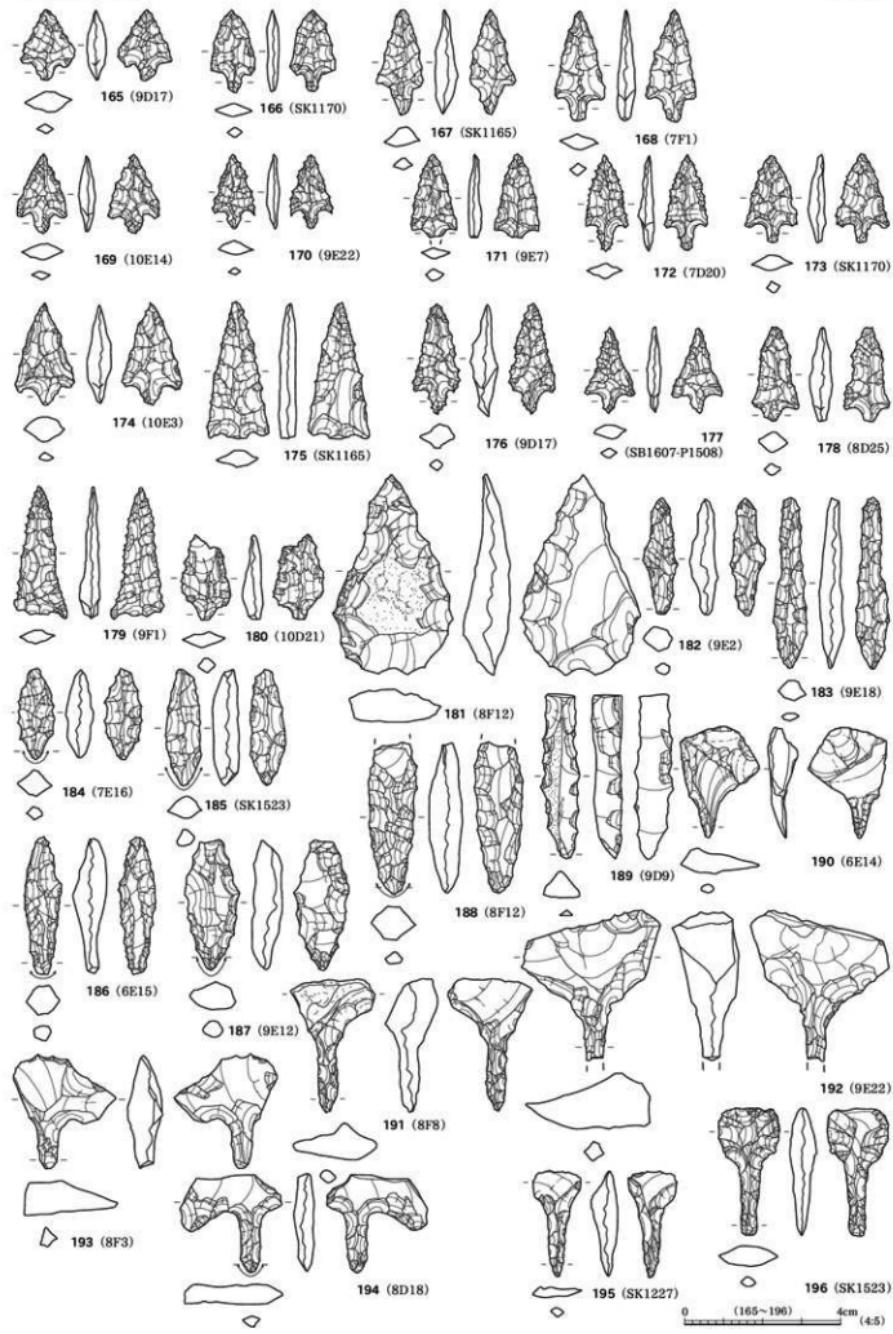
71

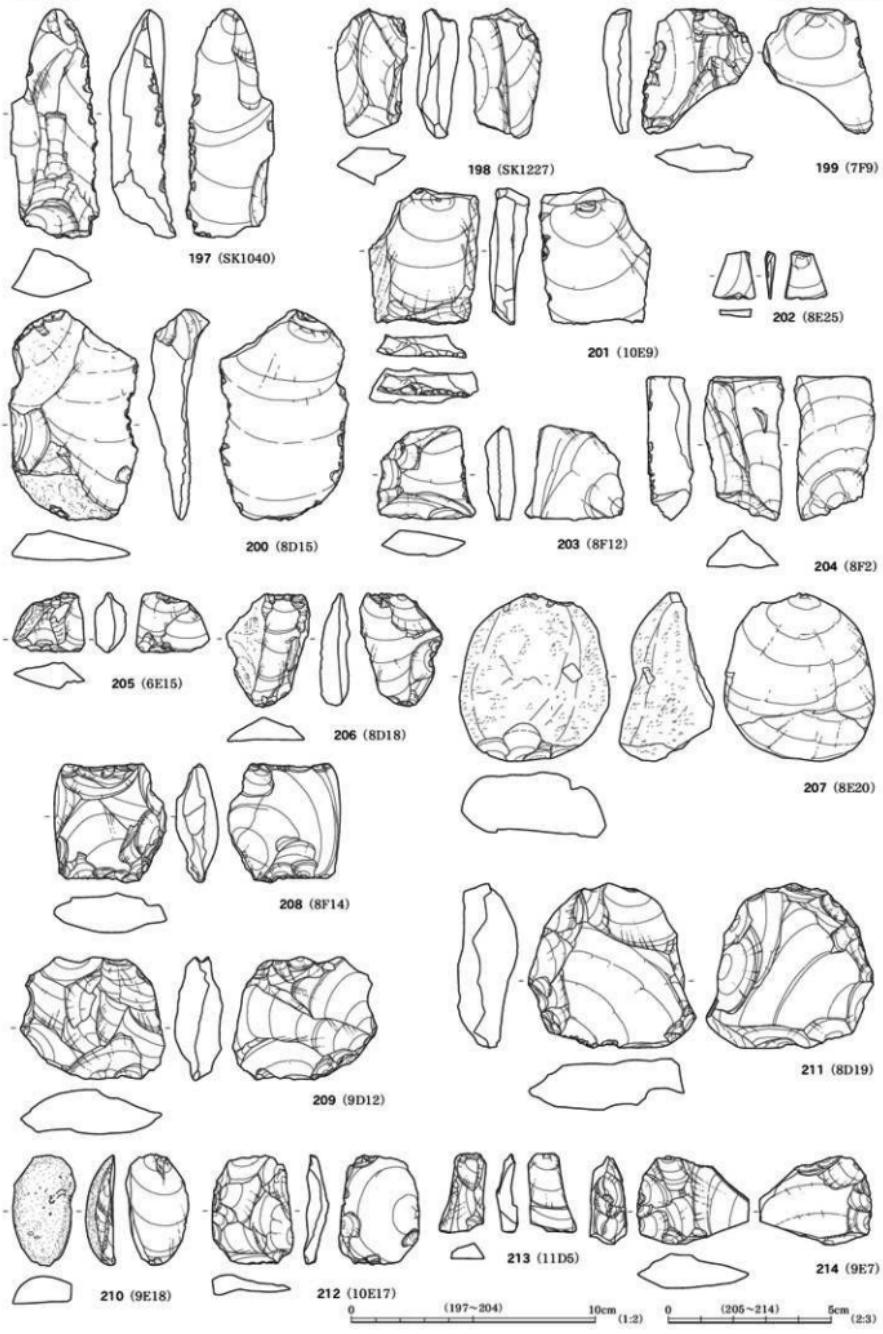


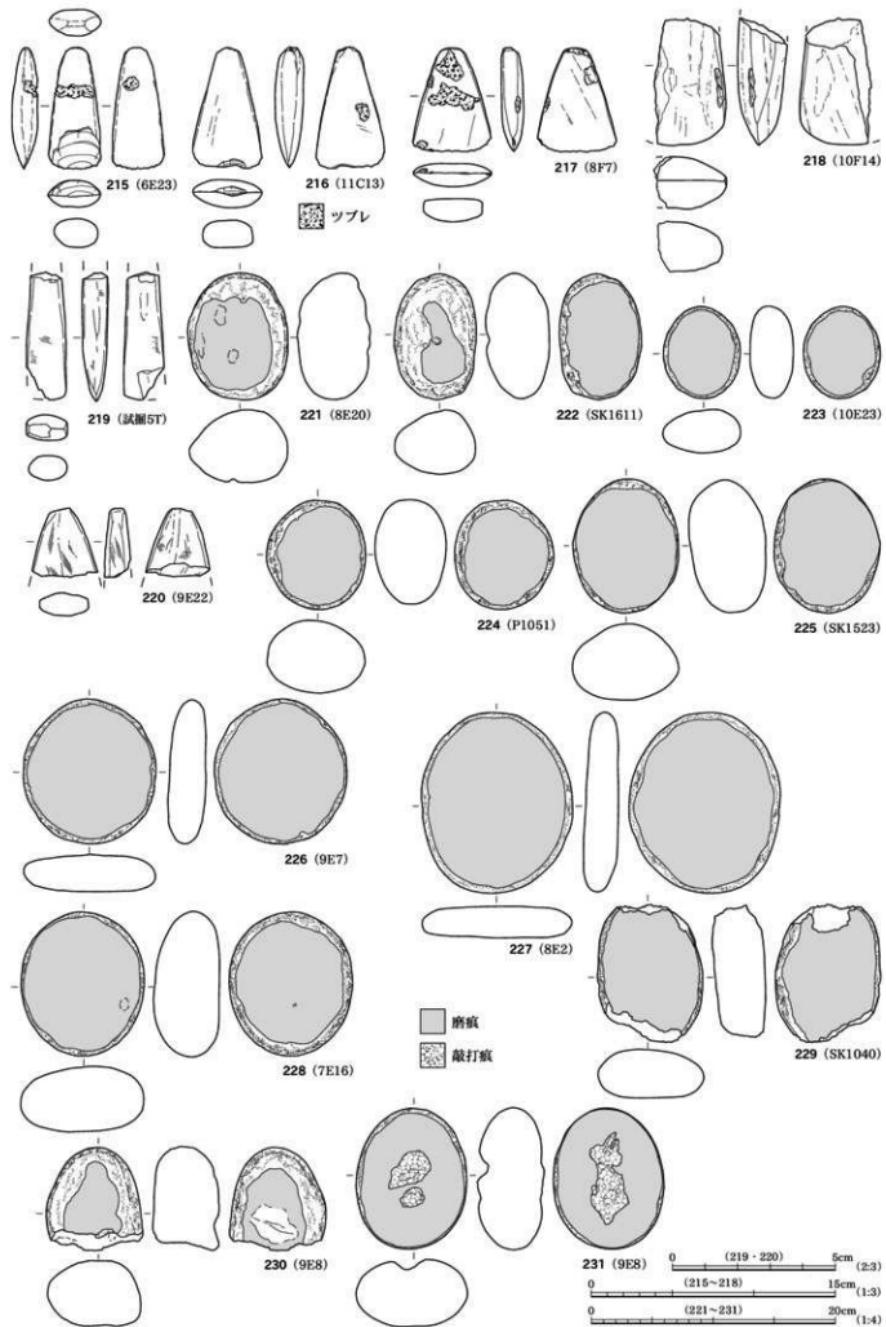


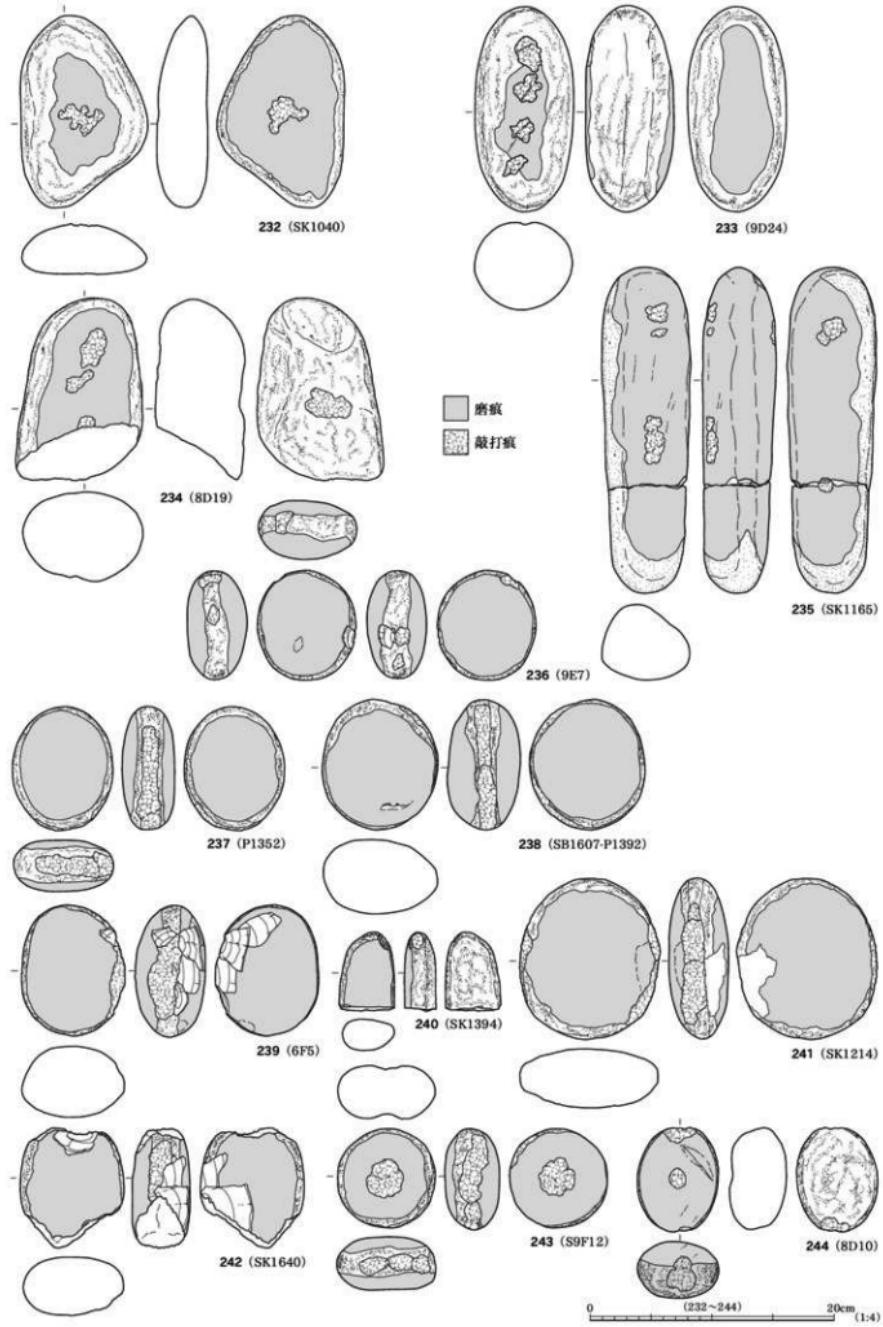


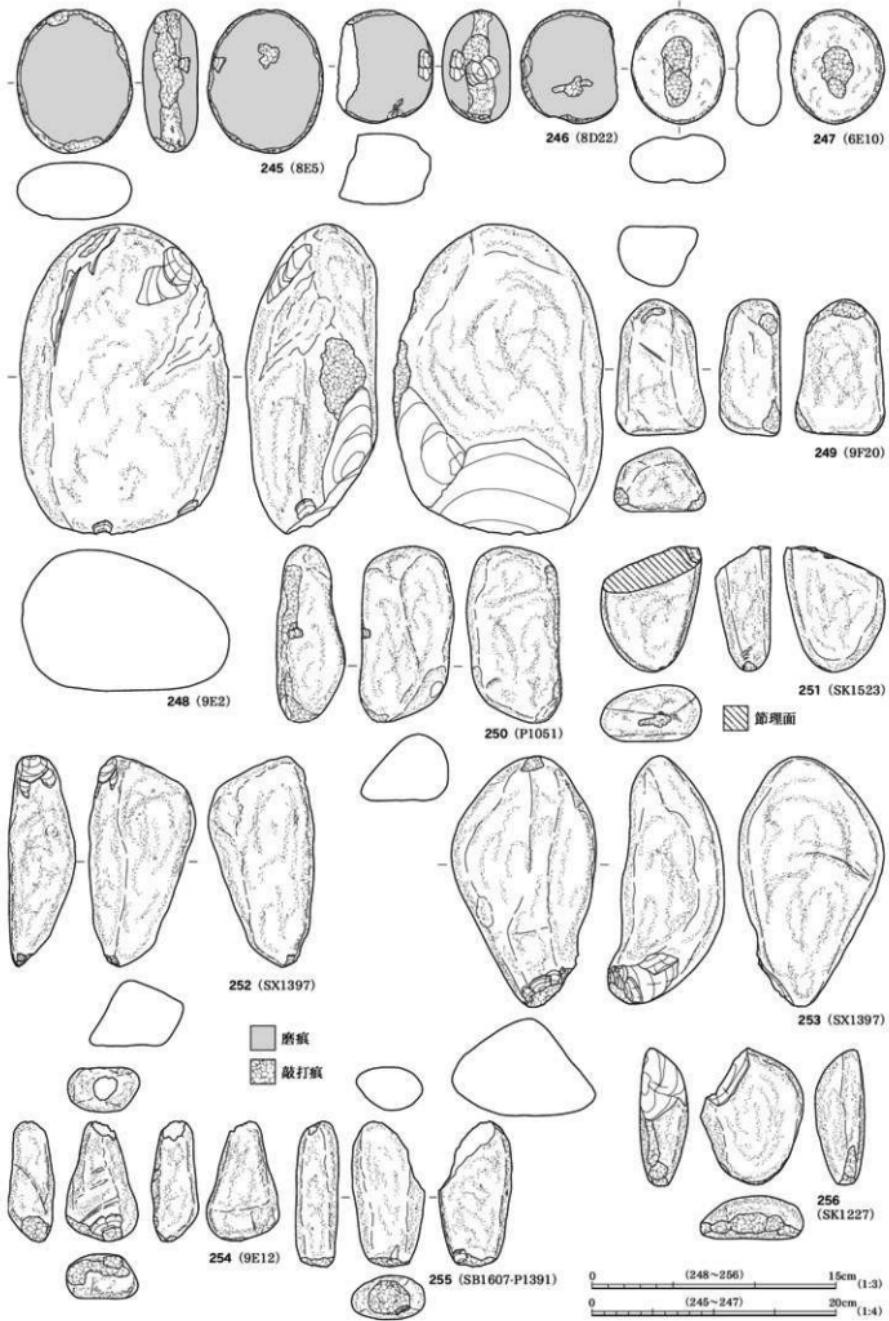


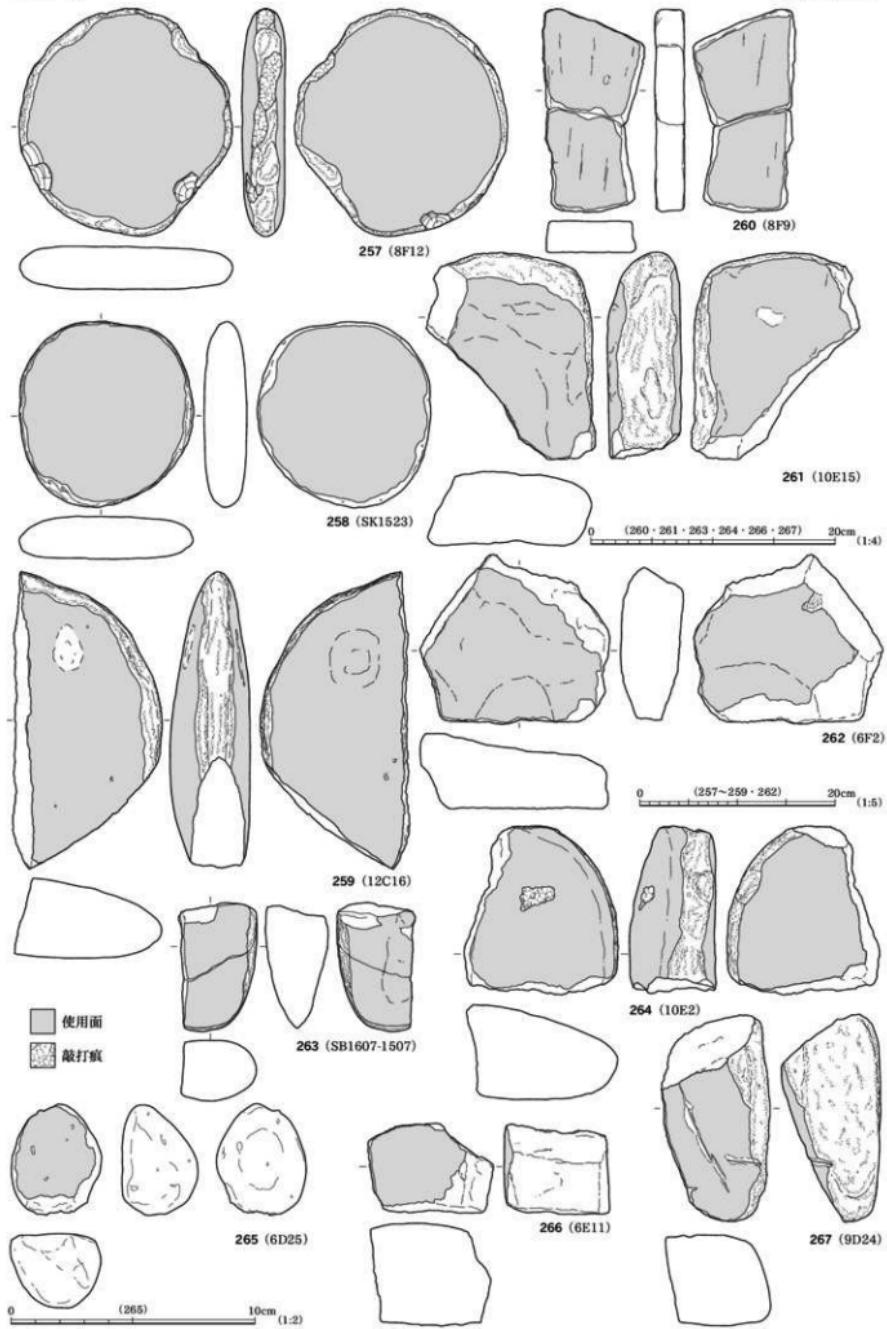


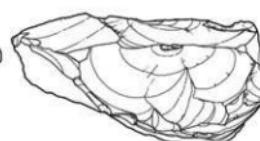
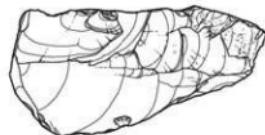




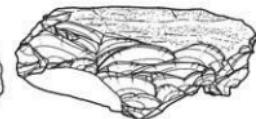
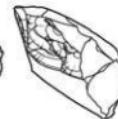
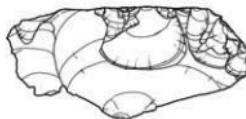








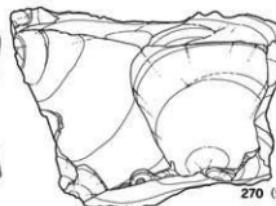
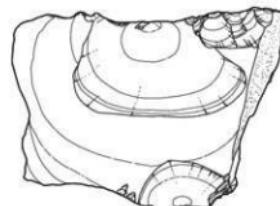
268 (SB1607-P1392)



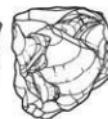
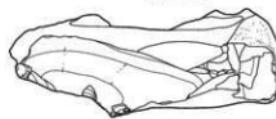
269 (7E13)



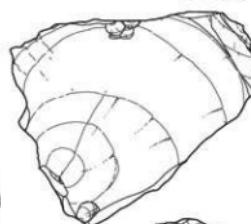
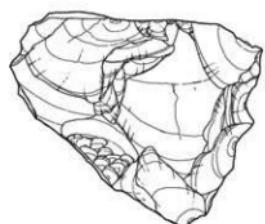
0 (268 - 269) 15cm (1:3)



270 (9E7)



271 (8E12)

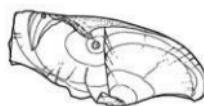
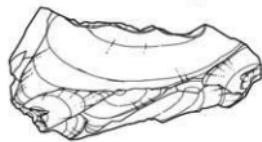
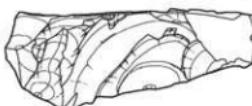
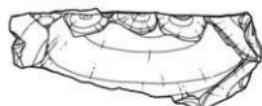


272 (SB1607-P1241)



273 (8F2)

0 (270~273) 10cm (1:2)



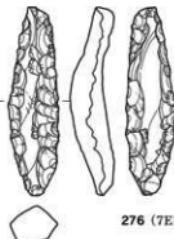
274 (11C7)



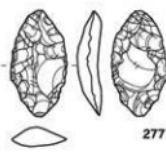
275 (P1024)



0 (274・275) 10cm (1:2)



276 (7E10)



277 (9E8)

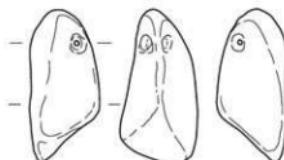


278 (6E8)

0

(278)

20cm (1:4)



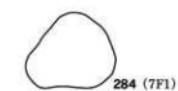
279 (8E3)



280 (8F13)



283 (SB1607-P1392)



284 (7F1)



285 (P1413)

0 (276・277・279～285) 4cm (4:5)

磨痕

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-



第1面 調査範囲全景（上が北、8月1日撮影写真と11月13日撮影写真を合成して作成）



遺跡遠景（南から、第1面、矢印の交点が熊山遺跡）



遺跡近景（西から、奥が五頭連峰）



調査前風景（西から、奥が五頭連峰）



基本土層（西から、6D グリッド。第5回・柱状図⑧）



作業風景（南から、SB1324）



第1面 4D グリッド付近（西側2E グリッドから）



第1面 5B・5C グリッド周辺（北東側7A グリッドから）



第1面 7E グリッド周辺（南東側8G グリッドから）



第1面 9B グリッド周辺（北西側8B グリッドから）



第1面 8E・8F グリッド周辺（南東側9G グリッドから）



第1面 7F・8E グリッド周辺（南西側6F グリッドから）



第1面 12F・13F グリッド周辺（南西側9G グリッドから）



第2面 8C・9C グリッド周辺（西側7B グリッドから）



第2面 6E グリッド周辺（南西側5F グリッドから）



第3面 調査範囲全景（上が北）



弥生時代の掘立柱建物（SB1607）完掘（南東から）



SB1607 内 被熱を受けた礫 出土状況 (東から)



SB1607-P1390 根固め土器出土状況 (南東から)



SK1040 遺物出土状況 (南東から)



SK1523 底面遺物出土状況 (南から)



9E17 グリッド 遺物出土状況 (南から)



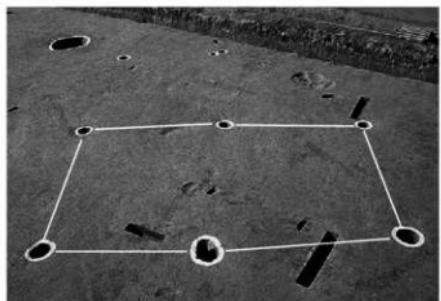
斜面部 遺物出土状況 (6F1 グリッド付近から北東方向を望む)



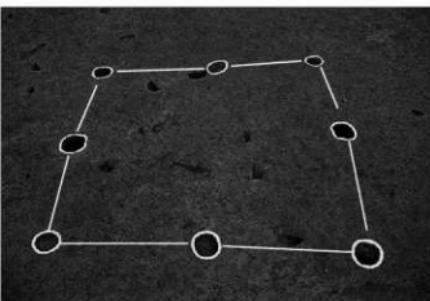
SK1289 垂玉出土状況 (北から)



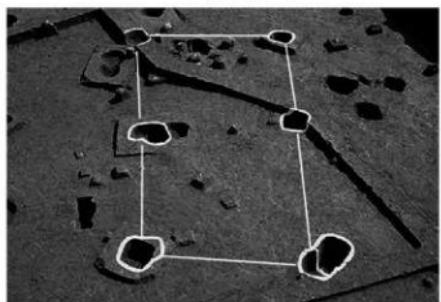
弥生時代の玉



SB1282 完掘（東から）



SB1324 完掘（南から）



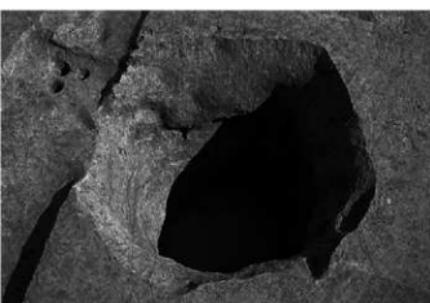
SB1500 完掘（西から）



SE4 断面（北から）



SE4 完掘（北から）



SE513 完掘（北から）



SE513 完掘（南から）



SE722 断面（南から）



SE722 完掘（北から）



SE799 断面（北から）



SE799 遺物出土状況（南西から）



SE799 完掘（北から）



SE857 断面（南から）



SE857 完掘（南から）



SE995 断面（南から、覆土上半）



SE995 遺物出土状況（南から）



SE995 断面（南から、覆土下半）



SE1052 断面（南から）



SE1052 完掘（南から）



SE1173 断面（南から）



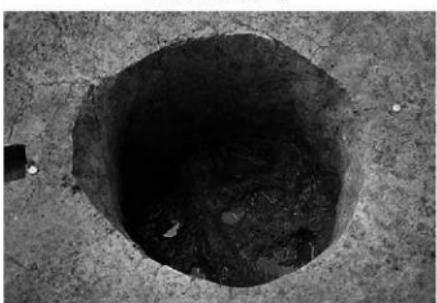
SE1173 完掘（南から）



SE1173 底面（東から）



SE1175 遺物出土状況（東から）



SE1175 完掘（東から）



SE1211 断面（南から）



SE1211 遺物出土状況（南東から）



SE1211 完掘（北から）



SE1220 断面（東から）



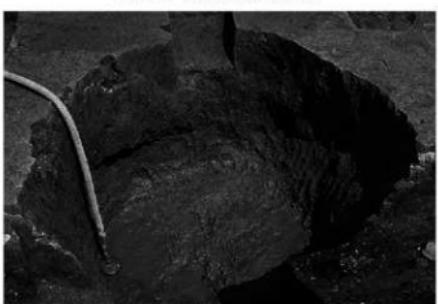
SE1220 遺物出土状況（東から）



SE1220 遺物出土状況（東から）



SE1230 断面（西から、左からSD1207、SE1230、SX1231）



SE1230 完掘（南西から）



SE1260 断面（南西から）



SE1260 完掘（北から）



SE1538 断面（西から）



SE1538 完掘（西から）



SE1554 断面（南から）



SE1554 遺物出土状況（北東から）



SE1554 6・7層断面（南から）



SE1554 完掘（南から）



SK7 断面（東から）



SK7 完掘（南東から）



SK15 断面（南から）



SK15 完掘（南から）



SK20 断面（西から）



SK20 完掘（北から）



SK48 完掘（東から）



SK49 完掘（北から）



SK52 剥離面 (東から)



SK52 完掘 (南東から)



SK53 剥離面 (北東から)



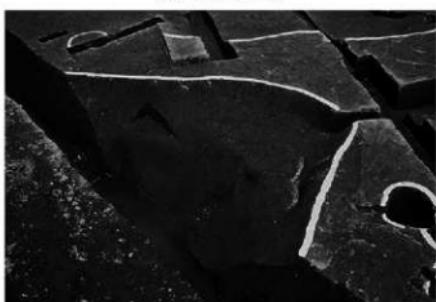
SK53 完掘 (北東から)



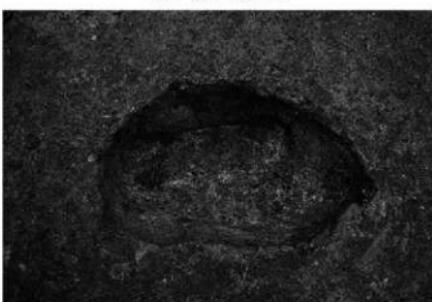
SK67 剥離面 (西から)



SK67 完掘 (北東から)



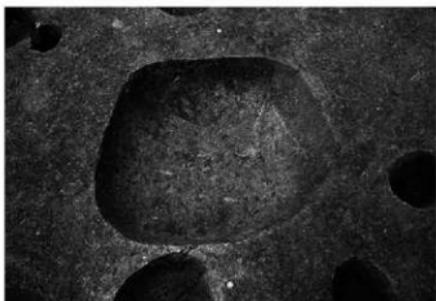
SK94 完掘 (西から)



SK150 完掘 (東から)



SK152 断面（南東から）



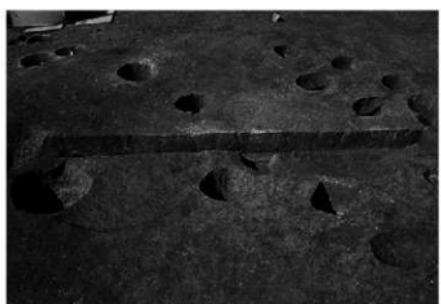
SK152 完整（北東から）



SK507 断面（南から）



SK507 完整（南東から）



SK520・SK521 断面（南から、左SK520）



SK520・SK521 完整（南から、左SK520）



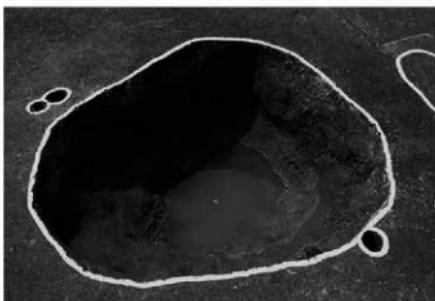
SK545 断面（南西から）



SK545 完整（南西から）



SK578 断面（南から）



SK578 完掘（東から）



SK721 断面（南東から）



SK721 完掘（南東から）



SK763 断面（東から）



SK763 完掘（東から）



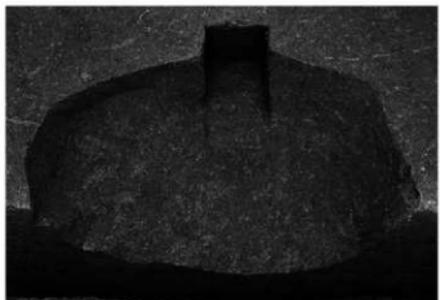
SK764 断面（南西から）



SK764 遺物出土状況（南から）



SK828 断面（南から）



SK828 完掘（南から）



SK829 断面（東から）



SK829 完掘（東から）



SK830 断面（北から）



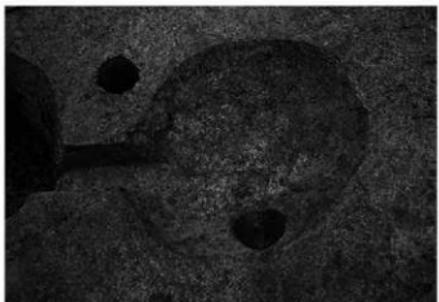
SK830 完掘（南から）



SK920 断面（北から）



SK922 断面（南から）



SK922 完掘（南から）



SK960 断面（北西から）



SK960 断面（北西から）



SK960 完掘（北東から）



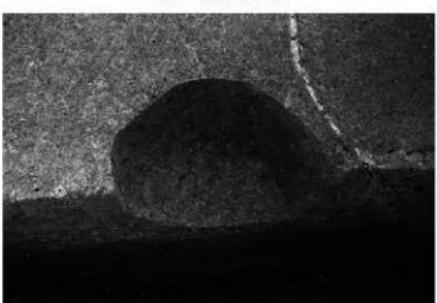
SK969 断面（西から）



SK969 完掘（西から）



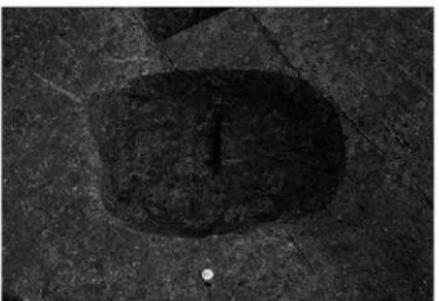
SK991 断面（南から）



SK991 完掘（南から）



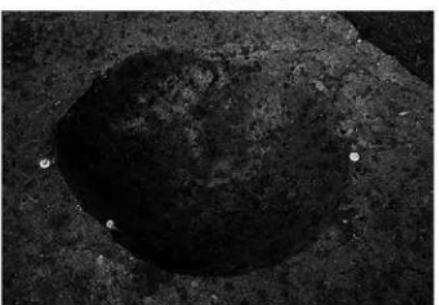
SK997 断面（東から）



SK997 完掘（北から）



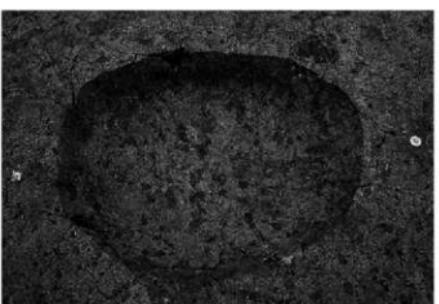
SK1054 断面（南から）



SK1054 完掘（南から）



SK1055 断面（南東から）



SK1055 完掘（南東から）



SK1056 遺物出土状況（北から）



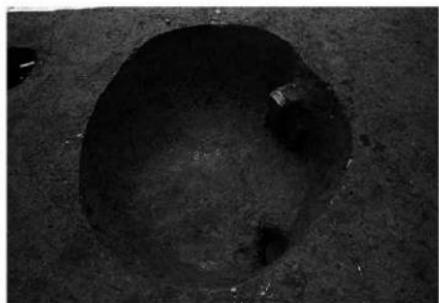
SK1057 断面（西から）



SK1057 完掘（西から）



SK1058 断面（西から）



SK1058 遺物出土状況（北から）



SK1174 完掘（南東から）



SK1177 断面（東から）



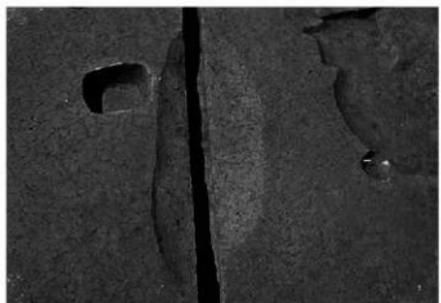
SK1177 遺物出土状況（西から）



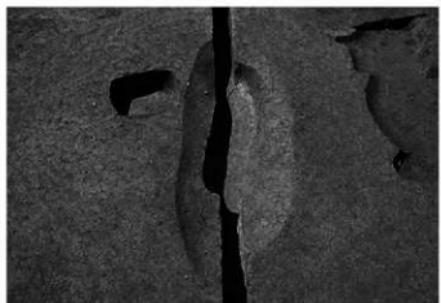
SK1179 断面（南西から）



SK1179 遺物出土状況（北東から）



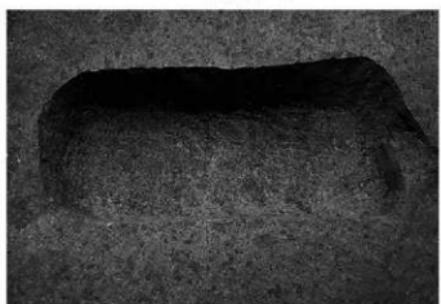
SK1180 完掘（東から）



SK1210 完掘（東から）



SK1212 断面（南から）



SK1212 完掘（北から）



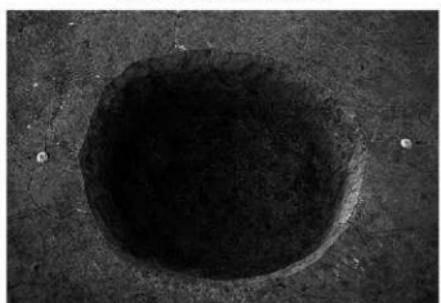
SK1213 断面（南から）



SK1213 遺物出土状況（南東から）



SK1225 断面（南から）



SK1225 完掘（南から）



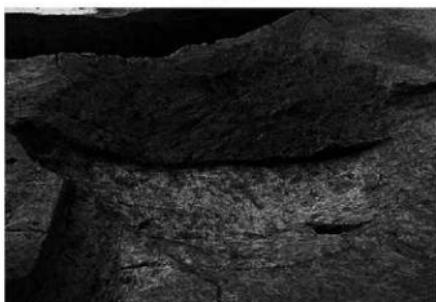
SK1255 断面（北から）



SK1255 完掘（北から）



SK1414 完掘（北東から）



SK1414 壱化物層断面（北から）



SK1621 断面（北から）



SK1621 完掘（北から）



SX1555 断面（西から）



SX1555 完掘（西から）



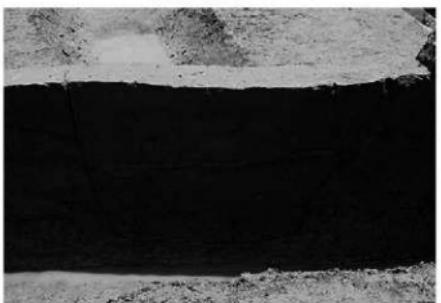
SD22・SD27 断面(北西から、中央SD22)



SD22・SD23・SD27 遺物出土状況(東から、左からSD23・22・27)



SD23 遺物出土状況(西から)



SD24 断面(西から、図版5上段 3-3')



SD24・SD25 断面(南西から、左SD24)



SD24・SD25 完掘(南西から)



SD43 断面(南西から、図版11 5-5')



SD43 完掘(北西から)



SD50 断面（北東から、図版15 6-6')



SD50 断面（東から、図版11 10-10')



SD50 断面（東から、図版11 11-11')



SD50 遺物出土状況（東から）



SD77 断面（西から、図版3 5-5')



SD77 完掘（西から、右 SX55）



SD148 断面（北東から、図版13 7-7')



SD148 遺物出土状況（北東から）



SD148・580 完掘（南西から、手前 SD148）



SD546 断面（南西から）



SD546 完掘（南西から、右 SK545）



SD574 断面（南東から）



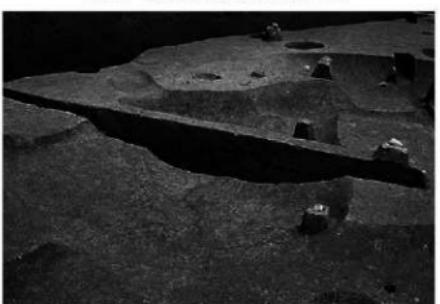
SD580 断面（南西から、図版 17 下段 5-5')



SD580 断面（東から、図版 23 下段 2-2')



SD583 断面（南西から、図版 9 9-9')



SD583 断面（南西から、図版 9 8-8')



SD624 断面（南西から）



SD645 断面（東から）



SD793・795・798（北から、左から795・793・798。図版13 9-9'）



SD795 断面（北西から。図版13 10-10'）



SD796・SD797 断面（西から）



SD800（左）・SD801（右）断面（西から）



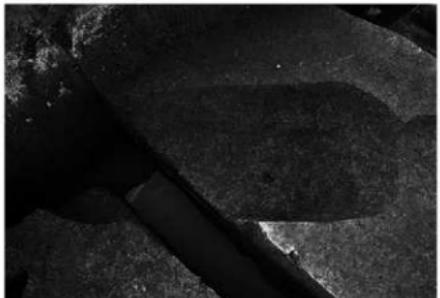
SD800・SD801 断面（西から、左SD800）



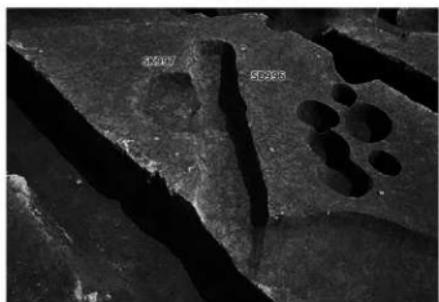
SD800（右）・SD801（左） 完掘（北東から）



SD962 新面（南西から）



SD962 完掘（南東から）



SD996 完掘（北西から、左SK997）



SD1031 断面（北西から、図版36下段 4-4'）



SD1031 断面（北西から、図版29 7-7'）



SD1031 完掘（北から、SD1032と重複）



SD1031 · SD1032 断面（北から、図版27 6-6'）



SD1032 断面（南から、図版29 8-8'）



SD1032 完掘（北から）



SD1041・SD1042・SD1043 断面（西から）



SD1042・SD1041・SD1044 完掘（東から）



SD1043 完掘（西から）



SD1044 断面（西から）



SD1044 完掘（西から）



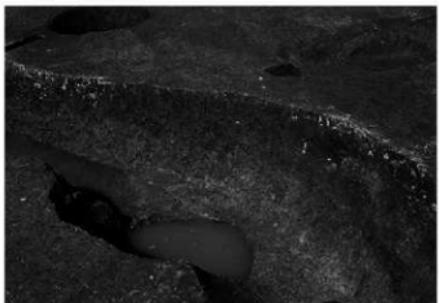
SD1201 断面（西から、図版 29 10-10')



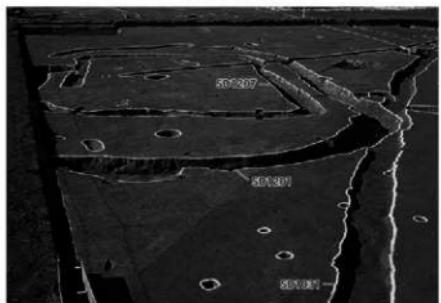
SD1201 断面（南西から、図版 36 下段 5-5')



SD1201 遺物出土状況（東から）



SD1201 (東側張り出し部分) 完掘 (南東から)



SD1201 完掘 (南東から、右SD1031)



SD1207 断面 (北から、図版31 9-9')



SD1207 断面 (西から、図版29 10-10')



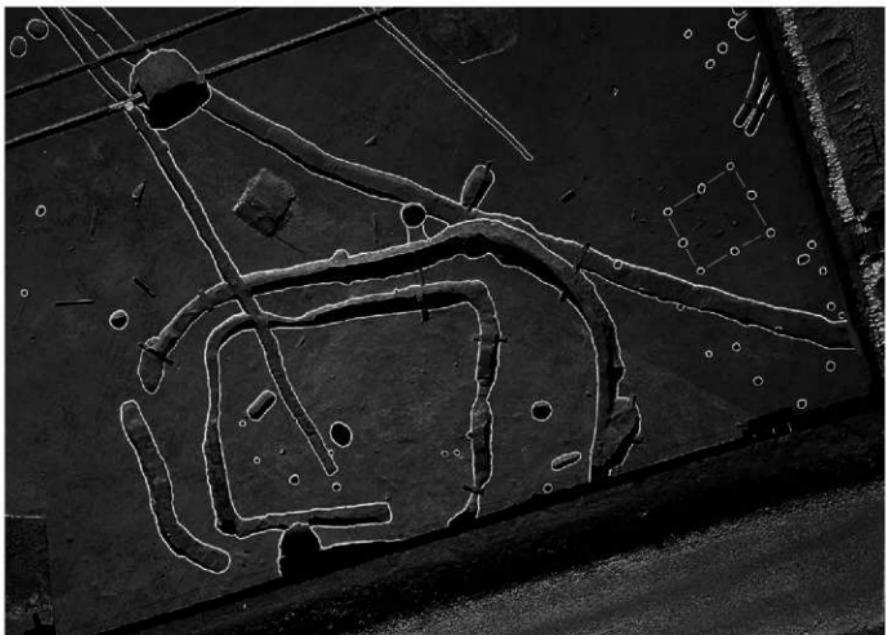
SD1207 断面 (西から、図版31 11-11')



SD1207 断面 (北西から、図版31 12-12')



SD1224 断面 (北から)



SD1201・SD1207・SD1224 全景（上が北東、図版30）



SD1521・SD645・P1522 断面（西から）



SD1539 断面（西から）



SD1540 断面（北から）



SD1541 断面（南から）



SX55 断面（上半、南西から）



SX55 完掘（東から）



SX55 断面（下半、南西から）



SX55 摂り方完掘（東から）



SX1537 遺物出土状況（北から）



11F4・5グリッド 遺物集中範囲（北から）



戸間状遺構 完掘（西から、15E グリッド周辺）



戸間状遺構 完掘（南西から、15F グリッド周辺）



SX1543 断面（北西から）



SX1544 断面（西から）



SX17 完掘（西から）



SX54 断面（南西から）



SX56 断面（北から）



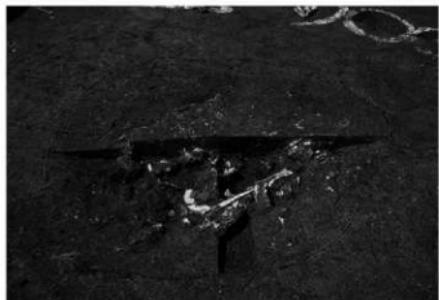
SX85 完掘（南西から）



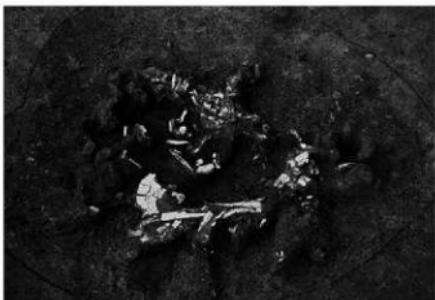
SX144 完掘（南から）



SX153 断面（南東から）



SX154 断面（南から）



SX154 骨片散布状況（南東から）



SX154 完掘（南東から）



SX573 遺物出土状況（南から）



SX577 断面（南から）



SX610 完掘（南東から）



SX647 断面（南西から）



SX647 完掘（南から）



SX648・SD580 断面（北西から、左 SX648）



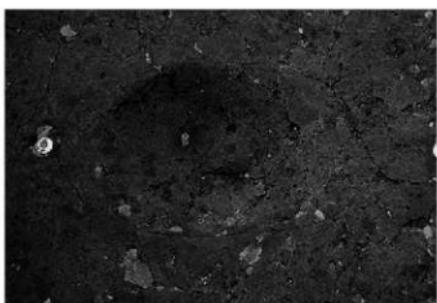
SX648 完掘（西から、右 SD580）



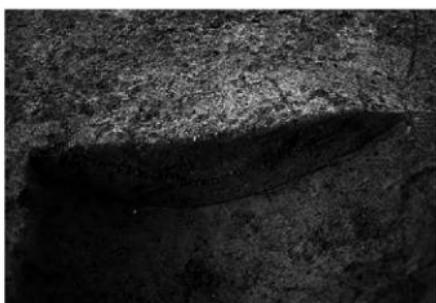
SX1178 完掘（南から）



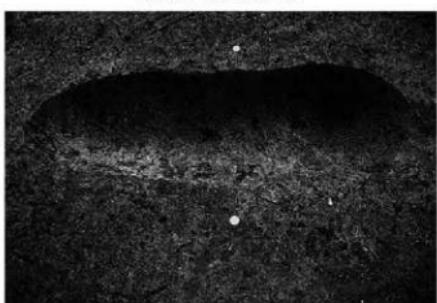
SX1208 完掘（南西から）



SX1209 完掘（南東から）



SX1623 断面（東から）



SX1623 完掘（北から）



SX1624 遺物出土状況（北から）



P73・P74 断面（北から、左P73・P74、図版3）



P73・P74 完掘（北から、図版2）



P105 断面（南西から、図版17）



P105 完掘（南西から、図版14）



P117 断面（南から、図版2）



P485 断面（東から、図版12）



P1337 断面（北西から、図版40）



P1430 断面（西から、図版40）



SB1607 完掘 (南西から)



SB1607-P1241 遺物出土状況 (南東から)



SB1607-P1390 断面 (西から)



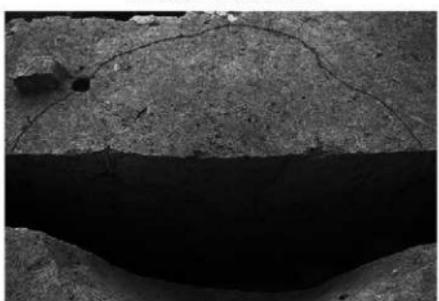
SB1607-P1390 柱痕部完掘 (西から)



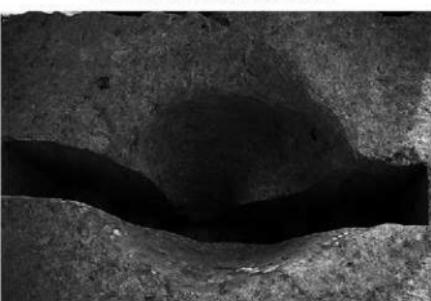
SB1607-P1391 完掘 (西から)



SB1607-P1392 遺物出土状況 (西から)



SB1607-P1506 断面 (北から)



SB1607-P1506 完掘 (北から)



SB1607-P1507 完掘（南東から）



SB1607-SX1637 完掘（西から）



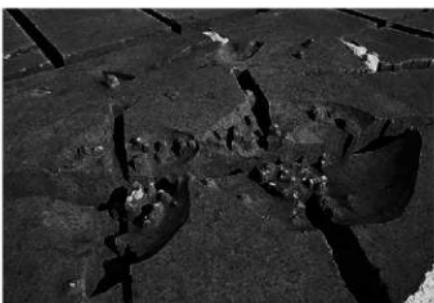
SK1040 断面（南東から）



SK1040 完掘（南東から）



SK1170 断面（南西から）



SK1165・SK1170 遺物出土状況（南東から）



SK1450 断面（西から）



SK1170・SK1165・SK1450 完掘（北から）



SK1166 断面（南から）



SK1166 完掘（西から）



SK1176 完掘（北から）



SK1214 完掘（南西から）



SK1227 遺物出土状況（東から）



SK1227 完掘（南から）



SK1289 断面（北から）



SK1289 完掘（北から）



SK1350 断面（東から）



SK1350 完掘（東から）



SK1394 断面（西から）



SK1394 完掘（西から）



SK1449 断面（北から）



SK1449 完掘（北から）



SK1502 断面（南から）



SK1502 完掘（南から）



SK1523 断面（東から）



SK1523 完掘（南西から）



SK1536 断面（南から）



SK1536 遺物出土状況（南から）



SK1611 断面（東から）



SK1611 完掘（南から）



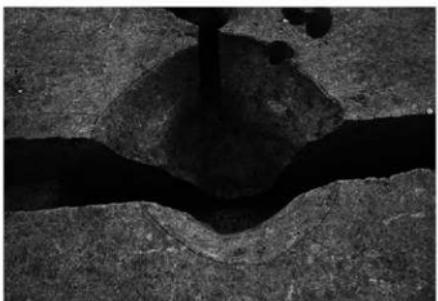
SK1640 断面（北東から）



SK1640 完掘（北東から）



P1024 断面（東から）



P1024 完掘（東から）



P1352 完掘（南から）



P1413 完掘（東から）



P1428 断面（北から）



P1428 完掘（北から）



P1493 完掘（北東から）



P1517 完掘（南から）



SH1167 検出状況（北西から）



SH1167 新面（北西から）



7F6 グリッド 遺物出土状況（南西から）



9E21 グリッド (SX1397) 遺物出土状況（南から）



9E6 グリッド 遺物出土状況（北から）



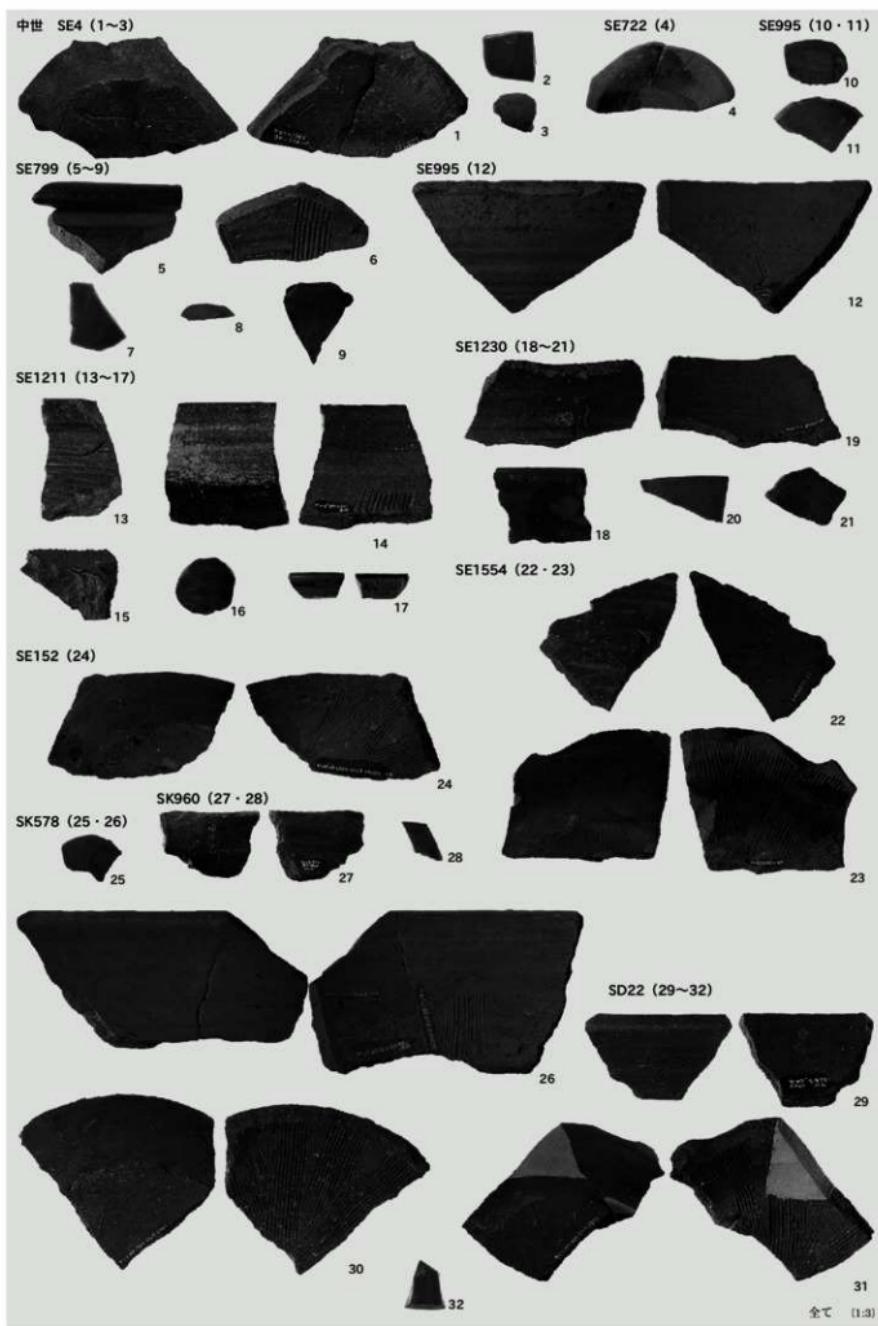
7D23・24、7E3・4 グリッド 木質遺物出土状況（西から）

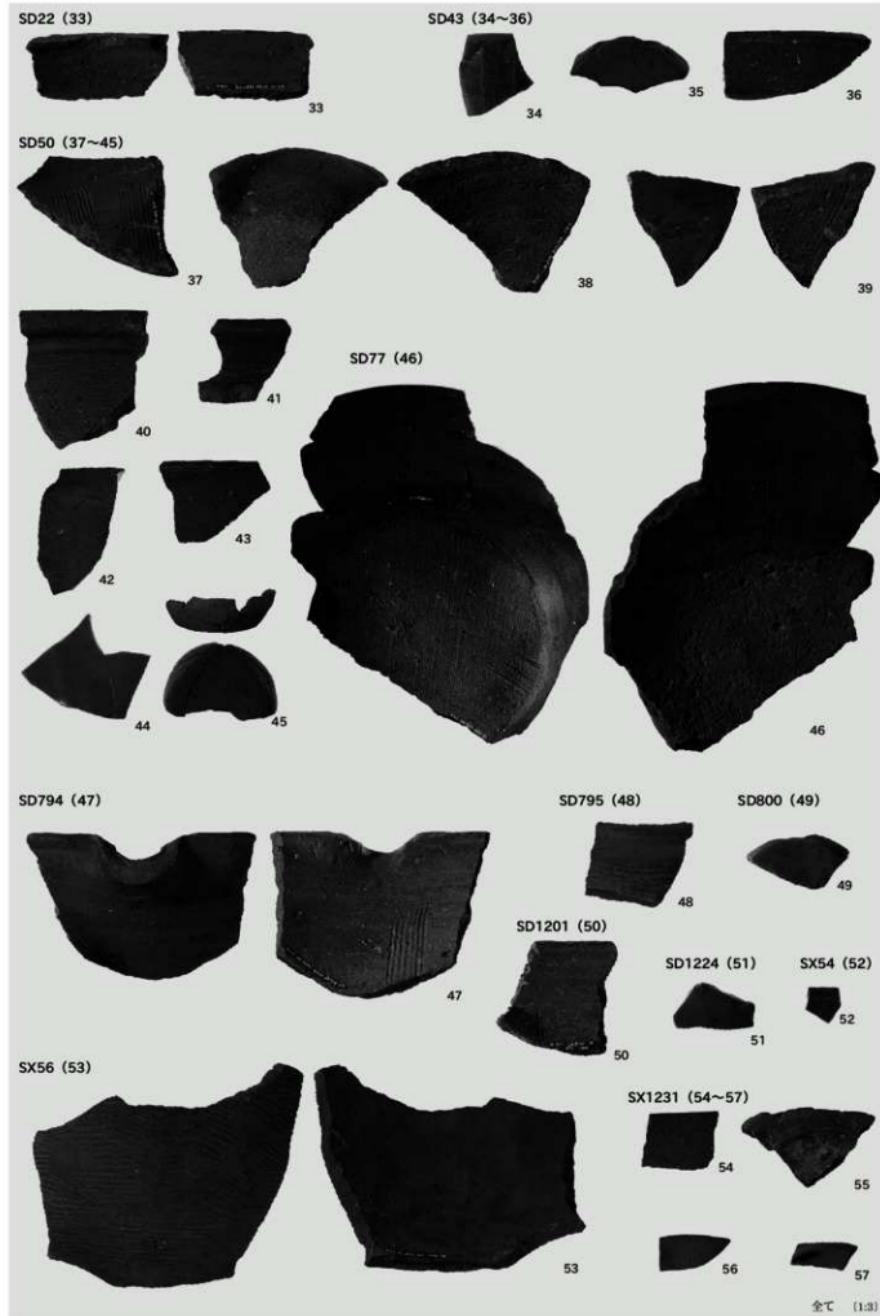


斜面部（手前）と遺構群（右手奥）(8C25 グリッド付近から南東方向を望む)



斜面部から遺構群を望む (7E9 グリッド付近から東方向を望む)



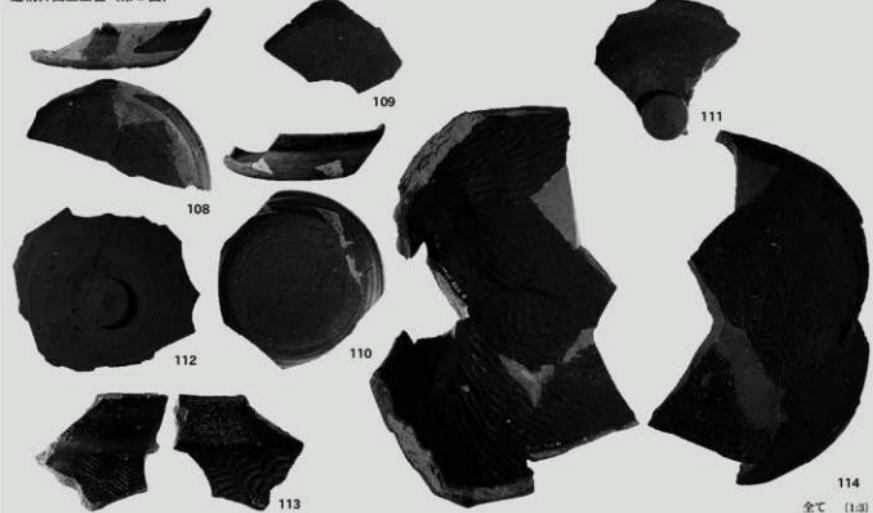




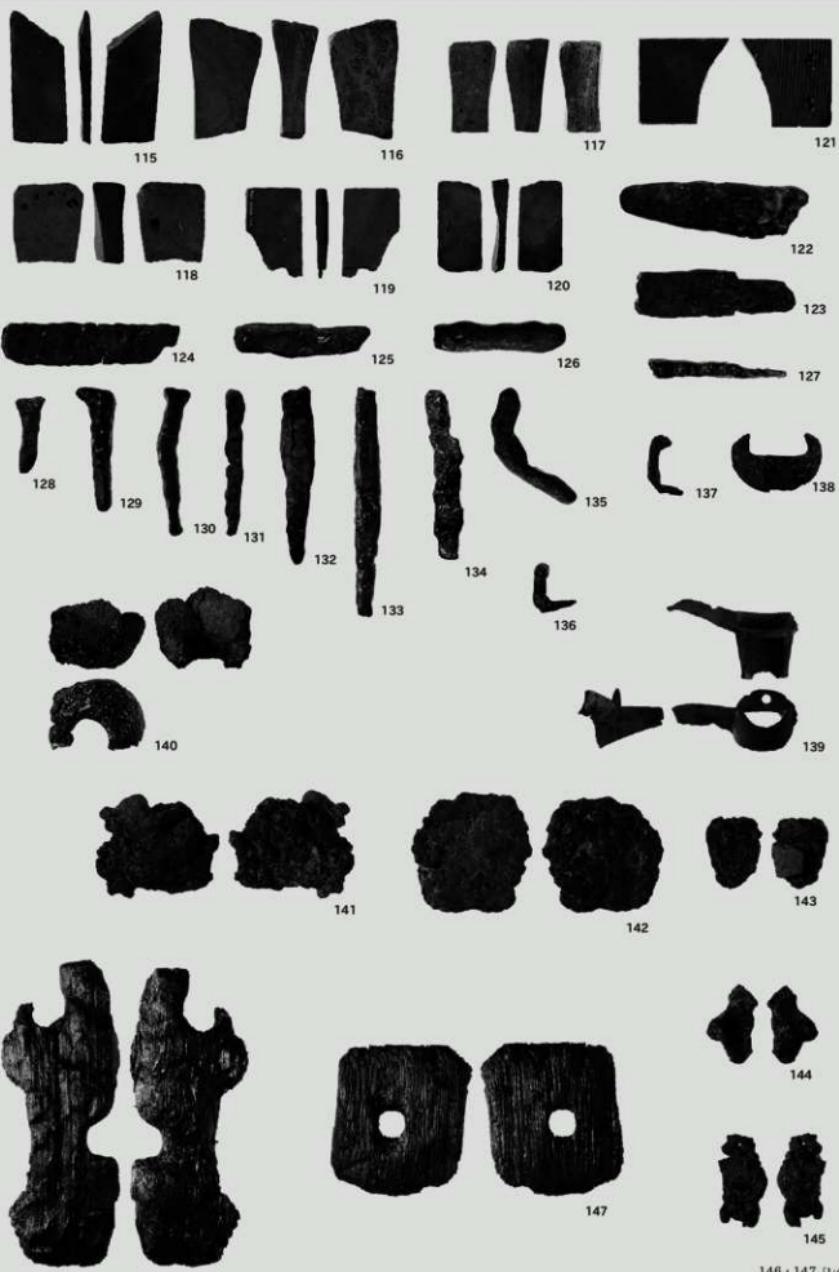
遺構外出土土器（第1面）

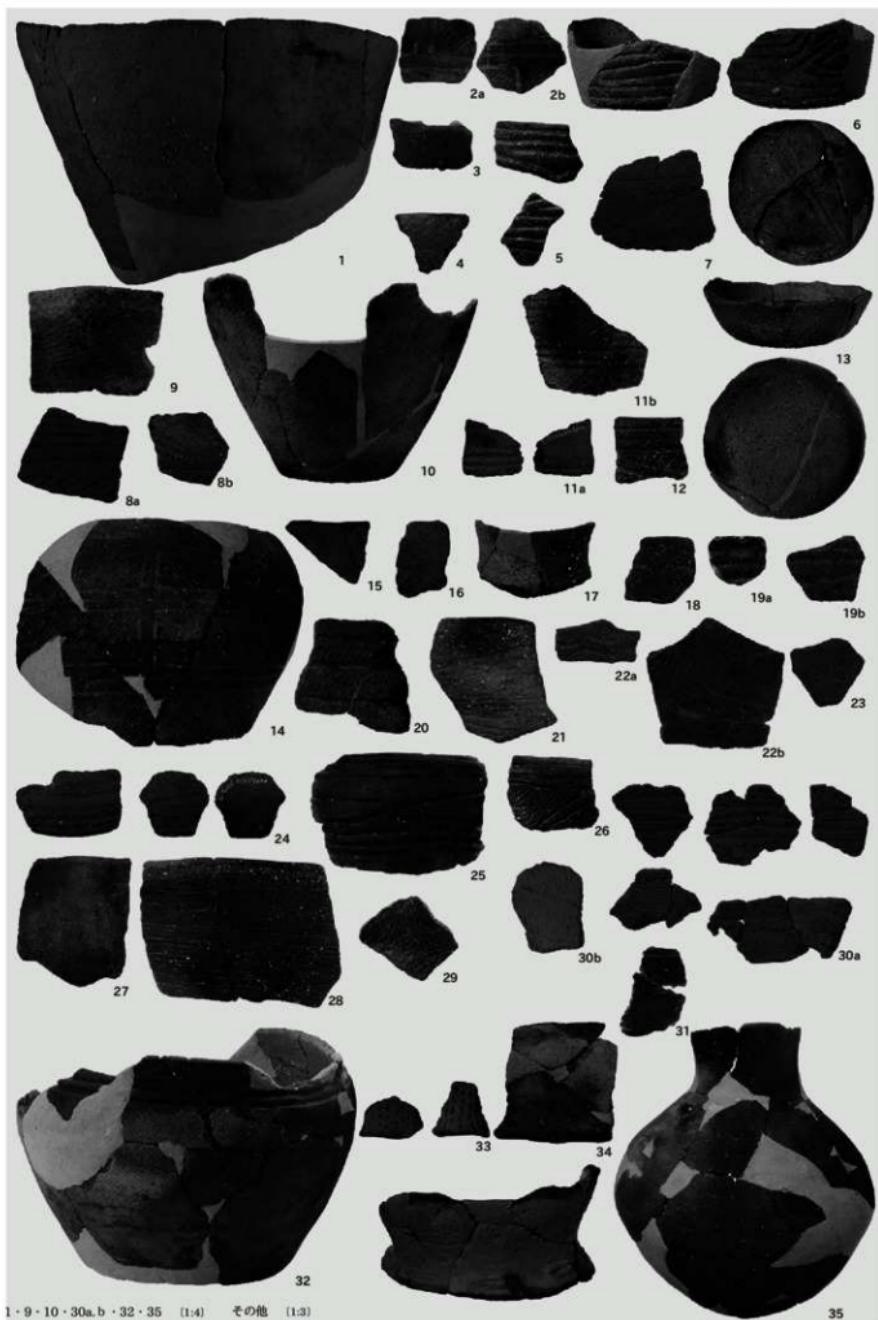


遺構外出土土器（第2面）

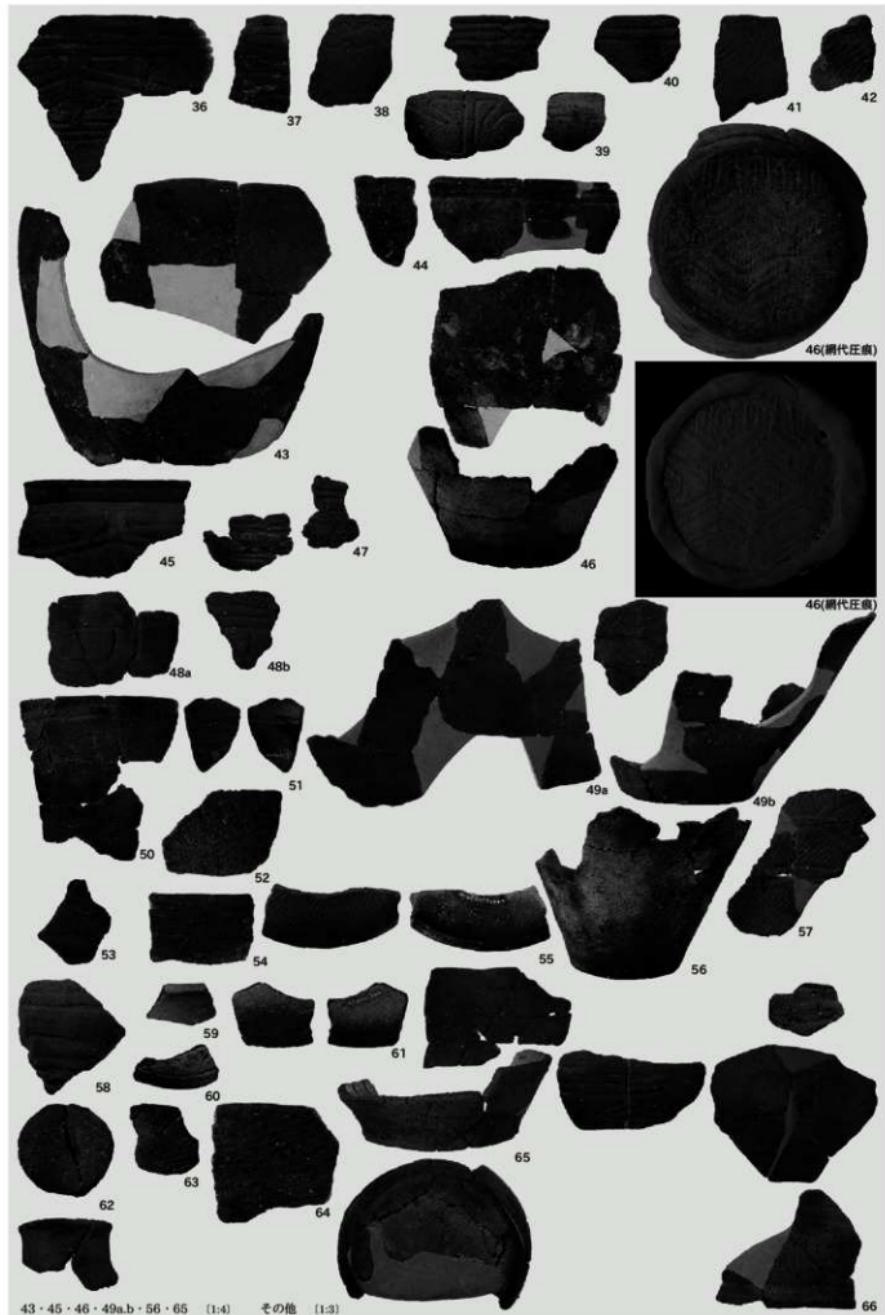


全図 (1:3)

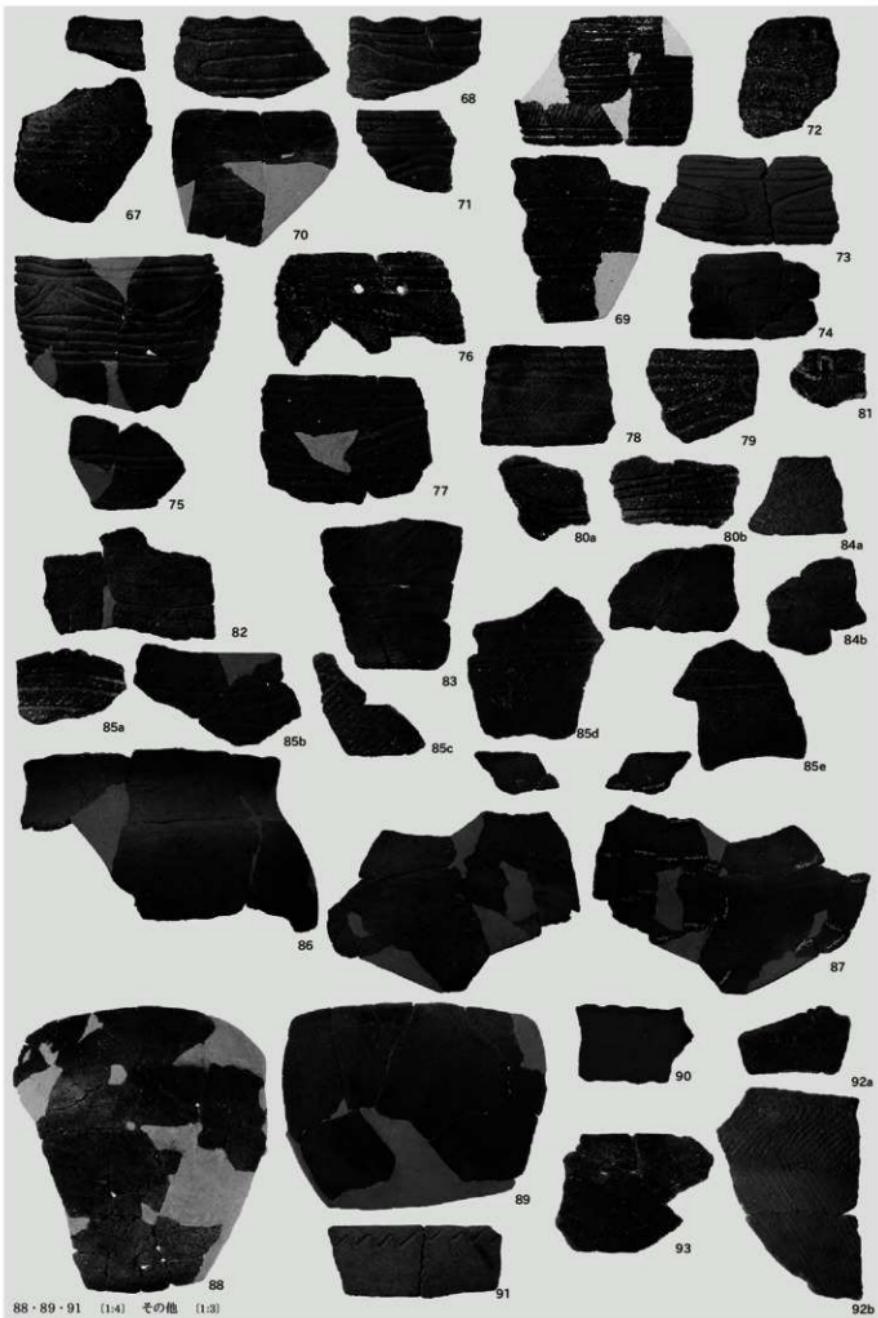


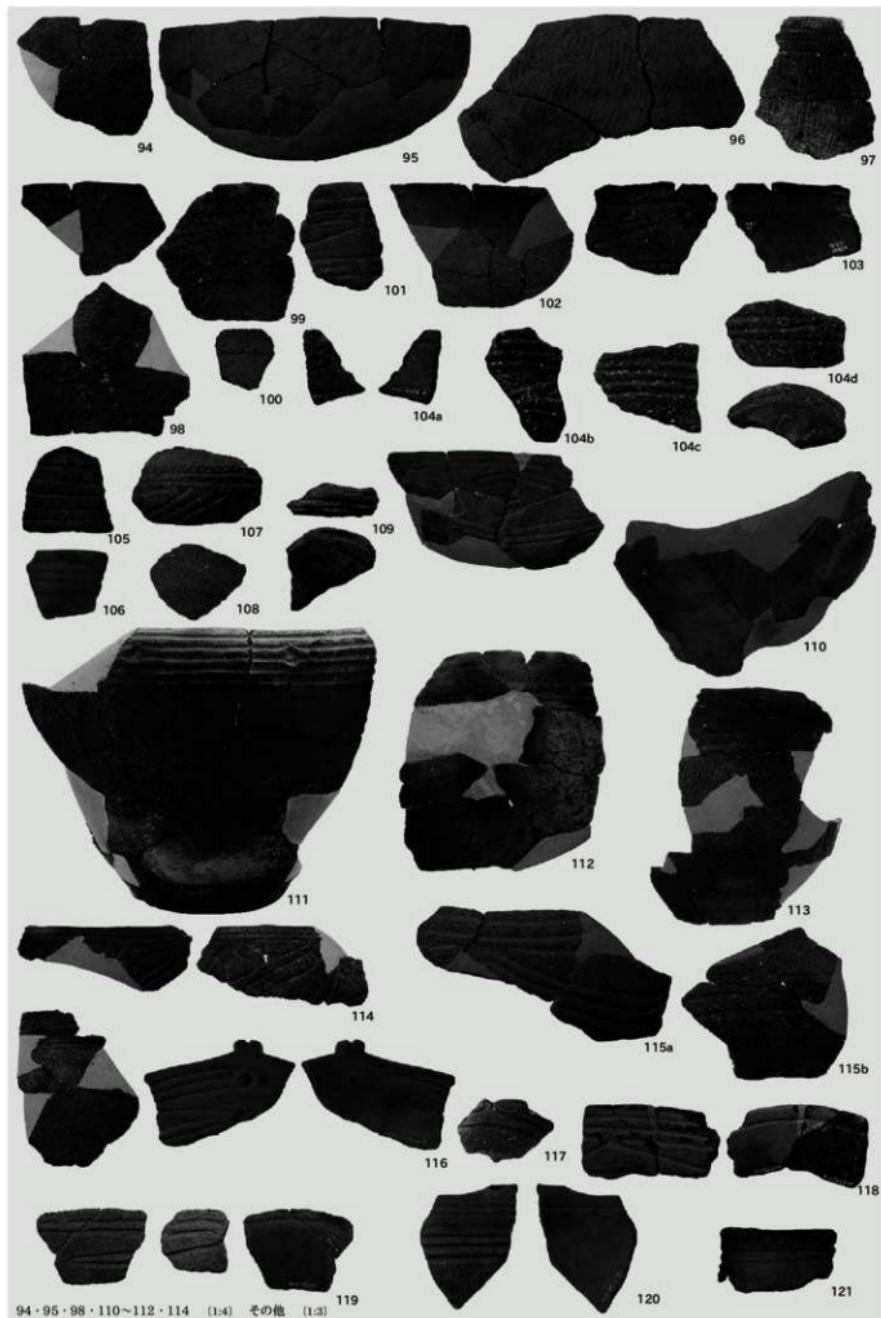


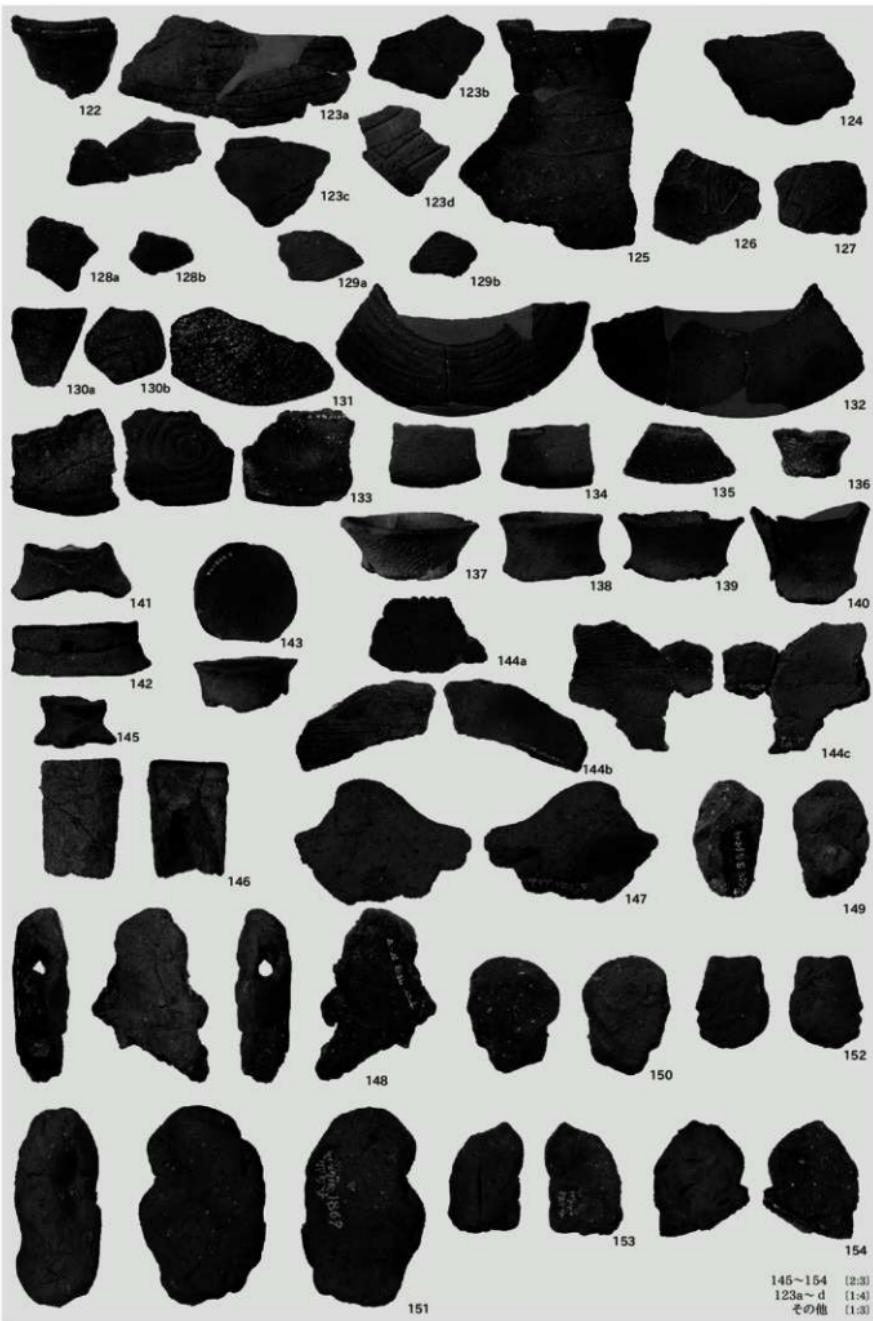
1・9・10・30a,b・32・35 (1:4) その他 (1:3)



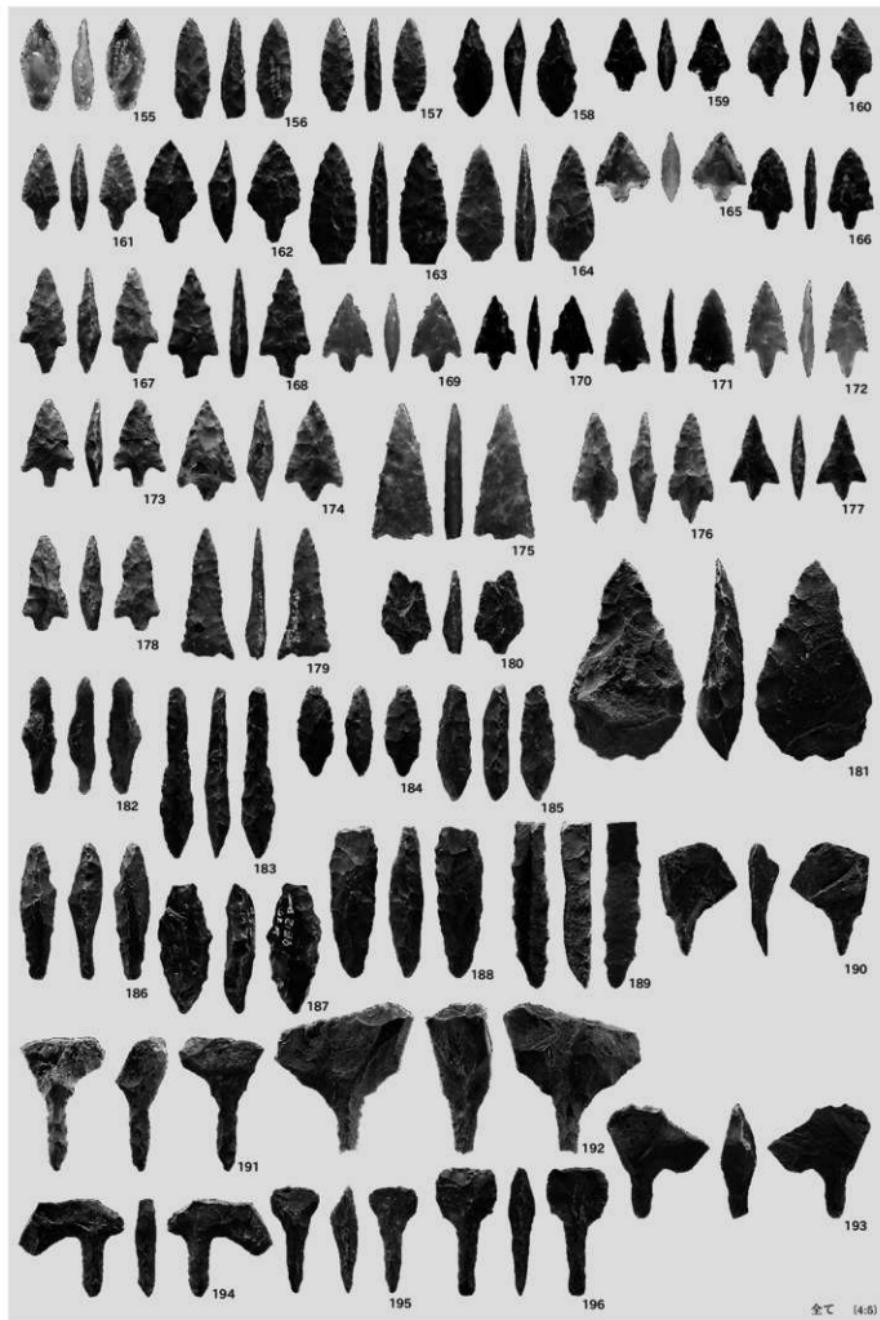
43・45・46・49a,b・56・65 (1:4) その他 (1:3)

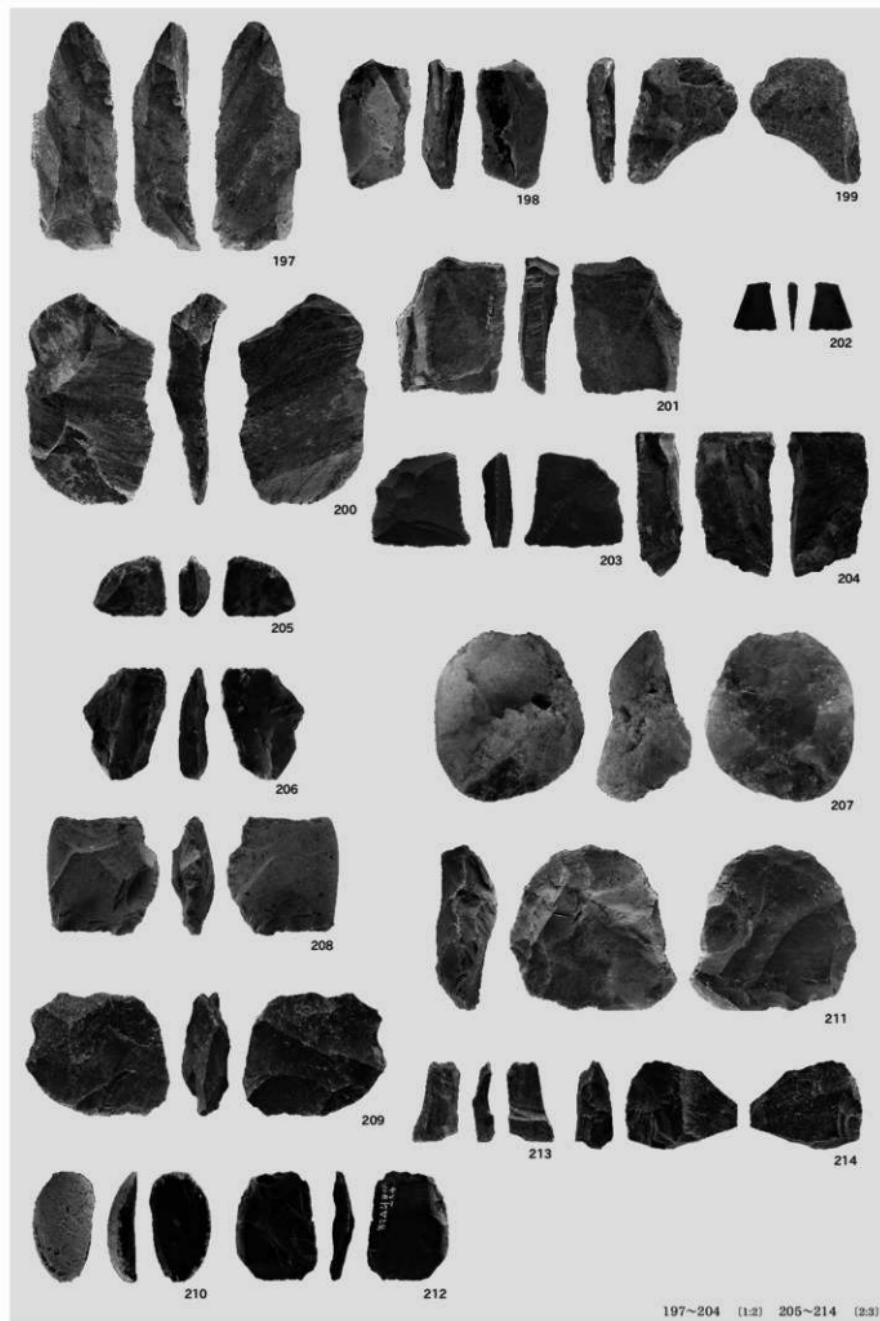


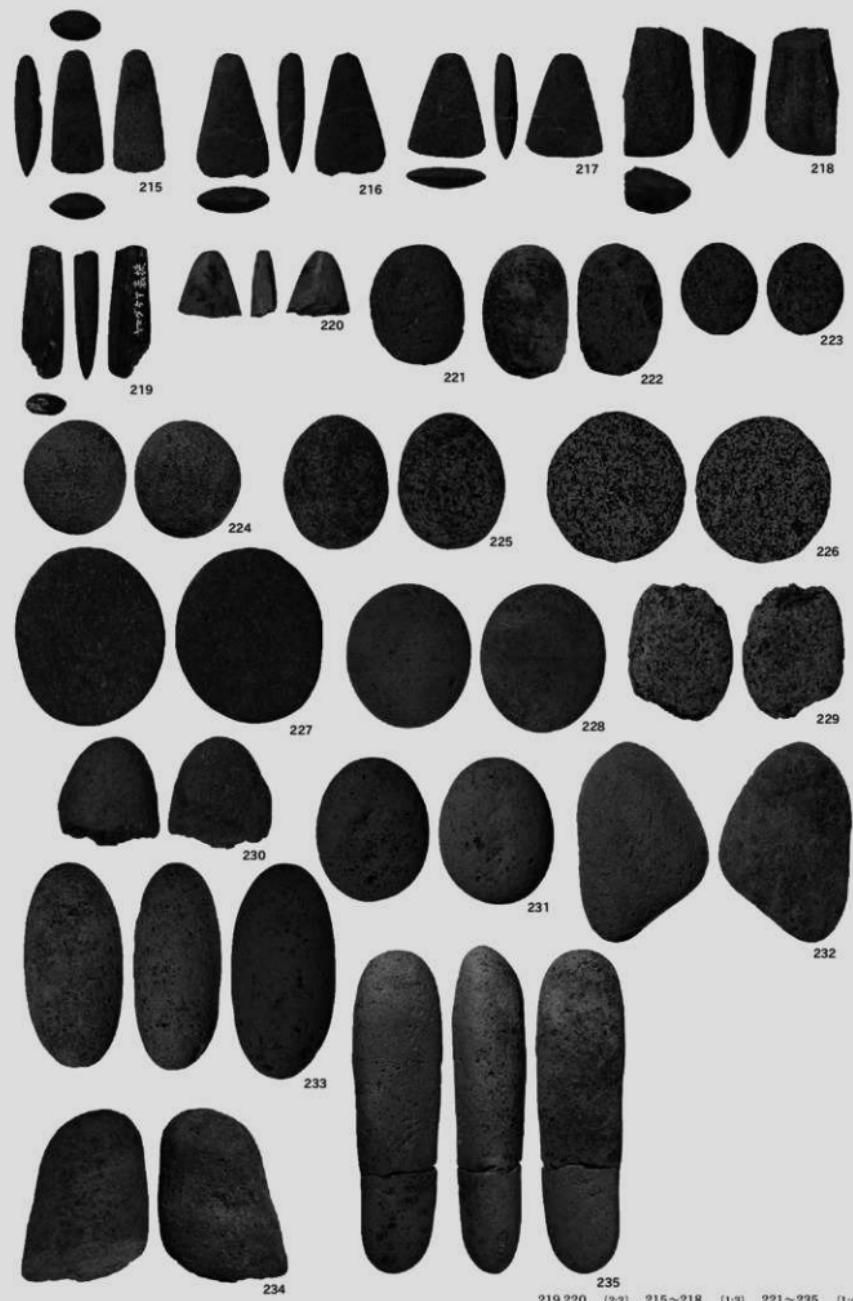


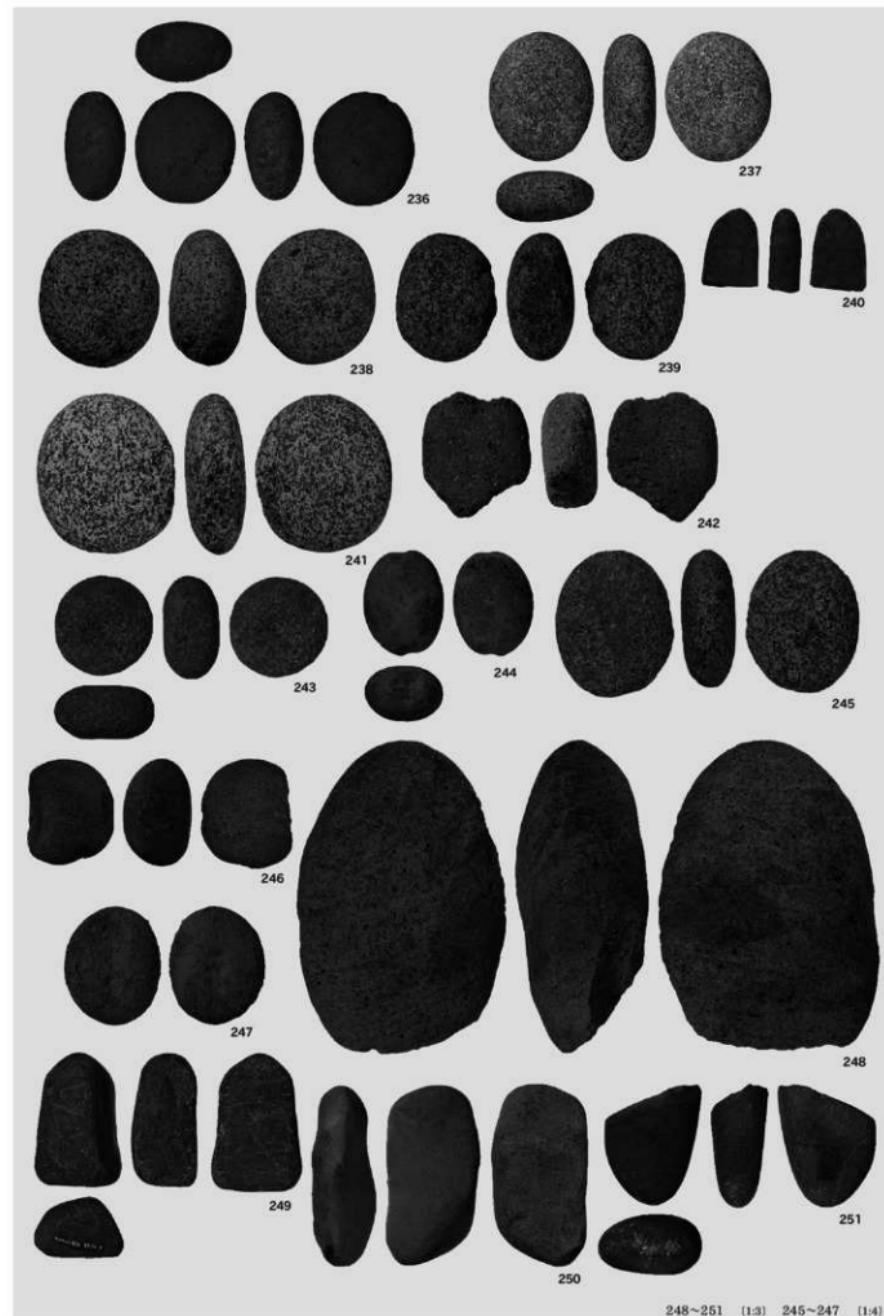


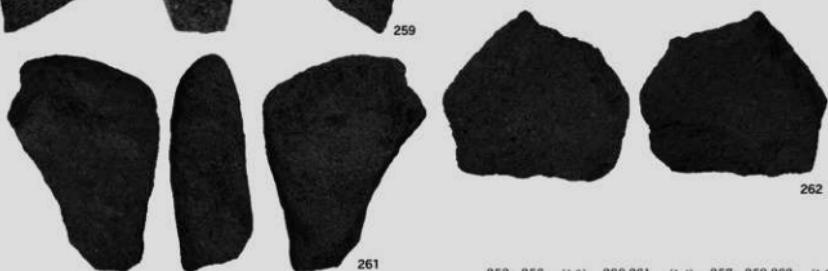
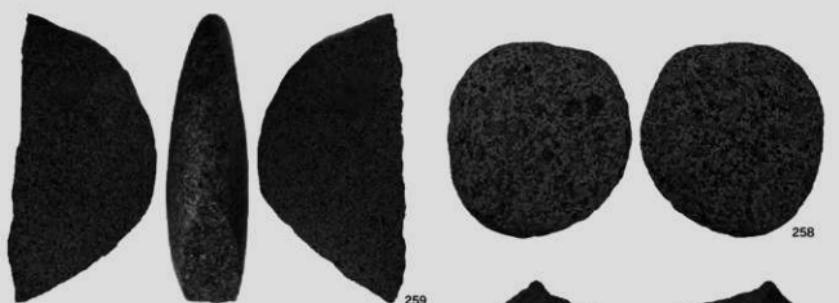
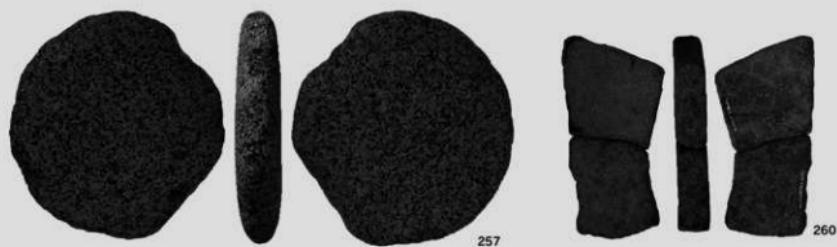
145～154 (2:3)
123a～d (1:4)
その他 (1:3)











252~256 (1:3) 260,261 (1:4) 257~259,262 (1:6)





276,277,279~285 (4:5) 272~275 (1:2) 278 (1:4)

報告書抄録

ふりがな	やまぐちいせき						
書名	山口遺跡						
副書名	一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書						
卷次	II						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第215集						
編著者名	荒谷伸郎・吉田浩明・高橋勝広・石垣義則（株式会社ノガミ）、千葉博俊・齐藤崇人・伊藤良永・馬場健司・松本美由紀・高橋敦・齐藤紀之・中根秀二（パリノ・サーヴェイ株式会社）、萬科哲男（有限会社造物材料研究所）、高橋保雄（埋文事業団）						
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団、株式会社ノガミ						
所在地	<p>〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団</p> <p>〒950-1136 新潟県新潟市江南区曾川甲527-3 TEL 025(280)6620 (株)ノガミ</p>						
発行年月日	2010(平成22)年2月26日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
やまぐちいせき 山口遺跡	新潟県阿賀野市山口 字城ヶ塙3079番地	15223	399	37度 50分 4秒	139度 11分 54秒	20080415～ 20081201	8,850m ² (第1面 5,631m ² , 第2面 1,112m ² , 第3面 2,107m ²)
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項
山口遺跡	集落跡	弥生時代前期～中期	掘立柱建物1、土坑19、 ビット15、埋設土器1			弥生土器、土製品、石器、 玉類（ヒスイ、蛇紋岩 製の重玉など）、搬入壁	
	集落跡	古代（8世紀後葉～ 9世紀中葉）	掘立柱建物3、井戸15、 土坑49、竪穴状遺構1、 溝45、炭窯1、焼土遺構2、 竪間状遺構16、凹地遺 構14、性格不明遺構22、 ビット1320			須恵器、土師器、石鈎（巡 方）	
	集落跡	中世（13～14世紀）				青磁、白磁、珠洲焼、瀬 戸・美濃焼、中世土師器、 石器、石製品、鉄製品、耐 製品、鉄生産関連遺物、 木製品	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第215集

一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書II

山 口 遺 踪

平成22年3月30日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会

平成22年3月31日発行 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025(285)5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社ハイイングラフ

〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号
電話 025(233)0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第215集『山口遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
例言・抄錄	編著者名	松本美由紀	松元美由紀
例言・抄錄	編著者名	齊藤紀之	齊藤紀行